
くらんくらうん

バラ発疹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くらんくらうん

【Nコード】

N3451W

【作者名】

バラ発疹

【あらすじ】

顔面麻痺の主人公と変な三人との日常コメディー

(注) 製作挫折したノベルゲーのシナリオなので、会話の割合が多いです。

物語後半R15の内容が含まれる恐れがあります。

陽気な音楽と共にネズミヤアヒルの着ぐるみに身を包んだ人が激しく踊っている。

どうやらここは東京ネズミランドらしい。いわずと知れた米国の人気ネズミアニメのテーマパークである。千葉県にあるのになぜ東京なのかと疑問に思ったが、どうも大人になると細かい事は気にしなくなるようだと言子供心に理解したものだ。

「どうだ楽しいか息子よ、今日で皆勤賞だ！」と俺のことを息子と呼ぶこの男はなぜか土下座をしている。

「いくら年間パスポート買ったからって毎日来ると飽きるよお父さん」

「そつだなもう充分だよ……。あの女、俺一人にガキを押し付けて逃げやがって」

あきらかに雰囲気が変わった父親に不安になる。「お父さん？」
「これから父さんは自由に生きるから、お前も達者で暮らせよ。じやあそつゆつことだ」と言つが早いか土下座したまま人ごみに消えていった。

「え？ ちょっと待ってよお父さん。あれ？ なにこれ？」なぜか追いかかけようとするが、どれだけ一所懸命に足を動かしても前に進まない。

ピンポンピンポン

父親の逃亡を助けるように館内放送が入る。

『本日は東京ネズミランドにお越しいただきまことにありがとうございます。本日の営業はこれで終了でございます。またのお越しをお待ちしております』

ジリリリリー…けたたましく営業終了のベルが鳴り響く。

ジリリリリリリリリリリ「うえええん、お父さんジリリリリ
おいてかないでジリリリリリやだよおおジリリリリリ…さいジリリリリ
リリリリ…るさいジリリリリリ」リリリリ

「うるさいわー！」

ガシャン、という音と共に目覚まし時計は晴れて他の五つの壊れた目覚まし時計の仲間になった。

幾度となく同じ夢を見てはオチとして目覚まし時計を投げるとい
う一連の持ちネタである。

「しまった、まだ買って一週間なのに……」
たいしてしまったと思つてなさそうな顔をしてつぶやく。

この男は子供の頃に親に捨てられて以来精神を患い、顔の筋肉が
麻痺して表情を作れなくなっていた。

「くっ、しょうがない。気を取り直して愛車のフェラーリで仕事に
行くか！」

すばやく着替えと簡素な朝食を済ませ、愛車の前に立ったところ
で行動が止まり震えだす。

「だ…誰だっ、俺のフェラーリのサドルに傘で穴開けた奴はー！
！」

フェラーリとは名ばかりの自転車のサドルのちょうど真ん中に、
きれいに一つ穴が開いていた。

「くっそおゆるせん！ まだ遠くに行つてないはずだ」

根拠もないのに犯人探しを始めだす。ちょうど50メートルほど
先に、長いものを持ったスーツ姿の男性が歩いている。

「奴だ！」

築43年のボロアパートを背に全力で走り出す。

「ためえ待ちやがれ！ 俺の愛車のサドルに穴開けやがっただろ
うがあー！」

突然の言いがかりに、スーツ姿の男性が振り返り言葉を返す。

「ああん？ 誰に口きいとんじゃワレエ！」

よく見ると、男性の所持していたのは傘ではなくて日本刀だった。どうやらこれから討ち入りのようだ。

「ぎゃあ！ 朝っぱらから抗争勃発？ 俺死ぬかも。いや、一人ならイけるか？」

行くのか逝くのか意味不明な独り言を漏らしていると。

「兄貴。どうしやした！」と日本刀とドスを装備した二人が兄貴のパーティーに合流した。

「無理。とんずらじゃあああ！」ここまでみごとに無表情で通してきた男は、やはり無表情のままに叫び一目散に逃げ出した。

「待たんかいワレエ！」日本刀を振りながら追いかけてくる。待てと言われて待つヤツなんかいるはずなのにバカな奴。と心の中で笑いながら、必死で逃げる。

男は逃げながら思う。

この世に生を受けて24年、楽しいことなどなにもなかった。

全力でなにかしようとしてもしたい事がなにもない。

充足感など感じたこともない。でも。

あれ？ これってなんか鬼ごっこみたいで楽しくね？

スポーツ選手がたまに言ってる”真剣勝負を楽しむ”ってこの事じゃね？ と錯乱気味に。

その一方で、鬼達から逃げるために人通りの多い道へ向かっていた……はずだった。

「はあはあ、あれ？ どこだここ？」

いつの間にか、閑静な住宅街にまぎれこんでしまったようだ。

「こつちに逃げ込んで行きましたぜ兄貴！」とさつき曲がってきた角のむこうから叫び声が聞こえる。

「やべえ、逃げなきゃ」

とつさに角を曲がると。

ドン！ と出会い頭に人と衝突してしまう。

「きゃあ！」 転倒する女。

「わあっ、ごめん、追われてるんだけどかくまってくれ！」 と言って、民家の生垣にもぐりこむ。

「あ？ えっ？ ええっ？」

そこへ兄貴一行がやって来る。さすがに刃物はしまっている様子。姉ちゃん、ここに無表情の男が逃げてこなかったか？

「えっと、あの…… あっちへ走っていきました」

「ほうか、ありがとな姉ちゃん。行くぞ野郎ども！」

生垣からは見えないが、どうやら女の指した方向はこの生垣ではなかったようだ。

兄貴一行の足音が聞こえなくなってから、ゆっくりと生垣から出てくる。

「いやー助かったよ。ありがとう、ケガとか無かった？」

「いえ別に大丈夫です」

あらためて見ると、女は自分と同じ位の年の様に見える。つつこみ所はあるのだが、助けてもらった手前失礼なので言わずに過ぎす事に決めて他の会話をきりだす。

「なんか力ギカツコが二重になってるけど病気？」 言わないと決めただけなのに言うのも駄目だが、病気の奴に病気よばわりされるのも失礼極まりない。

「ごめんなさい、私がしゃべるところなってしまうんです。おかしいですよね？」 女は笑って見せるが、伏し目がち…… と言うよりは目を合わせようとしない。まあ人と接するのが苦手な人などめずらしくも無いので、たいした問題ではない。

「ああ別にいいんじゃない？ それよりもホント助かったよ。それじゃ」 仕事は完全に遅刻だな、と思いながら帰ろうとすると。

「あつ、ちよつと待ってください！」

「ん？ ああゴメン俺、宗教団体とか興味ないから。てか神様信じ

てないから」

「いや…そうじゃなくて……あの……私……て……」「女はうつむいて何かごによごによ言っている。

「はっ！ まさか除霊の呪文！しかもっとハッキリ唱えないと効果はないぞ！」神様は信じていないくせに霊の存在は信じているらしい。

男のアドバイスに従った訳ではないが、女は一つ深呼吸をしてからもう一度繰り返す。今度はちゃんと見えそうだ。

「わたしと友達になってくださいー！」

「はい？」

02とか03とか

02

女性に”友達になってください”なんて言われて悪い気はしないが、お互い初対面。目の前の女は、まあ美人と言うほどではないが普通レベルである。身なりといえば、ノーメイクにメガネをかけ髪はボサボサで上下ジャージにパーカーを羽織っていると言う具合。

男は品定めしている訳ではないが、いつものように無表情で女を見ている。

「あ、突然友達になってくれなんておかしいですね？ ごめんなさい忘れてください」

「ん？ いや、別にいいよ」

「え？ あれ？ほんとにいいんですか？」

「なんでもなにも、友達になるくらいどってことないよ」

「わあ、ありがとうございます。すごい！ 占いが本当にあつた！」

この女は占いで友達を探しているようだ。聞いてみると、昨日インターネットで噂の占い師にうらなって見てもらったところ。「アシタジンセイノブンキテン、アシタトモダチツクルアルヨ」とのこと。カタコトなのが不安だが、占い師はさらに地図を取り出し適当にページを開き適当に指を置き。「ココデマテバトモダチデキルアル」

これで三万円、ぼったくりである。しかもなぜかカード決済オーケー。で、今に至るとのこと。

「アナタダマサレテマスヨ」

「なぜにカタコト?! デモトモダチデキマシタ」

「っーか、あんた友達いないのか？」

「ギャフン！ カタコトおしまい？ 乗ったのに……。はい、

この9年ほど友達いません。わたし引きこもりなので」「と泣いたり笑ったり表情をコロコロ変えながら言う。

「おおっ初めてヒッキー見た！やっぱ親のスネかじって生活してんのか？」

「わたし一人暮らしなので、収入あります」「

「引きこもりで収入で内職とかやってんのか？」

「いえ、ネトゲと株です」「さらりと男とは縁のなさそうな単語を口に出す。

「おおっ！ 絵に描いたような廃人ってヤツか！ てかネトゲとかそんなに儲かるのか？」

「まあ生活に必要な分くらいは稼げます。収入の大半は株ですけどね」「

たぶんネトゲも株も、素人が手を出すにはリスクが高すぎるだろうな。と男は思っているふりをして、ネトゲも株もぼんやりとしたイメージしか思い浮かばない。所詮その程度の人間である。

しばらく呆けていたが、ふと仕事に行く時間なのを思い出す。

「うおっやべっ！仕事行かなきゃいかん！じゃまた今度な！」

「あつ、携帯のアドレスを」「

「すまん、俺携帯もってないんだよね」「

「じゃあウチに直接来てください。ウチは駅前のヒルズパレス903号室です」「

「あああつ、あとわたしの名前は……」「女が自分の名前を言おうとする。

「待った！ わかるぞ！ お前の名前は……」「

「カギ カツ子」だあああああつ！」「

「えええええつ！ ぜんぜん違いますよおおっ！ てゆうか安直すぎますよおー！」「

「あ……でも、それでいいです」「いいのかそれで？ しかしな

ぜか少しうれしそうに見える。

「じゃあ近いうちに遊びに行くぞ！ またなカツ子！」

「「はいっ！ 待ってます！」」

カツ子と名づけられた女は、男の姿が見えなくなるまで手をふりつづけた。そこで気づく。

「「名前聞くの忘れた」」

03

築43年の四畳半の部屋に、目覚まし時計の「ごう音が鳴り響き男が目覚めます。

昨日は結局一時間遅れで出勤してバツが悪かったので、早めに起床する。

「さて、今日もバリバリはりきって仕事するぜ！いつものように俺の仕事っぷりに上司も舌を巻くぜ！」

サドルに穴の開いた愛車のフェラーリを走らせること12分、ここが男の勤務先スーパー バローフーツである。

バローフーツは、ここ地元愛知県に6店舗を構える中堅スーパーである。

男はいつものようにバリバリ仕事をする。

「おらあ！ 新入りい！ いつまでもチンタラやってっとクビにすんぞお！」

どうやら男は、新入りで駄目社員のようなようである。

人はみんな、自分が主人公の物語の中で生きている。

中学生の頃そんなことをぬかした教師がいた。うまいこと言ったつもりだろうが、つまらない”物語”しか出てこない人間にとって はビター文心には響かない。

てか中坊ばつか相手してるから頭ん中膿んできて、そんな厨二病的な発言をはずかしげもなく言えるのだろう。

主人公だからってデキル奴ばつかじゃねえんだよ！と誰にうったえるでもなく心の中で叫んだ。

そうやっていつものように悶々と仕事をしているうちに、帰宅の時間を迎える。実は男はバイトなので15時で帰宅なのである。男は持ち前の低能力と社交性の無さで定職には就けずにいた。

しかもこれまでの24年の人生の中で、友達と呼べる存在は皆無に等しかった。

「おつ、そっぴや昨日友達できたんだつた。さっそく遊びに行くか！」と言ったところで行動が止まり震えだす。

「だ……だれじゃあああ！俺の愛車のサドルに穴開けた奴はー！しかも二つも！俺の顔（ ）みたいになつてんじゃねえか」確かにサドルには綺麗に三つの穴が開いている。また勢いにまかせて犯人探しをしようとする、どこからともなく声が聞こえる。

「ひとつ人よりかわいくて」

「ふたつ二重の器量よし」

「みつつみんなの癒しキャラ、それは誰かとたずねたら……」

「それはわたしの妹だあああああ！」

と、駐輪場横の自動販売機の上に現れたのは二人の子供である。

叫んで現れた一人目はライオンだと思われる着ぐるみに身を包んでいる。どうやら手作りのようで、サイズも大きければ作りも雑。

顔に至っては、黒目があらぬ方向を向いている始末。

着ぐるみの後ろでおっかなびっくりしがみついているもう一人は、かわいらしいパステルカラーのワンピースに身を包んだ女の子である。

どうやら声の感じから、着ぐるみの方も女の子の様子。叫んでい

た内容からすると姉妹なのだろう。着ぐるみの方が背が高いので姉なのだろう。

「あ、あぶないから降りなさい」啞然としていた男がなんとか発した言葉は、おそろしいほどまともな忠告だった。

二人の子供は、プラスチック製のビールケースを積み上げて作った階段を使って降りてくる。

「……………」(笑)「ワンピースの女の子が、無言のまま口をパクパクさせる。

「こんにちは。わたし達はあやしい者ではございません。……と言ってる」とライオンの着ぐるみがしゃべる。

「うわあ、まためんどくさいのが絡んできたな。とまっていると。

「……………」(怒)「

「めんどくさい言うな! ……と言ってる」

「ぎゃあ! 勝手に人の思ってることを読むな! てか読めるの?」

「うん、妹は人の思ってることがわかるよ」とライオンの着ぐるみが言う。

「嘘だ!」と言いながら、何で着ぐるみなんか着てんだ?と思うと。

「……………」(怒)「

「着ぐるみちやうわ! お姉ちゃんは本物のライオンじゃい! ……と言ってる」

「ぐはあ! モノホン? やべえ怖い! もう行く!」と愛車に乗ろうとする。

「……………」(哀)「

「おなかすいた。……と言ってる」

「はい?」

「……………」(笑)「

「マグドでゆるしてやる。……と言ってる」

マグドとは大手メジャーハンバーガーショップで、1000円バーガーを始め貧乏人にやさしいお店である。

男も常連だが、見知らぬ子供におごってやるほど人間出来てはい

ない。

今日から俺はNOと言える人間になる！と男は思っていた。

なぜに俺は子供二人と大量のマグドの袋を抱えて一緒に歩いているのか、自分に問いかけているが、答えは神のみぞ知るということなのか。

手をつないで楽しそうに歩く着ぐるみと女の子の姉妹を横目にため息をつく。

「……………(?)」

「どうした？ 調子悪いのか？ ……と言ってる」

「おまえらに会ってからずっと調子悪いわ！ つーかこんな時間にハンバーガーなんか食ったら、晩飯食えなくて母ちゃんに怒られるぞ」

「……………(笑)」

「だいじょうぶ、おかあさんのご飯は別腹だから。 ……と言ってる」

子供は食べ盛りの育ち盛りと言うが、買ったハンバーガーはそんなレベルの量ではない。カツ子の分もあわせて12個のハンバーガーと、一人各一個つつのポテトとドリンクである。

見たところそんなに食べそうな体つきでもない。痩せの大食いか？ というより、こんな小さな頃こんなに食べた覚えが無い。

「おまえら二人とも小学生か？ いくつなんだ？」

小さいほうが両手の指を6本立てる。着ぐるみのほうはというと指の曲がらない着ぐるみの手を見て止まっている。

「アホか！ おまえは喋ればいいだろ！」と思わず突っ込むと。

「あほ言うな！ 9才の4年生と6才の1年生じゃどあほ！」と叫びながら繰り出した蹴りがわき腹に入る。

「ぐほあ！ いてえ！ 蹴んなクソガキ！」

「……………(怒)」
「……………」なぜかライオンは訳さなかった。
「ん？ おい、今なんか言ったんじゃないのか？」
「お姉ちゃん、蹴っちゃだめだよ！ って言われたんだよ！」と言
いながら殴られた。足がダメでも手はいいのか？

そんな調子で歩くこと15分、カツ子に教えてもらった駅前辺り
にさしかかると、なにやら警察官ともめている人がいる。

「げっ！ なにカツ子のヤツ警察ともめてんだ？」

警察官ともめているのはカツ子のようなので、他人のふりを決め
込もうと目をそらしていると。

「あーっ！ やつと来てくれたんですね。ちょっと助けてく
ださいーい！」メガネをかけているだけあって、視力は良いよう
である。

「ぶっ！ 声をかけるな！ 知り合いと思われるだろ！」

「おまわりさん、この人を待ってたんですよあ！ほんとにあや
しい者じゃありませんよあ！」と泣きながら警察官に訴える。

「いや、だから朝の6時からずっとこの辺りをうるちよろしてて、
あやしいからって通報が来たんですよ？」警察官から衝撃の事実が
告げられる。

「はあ？ おまえそんな朝早くから待ってたのか？ てか待ってな
くたって家まで行くって！」

「だってウチの場所忘れてるかも知れないじゃないですかあ！」
「いくら俺だって、そんなすぐに忘れるほどバカじゃないわ！」

終わりそうにも無い醜い言い争いに見かねた警察官は、「もう不
審な行動は控えるように」との忠告を残して見逃してくださいまし
た。

「ったく、もしかして俺が行くまであそこで待ってるつもりだった
のかよ」

「だってせつかく勇気を出して友達になっってもらったのに、来てもらえなかつたらって不安だったんですよお」と言ったところで、ついて来ている奇妙な子供達に気づく。

「……えっと、この子達はあなたの妹さんですか？」

「いや、ぜんぜん知らない子供達」

「ええ？ ええ？ それって、それこそ警察沙汰なんじゃないんですか？」

「知るか！ こいつらが勝手に飯食わせろってついてきたんだよ！ ついでにカツ子の分もあるからな」と言っマグドの袋を持ち上げて見せる。

「あ、ありがとございます。それと、お二人さんはじめまして」

「……（笑）」

「はじめまして。こんにちは。……と言ってる」
きよとん顔のカツ子に説明してやる。

「妹の”丸美”が言おうとしていることを、姉で自称ライオンの”

ライ子”が通訳するってのが、この”ライ丸”姉妹のルールらしい」

「……（怒）」

「勝手に変なあだ名をつけるな！……と言ってる」と言いながら下腹部にパンチが入る。

いくら女の子でも9才ともなると、攻撃力はすでに笑い事ではすまないレベルに達している。度重なる攻撃に無表情のまま悶絶しているうちに、カツ子の住んでいるアパートに到着したようだ。

「ここがわたしの住んでるところです」

と指差した建物は、そこに建っていたのはアパートではなく、高層マンションだった。

「……」絶句する三人。

さらに家に入ると、そこはテレビでしか見たことないような家具や電化製品の数々。

「……（驚）」

「うわあ！ 部屋が広すぎて怖い！ テレビが壁みたい！ 台所の蛇口がシャワーだ！・・・と言ってる」

と、はしゃぎながら二人であちこち見て回っている。残念ながら、俺の思っている事は子供達が全部言っている。

「・・・・・・・・（楽）」

「ひゃあ！ ベッドふかふかだあ！ お風呂にテレビついてる！ トイレのフタが自分で開いた！・・・と言ってる！」ライ子も思わず興奮したらしい。

「すげえな、家賃いくらするんだ？」と思わず出た独り言にカツ子が答える。

「「ここ賃貸じゃないですよ。わたしの持ち家です」」衝撃発言。

「何年ローン？」

「「え？ わたしお金借りるの好きじゃないんで、一括で払っちゃいました」」さらに笑顔で衝撃発言。

「ネットゲと株って・・・：そんなに・・・儲かるの？」なんか衝撃のあまり呼吸困難に陥っている模様。

「「ネットゲはそんなにないです。どうやらわたし株の才能があるらしくて。でも今は少し抑えて月に80万位ですかね（笑）」」

《（笑）ってよく見ると、なんかドラ もんに見えない？ ああ、なんかそう見えると良くないことが起こるらしいよ、80万日以内に。》

「はっ！ やばい！ 意識が飛んで、訳わかんない幻聴聞こえた」

「「大丈夫ですか？ それよりも、そろそろみんなでマグド食べましょ。あたたためなおしますか？」」

気を取り直し、あたたため直したハンバーガーをパクついた。さすがに残したカツ子のハンバーガーは、なんとライ丸姉妹が半分づつ食べていた。

全員食べ終わったところで、「食べ終わったらそろそろ帰るぞ、

ライ丸。家まで送ってやるから」ときりだすと。

「……………(怒)」

「ちょっと待った！ 人に変なあだ名付けといて、自分だけ逃げようとしたってそうはいかないぞ！ ……と云ってる」

「は？別にいいじゃねえか、お前達とはもう会うことなんてないんだからよ」

カツ子も少し考えて。「それはいい考えかも！」なんてことを言う。

「いやいや、ちょっと待て……………」

すでに三人は、楽しそうに話し合いに突入していた。

ああやべえ、なんかノリで変なあだ名ばっか付けちゃったけど、かつこいい名前がいいなあ。なんて都合のいいことばっか考えていると。

「「じゃじゃーん！ 会議の結果、名前が決定いたしました！」」

「……………(笑)」

「いつも無表情で、景気悪そうで機嫌の悪そうな顔をしてるから。

おまえの名前は、仏頂面の”ブツチョ”できまりだ！ ……と云ってる」

「いやだブツチョなんて！ そんな太った奴が付けられそうなあだ名は！」

「残念ながらブツチョに拒否権はありません」

「……………(笑)」

「じゃあ達者で暮らせよ、ブツチョ！ ……と云ってる」

こうして俺は”ブツチョ”と言う名前に生まれ変わった。

後に思うと、この最悪なあだ名が付いた時から、俺の本当の人生が始まったんだと思う。

ここから始まる虚構と現実の物語。

あらためて自分は主人公なんかじゃないと思いき知らされる……。

第一話「愛情と調味料と調理器具」 00とか01

第2章「ぶきょうな人々」

第1話「愛情と調味料と調理器具」

00

陽気な音楽と共にネズミやアヒルの着ぐるみに身を包んだ人が激しく踊っている。

どうやらここは東京ネズミランドらしい。いわずと知れた米国の人気ネズミアニメのテーマパークである。隣には海をテーマに作られた”ネズミシー”という系列テーマパークがあるが、日帰り日程ではどうしても”ネズミランド”の方に行ってしまうがちである。

「どうだ楽しいかブッチョよ！」となぜか土下座をしている父親は、なぜか俺のことを違う名前で呼ぶ。

「え？ 僕ブッチョなんて変な名前じゃないよ、お父さん」

「なにを言ってるんだ？ おまえは最初からブッチョって名前じゃないか」

「は？ そんな名前、役所の人が受理するわけないじゃん」

「あ？ もう時間？ じゃあそうゆうことで」と言うが早いか土下座したまま人ごみに消えていった。

「え？ ちょっと待ってよお父さん。あれ？ なにこれ？」気が付くと、不恰好なライオンの着ぐるみに、はがい締めに使われていた。

ピンポンパーンポーン

父親の逃亡を助けるように館内放送が入る。

『あー、本日は東京ネズミランドにお越しいただきまことにありがとうございました。本日の営業はこれで終了でございます。ブ

ツチヨさんのまたのお越しをお待ちしております』

ジリリリリ…けたたましく営業終了のベルが鳴り響く。

ジリリリリリリリリリリリリリリ「うえええん、お父さんジリリリリ
おいてかないでジリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリ
リリリリ…ぶなジリリリリリリリリリリ」

「ブツチヨって呼ぶなー…!」

がつん！ と鈍い音。いつも置いてある場所に目覚まし時計は無
く、つかもうとした手は空を切りタンスの角に当たる。

「いてえ！ しまった、目覚まし壊さないように隠しておいたんだ
った!」いつもは使われない学習能力がアダとなった。

だっさいあだ名を付けられてから三日、ブツチヨは毎日そのこと
でうなされていた。

しかしあの子供達はもう来ないので、カツ子だけなら本名で押し
切ることも可能だろう。

とりあえず、鳴り続けている隠した目覚まし時計を止めたところ
で、今日の仕事が休みだと気づく。

なにか損をした気分であったが、すべてが損でできているのでそ
んな気分は速攻消え失せた。

ちなみに今日は日曜日で、スーパーマーケットにとってはかき入
れ時なのでバイトが休みなどありえないのだが、ブツチヨは戦力外
なので休みとなっている。

本人は気づいていないが、バイトがクビになる日は近いだろう。

そうとは知らず「早起きついでに、朝飯買ってカツ子んとも
行くか」と、のん気なものである。

それから1時間ほど後。

ブツチヨは二人分の食料を持って、カツ子のマンションのエント
ランスに到着した。

マンションのエントランスは、ドアをくぐると部屋番号を押してインターホンを鳴らす機械が置いてあるのだが、先のドアは住民の許可がないと開かないので一時的に完全個室になってしまう。

別に閉所恐怖症でもないけれども、居心地の悪さを感じながら間違えないように部屋番号を押すと。

ピョッはあい、どちらさまですか？』』チャイムに仕事をさせない速さで、スピーカーから声が聞こえる。

「はやっ！ インターホンの前で待ってたのか？ とりあえずここ開けてくれ」

『はい？ どなたですか？』』

「は？ なに言ってるんだ？ カメラもついてんだろ……」と言ったところで、相手の意図に気づく。

どうしても俺の口から”ブッチョ”と言わせたいらしい。しかし俺は絶対に自分で言ったりなどしない！と決意した時に、個室のエントランスに住民らしい人が入ってくる。おもわず目が合って、その場が少し気まずい空気になる。

「おい！ マジで早く開けろって！」

『』で？ お名前は？』』

「くっ、ブ……ブッチョです」作戦負けである。

『はい？ もう少し大きな声でお願いします』』どうやらこの女にはサドっ気があるようだ。

「わ、わたしの名前はブッチョです！ ドアを開けてください！」
最終的には完全敗北で落ち着いたようである。

01

ひと悶着終えてようやく部屋の中にたどり着いたブッチョを待っていたのは。

この家主で、ヒッキーセレブのカッ子。

と、

もう会うことはないと思っていた、お笑い芸人のライ丸姉妹。その三人が爆笑の中迎えてくれたのだった。

「……………(怒)」

「誰がお笑い芸人じゃい！……と言ってる」と、いつものネタでツッコミを入れる。

「てか何でおまえらがいるんだよ！」

「ブッチョさんいらっしやい。ライ丸ちゃん達のご両親は、二人とも土日出勤なんだそうです」

「いや、だからってここに来なくてもいいだろうよ」

「……………(怒)」

「別にいいじゃんか！細かい事言っつとハゲるぞ！……と言ってる」

「誰がハゲか！てか、お前らの分の朝飯買ってきてねえぞ」

「そう言いながらマグドの袋を見せる。」

「またマグドですか？ よく飽きませんね」

「……………(笑)」

「マグドは日本人の主食ですけど何か？……と言ってる」

「うむ、セレブのカツ子には日本の和の心が理解できないのである」
「う」

「いやいや、マグドは外国資本ですよ？」

「！！！！」三人は驚愕の表情で顔を見合わせる。そのうち一人は無表情で、そのうち一人は着ぐるみで表情は変わらないのだが。

「いやいや、マグドって略さないとマグドナルドって……聞いてます？」

カツ子のお話を無視して食べだす三人。

「ぎゃふん！ わたしの分は？ っていうか、二人分買って来たにしてはハンバーガーの数多くないですか？」

ポテトとドリンクは2つずつだが、ハンバーガーは3人が1人につき4個抱えている。

「ん？ ああ昼飯の分も買って来たからな」昼食もハンバーガーで

済ませるつもりだったらしい。

カツ子が泣きついてきたので、三人は渋々1個ずつめぐんでやった。

「それにしても、ホントに同じものばっかで飽きないんですか？」

「まったく、これだからブルジョアは駄目なんだよ！見てな！」

そう言うと、ハンバーガーの上の部分のパンを取り外し、5本ほどのポテトを下の部分の上に乗せ、取り外したパンをもとに戻す。

「どうだ！これでポテトバーガーの完成だ！」

「……………(喜)」

「そうそう！中にケチャップやマヨネーズをかけると、まったく違う食べ物になるよ！……………と言ってる」

「そうだ！カツ子、ケチャップとマヨネーズを持って来い！」

「すいません、ありません」

「コシヨウでもいいぞ」

「ありません」と顔をそらす。あいかわらず目はあわせないが、顔をそらした。

「？」三人の頭に疑問符が浮かぶ。

それを見てカツ子が口を開く。

「ウチに調味料は無いです」

「……………(?)」

「え？どうやって料理の味付けしてるの？……………と言ってる」

「ウチには、調理器具もないです」

「は？いやいや、包丁にフライパンぐらいはあんだる普通」

「料理なんかしなくても生きていけますけど、何か？」カツ子は開き直った。

ウソだろう？と思いつつながら台所を物色した三人が発見したのは、紙コップと紙の皿の束。冷蔵庫には、ペットボトルのジュースと大量の冷凍食品が入っていた。

「マジか……………俺だつて自分の飯ぐらい作れるぞ」

「別に作らなくたって困った事ないですよ？」

「……………(願)」

「カツ子姉ちゃんの作ったご飯たべたいなあ。……と言ってる」

「え？」

「よし！ じゃあ今日の昼飯は、みんなで手作り料理だ！ 今からジヨスコに買出しだ！」

「えええっ！」

ジヨスコとは、全国展開の大型スーパーマーケットである。専門店も入っているので、食料品からファッションや電化製品まで何でも揃う。

休日に家族で行くと、家族全員が満足するという便利な施設である。

最近はいヨンと言うブランド社名に変更し、看板も変えているにもかかわらず、通称”ジヨスコ”で通じているようである。

ということで四人は、昼食用の食材と調理器具を買いにジヨスコに出かけることになった。

カツ子のマンションからジョスコまで通常徒歩15分。なにこともなく到着……はしなかった。

カツ子が迷子になる事2回、ライ子が近所の子供にもみくしゃにされること3回、カツ子の忘れ物を取りに戻ることに1回。通常15分のところを、1時間以上を費やす。

「……………(疲)」

「やっと着いた。……と言ってる」

「よし。時間短縮のために、割り当てを決めて要領よく買い物するぞ」一番要領の悪そうなブッチョが仕切りだす。

組分けのじゃんけんの結果、食材・調味料はカツ子・ライ子組、調理器具はブッチョ・丸美組に決定した。

ジョスコは、一階の約半分が食料品売り場になっている。こちらはカツ子とライ子にまかせておけばいいだろう。

ブッチョと丸美が向かっているのは、二階の雑貨売り場である。

二階は、こちらも約半分のスペースに生活雑貨売り場が展開されている。

歩き出すブッチョの手を丸美がつかむ。そういえば、この姉妹はいつも手をつないでいるな、と思ったところで気がつく。

「おまえ、もしかすると耳が聞こえないのか？」と、右手の先の少女に話しかける。

すると丸美は、大きく首を縦にうなずく。

むかし、話で聞いたことがある。耳の聞こえなかったり聞こえなくなった人は、自分が出している声が聞こえないのでしゃべれないのだそうだ。実際に会ったことがないのであまり気にしたことはな

いが、現にそういう人は存在するのだと実感する。

「でも俺の言ってることは分かるのか？ はっ！ そうだった、こいつは人の考えることが分かるんだった！」

丸美は、ブツチョコを横目で見てほくそ笑む。

「ぎゃあ！ ホラーか？！ 完全ホラーだろこれ！」

そうこうしているうちに、エスカレーターは二階に到達する。エスカレーターを降りる時、ブツチョコがつまづいて丸美の失笑を買ったのは見なかったことにする。

で、二階に着いて5分。目当てのフライパン・まな板・菜ばし・万能包丁をカゴに入れ、台所で確認した食洗機用の洗剤もついでに入れる。

「食洗機だけでまな板も包丁も全部洗えるのか？」二人で首をかしげつつ、必要なものはそろったようだ。

レジに向かおうとしたところで、重大な事に気づく。「やべえ、こんだけ払える金持ってねえ。今朝のマグドで使っちゃまった」やはりハンバーガー買いすぎである。しかしハンバーガーを買わなくても、お金は足らなかつたであろう。

話し合いの結果、カツ子を呼びに行くことになり、とりあえずその場にカゴを置いて二人で一階に向かう。

一階の食料品売り場に到着したブツチョコと丸美は、子供に囲まれてオロオロしているライ子を発見する。こちらは二人で手分けしているのか、カツ子の姿が見えない。

「おいライ子、カツ子どこ行った？ 金払おうと思つたら、金足んなかったからよ」とたずねると、ライ子はふるえながら言う。

「ど……どこ行つたつてこつちが聞きたいよ！ 一緒に歩いてたらカツ子姉ちゃん段々パニックつて、すごいスピードでどっか行つちやうんだもん！ ホラーか？ 完全ホラーだろあれ！」どこかで聞いたフレーズも出たが、ライ子も相当パニック状態である。

「ライ子落ち着けて！ さすがにまだ店の中探せばいるだろ。ほら、

癒しアイテム返すから」と言いつつ、先ほど”ホラー”と呼んでいた少女とつないでいる右手を差し出す。

やっと定位置について安心したのか、徐々にライ子は落ち着きを取り戻す。

「……………(怒)」

「誰がホラーじゃ！ こんな美少女つかまえて！ 呪いコロされるぞ！……………と言ってる」

「ここでツツコミかい！ てかやっぱホラーじゃんか！」丸美はホラーと言われたことを、だいぶ根に持っているようだった。

とりあえず三人でカッ子を探す事にする。

搜索開始から30分。一階から三階まであるジヨスコの建物を、一通り見て回った。

「……………(泣)」

「のどかわいた、ちょっと座りたい。……………と言ってる」

「そうだな、少し休むか。ジュース買う金くらいあるから何か飲むか？」

自動販売機でそれぞれジュースを買い、備え付けのベンチで一息つく。三人同時にジュースを口にしたとき、館内放送が聞こえる。

ピーンポーン

『迷子のご案内です。ブッチョさんライ子ちゃん丸美ちゃんが迷子です、カッ子様がお待ちですので、至急インフォメーションまでお越しください』

「ブーッ！」三人は同時に口に含んだジュースを吹き出し、インフォメーションに向かってダッシュする。

で、インフォメーション。

「いやいや！ 自分が迷子のくせに、他人のせいにしてんじゃねえよ！」

「……………(怒)」

「迷子になったのカツ子姉ちゃんじゃん！ すっごい探したんだから！・・・と言ってる」

「うえええん！ だって気がついたら倉庫の中にいたんだもん！」
「探しても見つからないはずである。」

奇妙な四人組に、完全にドン引き状態の係りのおばちゃんにお礼を言いインフォメーションを後にする。

先ほどのベンチに戻り、カツ子にもジュースを買ってやり落ち着かせてやる。

落ち着いた頃に、カツ子に二階に精算の済んでない商品があることを告げる。話し合いの結果。二階のカゴの場所を知ってる丸美がカツ子を連れていき、精算を済ました後四人で食料品を買いに行くことになった。

「じゃあ、ちょっと行ってきます」「手をつないだカツ子と丸美が、エスカレーターに乗っていく。」

残った放心状態のブッチョとライ子。

「カツ子のヤツいい年して迷子って。いったいいくつなんだよ」と
ブッチョが愚痴ると。

「ん？ 25才だって言ってたよ」

「俺より年上かよ！ あれで金持ちだってんだから、意味が分からん」と言いながらジュースを口にすると。

ピンポン

『迷子のご案内です。ブッチョさんライ子ちゃんが迷子です。カツ子さま丸美ちゃんがお待ちですので、至急インフォメーションまでお越しください』

「ブーっ！」二人は同時に口に含んだジュースを吹き出し、インフォメーションに向かってダッシュする。

「.....(怖)」

「二階に行ったらカツ子姉ちゃん段々パニックって、すごいスピードで引っ張って行くんだもん！ ホラーか？ 完全ホラーだったよ

あれ！・・・と言ってる」「ホラー少女にホラーと言われる位なのだから、相当怖かったのだろっつ。

「「め……面目ない」「

その後。四人で調理器具を精算しに行き、食料品を買い帰路に着く。

「なんか超疲れたな」

「……（疲）」

「買い物するだけで、こんなに疲れたの初めて。・・・言ってる」「すみません、外の世界にあまり出ないので」「そう言うレベルの話では無い。

現在すでに14時30分。これから料理をすと思うとつんざりである。

「……（泣）」

「おなかすいた。・・・言ってる」

「そうだな」

「「そうですねえ」「

そう言いながら四人の視線は同じ方向を向いていた。

「もうマグドでいいか……」本末転倒である。

余談になるが、買った食材は夕飯としていただいた。そこに至るまでに、ぼや騒ぎまで起こしていたのは四人の記憶に黒歴史として封印した。

まあ四人の人生すべてが、ほぼ黒歴史のみなのだが。

第二話「正義の価値は」01とか02かも

2話「正義の価値は」

01

西暦2035年

地球から超エネルギー物質が発掘された。そのエネルギーは、宇宙を征服できるほどの力を持っていた。

その存在を嗅ぎつけた、宇宙海賊ドンゾックによる地球侵略が開始される。

宇宙海賊ドンゾックに対抗するべく、地球政府は超エネルギーを使用したスーパードル部隊を開発。

彼ら5人に地球の運命は託された。
彼らに名づけられた部隊名は

讃岐戦隊 ウドレンジャー！！

ワーツ！ と言う大勢の歓声と共に、ステージ上に登場する白い全身タイツの5人。

名前の通りうどんをモチーフにしているらしく、白ばかりで5人の区別がつかない。

「……………(叫)」

「わーっ！ ぶっかけー！……と言ってる」と、お前はあっち側じゃないのか？ と思うような着ぐるみ芸人コンビが叫ぶと。

「わーっ！ かまあげー！」「と、いい年したヒッキーセレブも負けじと叫ぶ。

その横で、無表情のままの男がポカンとしている。

「カツ子お前もファンなのかよ！ 俺には5人の区別がつかん！」

「なに言ってるんですか！ 頭のマークが違いますよ。リーダーの”てんぷら”を筆頭に、”かまあげ””ぶっかけ””ざる””カレー”の5人です」「

「こんな子供だましじゃないのか？」ブッチョは子供の頃にヒーローものの番組を見た記憶がなかった。

「見たことないんですか？番組開始5話で地球侵略されるんですけど、そこからが神なんですよ」「」での悪いヒーローもいたものである。

カツ子の話では、地球征服を一ヶ月で達成してしまったドンゾクとやらは、まず世界の兵器を無力化。一年で全世界の生活水準を上げて、世界のカリスマとなる。

一方、地球政府から解散を命ぜられたウドレンジャー達は、ゲリラ的にドンゾク達を攻撃するのだった。

と、まさかの電波シナリオが親までもを巻き込んで大ヒットしているそうだ。

「「カリスマ”ドンゾク”と蛮人”ウドレンジャー”の人間くさい掛け合いが秀逸なんですよ。最後は人間の愚かさを精神世界まで掘り下げ、文学的なラストを描くという噂まで出てるんですよ」「朝8時半からの番組らしいが、朝から憂鬱そうな内容である。

とはいえ、なぜ四人でこんなショーを見ているのかという点。

話は三日前にさかのぼる。

それは、カツ子の家に来たライ丸姉妹に「お前ら、また来てんのかよ」と言うブッチョの言葉を聞かなくなって、しばらくした時期の話。

カツ子はいつものように、近所のコンビニで食料品を買いあさっていた。

ブッチョとライ丸姉妹が来るようになってからというもの、今まで通信販売で済ませていた食料の購入を外で買うように心がけてい

る。引きこもり脱却の第一歩らしい。

今日の購入商品は

「のりべん」ピッ

「コーラ×2」ピッ

「ポテトチップス」ピッ

「バーデンダッツ」ピッ

「菓子パン小倉マーガリン」ピッ

「てか、ろくなもん食ってねえな。高級アイスのバーデンダッツ買
うあたりがセレブくせえ」

「「！！！」カッ子は、店員からのいきなりの暴言に絶句する。

その失礼な店員を見て、さらに驚愕する。

「「ブブ……ブツチョヨさんなんで、こんなところで何してるんです
かあ！！！」

「あー前のバイトはクビになったんで、今日からここでバイトつす
！弁当温めますか？」

「お代は、あー電子マネーね。……はいどうぞ。お前現金持たない
のな」

カッ子がレジに携帯をかざすと、シャリーンという電子音が鳴る。
精算完了の合図だ。

「「私お金持ち歩くの嫌いなんです。財布の中はカードと電子マネ
ーだけですな」

温めた弁当と、その他の商品を別々の袋に入れて渡す。初日にし
ては、なかなかできている。

「じゃ、バイト終わったら遊びに行くわ」

「「はい。待ってます。あっ、じゃあもつと買っていきます」

その後カッ子は、大量の商品を持って店を出て行った。

「キミ、やれば出来るじゃないか。その前のお客様までのように失
敗ばかりだとやめてもらうよ」と、奥からやってきた神経質そうな
男は言う。

「はい店長！ がんばります！ クビにしないでください！」やは

りあまり出来は良くないようである。

02

「ゴチになります！」という掛け声をカツ子に向ける三人。目の前には大量のコンビニ弁当とドリンク、そしてデザートまで並んでいる。

「どうぞ、ちょっと買すぎたので残してもいいですよ」「いつもの食べっぷりを見る限りでは、いらぬ心配だと思いが。

現にものの20分足らずで、すべてを平らげてしまった。

食事をすませたライ丸姉妹は、カツ子になにかを促している。それを合図にカツ子はブツチョに話をもちかける。

「あのうブツチョさん、今度の日曜日ってバイトお休みじゃないですか？」「

「ん？ いや、休みじゃねえけど。一応土日はバイト夜間にしてもらってるから、日中ならあいてるぞ」

「じゃあジヨスコに遊びに行きませんか？」「

「は？ 買い物じゃなくて？ ゲーセンか？」

「……………(頼)」「

「だめ？……………と言ってる」

「いや駄目じゃねえけど、わざわざ予定聞かなくてもジヨスコならすぐだろ？」

「あのですね、日曜日の朝9時までに行かなきゃ駄目なんですよ」

「朝9時！ ってまだジヨスコ開いてねえだろ！ 襲撃か？ 開店前を襲うんか？！」

「……………(怒)」「

「おちつけ！ おまえが襲撃したところで、返り討ちにあうのがオチだ！……………と言ってる」

「…なんの話しに発展してるんですか？ そうじゃなくてですね、

朝9時に着くって事は8時前には出なきゃだめなんですよ。わたし達は「」

その原因はお前だけだな。という視線をカツ子に向ける三人。

「そうだな、その時間だとバイト終わってから寝る暇ねえな」深夜のバイトが22時から翌早朝6時までなのだそうだ。

「……………(哀)」

「やっぱりダメだね。うん、いいやあきらめるよ。……………と言ってる」

「別にいいぜ。ちょっとぐらい寝なくたって大丈夫だろ。親と一緒に行かないって事は、その日しかないんだろ？」

「……………(喜)」

「ほんと!やった!ぜったい約束だよ!……………と言ってる」だいぶ喜んでるようだ。そんなに楽しいことがあるのだろうか。

「「ありがとうございますブッチョさん。よかったねライ丸ちゃん達」」

まさか徹夜でバイトした後に、あんな電波ヒーローショーを見せられるとは知らないブッチョであった。

2話の03と04で

03

そして日曜日。

ジョスコへの道すがら、ブッチョはすでに後悔していた。バイトが終わったのが朝6時。

着替を済ませ、全員がカツ子の家に集合したのが7時半。

みんなで朝食を済ませ、ジョスコに向けて出発したのが7時45分。

そのまま行けば、到着は予定時刻よりも一時間も早い。

はずなのだが。やはり、というかカツ子の神がかった迷子能力のせいで、いまだ到着には至っていない。

現在8時半。カツ子の姿はここには無い。

「……………(汗)」

「どうしよう、本気でカツ子お姉ちゃん行方不明だよ。……言ってる」

「とりあえず、一度戻ってみるか。てかあいつ迷う理由がマジハンパねえよ」

カツ子は、ここに至るまでに二度迷子になっているのだが、その理由が毎回違っているのだ。

一度目は、突然思い立ったように一人でコンビニに立ち寄り、みんながいらないのに気づきパニック状態に。

二度目は、猫を発見してそのままふらりと追いかけて、柵にハマり動けなくなる。

はたして今回はどんな理由で迷子になっているのだろうか。

と、たいして楽しくもない事に考えをめぐらせていると、前方で二人の警察官ともめている人を発見する。

「あれ？　なんか前にもこんな光景見たような気がするが。デジャ

「ブか？」

「……………(汗)」

「いや、たぶんこれは確実に前にもあった光景ですな。……と言ってる」

そう、警察官ともめているのは、迷子の子猫ちゃんならぬ迷子のカツ子である。もし警察官が犬のおまわりさんだったとしても、相手がカツ子だと、困ってしまったってワンワンする前にガウガウ言ってる威嚇することだろう。

「よし、他人のふりしてやりすぎすぞ」

「……………(汗)」

「了解。今日はカツ子姉ちゃん来られなかったってことで。……と言ってる」

そう言って、まわれ右する三人。

すると、背後から聞きなれた声が。「あつ！ あの三人です！ ブッチョさんライ丸ちゃん達、助けてくださいよお！」「見つかったようだ。

「ぐはぁ！ 呼ぶんじゃねえよ！ 知り合いだと思われるだろ！」

04

警察官に呼ばれる三人。事情聴取の幕開けである。

「で、君が旦那さんで、そちらの二人がお子さんですか？」第一声からおかしなことを言い出す警察官である。

それを聞いてブッチョは警察官に言う。「は？ なに言ってるの？ お前頭おかしいの？」たぶんお前の方が頭おかしいのだろう。

「いや、この女性が、旦那さんと子供達が迷子になったと言っていたので」さすが警察官、ブッチョの暴言にも毅然とした対応できり返す。

「……………(?)」

「え？ カツ子姉ちゃんそんな風に説明したの？……と言ってる」

「だって、そう説明した方が早いと思っただもん」

それを聞いて、もう一人の警察官が出て言う。「おい女！ それじゃ本官に嘘をついたと言うことかあ！」

突然怒り出した警察官に、啞然とする5人。4人ではなく5人である、毅然とした警察官も啞然としていた。

「すまん君たち、この人は警察の中でも少し問題のある人なので気をつけて」と怒った警察官に聞こえないように小声で、ありえないアドバイスをしてくる。

「なにをこそこしているのかね。あまり本官を馬鹿にすると撃っちゃうぞ」おそろしい事を言う警察官もいたものである。

「あ？やっぱ頭おかしいだろ。てめえどっかのマンガの拳銃バンバン撃つ本官さんか?!」

なるほど本官さんは鼻の穴は二つあるものの、目は左右がつながってしまいそうなほど見開かれている。

「ぶ……ブツチョヨさん、国家権力にたてつくのやめましょうよ。本官さん目つきがヤバイですよお？」

「……（恐）」

「おお、まじめに撃つてきそうぞで怖い。……と言ってる
その様子を見ていた、毅然とした警察官が補足説明をする。

あの本官さんは、過去に2度拳銃で問題を起こし、若手の頃殺人犯を射殺した経歴を持っているという。

「ぶっ！ 本官さんマジヤバイ人じゃん！ てか人殺しはじめて見た！」と、ブツチョヨが空気を読めない発言をすると。

「へえ、人を殺すってどんな感じなんですか？」と、さらに変な食いつき方をしたカツ子が追い打ちをかける。

「失礼な！本官は犯人に正義の鉄槌を下しただけである！断じて人殺しなどではない！」正義の鉄槌とは良く言ったものである。

「そう言えば昔、殺し屋のことを、ターゲットを”消す”って意味で”レイサー（消しゴム）”って言ってたドラマか映画があった気がするから、これから本官さんの事をレイサーの”レイさん”

と呼ぼう！」「ブッチョの最低あだ名付け芸の本領発揮だ。

「ほう、なかなか格好の良い名だ。これから本官のことをそう呼ぶがいい」殺し屋警官レイさんの誕生である。

あきれかえるもう一人の警察官に、多少の警告を受けた後にようやく解放される。

「……………(疲)」

「ようやく行けるよ、てか早く行かないと時間がないよ！……と言ってる」

時計を見ると、9時までは後5分しかない。

これ以上のタイムロスは許されないので、四人で手を繋いで行くことになった。

その後無事にジヨスコに到着。結局今日の目的は11時からのヒーローショーだと判明するのだが、なるほどすでにショー目当ての行列ができていた。

ショーが始まるまでの時間ブッチョは、眠気と戦いながら、レイさんの言う”正義”と”殺人”と言う言葉が微妙な違和感を持って繋がらないでいた。

まあそんな違和感も、もうしばらくで始まる電波ヒーローショーのおかげで混沌の中に埋もれてゆくことになるのだが。

ショーも終わり、余韻に浸りながら会場を後にする観客達。

カッ子がいらない事に気づく三人。

ピンポーン

『迷子のご案内です……………』

カッ子お得意のネタで、今日の行事が締めくくられる。

第三話「以心電信」01 および02で

第三話「以心電信」

01

街は初夏と言っても過言ではない暑さをまとっている。
そんな時期のお話。

あの電波ショーから一週間、カツ子のマンションのリビングにある巨大な液晶テレビのスクリーンの中では、かのウドレンジャーがゲリラ活動を行っている。

この、朝から憂鬱になりそうな番組が終わると、次は仮面ソルジャーという、これも変身ヒーロー物の番組が放映されるのだが。これらのヒーローが変身するために使用するアイテムが、今回の話の中心になる。

「……………(笑)」

「今週のウドレンジャー最高だったー！ ゾンドックが、ウドレンジャーをまさかの幹部起用！ 来週が楽しみ！……………と言ってる」

「お前ら朝からこんなもん見てると、アホになるぞ」

「……………(怒)」

「ブッチョは見てなくてもアホじゃん。……………と言ってる」

「ライ丸ちゃん達、女の子がそんな言葉つかいしちゃいけません。ブッチョさんはちょっとアレですけど、アホじゃありません！」

などといったものようにコントを繰り広げる四人。

ほどなくして、テレビから仮面ソルジャーの歌が流れ出す。

仮面ソルジャーは、やはり怪人と戦うヒーロー番組なのだが、ウドレンジャーの5人とは違い主に1人で戦うことになる。姿かたちも仮面ソルジャーの方が、昆虫をモチーフにしている格好が良い。

しかし、そんな似ても似つかない二種類のヒーロー達の共通点にブッチョは気づく。

「あれ？ こいつも携帯電話で変身するんか？」

そう、ウドレンジャーは携帯電話を掲げ、仮面ソルジャーは携帯電話を腰に当てて変身するのだ。

それに連鎖するようにカツ子も気づく。

「「そうだ！ ブッチョさんが携帯電話持ってないから、私が迷子になったとき困るんですよ！」」

迷子になる方が悪いのだが、とんだとばっちりである。

「………（解）」

「なるほど。カツ子姉ちゃんが迷子になった時、連絡が取れば館内放送で呼び出される事もないね。………と言ってる」

「ん？ そういうもんか？ 携帯電話持ったことないから、気づかんかった」

ブッチョは別に、理由があつて携帯電話を持っていなかったのではなくて、ただ必要なかつただけの寂しい男なのである。

しかしカツ子も、電子マネーの支払い以外で携帯電話を使用することなど皆無に等しいのであった。

「………（笑）」

「じゃあ今日は、ブッチョの携帯を買いにいこう！………と言ってる」

「は？ いや、そっか、必要なら買ってもいいか」ブッチョは、まさか携帯電話が必要になるとは思ってなかったので少し戸惑う。

「「じゃあ決まりですね。今日はヘイデン社に行きましょう」」

ヘイデン社とは、ここ愛知県を中心に展開する大型家電量販店である。家電から、ゲーム、おもちゃに家具までなんでもあり、一日いても楽しい店舗なのだ。場所も、ジヨスコの近くという利便性の良さもポイントだ。

こうして一行は、ブッチョのはじめての携帯電話を買いに行く事になったのである。

02

「じゃあヘイデン社へ出発です！」と元気良く叫ぶカツ子を。
「ちよつと待て！」とブッチョが止める。

「はい？ なにか忘れ物ですか？」

「いやいや、今までスルーしてきたが、カツ子お前いつも同じ格好してないか？」

そう言われて全員の視線がカツ子に集まる。

なるほど、いつものノーメイクにボサボサ髪、上下ジャージにパーカーを羽織っている。見慣れた光景なので、疑問に思わなかったが、カツ子が他の服を着ているのを見たことが無い。

「なつ！ ちゃんとクリーニングしてますし、同じ服4着ずつ持ってて、毎日着回してるんで汚くないですよっ！」

「って、そういう事を言ってるんじゃないか！ てか4着ずつもあるのかい！ お前はアニメキャラか？！」

「ブッチョさんだって、いっつもジーパンにTシャツじゃないですかあ！」

「いやいや、俺だって3着ずつ違うのを着回してるし、ジーパンだって1回履いたら洗濯するぞ！」以外とキレイ好きらしい。

「……………(汗)」

「もう、ふたりともケンカしちゃだめだよ！……………と言ってる心配をするライ丸達を指さしてブッチョは言う。

「見てみる！ ライ子はしょうがないとして、丸美は毎回違う服を着てきてるだろ！」確かに、丸美が同じ服を着ている事はあまりない。

「……………(怒)」

「お姉ちゃんだってライオンの皮3着を洗濯して着回してるぞ！・・
・と言ってる」

「！！！！」「！！！！」「まさかの事実にはブッチョもカツ子も驚愕する。」

結局、カツ子の持っている服は、ジャージ以外は礼服しか無いことが判明。カツ子の服の購入はまたの機会ということになった。迷子阻止の為に携帯電話を購入するのが先、という結論に達したためだ。

で、出発したのだが、今回は最初からみんなで手を繋いで行ったため、何事もなくヘイデン社に到着した。何事もないと逆に不安になる一行であった。

ヘイデン社の店舗は、3階建てながらも広大な敷地に建っているため、かなりの商品数を有している。

1階は駐車場となっており、実際は2階と3階が商品スペースとなっている。

さらに、3階は家具や大型家電を販売するスペースで、携帯電話を販売しているのは2階部分ということになる。

「うおおおっ！ でけえ店だなおい！ こりゃあカッ子じゃなくても迷子になるぞ！」

「……………（驚）」

「わあああっ！ 見てあれ！ おもちゃコーナーもある！ ウドレンジャーフィギュアもあるよ！……………と言ってる」

いなか者まるだしのはしやぎよの三人。地元の店でこれだけ興奮できるのは安上がりこのうえない。

さすがヒッキーとはいえ、セレブのカッ子はこの程度でははしやがない、と思いきや。

「ぶっ！ カッ子がいねえ！」どうやらあまりの広さにパニックになっただけらしい。

幸いこの商品棚は低く作られているので、さまようカッ子の姿をすぐに確認できた。

「……………（呆）」

「まったくもう、ブッチョが携帯買つまでおとなしくしてよ……………と言ってる」

「「面目ない……………」小学生に説教される25歳の女。」

まわりを見てみると、ここはテレビ売場のようだ。

「・・・・・・・・・・(喜)」

「あっ！ カツ子姉ちゃんこのテレビと一緒にだ！・・・と言って
る」

「これが一番でかいテレビだな、さすがヒツキーセレブ」

「「そりゃあ毎回、その時一番の機種を頼みますから」「テレビは、
そう頻繁に換えるものではないと思うが。」

「テレビかぁ。そろそろ買わなきゃいかんな」

「・・・・・・・・・・(?)」

「ブツチョ、テレビ持ってないの?・・・と言ってる」

「ウチにあるテレビは厚型のブラウンさんじゃい!」「どうやらブツ
チョの家には、地デジーコオは来てくれなかったらしい。」

ちなみに地デジーコオとは。テレビの電波が、地上デジタルとい
うものに切り替わり、今までのテレビでは見れなくなってしまふ。
そのためにテレビを買い換える。というキャンペーンのキャラクタ
ーである。

伝説の元サッカー選手ジーコオを起用し、大量のCMが流された。
サッカーと言えば、地元チームグランドパスエイティを悲願の優勝
へと導いた、元選手で現監督のストコビッチが神である。

余談が長くなつたが。簡単に言うと、現在ブツチョのテレビは砂
嵐しか映らない。

「まあいいか。テレビなんか見られなくても生きてける」三人に苦
笑されるブツチョであった。

「・・・・・・・・・・(?!)」

「あっ、見て！ こんな所にソファで寝てる人たちがいる!・・・
と言ってる」

「ああ、マッサージチェアコーナーだな。ジヨスコにもあるぞ」

「・・・・・・・・・・(汗)」

「こんなところでガチで寝て、恥ずかしくないのか？こいつら。．．．
と言ってる」
「みんな寝てるから恥ずかしくないんだろ？ それに見る。店側も
みぐるしいからって、ちゃんと周りから見えにくい様に配置してあ
るだろ？」
「いやいや、本人達の目の前で暴言吐くのやめましようよお」「
迷惑極まりない一行である。」

04

なんだかんだで、携帯電話売場に到着。
電話会社別に、実にカラフルな携帯電話が数多くディスプレイさ
れている。

「．．．．．（笑）」
「やっぱスマホがいいよね。ゲームできるし。アンドロイドとア
イホンどっちがいいかな？．．．と言ってる」
「すまん、日本語でしゃべってくれ。横文字はわからん」じじいの
様なことを言う若者である。
「こっちのスマホは防水仕様ですよ。こっちは私が持つてると
同じです。新作が発売されることに買い換えてるんで詳しいです
よっ」「次々に説明してくれる、こちらは金銭感覚のおかしい若者
である。」

「ちよつと待て！ まずスマホってなんだ！ そつから説明しろ！」
「．．．．．（！）」
「マジで言ってるの？ CMとかでもやってんじゃん！．．．と言
ってる」厚型砂嵐のテレビではコマーシャルなど放映されてはいな
い。

この騒ぎに気づいた店員が、説明しようとカタログを持って少し
後ろで待機しているが、この異様な一行に近づけないでいる。苦笑
する店員をしりめに、カッ子はスマートホンの意味から機種の説明

までブツチヨにたたき込んだ。

「なるほど、これ一台あれば電話もインターネットも何でもできるわけだ」

「そうですね。どのスマホにしますか？」

「いや、どれにもしない」

「……………(?)」

「は？ ここまで来て買わないのかよ！ ……と言ってる」

「おいおい、お前らフリーターの収入をなめてんじゃねえって言うてんじゃねえか！」 予算オーバーらしい。

「いや、これぐらい私が出しますよ。私と同じ電話会社なら、使料も出します」

「……………っ！」 カツ子の言葉を聞いたブツチヨは、どろり……………と忘れていた嫌な記憶が、膿のように出てくるのを感じた。

ブツチヨは、高校生の頃に一時だけ友達ができたことがあった。友達と呼ぶには曖昧な感じに集まる四人。ブツチヨは、長い間友達などできた覚えが無いので、どこか馴染めない居心地の悪いような感じを抱えていた。

しかしあれは、ほんとに気まぐれだったのだが、放課後寄ったマグドで、ブツチヨが三人に奢ったのだ。

「おっ！ マジで？ ごっそさん」

「バイトやってんだっけ？ ゴチっす」

「ごちそうさん。俺も給料入ったら奢るよ」

その当時バイトをやっていて、それこそたいした金額ではなかったのだが、初めて友達のような関係が持てた気がした。

それから遊びに誘うときは、決まって奢ると自分で決めていた。

他の三人もバイトをしていて、金に余裕があるので奢ってくれることも多々あった。

そんな感じで、四人の関係は成り立っていた。

今と同じで出来の悪いブツチヨは、ある時バイトをクビになる。

収入が無くなり、バイトを探すがなかなか見つからない。

そうになると、奢ることで友達と繋がっていると思っていたブツチ

ヨは、徐々にその三人とは疎遠になる。

そのことを三人に打ち明けると、「そんなこと気にすることねえよ、別に金で繋がってた訳じゃねえんだし」と言ってくれた。実際三人は全く気にはいかなかったのだが。

しかし結局、以前のように居心地の悪さを感じるようになってしまい、三人とは付き合わなくなってしまった。

今、同じ状況になったとしても、あの三人とちゃんと友達でいられる自信は無い。

だが、同じ気持ちを今日の前にいる友達にあじあわせない様にする事はできるはずだ。

ゴン！

「いったーい！ ブッチョさん何するんですかあ?!」「いきなり脳天にゲンコツをくらったカツ子は、泣きながら抗議する。

「アホかお前！ 友達と付き合う為の予算ぐらい自分で出すつーの！ それにそんな事されると、逆に友達でいずらいわ!」

「えっ?!」「」

と言う感嘆符付きの声を発したかと思うと、次の瞬間カツ子と目が合う。

今までも、偶然目が合う事は何度もあったが、すぐに目をそらしていた。

しかし、今は確かにカツ子は”目を合わせた”。まあ次の瞬間には目を背けてしまったのだが。

「……………(怒)」「」

「あーっ！ ブッチョがカツ子姉ちゃんいじめてるー!……………と云ってる」と絶妙な横やりが入る。

「いやいや、ちょっと叱ってやっただけだから。いじめとか言うな。教育委員会から苦情が来るわ!」

「……………(?)」「」

「カツ子姉ちゃん、大丈夫?……………と云ってる」と言いながら、カツ子のゲンコツの落ちた箇所をなでるライ丸姉妹。

しかし、カツ子の様子を見て手が止まる。

「えへへへ、友達だって。えへへへ」と小刻みに震えながら笑っている。

「……………(恐)」「」

「か……カツ子姉ちゃんが壊れた！ ホラー再来？！……と言ってる」

「やべえ、打ちどころが悪かったか。もっかい叩いたら治るかもしれん、お前らたのむ」

ライ丸姉妹は、カツ子の頭をポカポカ叩くが、一向にヘラヘラ笑いは治らないのであった。

結局ブッチョは、0円で買える折りたたみ式の携帯電話を購入する事に決める。

しかし契約の段階で、身分証が必要な事が発覚。

自動車免許その他身分証になるものなど、持ち合わせている訳などなく。

本日の購入を潔く断念。

その後の店内には、マツサージチェアを占拠する四人がいたという事である。

後日ブッチョは、一人で保険証と住民票を持って来店。契約を済ませ、晴れて携帯電話の所持者となったのであった。

と、これがブッチョの初携帯電話所持までの経緯である。

それと、もう一つ。カツ子のファッション問題について。

ブッチョが携帯電話を購入した日から三日後に進展があった。

カツ子の服装は、パステルピンクに白のツーラインが入った長袖長ズボンのジャージに、淡い水色の長袖パーカーを羽織っている。これを4セット持っているらしく、その服装しか見たことが無いのだが。

その日に見た格好は。

パステルグリーンで、胸の部分に英語のロゴが入り、半袖の。

上下ジャージであった。

ご丁寧に、パーカーもオレンジの腕の部分の無い夏物に変わっている。

なにごともしなかつたように、それを着ているカツ子を見て、ムカついたブッコヨは、ツッコまずにスルーするのだが。

二日目には、デザインが全く同じで、色の違うものを着ていて。

三日目にも、さらに色だけ違うものを出してきた。

そして、四日目を見せられたときに。

「色違って、お前はどっかのゲームの雑魚キャラか！」 というブッコヨの絶叫で、このネタは幕を閉じたのである。

第3話了

第三話補足「着信アリ」01と02です

第三話補足「着信アリ」

01

はじめての携帯電話から二日後、カツ子が新しい服を披露する前日の話。

いまやすでに、変人達のたまり場になりつつあるカツ子宅。

その食事時間でのひとコマふたコマ。

最近夕飯は、四人そろって食べるのが習慣になりつつあった。二人ほど、夕飯ではなく間食として食べている子供がいるが。

「……（汗）」

「うっ。カツ子姉ちゃん、このハンバーグすっごい甘いんだけど。」

「……と言ってる」

「おい、味噌汁の半分が味噌のかたまりだぞ」

「「ええっ！ おかしいなあ、ちゃんと料理本の通りにやったんですけどねえ」」

あの買い物の一件からしばらくして、せっかく買った調理器具を使わないのはもったいないと、ブッチョとカツ子が交代で夕飯を作ることになったのだ。

カツ子は、料理本を見ながら作っているにもかかわらず、できあがる物は、見た目は良いが、本とは違った味になる。まともにできるのはご飯を炊くことぐらいである。

ブッチョの作る料理はというと、味は良いのだが、高タンパク、高カロリー、高コレステロール、そして量が多いときている。しかも、オリジナル料理が多いので、見た目が最悪なのだ。

とはいえ、文句を言いながらも毎回全部たいらげてしまうのだが。

食事を終え、食洗機に食器をセットしているブッチョにカツ子が声をかける。

「ブッチョさん、携帯電話の調子はどうですか？」

「ああアレなんか壊れてるみたいだから使ってねえよ」

「……………(怒)」

「なんだ、いまだき不良品つかませるたあふてえ野郎だ！……………と言ってる」とライ丸は、なぜか時代劇の口調で怒りをあらわにする。「それじゃあ交換してもらわないといけませんねえ。どこが悪いんですか？」

「ああなんか、どのボタン押しても、画面が真っ黒で何も映んねえ」

「ん？」

「……………(?)」

「あれ？ それって、電源入ってないんじゃない？……………と言ってる」

「は？ だから、電源も入らないんだって」

「えっと、電源ボタンは3秒ぐらい長押ししないと入らないですけど？」

「え？ そうなのか？ どれどれ」ポケットから、携帯電話を取り出す。使えないのに持っているとは律儀なやつである。

言われた通りボタンを押してみると、電子音と共に画面が映る。

「おおっ！ちゃんと動いた！」

「……………(汗)」

「いまだき携帯の電源も入れられないやつがいるのか？……………と言ってる」

「ブッチョさん、どれだけ文明の利器から離れてるんですか？」
電源が入り、はしゃいでいたのもつかの間。すぐに落ち込んでしまっ。

「……………電話をかけようにも、かける相手がいねえ！」

「……………(驚)」

「ブッチョ友達一人もいねえのかよ！ いるのかそんな奴！・・・
と言ってる」

「なっ！ お前らだって、毎日こんな所に来てて、友達いねえんだ
ろうがあっ！」

「.....(怒)」

「ブッチョと違って、友達いっぱいいるもん！ いつも友達と遊ん
でから来るんだもん！・・・と言ってる」

「ま.....まじか、お前ら絶対友達いないもんだと思ってたのに」ガ
ツクリとうなだれるブッチョ。

「ブッチョさん携帯貸してください」「と言いながら、カッ子は
ブッチョから携帯電話をうばいとる。

すると、手早くブッチョの携帯をいじりまわし、自分の携帯と向
かい合わせる。どこかの儀式のように向かい合わせると、ピロリン、
という電子音になる。

そのまま返された携帯電話を見ると、画面には登録された電話番号
が映っていた。ご丁寧に、「カッ子」という名前で。

「ブッチョさんの初めてもらっちゃいましたあ」「と、うれしそ
うにはしゃぐ。

「なんかそのいいまわし、ちょっとエロいな」

「.....(怒)」

「ブッチョさいて！.....と言ってる」

「ぶっ！ 意味わかんのか、お前らにはまだ早い！」

あまりこのネタを引く張るとヤバいと感じたブッチョは、携帯電
話を持って歩き出す。

「ちょっとお前からここで待ってるよ」と言い残し部屋を出ていく。

取り残されるカッ子とライ丸姉妹。

しばらくすると、カッ子の携帯が鳴り出す。

カツ子が電話を取ると『もしもし、ってうわっ、もしもしって言っちゃったよ。しかも自然に!』という、ブッチョの、はしゃぎ過ぎて寒いテンションの声が、静かな部屋に響き、苦笑する三人。

「あのう、同じ家の中で電話って、電話代の無駄だと思うんですけど」「と、呆れながら言う。

『別にいいじゃねえか。最初ぐらい。ってお前、脱いだ服こんな所に山積みにしてんじゃねえよ』

「ぎゃあっ! ブッチョさんどこにいるんですかあっ?!」「

『どこって、ベッドがあるから寝室か?てか洗濯ぐらいしろよ』

「まとめてクリーニングに出してるんですっ! 女性の寝室のぞかないでくださいっ!」「

「………(汗)」「

「いや、でも、カツ子姉ちゃん、アレはちょっとないね。……と言ってる」

ライ丸姉妹は、初めて来たとき寝室をのぞいていた。

「ぎゃふん! 寝室のぞかれて、ダメだしされて、最悪ですっ!」

撃沈するカツ子であった。

電話を切り、ブッチョは携帯電話をポケットにしまう。

そこで、前にテレビで見た映画のCMで、”着信あり”というタイトルのホラー映画があったのを思い出す。

映画そのものも、見たことはなかったのだが。

当時も携帯電話の事を、あまりよく知らなかったなので、携帯電話の画面に”着信あり”と出ると呪われるかと思いきや、

そんな事を、ふと思いだしながら部屋を出ようと、ドアの付近に差し掛かったとき、散乱していた服につまづいて転んでしまう。

その時、運悪く照明のスイッチを切ってしまい。部屋が暗黒の闇に支配される。

一方、カツ子たちは、ブッチョがなかなか帰ってこないのを電話を掛けることにした。

「あれ？ 電気のスイッチどこだ？」と手探りでスイッチをさがしている。

ピリリリリリリリ！

ブイイイイイイン！

と、大音量の着信音とバイブレータが鳴り出す。

「ぎゃああああああつ！！」暗闇での初めての着信に、もう大パニックである。

携帯が鳴り止み、落ち着きを取り戻すと、ポケットの携帯電話が光っているのに気づく。

恐る恐る携帯電話を開くと、その画面には。

”着信あり”の文字

「ぎゃああつ！ リアルホラー！」という絶叫と共に意識を失うブッチョであった。

二度の絶叫を聞いて、部屋に駆けつけた三人が見たものは、カツ子の山積みの洗濯物に顔をうずめて気絶したブッチョで、さらにそれを見たカツ子の絶叫でこのネタは終わったのであった。

第3話補足了

第おまけ話「顔出しNO GOOD」（前書き）

はじめにお読みください。

この話には挿絵が入っております。

もともとノベルゲー用の物語なので、キャラクターのデザインがあります。

しかし、小説という媒体で、キャラクターのビジュアルを固定するのは本望ではありません。

話的には第3話の続きの体ですが、物語の本筋に必要な情報は含まれていません。

まあ、どうでもいい小説にどうでもいい絵が付いただけなので、気にすることはありませんが。

素人の描いた絵を見るのが苦痛な人は、ぜひ読み飛ばしてください。

第おまけ話「顔出しNO GOOD」

第おまけ話「顔出しNO GOOD」

01

ある日の昼食時の光景。

今日の昼食は、定番のマグドである。

定番で大量のマグドである。

「・・・・・・・・・・（笑）」

「うまい！ マグド最高！ 発明した人は神！・・・と言ってる」

「それじゃ、わたしもいたただきましょつと」

そんな食事風景の横で、一人携帯電話をいじるブツチヨ。

カツ子がハンバーガーを口にくわえたと同時に。

ピロリン！

>i31975—3933<

電子音と同時に、ブツチヨの携帯電話の画面に、カツ子とライ丸姉妹の写真が保存される。

「わっ！ いきなり写真撮るなんてマナー違反ですよブツチヨさん！」

「・・・・・・・・・・（笑）」

「えっ写真撮ったの？ 見せて？・・・と言ってる」

「わりいわりい。携帯で写真撮れるって、今気がついたから撮っちゃった」

「もっ、ちょっと見せてください」

カツ子はブツチヨの携帯を取り上げ、写真をチェックする。

「！！！！」「ピッ。即削除である。」

「えっ？ 今消したの？ 勝手に消すのはマナー違反じゃねのかわ

！！」「どっちもどっちである。」

「ちゃんと撮ればいいのなら、これから撮影会だ！」
こうして、なんの脈絡もない撮影会のスタートである。

02

トップバッターはカツ子である。

カツ子はなにやら、奥の部屋でゴソゴソやっている。

待つこと10分、いよいよライ丸達からあくびが出始めた頃にカツ子は出てきた。

「おまたせしましたあ。じゃあ始めましょうか」

そう言いながら登場したカツ子は、セーラー服のコスプレに羽根が生えていて謎のステッキを持っている、という出で立ちであった。

「……………(汗)」

「……………と言ってる」

「あつ、あれ？ ライ丸ちゃん達なら、このステッキわかってくれると思ったんだけどなあ？」

「……………(哀)」

「ごめん、カツ子姉ちゃん。ステッキはいいけど、なんかもうどっ散らかってパニックだよ。……と言ってる」

カツ子の話では、”鈴宮ハヒルの鬱憤”とか言う大ヒットライトノベルの主人公のセーラー服に、なぜか羽根を背負い、手持ちぶさたなので少女アニメのステッキを持った。とのことだった。

「どう見ても、いい年した女がセーラー服着て、はしゃいでるようには見えないので10点」

「え？ 10点満点で？」

「アホか！ 100点満点中だ！」どうやら採点されるようだ。

「じゃあとりあえず撮るぞ」

「えっ？ ほんとに撮るんですか？ ちょっと待ってください」「ピロリン！」

「あつ、もう撮っちゃったんですか？ 中途半端な感じになっ

てないですか？」「といいながら携帯をのぞき込むカツ子。

> i32047-3933<

「やつぱり中途半端……っっていうか、これってまさか、手抜きですよね？！絶対手抜きですっ！完全に線が適当ですもん！」「

なにを言っているか解らないが、断じて手抜きなどではない。面倒くさくなっただけなのである。

「なに言っただよ！ 写真に手抜きもなにもあるか！」

「………(笑)」

「あははは。ほんとだ、完全に手抜きだね。……と言ってる」「失礼なガキである。」

「お前ら！ そう言うツッコミを入れるのはルール違反だぞ！ 自重しろ！」こんな小説に、ルールもへったくれもあつたもんじゃない。

03

で、次はライ丸姉妹である。

「………(笑)」

「カツ子姉ちゃん、よぶんな事するからあんな結果に終わるんだよ。……と言ってる」

「だってえ、こんな時ぐらいしかコスプレ着る機会なんてないんだもん。ライ丸ちゃん達もなにか着る？」

「………(汗)」

「いや、遠慮しときます。イタい結果になるのは目に見えているので。……と言ってる」

子供の目にも、カツ子のコスプレは相当イタらしい。

「じゃあ撮るぞ」

「………(!)」

「えっ！ ちょっと待ってよ！ 前振りもうおわり？ 採点とかしてないし。……と言ってる」

「ああ、お前らすでに出落ちだし、採点はもう飽きた」
ピロリン！

「……………(汗)」

「よっしゃ、とりあえず顔だけはいい感じに作れたと思う。．．．
と言ってる」といいながら携帯をのぞき込む。

> i 3 2 0 4 8 — 3 9 3 3 <

「……………(怒)」

「てか、私たちの顔だけかい！絶対からだ描くの面倒くさかった
の見え見えじゃねえか！．．．と言ってる」さすが自称エスパー、
わかっていらつしやる。

「もう俺はフォローしないぞ」

04

なんだかんだでブッチョの番である。

「これで撮影会はおひらきだな」

「！！！！」三人はブチギレである。

「……………(怒)」

「お前、自分だけ逃げようつたつてそうはいかねえぞ！ お前もガ
ツカリ写真とれ！．．．と言ってる」

「そうですね！ あんなにひどい写真撮られたんですから、ブ
ッチョさんも撮ってくださいよおっ！！」

「わかった、落ち着けお前ら！それじゃあ四人の集合写真を撮ろう。
それでいいだろ？」

「……………(苦)」

「なんか釈然としないけど、まあいいか。．．．と言ってる」

「「しょうがないですねえ。それで手を打ちましょう。じゃあみん
なで写るなら着替えてきますね」」

「よし！ タイマーセット！ 撮るぞ！」いつの間にか、タイマー
なんて機能が使えるようになっていた。

ピピッ！ タイマーセット完了の電子音が鳴る。

「はい？ ちょっと待つてくださいよお！ なんでブツチョさんはいつも勝手に撮り始めるんですかあっ！」

「は？ なに言ってるんだ？ 見るよライ丸達はもう準備万端だぞ！」
ライ丸姉妹は、携帯の前で澄まし顔で手を繋いでいる。

「ぎゃふん！ ライ丸ちゃん達ずるい！ ブツチョさん、私こないたい格好じゃ嫌です！」
「やはり自分でもイタいらしい。」

「いい年こいてアニメキャラの扮装なんてするからだろ！ お前が着替えてる間に、ライ丸達寝ちまうぞ！」

「たしかにさつき着替え終わったときも、ライ丸ちゃん達眠そうでしたけどっ！ それでも着替えたいんですっ！」

そんな言い争いをしている二人の前で、ライ丸姉妹は笑顔で立ち尽くす。立ち尽くしながら思う、タイマー長え！

ブツチョがタイマーをセットしてから、すでに30秒以上が経過していた。

笑顔で立ち尽くす子供二人と、言い争いをする男女二人。

彼らはしらなかった。

> i 3 2 0 4 9 — 3 9 3 3 <

その醜態がムービーで撮影されていたことに。

新たな黒歴史の誕生である。

第おまけ話了

第四話「モダンウォーフエア」01と02

第4話「モダンウォーフエア」

01

カツ子は、ビルの廃墟の二階の窓から外をうかがう。
眼下を味方が走り抜けていく。

直後銃声が鳴り響き、戦闘が開始される。

雑居ビル前方の道路右側を敵が走り抜ける。カツ子は、装備しているアサルトライフルで狙いを定め、トリガーを引くと、目標の敵はその場に倒れ伏す。

視線を前に戻すと、向かいのビルの窓からこちらを狙う敵が。

「しまった！」と思った瞬間、こちらを狙っていた敵が窓から転げ落ちた。

「大丈夫かカツ子！」ブッチョが窓から姿を見せる。

「ありがとうございます。助かりました」

ひと安心した直後、爆撃機の轟音が上空から鳴り響く。

「なっ！ 空爆!?」二人は建物の中にいるので安全だが、窓際では爆風に巻き込まれる恐れがある。

「……………(笑)」

「空爆要請したから、二人とも気をつけてねー。……………と言ってる」
ドカン！ ドカン！ ドカン！ と周囲を焼き尽くす爆撃が放たれる。

「マジかお前ら、空爆で。そんなに倒したんか？」

「……………(笑)」

「あははは、今のでさらに3人逝ったね。……………と言ってる」

空爆は、自分がやられずに5人連続で倒すと呼べるポーナスなのだ。

そう、これは最近はやりのFPSゲームの話。
ファースト・パーソン・シューティング
FPSとは、その名の通り自分視点で動かし、鉄砲をうって敵を
倒すゲームである。

なぜ、こんなゲームをやっているかというと……。

時は、夏本番を思わせる七月初旬。思わずエアコンの効いている
場所へと足が向いてしまう時期の話。

ブッチョとライ丸姉妹の頭のなかで、エアコンの効いている施設
は、自動的にここカツ子の家になる。

まあ、暑くても寒くてもここに集まるので、季節は関係ないのだ
が。

「で、今日はみんなにお願いがあるんですけどお」

「金ならないぞ」金持ちに言うせりふではない。

「……………(哀)」

「ご飯は減らさないください。……と言ってる「どんな貧乏セ
レブか。」

「いや、このゲームと一緒にやってもらいたいですけど」「と、
なにやらゲームの箱を手にカツ子は言う。

ゲームのタイトルは”コールオブビューティ―：モダンガールフ
エスタ3”全世界で記録的な本数を売り上げた、大ヒットFPSシ
リーズの第3弾らしい。

ゲーム内容をざっくり説明すると。セクシーな女性兵士が、露出
度の高いコスチュームで、数種類の武器を使い、2チームに分かれ
て対戦するというお色気系FPSである。

ちなみに設定として、人は攻撃を受けると気絶するので、武器は
実在のものではない。

カツ子はこのゲームをやってる人たちのチームに所属していて、

今日は他のチームとの決戦なのだが、チームメイト3人が用事でプレイできないとの事。
ヒマ人のカツ子が補充要員の確保をまかされたのだが、人見知りの激しいカツ子は、悩んだ末ブツチョとライ丸姉妹に助っ人を頼んだ次第である。

02

「よし、わかった。けど、お前のやってたネットゲってこのゲームの事か？」

「いいえ。ネットゲの方はパソコンのオンラインRPGです。そっちの話がいいですか？そうになると、傾向としてゲームの世界に入り込むことにもなりかねませんけど？」

「……(汗)」
「カツ子姉ちゃん。あんまりそういう事言わない方がいいとおもうよ?……と言ってる」

「おい！ あんまこのネタ引つ張るな！」

「あれ？ そうですか？ じゃあこっちの部屋に来てください」「
と言つて開けた隣の部屋の中には、3台の液晶テレビと、それに繋がった3台のゲーム機がセットされていた。

「うおっ！ どちらのオフィスみたいだな。わざわざこのためにそろえたのか？」

「いえ、テレビとゲーム機を3台つなげて遊ぶゲームがあるので、そのためのセットです」

実際、5台つなげて遊べるゲームがあるそうだが、それは別の話
「……(驚)」
「すごい！ はやくやろーよ!……と言ってる」と、目をキラキラさせながら言う。

「じゃあ少し説明しますね」「
と、いってリモコンで電源を入れていく。

それから約10分ほど操作説明を受ける。
さすが子供は飲み込みが早く、すぐに操作を覚える。ブッチョも
出来が悪いなりに覚えたようだった。

次に使用武器を選ぶのだが、大きく分けて遠距離・中距離・近距離の武器がある。で、数回プレイした結果。

ブッチョ……………近距離武器（ショットガン）
カッツ ……中距離武器（アサルトライフル）
ライ子 ……中距離武器（アサルトライフル）
丸美 ……遠距離武器（スナイパーライフル）
という具合になった。

「よし、まあだいたいオツケーだろ」

「……………（怒）」

「ぜんぜんオツケーじゃねえよ！ 敵が見えたからって、あんな遠距離からショットガンが当たるか！……………と言ってる」たしかにぜんぜんオツケーではない。

「まあ時間もありませんし、これでいきましょう」

と言いながら、カッツはリビングの方のゲーム機を起動させる。

ブッチョとライ丸も、それぞれのゲーム機のコントローラーを持つ。

現在ゲーム画面には、ロビーと呼ばれる文字だけの画面が映し出されている。

「……………（笑）」

「あつ！ わたし達の名前が書いてある……………と言ってる」

テレビ画面には、ブッチョ・カッツ・ライコ・マルミ、と上から順に並んで書いてある。他の名前が無いが、時間になれば増えるらしい。

「ふーん。で、この名前の前の文字はなんだ？」

自分達の名前の前に、カッツに囲まれたアルファベット四文字が書いてある。

「「あつ、それは”クラಂತグ”って言って、チームの名前みたいなものです。こういうゲームでは、チームの事を”クラン”って言うて、このゲームではその名前をアルファベット四文字で付けられるんです」「

「……………(笑)」

「じゃあ、わたし達も”クラン”かな?…・…・…って言うて」

「アホか、チームなんて格好いいもんじゃねえだろ? 寄せ集めで充分だ」と言いつつ、まんざらでもない様子。

「「えへへへ、今度わたし達の”クラಂತグ”考えましようか」「

「ところでこのクラಂತグはどう言う意味だ?」「HDKS」何かの略か?」

「……………(?!)」

「H……………ほっとけ・D……………だまれ・K……………けど・S……………好き。…・…・…と言ってる」「あいうえお作文が始まったようだ。

「ツンデレか?! もっとかつこいい略だろ! たとえば、H……………ハインな感じで・D……………ドラスティック・K……………クロツシング・

S……………サレンダー」

「「厨二病ですか! 支離滅裂ですし! H……………へた・D……………だけど・K……………かんべん・S……………してね。の略です」「まったくもって駄目である。」

これからの対戦の泥試合ぶりが目に見える、ブッチョとライ丸姉妹であった。

そんなこんなで、これから数分後に世紀の泥試合が幕を開けるのであった。

「で、今日の対戦相手は強いのか？」

「いいえ、たぶん私達とおんなじ位の強さだと思います」「それを言うなら強さではなく、同じ位の弱さであろう。」

「……………(汗)」

「うーん、ぐだぐだの予感……………と言ってる」

「まあ正直なところ、相手のリーダーがウザすぎて相手したくないというか……………」

メンバーが来ないのも、そこらへんも理由のひとつのようだ。

カツ子の話によると、相手のリーダーはいわゆる粘着質らしく、いやがらせの様にしつこくまとわりついて来るらしい。

「しかもハンドガンしか使わないですよ」「」

ハンドガンは、どの武器を選択しても持っている二つ目の武器である。

「ほう、あんな使いづらくて弱い武器を使ってる事は、そいつは上手いのか？」

「いえ、たぶん今日やるメンバー、敵味方全員の中で一番下手くそです」「」

「……………(驚)」

「えっ！？ 意味がわからないんだけど……………と言ってる」

「とりあえず、始めればわかりますよ。っと来ましたね」「」

テレビ画面を見ると、名前が二人増えている。

表示された名前は、ヨシオとマサミと書いてある。

「普通か！？」意味不明なツッコミである。普通のどこが悪いのだからか。

クランのメンバーはこれで全部らしい。しかしカツ子は、これと

いつてなにもせず待っている。

「おい、なんかしゃべるとかメッセージ送るとかしないでいいの？」

「え？ はい、私この人達と喋った事無いですし、勝手に始まりますよ？」「それでチームとはよく言ったものである。コミュニケーションは、たまにゲーム機のメール機能でやりとりする程度らしい。」

そんなやりとりをしているうちに、テレビ画面の自分達の名前の反対側に、名前が6人分一気に表示される。どうやらこの6人が今日の対戦相手らしい。

その名前を見て、カツ子が、「あれ？ 相手のリーダー名前が変わってる」「

カツ子が指さした名前は”103”と表記されている。

「あんま嫌われすぎて名前変えたんじゃない？元の名前は何だったんだ？」

「ん？ あれ？ あまりにも忌まわしすぎて、記憶から消え去っちゃいました」「そこまでウザいらしい。」

「……………(笑)」「

「そろそろ始まるみたいだよ。……………と言ってる」

04

テレビ画面では、カウントダウンの後、廃墟の街並みとセクシーな女性がメンバー分表示される。ゲームのスタートだ。

開始直後、全員がダッシュで散会する。

しばらくすると、銃声が聞こえ出す。どこかで、戦闘が起こっているようだ。

ブッチョが銃声のする方へ走っていると、ひとつ向こうの道を、ハンドガンを撃ち続けながら、あさつての方向へ向かって行く敵を

発見する。

「はい？ なにやってんだあいつ」この距離ではショットガンは当たらないので、つけてみる事にする。

キャラクターが視認できるようになると、その頭のうえに名前が出るのだが、その挙動不審者の頭には”103”と表示されている。ほどなくして、プレイヤー103に追いついき、ついでにショットガンで倒してしまう。

「？ 今の奴なんか意味あんのか？」と疑問に思っていると。ポコン！ とテレビから気の抜けた音がする。

このゲーム機は、メールが来ると今の音で知らせてくれるらしい。「なんだ？ こんなときにメールか？」と言いつつメールを確認してみる。

メールはボイスメールだった。ボイスメールとは、文字ではなく音声を送れるメールである。ブッチョはとりあえずメールを再生してみると。

『貴様も我が輩の邪魔をするのか。ゆるせん！ 呪ってやる！』とのこと。

「ぎゃあ！ 怨霊戦線！」

それをとなりの部屋で聞いていたカツ子が「ああブッチョさん、やっちゃいましたか。これから執拗に追いかけられますよ」「

「え？ なにこれ？ リアルサイバーホラーなの？」

と言っていると、前方からハンドガンを発射しながら、頭に103と書いたキャラが走ってくる。

このゲームは、一人敵を倒すと10点チームに入り、どちらかのチームが750点取るか、30分の制限時間の終わりに点数の多いほうが勝つというルールなので、やられても数秒の後にすぐに復活するのである。

ブッチョは、走ってくる103を難なくショットガンで倒す。

「ま、どつてことないな」

「いえ、これからですよ、本番は」

その後も幾度と無く向かってくる103を、楽勝で倒すのだが。

「えっと、ちよつとヤバい！ うわっ！」ブッチョが他の敵の相手をしているときに、たまたまタイミング良く103が来て、ブッチョは倒されてしまう。

「むむっ、なんだかむしょうに腹が立つんだが」

「そんなんですよ、たまに運悪くやられるとムカつくでしょう？」

そんな会話をしていると、丸美のテレビからもポコン！ と音がする。どうやら丸美も103を倒したらしい。丸美が、メールを再生すると。

『貴様も我が……うっ……やっ……おい……ごめんなさい』復活した瞬間に丸美に倒されるらしい。どうやら4回目で屈服したようだ。丸美おそるべし。

ライ丸姉妹のコンビプレイはすさまじく、建物内を移動しながらライ子が丸美を守りつつ、丸美が遠距離攻撃で敵を倒す。

そんな感じで、どれだけの点差があるのか確認してみると。

630対630。

なぜか同点である。

「……………(怒)」

「ブッチョとカツ子姉ちゃんやられすぎ！ ……と言ってる」

「面目ない」「面目ない」「ブッチョはまだしも、カツ子もへたくそだった。

影の薄いヨシオとマサミは、名前と同じでスコアも普通である。

そんな事を言っていると、時間切れのアナウンスが流れる。それと同時に画面に”サドンデス”と表示される。

時間切れ時に同点だと、時間が10分追加され、復活が無くなるのだ。

もう復活しないとなると、全員慎重になるが、カツ子とヨシオとマサミが一人ずつ倒して、自らも倒されていた。後はライ丸姉妹で終わり、かと思いきや。一人倒した直後、丸美をかばったライ子が倒れ、そのまま丸美も倒れてしまった。ライ丸姉妹を倒した敵は、駆けつけたブツチヨが倒したのだが。気がつくのと、ブツチヨと103の一騎打ちになっていた。そこでブツチヨにボイスメールが届く。『やはり貴様とは決着をつけねばならぬようだ。決闘を申し込む！』いや、すでに1対1なので決闘なのだが。

05

そんな流れで、なぜか画面ではブツチヨと103のキャラが、近距離で背中合わせで立っている。

どうやら西部劇風の決闘で勝負をつけようというらしい。スリーカウントで同時に振り向き、撃ち合って立っていた方の勝ちである。

このゲームにカウントダウンの機能はないので、どうするのか相手のメールを待っている。

ライ丸達が指を三本出して。

「……………(笑)」

「スリー・ツー・ワン……と言ってる」と勝手にカウントダウンを始めた。

ブツチヨはそれにつられてしまい振り向き、ショットガンを放つ。「あ!」「あ!」「あ!」

本日の勝負は「HDKS」の勝利である。

勝手に振り向いたただけではなく、ハンドガンに持ち換えるのを忘れてショットガンでとどめをさす。という卑怯極まり無い幕切れであつた。

案の定『き……貴様あ! 卑怯な! ゆるさんぞおっ!』という

メッセージが送られてくる。

ブッチョがショットガンを放ったと同時に来たメールでは『ゲ
ム画面の下に表示されている時計が、残り5秒になったら開始だ！』
と、なかなか燃えるシチュエーションを考えていたらしいので、怒
りも倍増であるう。

で、次のメールでは『貴様を一生呪つてやる！いや、本官の拳銃
の錆にしてくれるわ！』

「ん？」 「ん？」 「……………」 「？」 「ん？……………」
「……………」

どこかで聞いたしやべり方である。

「あれ？この変人つてもしかして……………」

「……………」 (汗)

「ああ、ブッチョが前にヒドいあだ名付けて、それを気にいつてた
変人警察官だね。……………」

「なるほど、それでハンドガンしか使わない変人なんですな」「
ブッチョが付けたあだ名は”変人”ではなく”殺人警官イレイサ
ーのレイさん”であった。」

「……………」 (!)

「それで103 (イレイサー) か！ ……ってどんだけ気に入ってんだ
よ！……………」

「いや、なんか気に入ってくれてると、それはそれでちよつとうれ
しいような」

「「あつ、私も”カツ子”って結構気に入ってますよ？」」

「……………」 (怒)

「私たちの気に入らないけどな！……………」

「俺の気に入らねーよ！」

といつもの調子で、グダグダに終わっていくのであった。

第4話了

第五話「勇者の条件」 01から03へ

第5話「勇者の条件」

01

ここは異世界ラグー。

青く広大な海と空には巨大なドラゴンが蹂躞し、大陸には様々な種族の生き物達が、生を謳歌する大いなる世界。

すべての物には魔法の力が宿り、すべての生き物には力が授けられる。

そんな世界のお話。

この世界では、近年一人の人間が世界を支配していた。

その人間の名は”ヨシオ”。

我々の世界から、この異世界に迷い込んだ特異点。

この調和のとれた異世界は、不意に入り込んだノイズで崩壊の危機に瀕していた。

この世界を崩壊から守るべく賢者は、4人の人間を、これもまた我々の世界から召還した。

勇者”丸美”

従者”ライ子”

使用人”カツ子”

奴隷”ブッチョ”である。

「つて、誰が奴隷じゃあつ！」

「……………（笑）」

「だって、あきらかにブッチョ役にたつてないんだもん。……と言ってる」

確かに、先ほどの問題でもブッチョの回答は間違っていた。

そう、ここは異世界ではなく、愛知県南部にある”ラグーナス”という海をメインにしたテーマパークである。

ラグーナス自体は、海や海賊をモチーフにしているが、現在一行は前述の冒険アトラクションを体験中なのだ。

「よかった、てつきり話の方向転換で異世界に飛んだのかと思いました。でも、私はメイドの方がよかったです」

「カツ子！ そのネタはやめろって！ てか、ヨシオ出た！ 流行なのか？」設定では”高橋ヨシオ”だそうだ。どこかの類人猿とは違うのだろう、きつと。

で、毎度のことながら、なぜラグーナスに遊びに来ているかという点。

それは、8月もお盆を過ぎた頃の、ライ丸姉妹にとっては夏休み終了間際の日曜日にさかのぼる。

02

天気の良い日曜日、エアコンの効いた部屋の中、例のゲームでレイさん一味をこてんぱんにした後の昼食時。

「ブッチョさん、今度の水曜日暇ですか？」

「なんだ？ 唐突に。別に水曜日はバイト休みだから暇だけど。いやだぞ、また変なのとゲームすんの」

「……（汗）」
「そうだね、これ以上変な知り合い増やしたくないね。……と言ってる」

「いえ、実はこんな物をいただきました」とカツ子は四枚の紙切れを取り出す。

それをのぞき込むブッチョとライ丸姉妹。

「……（?!）」

「あつ！ ラグーナスのチケット！・・・と言ってる」

「ああ、テレビで宣伝やってたやつか」

みんなでテレビを見ていた時に、ライ丸姉妹がそのCMにやけに食いついていたのを思い出す。

「・・・（笑）」

「今、ラグーの勇者って体験型アトラクションやってるんだよ！

液晶画面付きの剣を持って、謎を解いたりすると光の力を手に入れて、それを四つ集めて魔王を元の世界へ戻すってやつ！・・・と言ってる」と、ライ丸姉妹は興奮しているようだ。

「ほう、誰からもらったんだ？」

「え？ ライ丸ちゃん達のご両親からです。いつものお礼だつて」

「は？ お礼なのか？ それって体のいい子守……げふう！」すかさずライ子のパンチが横つ腹に絶妙な角度で入る。

「・・・（怒）」

「……」ライ子は訳さなかった。

「ん？ 何か言ったんじゃないのか？」

「お姉ちゃん殴っちゃだめだよ！ って言われたんだよ！」

「げふう！」ライ子の渾身の蹴りがブツチヨの側頭部に決まる。前にもこんなことがあったが、蹴りならいいのか？

「まあお小遣いもいただいているので、行きましようよお」「」

「ああ、別にイヤだとは言っていないぞ。水曜日だな」

「・・・（嬉）」

「やったーっ！ すっごい楽しみ！ もう眠れないかも！・・・と言ってる」ライ丸姉妹は手を取りあってピョンピョン飛び跳ねている。

どうも両親の仕事が忙しく、夏休みにどこへも連れていってもらえなかったらしい。そんな両親のせめてもの罪滅ぼしに付き合つのも、ライ丸姉妹のこの喜びようを見られれば良しと言わざるをえない。

「とりあえずちゃんと寝ろよ！ 行く前にバテたら元も子もないぞ」
「それじゃ水曜日の朝8時ここに集合ってことで」

という訳で、一行はラグーナスへと向かうことになったのである。

03

で、現在ラグーナスで、ラグーの世界を冒険中の勇者御一行様である。

このアトラクションは、カウンターで受付を済ますと、液晶画面付きの剣を手渡され、スタンプラリー形式でミニゲームなどをクリアすると、液晶画面に描かれた穴に光の玉が表示されるらしい。ミニゲームの場所は、液晶画面に映るテーマパークの地図に、次の場所が光る仕組みになっている。

ちなみに先ほどのミニゲームは図形クイズだった。ブツチョのせいで危うく不正解になるところだったが、ライ丸姉妹のおかげで正解しみごと最初の光の玉をゲットしたのである。

「で、次はどの辺りなんだ？」

丸美は、ライ子の持つ剣の液晶画面をのぞき込む。剣は丸美が持つには大きすぎるのだ。

「……………(覗)」

「えっと、次はおみやげ屋さんの横の辺りだね。……と言ってるおみやげ屋さんの横には、ネズミともウサギともつかないオブジェが液晶パネルをにかけている。

「なにに？ このネズミウサギの頭を、10秒以内に25回殴れる？」この安直な名前のオブジェの横にはグローブが垂れ下がっている。

「……………(笑)」

「よし、奴隷！ 行け！ 失敗したらゆるさん！……と言ってる奴隷言うな！ とはいえ、さっきの名誉挽回せんとな」挽回する

名誉などなくせによくいうものである。

ブッチョはグローブをはめ、ファイティングポーズを決める。そして、液晶画面にタッチするとタイマーが表示され、カウントダウンをはじめめる。

「うおおおおおおおっ！」雄叫びをあげながらパンチを繰り返す。

「うおおおお……おおお……」残り4秒あたりで失速。

終了間際へロへロになりながらも10秒を乗り切る。

「ぜえ、ぜえ、ど、どうだ？、ぜえ、いっただろ」体力無さ過ぎである。

画面を見ると、25回と表示されている。

「「ぎりぎりでしたねえ。でもこのゲームはクリアです」」

剣の液晶には、二つ目の光の玉が表示されている。

「………（笑）」

「二つ目の玉、ゲットだぜ！……と言ってる」

「ぜえ、ぜえ、その決めゼリフ大丈夫か？ ぜえ、ぜえ」お前の方が大丈夫か？ と聞きたい。

こんな感じで、はしゃぎながら進行する一行であった。

次のミニゲームは、壁で光っているスイッチ12個を同時に押すというもので、これは四人で協力してクリア。

その次は、左右の壁と天井と床に開いた穴から、出てくるモグラ風モンスターを叩くという、ハイパーもぐらたたき。これも四人でできるように、ハンマーが四つ用意されていた。

これも四人でクリアしたのだが。相当な数のモグラ風モンスターが出てきて「ぜえ、ぜえ、これって一人じゃクリアできなくね？」というブツチョの疑問に同意するライ丸姉妹とカツ子。

他にやっている人を見てみると、どうやら参加人数に応じてノルマが変わるらしい。

で、なんだかんだで四つすべての光の玉を手にいれる。しかしなぜか液晶画面には、新たにもう一つの玉を入れるべき穴が表示されている。

「・・・・・・・・・・(?)」

「あれ？　なんかやり忘れたっけ？・・・と言ってる」

「ん？　でも、地図にはヨシオの所に行けっ出てますよ？」
疑問は残りつつも、勇者様御一行は最終決戦へとむかうのであった。

このアトラクションの受付の横にある、ヨシオの城の扉を開けて中に入る。全員が中に入ると、扉が閉じられる。

「なんか暗くてやな感じだな」と漏らしていると。

ガガン！　ドドドド！　という轟音と共に、雷のようなエフェクトが発せられる。どうやら最終決戦の始まりのようだ。

『ハッハッハッ！　おろかな人間共よ、ここで朽ち果てるがいい！』

とベタな台詞がスピーカーから流れる。と同時に前方に魔王っぽい人形が姿を現す。

「ぎゃあ！ ヨシオ出た！ けっこう怖ええ！」ブッチョはこの手のものが苦手らしい。

前方から、魔王の攻撃がきている体で、音と光にあわせて風まで出る気合いの入った演出である。

ライ丸姉妹を見ると、興奮最高潮らしく。二人で剣を握り合い、魔王の攻撃を跳ね返すように、必死で前に突き出している。

しばらくそうしていると、突然エフェクトが止まり、キラキラした音と共にスピーカーから声が聞こえる。

『私は光の玉の妖精。最後の隠された光の玉を取らないと、魔王は倒せないわ！これを使って！』という台詞と共に、魔王の人形の前のカゴにグローブが滑り込んでくる。

『それで魔王の頭を、10秒間に30回殴れば光の玉が手に入るわ！』

「またこれかい！ ノルマ上がってるし！」

「お父さん！ お願い！ 光の玉をとって！」と叫んだのは、どうやら丸美ではないライ子の言葉のようだ。

「？」なんの事だかわからないブッチョとカツ子が、ライ子を見ると一心不乱に力んで叫んでいる様子。

まあ、小学校の頃たまに先生を呼ぶときに「おかあさん！」とか言い間違っ奴がいたので、それと同じ間違いだろう。

それをカツ子も理解したようで、「ちよつとがんばらないといけませんね、お父さん？」と小声でからかう。

「よっしゃ、お父さんちよつと気合い入れていくかな」とグローブを装着しながら言う。ライ子には聞こえないように。

スピーカーから妖精の声でカウントダウンが始まる。

『スリー・ツー・ワン』

「ゴーツ！」と全員のかけ声と共に、魔王の右上のタイマーがカウントダウンされる。

「うおおおおおおおおおおおっ！」「魔王にパンチを連打するブッチョ。

「うおおおおおおおおおっ！」「残り4秒を切っても失速しない。

「うおおお……げほっ、げほっ！」「むせながらもパンチを繰り出し、10秒をしのぎきる。

「ぜえ、ぜえ、どうじゃあっ！」

カウント表示は……” 35”

「よっしゃあ！」

という声と同時に、剣の液晶画面に最後の光の玉がはめ込まれる。『よくやったわ！ これで魔王を倒せる！ その剣を魔王の胸に突き刺すのよ！』となにやら物騒な事を言う妖精の声と共に、魔王の胸が開き剣を差し込む穴が出現する。

それを見て、ライ丸姉妹はあわてて剣を差し込みに行く。

そうして魔王にとどめをさすと『おのれ人間ども、この恨みはらさしておくべきか！』と言う呪いの言葉を残し、魔王人形はゴゴゴ！という音と共に下にさがって消えていった。

「やったー！」とライ丸姉妹は手を取りあつてピョンピョン飛び跳ねている。

するとスピーカーからアナウンスが入る。

『おめでとございます。これで終了でございます。グローブは受付までお持ちください。』

そうして受付でグローブを返すと、代わりにクリア特典として、剣の形をしたビニール風船二つを手渡され、大喜びのライ丸姉妹。

こうして、ライ丸大満足のラグーの勇者は幕を閉じたのであった。

その後、昼食として大量の食料を胃の中に放り込み、一通りの乗

り物を堪能する。

「・・・・・・・・・・（笑）」

「ねえ、次あれ乗りたい！・・・と言ってる」

丸美が指さす先には、ボートに乗っている人たちがいた。

ここラグーナスは、テーマパーク全体を運河に見立てた川が流れていて、そこをボートに乗って遊覧することができるのである。

ボートは二人乗りだということなので、じゃんけんの結果、ブッチョ・ライ子ペアとカツ子・丸美ペアに分かれて乗ることになった。先にカツ子達が乗り、こちらに手を振って出発する。

次にブッチョ達の番だが、ライ子が先に乗ろうとすると係員の兄ちゃんが「あつ、ごめんねお父さんから乗ってもらえるかな？」と言うと。

「お父さんちゃうわ！」速攻否定である。

テーマパークで着ぐるみという異常な光景も相まって、係員の兄ちゃんは愛想笑いしか出てこない。

「お前、そこは別に否定せんでもスルーでいいだろ」

「だって、ブッチョはお父さんじゃないもん」ライ子は拗ねたように言う。

「いや、でもさつき魔王と戦ってる時に俺のこと”お父さん”って呼んでたぞ」

「！！！！」どうやら恥ずかしいのだろう、ビクン！としたまま止まってしまった。

しかし次の瞬間「ぐはあっ！」ブッチョの横っ腹にライ子のパンチがつきささる。

「ぐだぐだ言っていないで早く乗れ！」と照れ隠しにしては少々過激である。

ボートに乗るとすぐにライ子の機嫌も治り、丸美達が見えると手を振りあう。まあ、ボートは乗ってるだけでも楽しいのだが、できることといったら手を振るぐらいのものである。

「・・・・・・・・・・（笑）」

「あー気持ちいいね。・・・と言ってる」
「このうだるような夏の暑さでも、水の上はそれなりに清々しかった。」

06

あまりに平然としていて気がつかなかったが、ライ子はこの暑さの中着ぐるみで大丈夫なのだろうか。

「お前そんなの着てて、暑くないのか？」と聞いてみると。

「ん？ ちよつとここに手え突っ込んでみ？」と言いながら、ブツチヨの手を首の辺りに引つ張り込む。

「！！！」驚いた事に、着ぐるみの中はヒンヤリ涼しかった。

「ふっふっふっ。冷水をホースで全身に循環させて、ホースの冷気で涼しくするシステムが装着されているのだよ」と得意げに言う。

「ずりい！ 心配して損した！」

はっはっはっ！ と運河にライ子の高笑いが響き渡った。

「なにかずいぶん楽しそうでしたねえ」「ボートから降りると、カッ子はそんなことを言う。

「そっちは楽しくなかったのか？」

「いいえ、すっごい楽しかったですよ。ねーっ」「と丸美と顔をあわせ、楽しそうに一緒に首を傾げる。

「そいつはよかったな」と丸美の頭をなでてやる。

ライ子の方を見ると、なにか呆けているようだ。

「おい、大丈夫か？ 疲れたんか？」

「は？ ぜんぜん大丈夫ですがなにか？」どうやらかなりキているようだ。

「さうですねえ、丸美ちゃんも少し目がすわってきましたし、休憩しましょうか？」

「やだ！」ライ子は即答で拒否。

「私はこんなところで力尽きる訳にはいかないんだ！」なにか格好いい事言っているが、しょせんは遊びたいだけである。

で、現在ライ丸姉妹は揃って熟睡している。

ライ子はブツチヨの背中、丸美はカツ子の胸で。

「つーか、あんな事言っとして、一回寝たらもう起きないんだもんな」

「しょうがないですよ。二人ともかなりはしゃいでましたからねえ」

「そうだな、なんかこいつらの親に悪いな。あんなに楽しそうな笑顔を俺らがもらっちゃまって。一人笑顔わかない奴いるけどな」

「……そうですね」

そんな事を話しながら夕日を背に家路に着いたのだった。

07

結局、ライ丸姉妹は自宅に着くまで起きなかった。

ブツチヨはライ丸姉妹の自宅を見るのは二回目だが、前回は家の手前で別れたので、家族の人とは会っていない。

すでに時間は午後7時をまわってしまっているのだが、両親は帰ってきているのだろうか。

ライ丸姉妹の家は、築20年ほどのなんの変哲もない一軒家である。ブツチヨとカツ子はインターホンを鳴らす。

出てきたのは60代であろうかという初老の女性である。祖母であろうか。

「はい、なんでしょうか？」と女性はブツチヨとカツ子を訝しげに眺める。

「あ、えっと、ライ丸……じゃなくて」そういえば本名知らなかったな、と今更ながらに思う。

女性は、二人が抱きかかえている子供に気づき。

「あらあら、あなた達が、そう、ああ二人ともぐつすりね、悪かったわね」と言いながら「おじいさん、手伝ってちょうだい！」と家の中に向かって叫ぶ。

すると、女性より少し年の多そうな男性が奥から出てくる。

訝しげに見る男性に女性が耳打ちすると、納得した顔になり、女性と共にライ丸姉妹を受け取る。

「いつも悪いわねあなた達、これからもよろしく頼むわね」と言いながら家の中に消えていく。

少しの違和感と寂しさを覚えながらも、ブッチョとカツ子は帰りの道を進む。

「「なんだか寂しいですね」」

「ん？ ああ、結構騒いだからな」

言葉少なに歩いていると、大通りの交差点にさしかかる。

「「あれ？ ブッチョさんのアパートあっちじゃないんですか？」」

「は？ お前一人で帰れんの？」と言いながらジヨスコでの一件を思い出す。

「「あつ、そうですね、無理でした。じゃあついでに何か食べて帰りませんか？お腹すいちゃった」」

「「そうだな、マグドでいいか？」」

「「いやいや、まだ金額に余裕ありますから違うものにしましょ？」」

結局二人はファミリールストランで食事をした後、カツ子をマンションまで送って別れるのだった。

その帰り道。ブッチョは今日の出来事を思いだし、今日起こった事は、夢か幻のようなそんな錯覚を覚えていた。

それはもしかしたら、テーマパークの持つ雰囲気のようなものなのか、そういった喧噪から抜けた後の寂しさからなのか解りかねていた。

しかし、確実に胸の中に生まれた感情があった。

こんな夢のような出来事がずっと続けばいいな、と。

第二章了

第一話「ゴージャグラー」 00から02

第三章「夢みるピエロ」

第一話「ゴージャグラー」

00

陽気な音楽と共にネズミやアヒルの着ぐるみに身を包んだ人が激しく踊っている。

どうやらここは東京ネズミランドらしい。いわずと知れた米国の人気ネズミアニメのテーマパークである。パーク内にある城の壁画には、本物のダイヤが埋め込まれているという噂があるが、ウチの近所の歩道橋の柱にも10円玉が埋め込まれているという噂がある。

「あれ？ お父さんは？」いきなりであるが、いつもの土下座している父親が見あたらない。

「え？ なに？ これホラーなの？」子供一人で、雑踏の中にいるのは恐怖であろう。

「あれ？ ブッチョさん、こんなところでなにしてるんですか？」と、なぜか見慣れた女が出てくる。

「ん？ カツ子？ なんて僕の夢に出てくるの？」

「……………(笑)」

「わあ！ ネズミランドだ！ てかブッチョ子供だ！……………と云ってる」

「さあ！ 夢の時間の始まりですよ！」

「え？ わあ！ ちよつと引つ張らないでっ！ おとうさん！」

「……………(笑)」

「なに言ってるの？ お前がお父さんだろ！……………と云ってる」

「は？ いや、夢？ 始まり？」

ピーンポーンパーンポーン

訳が分からず戸惑っている、館内放送が入る。

『あー、本日は東京ネズミーランドにお越しいただきまことにありがとうございます。まもなく営業開始いたします』

ジリリリリリ…けたたましく営業開始のベルが鳴り響く。

ジリリリリリリリリリリ「いやちょっとまって、お父さんジリリリカツ子？ おいジリリリリてかライ丸おまジリリリリ…ちよつるさジリリリリリリ…るジリリリリリ」リリリリ

「うるさいって言うてんだろーがってんだろーが！」

ガシャン！ と目覚まし時計が壁に激突する。

しかし、ジリリリリ！とまだ鳴り続けている。

どうやら枕元に置いてあった目覚まし時計はダミーのようだ。もう壊さないようにとよく考えたものだが、それに引っかかっているところがまだまだである。

「くっ、なんだか昨日の自分に負けた気がするぜ」と本物の目覚ましを止めながら愚痴る。

01

今回は、夏も終わり少しずつ秋の足音が聞こえてくるようなこないような時期のお話。

ブッチョはいつものように、コンビニでバイトに勤しんでいた。

そう、驚いたことにバイトが続いているのだ。

どうやらブッチョにも自尊心があったらしく、カツ子やライ丸姉妹が立ち寄ることがあるため、真面目に仕事を覚えたようだった。

今はちよつど昼時を少しまわったところである。昼の忙しさがひと段落して、交代で昼食を食べる時間帯である。今はブッチョ一人

で店番をしている。

現在店内のお客さんは二人。その内の一人はこのコンビニの上得意のカッ子である。カッ子はいつものように、大量の商品をカゴ一杯に入れてレジにやってくる。

「お前こんなに菓子とか食うと太るぞ」と、いつもの無表情で、商品のバーコードを読み込みながら告げると。

「なに言ってるんですかあ！ ほとんどブッチョさんとライ丸ちゃん達が食べちゃうじゃないですか！」「と、相変わらず目を合わせず、表情をこころ変えながらしゃべる。

「あれ？ そうだっけ？ 今度から控えるよ」

「いや、別に余らせてもしょうがないし、ライ丸ちゃん達もご飯残さず食べるのでいいですけど」「と言いながら、いつものように携帯電話で支払いを済ませる。

「じゃあまたウチで待ってますね」「と言い残しコンビニを後にする。

カッ子を見送った後に、次の客が精算を済ませにやってくる。

ブッチョはいつものように、なにを間違えることなく商品のバーコードを読んでいく。

「はい、全部で1,543円になります」

と言ったところで、その客が「ちよつと待った」と止める。

「何か違いました？」クレーマーか？ と思いながらブッチョが聞く。

「いや、別に間違っちゃいないが、仮にも客商売なんだから、あんたもうちよつと愛想よくした方がいいぜ」と、もつともなご忠告。

面倒くせえと思いつながら、自分の病気を説明すると「えっ？ マジ？ うわあすまん、またやる気のない最近の若者かと思っちまって」と恐縮しながら謝罪する。

「いや、別にいいですよ。なれてるんで」と言う。

「わっ、ほんとにしゃべりのニュアンスと表情が連動してないんだ

な」と珍しそうにブッチョを見る。

その客は、年齢はブッチョより少し上であろうか、長身で筋肉の引き締まった男で、カツ子以上に表情をこころ変えて喋る。カツ子と違い自然な感じに表情を変えるので、人当たりの良さそうな印象を受ける。

そんなやりとりをしながら、男は現金で精算を済ませます。

男は帰り際に「あんた面白いよ！俺あさってそのジョスコでシヨーをやるんだけど、よかつたら見に来てくれよ」とジャグリングシヨーと書かれたビラを渡される。

「俺は”テンホー”って芸名だけど、あんたは……ブッチョだっけ？さっきの彼女が呼んでたけど、変なあだ名だな。シヨーは無料だから彼女と一緒にきてくれよ」と言い残し去っていった。

別に彼女じゃねえよ。というツッコミを入れる間もなく、去って行った客に渡されたビラを見ながら「みんなで行ってみるか」とつぶやいた。

02

「……（笑）」

「……」いきなりで悪いが、ライ子は訳さない。

「おい、あさつての土曜日行けるかって聞いただけなのに、なんで訳さないんだ？」

「土曜日は大丈夫だよお父さん。」って言ったんだよ！誰だ！ばらした奴は！」とライ子は叫びながらブッチョの横っ腹にパンチが突き刺さる「ぐぼはあ！」

「あつ、丸美ちゃんだけ知らないのは不公平だと思って、さっき言っちゃいましたあ」「あの時、丸美も必死で気がつかなかったらしい。」

「ってなぜに今?! ラグーナス行ってからどんだけ経ってんだよ！」約一月ぐらいだろうか。

「「いやー、ちょっと思いついちゃったもので」「
「ぎゃふん！ もうこのネタやめてください」「ライ子は撃沈された
模様。」

と、こんな感じで、いつもおしゃれでかわいい無口な妹と、着ぐるみを着た姉の通訳という奇妙な姉妹も合流して、カツ子の家は賑わっていた。

結局全員あさっては予定が無いとのことなので、四人揃って行くことになったのである。

「………(?)」

「で、ジャグリングってなに? ……と言ってる」

「ん？ アレだろ？ 火の着いた棒みたいなのを回して、踊ったりするやつ」

「それはファイヤーダンスですっ。ジャグリングっていうのは、すごい数のお手玉したり、いろんな道具を使ってすごい技を見せてくれるショーですよ」「」

「………(笑)」

「そのテンホーって人もすごい技を持ってるんだね。ブッチョと違って。 ……と言ってる」

「悪かったな、なにも持ってなくて!」

「でもそれは楽しみですねえ。私も実際見たことないですから」「
そりゃあ引きこもっていれば見る機会などないだろう。」

「………(笑)」

「いざジャグリングショーへ! ……と言ってる」

「あさってだけどな!」

というわけで一行は、土曜日のジャグリングショーを見に行くことになったのである。

そしてジャグリングショー当日の土曜日である。

早朝カツ子の家に集まった一行は、軽く朝食をすまし、ジョスコへ出発する事になった。

ショーは午前11時30分からなのだが、前回のウドレンジャーの件もあり、早めに出発することにする。

しかし、なぜかジョスコに到着したのが11時45分になってしまった。

その内訳は、

カツ子が迷子になること3回。

ライ子が子供に捕まること2回。

カツ子が忘れ物を取りに戻ることに2回。

なんと前回よりもひどくなっているという始末。どうやらカツ子は外に出ることに慣れてきたのと、ブツチョと携帯電話で連絡が取れる安心感で、迷子の質が向上しているという迷惑さ。最近良くなっていたので、手を繋ぐのを忘れていたのがいけなかった。

中に入ってみると案の定会場は超満員で、すでに一人目が終了したところらしい。このショーは四人出るらしいのだが、名前まではピラにのっていない。テンホー氏はもう終わってしまったかな？と思っていると『はい、一人目のショウさんでした。拍手ーっ！』と進行役のお姉さんがアナウンスすると、会場から拍手がわき起こる。「どうやら間にあつたみたいだな」とライ丸姉妹でも見られる場所を確保しながら言う。

「……………(怒)」

「もう、カツ子姉ちゃん迷子になりすぎ！ てか手え繋いでないと迷子になるって風船か？……………と言ってる」

「「面目ない」」

『ではつぎはケン横井さんの登場です!』

と言うアナウンスと同時に拍手がわき起こり、BGMのユーロビートと共に、おしゃれなイケメンがスーツケースを持って登場する。まず、スーツケースを開けて、赤いお手玉を山のように取り出す。そのお手玉を、立てたスーツケースの上へ並べたかと思うと、ひとつずつ上に投げだす。すると、あれよというまに10個もあるうかというお手玉が宙を舞続ける。実際はお手玉を受けては宙に上げているのだが、玉が浮かんでいるような錯覚に陥ってしまう。

そこで会場から拍手が出だすが、足まで使い始めたので「おおーっ!」と感嘆の声があがる。

「.....(驚)」

「わああ、すごい!.....と言ってる」ライ丸姉妹も釘付けである。一通りお手玉の芸が終わると、次にスーツケースから四つの木の箱を取り出す。

四つの箱の両端を持って持ち上げると、一瞬で中に挟まれた箱と外側の箱を入れ替える。それはまるで箱がそこに浮かんでいるかの様に見える。その後も、箱から手を離して体を一回転してから箱をつかんだり、箱を縦に並べて芸をしたりと拍手と感嘆の声が鳴りやまなかった。

04

『はい、二人目のケン横井さんでした。拍手ーっ!』というお姉さんのアナウンスで二人目のショーが終了する。

「いやー、すごかったな、なんか無重力状態みたいに浮かんで見えたな!」

「.....(驚)」

「いやもうびっくりだよ! あんなに簡単にあんな事できちゃうなんてすごいね.....と言ってる」と興奮さめやらぬ様子。

「「そうですねえ、あれだけ簡単にやってるの見てると、なんだかできそうな気がしてきますね」「と絶対にできそうにもない奴が言う。」

ほかの観客も一様に同じ様な意見を漏らしている。
すると、進行役のお姉さんが出てきてこうアナウンスする。

『はい、次は少し趣向を凝らした方の登場です。』 クラウン テンホー”！』

と、目当ての名前がアナウンスされる。

「ん？ クラウン？」と、疑問に思っている。

気の抜けたBGMに乗って登場したのは、ダブダブの黄色い服に大きな帽子、鼻に大きな赤い玉を付けた道化師だった。

「つて、ピエロかい！」と思わずツッコむ。

ステージ横から登場したクラウンテンホーは、ステージ中央あたりまで行くと見えない壁にぶつかる。どうやらパントマイムが始まるようだ、と思いきや、突然壁を突き破り前に一回転してペタンと尻餅をつく。そこで会場からどつと笑いが起こる。

そんな失敗を無かった体で立ち上がると、ステージ横に引き返し、大きなつぎはぎだらけのバッグを抱えて戻ってくる。バッグの中から取り出したのは、先ほどのジャグラーがやっていた赤いお手玉と同じもので、クラウンテンホーも器用に10個ものお手玉を宙に舞わせる。

それを見た観客の「おおっ！」という感嘆の声もつかの間、舞っていたお手玉が一つずつ頭に当たって落ちていく。感嘆の声が「あー」という声に変わったところで、最後のお手玉が頭に当たると同時にズボンが下がり、白地に赤の水玉模様のデカパンが現れ、会場が爆笑の渦に巻き込まれる。

続いてクラウンテンホーは、バッグの中から長風船の束を取り出す。その中から一本を取り出し、息を吹き込み風船を膨らます。全

部膨らんだ後も息を入れ続け、観客の中から「割れる割れる」「キヤー」という声が出たかと思うと案の定風船はパン！ という音を立てて割れてしまった。

割れてしまった風船をつまみながら首を傾げ、もう一本を膨らまし始める。するとまた空気を入れすぎてパンパンになった風船を見て「入れすぎ入れすぎ」「割れちゃうよー」など、先ほどよりも多くの悲鳴があがると、やはりパン！ と割れてしまう。会場全体から「あーあ」と声が漏れると、クラウンテンホーはポケットから小型の空気入れを取り出し、それで割らずに空気を入れることに成功、その風船をかかげ「どうだ！」とばかりに胸をはり、会場から笑いと拍手が起こる。

そこでブッチョは奇妙な感覚に陥る。

さきほどまでの会場の雰囲気とはあきらかに違っている事に気づく。先ほどのジャグリングのとき、会場はすごい芸を見た感動の空気に満たされていたが、今の会場は、なんと言ったらいいのか、角の取れたような丸い雰囲気に含まれていた。

その後、風船でプードルやキリン、花などを作っては会場の子供にプレゼントして「ありがとー」と言われたり言わせたりしていた。そうすると、横から進行役のお姉さんが出てきて、クラウンテンホーに耳打ちすると、大げさに「もう時間なの？」というリアクションをする。すると会場から「えーっ」と言う声があがるが、残念ながら退場しようとする、入場時の様に見えない壁にぶつかると、いくら押してみても進めないが、何かに気づいたと思ったら、ドアがあったらしく取っ手を引いてドアを開き、今度は笑顔で手を振り退場する。こうしてクラウンテンホーのショーは、笑いと拍手によって幕を閉じたのだった。

「……………（笑）」

「あははは、すっごい面白かったね！・・・と言ってる」
「「そうですねえ、すごく楽しいショーでしたね」「とこちらも満足げた。」

「そうだな、最初はどうかと思ったが、良かったな」

その後、トリをとめたのは”ミスター大暮”というマジックとジャグリングを融合した、エンターテイメントと言うにふさわしいショーだった。クラウンテンホーが作った会場の空気をつなぎにして、最高に盛り上がったステージだったのだが、紹介できないのが非常に口惜しい。

05

ステージが終わった後、ちょうど片付けを終えたテンホー氏を見する。向こうもこちらに気づき、スタッフにあいさつを済まし、こちらへ向かってくる。

「よお、見に来てくれたんだな。どうだった？ って、あんた子供いたんか？！」と、いきなり質問をダブルでいただく。

「・・・（怒）」

「ブッチヨの子供違うわ！ でも、あんたのピエロおもしろかったぞ！・・・と言ってる」

「「すいません、私たちブッチヨさんの友達なんです。ショーとっても楽しかったです」と、三人ともいつもの調子であいさつする。

「.....」いきなり不思議人間が三人も増え、絶句するテンホー氏。

「いや、すいません。こいつらいつもこんな調子で」

「・・・（怒）」

「こんな調子ってなんじゃコラ！ お前もそんな調子じゃねえか！・・・と言ってる」

「「あわわ、そんなケンカしちゃだめですよ」」

と言った所で「ぷっ！ あははははは！ ブッチヨくん、やっぱ

あんた面白いよ！ いや、ほんとに面白い！」と、テンホー氏はいきなり笑い出す。

「いや、失敬。俺はクラウンをやってるテンホーって言います」と、うやうやしく頭を下げる。

「……………（笑）」

「こつちがライオンをやってるライ子姉ちゃん、私がその妹をやってる丸美です。……………と言ってる」

「私は、引きこもり……………は最近卒業気味なので、ゲーマーをやっているカツ子です」

「で、あんたがコンビニバイトのブツチョコくんだね。で、ブツチョコくんはどうだった？俺のステージ見て」

「え？ あ、はい、えっと」ブツチョコはいきなり振られたので焦る。

「……………俺頭悪いんで、どう言ったらいいか分かんないけど、なんかこう一瞬で会場の雰囲気丸くっていうか、柔らかくなったんで、すごいなって」ほんとに何を言っているか分からない。

それを聞いてテンホー氏は「ふーん。やっぱブツチョコくん面白いわ。今日のステージに興味を持ったんだったら……………ってちよつと待ってて」と言っつてバッグの中を探つてメモ用紙とペン、そして携帯電話を取り出し、携帯の画面を見ながらメモを取る。

「よし、今度このメモの所でやるから、興味があつたら来てよ。ただし、悪いけどこれはブツチョコくん一人で来てくれ」と言っつてブツチョコにメモを手渡す。そこには、ある施設の名前と住所、そしてテンホー氏の携帯電話の番号が書いてあつた。

「え？ ここつて？」メモに記された施設の名前を見て、ブツチョコは戸惑う。

「あはは、来てからののお楽しみつてとこだな！まあ来なくても問題ないから、気が向いたらきてくれ。じゃあブツチョコくん、カツ子さん、ライ子ちゃん、丸美ちゃん、今日はありがとな！」と言っつて、テンホー氏は満面の笑顔で去つていった。

「……………（笑）」

「テンホー面白い奴だな。・・・と言ってる」

「「そうですねえ、シヨ一の最中は喋らなかつたですけど、喋っても同じ感じですね」「」

「そうだな」

と、今までに会った事のない人種との交流に、戸惑い、メモをにぎりしめるブツチヨであった。

第1話了

第二話「クラウン・クランケ・クラウン」01と02

第2話「クラウン・クランケ・クラウン」

01

なぜかブッチョは病院の中にいる。

カツ子やライ丸姉妹が入院しているわけではない。

ましてや自分に悪い所など見あたらない。

どうして、と問われても自分でも分からない。

かのテンホー氏に渡された、メモの施設は確かにここなのだ。

“豊多市 厚生病院” ブッチョの住む愛知県豊多市にある大きな病院である。市民病院かと思いきや、実はそうではないという市民から信頼のある病院なのだ。

ブッチョがいるのは、その小児科病棟である。

小児病棟など入る機会はないのだが、入ってみるとそこはやはり病院であると実感させられる。病棟自体は、廊下の壁に子供の好きそうな絵が貼ってあったりして、幼稚園のような感じをだしている。しかし、病院特有のにおいのする廊下には、遊んでいる子供もいるものの、その手には点滴のホースがつながっていたり、頭に白いネットをかぶったりしている。

とりあえずブッチョは、ナースセンターに行ってみる。

「あー、すいませんブッチョといいますが」と居心地悪そうに女性看護師に声をかける。

すると看護師は、一瞬怪訝な顔をしたかと思うと、思い出したように「ああ、テンホーさんの助手の方ね。伺ってます、こちらへ来てください」とナースセンターの中へ招き入れられる。

助手ってなんだ？　と思いつながらもブッチョはナースに聞いてみる「今日は何かイベントかなにかやるんですか？」

というブッチョの問いに、女性看護師が怪訝な顔をした時ナースセンターの外から声が聞こえる。

「おっ！　ブッチョくん来てくれたのか！　うん、あんたなら来てくれると思ったよ」と、場違いな元気な声で話す。

「っていつか助手って何なんスか？」とブッチョが言う。

「まあまあ、今日は社会見学ってことでよろしく」とテンホー氏。

それを聞いた女性看護師は「ちよつと、大丈夫なんですか？　なにかあつたりしたら……」

「大丈夫ですよ、ほんとにただの助手ですし。ささ、早く打ち合わせやっちゃいましょう」さらに不安にさせるやりとりである。

なにやらテンホー氏は、看護師と患者の体調などを確認しているようだ。テンホー氏はこの病院の医者なのであるうか。と思つていと。

「じゃあ着替えて30分後に開始つてことで。じゃあブッチョくん一緒に来てくれ」と言われたとおりについていく。

02

そしてブッチョはなぜかピエロの格好をしている。

「ぎゃあ！　俺なんでこんな格好してんだ?!」

ブッチョはしま模様の大きなツナギを着て、大きな靴と奇妙な形の帽子をかぶり、真っ白に塗られた顔には笑つていようなメイクが施され、その真ん中には赤いボールの様な鼻が取り付けてある。前に立っているテンホー氏は、この前のショーとおなじ格好をしているので、それと比べると少々地味な印象を受ける。

「とりあえず、何もなくていいから、指示に従つてついてきて。じゃ、行こうか」と言うが早いかテンホー氏は歩き出す。

「え？　はい」とブッチョは言われるままについていく。

小児病棟に入ったクラウンテンホーは、目の前の病室をこっそりのぞく。

病室には四つのベッドがあり、それぞれに点滴をしたり、鼻に管が入ったりした子供が横たわっている。クラウンテンホーは、大きな動きでこっそり病室に入ると、無表情のまま携帯ゲーム機をプレイしていた男の子が気づき、表情がぱあっ！と明るくなり「あっ！ テンホーくんなんだ！」と叫ぶ声をかわきりに、病室の中がざわめき立つ。

「あちゃあ、みつかっちゃったか！ ゲームやってるからいたずらしようと思ったのに」と、くやしがる。テンホーくんが男の子に「ゲーム機がベッドから落っこっちゃいそうだよ」と言うと、男の子はゲーム機を見るためにこちらに背を向ける、するとテンホーくんは男の子の背中にタッチする。すると男の子は「あーっ！ 今なにか付けたでしょー！」と、一生懸命に背中の方を見ようとしたり、手をまわしたりしている。するとテンホーくんは男の子のおなかにもタッチする。男の子がおなかを見ると、そこには大きなシールが貼ってあった「もーっ、やめてよー」とうれしそうに言うと、ポン！ と頭にもシールが貼られる。「やめてー」と言っている間に、男の子の腕や足にもシールが貼られていく。

その後、はがしたシールを全ておなかに貼ったところで、テンホーくんは「ばいばい」と手を振り、次の子の所に向かう。

そんな感じで、クラウンテンホーは順番に子供のベッドをまわっては、子供にいたずらをしたり一緒に遊んだりしていった。

状態のすぐれない子供には無理に絡まず、2、3言葉をかわした程度で風船などを置いて去っていく。そんな風にすべての病室をまわっていくのだった。

終盤になるとクラウンテンホーは子供たちを引き連れ、看護師にまでいたずらを仕掛け、看護師に叱られる始末。まさにやりたい放題。

その光景をぼんやり眺めていたブッチョは、不意に服を引つ張られる。引つ張られた方に目をやると、そこには最初にシールを貼られていた男の子が立っていた。その男の子はブッチョに「ねえねえ、君は何かやったりしないの？」と声をかける。

「ん？ 俺はなににもできないから、ここでもなにもせず立ってんだよ」と言つと。

「ふーん。君のお名前何て言うの？」と聞いてくる。

「えつと、俺の名前はブッチョだ」と答えると。

「そつか、君はピエロのブッチョくんだね」などと笑いながら言う。それを聞いてブッチョは、今の自分の格好を思い出す。

気がつくと、ブッチョは周りの子供たちに好奇の目で見られていた。「いやいや、マジで何にもできないから」と、なにやら子供たちの視線は、ブッチョの背中に集まっているようだ。

「はっ！ もしかして、背中に何か貼られてる？」と背中の方を見ようとしながら言うと、周りの子供たちから「あはは」と笑い声があがる。

そんなこんなで、最後は子供たちに囲まれていたブッチョは、クラウンテンホーに促され帰る事になる。

帰り際子供たちが「テンホーくん、ブッチョくん、またねー」と手を振ってきたので、それに答えて手を振り返し、終了したのだつた。

その後、着替えた二人はナースステーションで報告を済ませ、病院を後にする。

ブッチョはテンホー氏の車で送ってもらうことになり、車に乗り込む。

そして帰りの道中、ブッチョは先ほど小児病棟で見てきた事の意味を分かりかねていた。

するとテンホー氏が「ブッチョくんは、”笑いの力”ってもんを知ってるか？」

「いや、わからないです」と言うとテンホー氏は「さっきの子供達は、病状の重い、軽い、の差はあるにしても、一日のほとんどをベッドの上で過ごす入院患者なんだ。それを何週間、何ヶ月、何年と続けている子もいるんだ。ブッチョくん想像がつくかい？」

「いえ、入院したことがないので。でも、退屈で面白く無いのは分かります」

「そう、退屈でつまらない、ましてや病気で苦しんでいる、そんな子供を見て親だって気が滅入ってくるだろ？子供って、親のそういう所に敏感だからさらに面白くない」と、運転しながらテンホー氏は肩をすくめる。

「人間の体って不思議なもんで、つまらないことが続くのに耐えられないようにできてるんだよね。免疫力が落ちたり、精神的には鬱になったりさ。だからみんな遊びに出かけるだろ？」

ブッチョはうなづく。

「でも、今日のあの子どもたちのような入院患者は遊びに出たくても外に出られないんだ。逃げ場がないのさ、あの子どもも、その親もさ」

「で、その昔。だったら、楽しさ、笑い、の方から遊びに行っちゃえばいいじゃん。と思いついたお医者さんがいたんだ。」パッチ・

「アダムス」って聞いたことないか？」

昔そんなタイトルの映画があったような気がする。

「そのアダムス医師は、精神面からも治療するため自分がクラウンに扮し、入院中の子供に笑いを与えたんだ」

「毎日つらそうにしている子供から出た笑顔は、その親にも笑顔を取り戻させる」

ブッチョはラグーナスでの事を思い出す。ライ丸姉妹の楽しそうな姿を見て、自分やカツ子が癒されたのも事実だ。

「世の中には、楽しい状態を継続させて病気が治ってしまったという話もあるくらいだ」

「そう、今日ブッチョくんに体験してもらったのは、そのアダムス医師が始めた取り組み”ホスピタルクラウン”とか”クリニクラウン”と呼ばれているものなんだ」

そこまで聞いて、ブッチョはテンホー氏にたずねる。

「なんでそれを俺に見せたんですか？」

「ん？ブッチョくんにはクラウンとしての才能がありそうだったからさ」

才能？なんの取り柄もないブッチョには幻のような単語である。

「ブッチョくんは、大人とか子供とか関係なく真正面から接するだろ？子供は大人のそういう所すぐに見抜くからさ、だからみんな寄ってきたろ？」

いまいち言っている事が理解できない。

そんなブッチョの様子を見ながらテンホー氏は続けて言う。

「それに、ブッチョくん自身がそういう世界、アダムス医師が思っている世界を、望んでいるように見えたからさ」

ブッチョは世界を望んだ事などない。テンホー氏の自分への評価は理解できないが、カツ子やライ丸姉妹と出会ってからの日々と、今日見せられた世界が、ぼんやりと虚構と現実の狭間で揺れている

ような感覚を覚えるのであった。

04

ほどなくしてテンホー氏の車は、ブッチョのアパートに到着する。「ありがとうございます」とブッチョはお礼を言いながら車を降りる。

テンホー氏は去り際、ウィンドウを開けて「ブッチョくん、今日は特別だったけど、興味があつたら連絡してくれ。俺がキミをクラウンにしてあげるから」と笑いながら車を走らせて行った。

ブッチョは、その後しばらく部屋の中でぼんやりと考えをめぐらしていたのだが、考えがまとまらない内にふと思い出す。

「そういや、今日は俺が飯を作る番だったな」

ブッチョは呆けながらスーパーで買い物を済ませ、カツ子のマンションへ向かっていた。その途中で、見慣れた二人を見つける。

「よお、今から出勤か？」とその二人に声を掛けると。

「……………(笑)」

「あつ、ブッチョだ！ 今日のご飯は何作んの？……………と言ってる」とライ丸姉妹はいつものネタで答える。

「ん？ あれ？ 俺何作るうと思つてたんだっけ？」といいながら買い物袋の中身を確認する。

「……………(?)」

「は？ ブッチョこれで何作る気だ？……………と言ってる」

買い物袋の中には、さばの切り身、板子ヨコ三枚、キウイ、モロヘイヤ、ポテトチップ、そして豆板醤と、統一性のない食材が放り込まれていた。

「お？ なんじゃこりゃ、超うける」と言つと。

「……………(怒)」

「超うける、じゃねえよ！ たまにはまともな物作りやがれ……………と言ってる」

そんな調子で、カツ子のマンションまでの道中、ライ丸姉妹に説教されるブッチョであった。

で、現在カツ子を含む四人の前には、さばの豆板醤煮という創作料理と、モロヘイヤのポテトチップ和え、そしてデザートのカウイ、板チョコは、ブッチョがさばの煮物の鍋に投入しようとした直前三人が阻止し、そのままいたいだいたのだった。ついでに白飯の上には、砕かれたポテトチップスが乗り、醤油が数滴たらされている。

「こつ、こんなふざけた料理なのにおいしいなんて、なんだかくやしいですっ！」

「……（驚）」

「さばの臭みがまったく無い！もしかしたらチョコ入ってもおいしかったのか？・・・と言ってる」と言いながらバクバク食べる。「はっはっはっ！食材を無駄にしないのが、正しい貧乏人の流儀というものなのだよ！」ブッチョの料理は、味付けこそ感覚に頼ったデタラメだが、下ごしらえは完璧だった。

いつものように騒がしい食事風景、時にはケンカもするが笑いの絶えない空間。

健常者とは言いがたい四人であるが、それなりに楽しいのだと思う。

しかし楽しさという点だけで言えば、ラゲーナスでの一日の比ではない。

だが今日見てきた子供達の笑顔は、ラゲーナスでのライ丸姉妹の笑顔に匹敵するものであった。

短い時間でも子供たちからその笑顔を引き出せるクラウンテンホーは、正直すごいと思う。

ブッチョは、自分にもそんな事ができるのであろうか。と少しだけ胸が高鳴るのを感じる。

そんな事を考えていると、食べ終わった食器を食洗機にセットし

ながらカツ子が「何か楽しい事があつたんですか?」「と聞いてくる。

ブッチョは、テレビを見て笑っているライ丸姉妹を見ながら「別に何もねえよ。今だって楽しいだろ?」と言う。

「「そうですね」「とカツ子もライ丸姉妹を見ながら返事をかえず。

確かに、苦しい事、悲しい事、つらい事、そんな事も忘れてしまふ”笑い”を作れるとしたら、どれほど素敵な事だろう。

そう思ったブッチョがテンホー氏に連絡するのに、それほど日数はかからなかった。

第二話了

03と04です。(後書き)

参考文献および参考サイト

『ホスピタルクラウン 病院に笑いを届ける道化師』 大棟耕介著
サンクチュアリ出版

『NPO法人日本ホスピタルクラウン協会』 協会サイト

この物語はフィクションです。物語に登場する人物、団体、設定はすべて架空のものです。

第三話「しゅわしゅわソーダ」01から03

第三話「しゅわしゅわソーダ」

01

これは、師匠が走ろうか走るまいかと迷ってしまっほどの、11月も終盤の頃のお話。

こちらの師匠、クラウンテンホーの地獄の特訓で、クラウン街道ばく進中のブッチョである。

初めてホスピタルクラウンの存在を知ったあの日から数日後。テンホー氏に、ホスピタルクラウンになりたいと連絡したその日の夕方に、テンホー氏は満面の笑みを浮かべながらブッチョの前に現れる。

「あっはっはっ！ さすがブッチョくん！ 連絡くれると信じていたよ！」

「さっそくだけど、ブッチョくん、ジヨスコでのステージの時”ピエロかよ！”って叫んだろ？」地獄耳である。

「厳密に言つと”ピエロ”っていうのは昔の演劇の役柄の一つではないんだ。日本では白塗りの道化師っていうとピエロが有名だから、クラウン”ピエロ”って誤解されてるんだよ。まあ、そんなことは些細なことだけどね」

と、興奮したテンホー氏がまくし立てるように言ったところで、ブッチョが口を開く。

「すみませんテンホーさん、後ろでお客様がお待ちです」

テンホー氏の後ろには、三人ほどのレジ待ちの客が待っていた。ブッチョはバイト中であつた。

「いやいや、みなさんすみません。ごめんなさい」と言いながら、

こそそと店の隅に逃げる。

後で聞いたことなのだが、ピエロというのは、目の下に涙が書いてあるキャラクターで、悲しみを抱えながら人を笑わせる役柄なのだそう。

で、改めて初めてメイクした時に、ブッチョはなんとなくピエロメイクになると。

「ふーん。そうだな、ブッチョくんらしいよ」と言われてしまった。

そんな感じでテンホー氏は、ブッチョにジャグリングやバルーンアートを教えたり、ブッチョのバイトの合間に無理矢理ステージに上がらせたりと、ホスピタルクラウンになるための基礎をたたき込んでいった。

そのかいもあって、ブッチョは病院での活動もするようになってきたのであった。

02

そんなある日曜日の朝のカッ子邸。

ホスピタルクラウンの活動は平日が基本で、クラウンのステージの仕事は、ブッチョはストリートパフォーマンスなどしかやらされないの、土日の日中は暇なのである。

朝食を済ました四人は、揃って子供向け番組を視聴中である。

「……………(笑)」

「ウドレンジャーも、さすがにあと三ヶ月で終わりだから、展開がやばいね!……………と言ってる」

「まさかメンバーが一人ずつ超エネルギーに取り込まれるとは、肉体をなくしたウドレンジャー達はどうなっちゃうんでしょう」「と、相変わらず憂鬱な話が繰り返り広げられているようだ。

ちようど番組が終わったところで、ブッチョは丸美を呼ぶ。

「……………(?)」

「なんか用？・・・と言ってる」

するとブッチョは、丸美に向かって野球のブロックサインの様な妙な動きをした。

丸美は、訳がわからず首をかしげる。ライ子は気のせいかビクッ！としたようだ。

「あれ？ 丸美わかんねえの？ おつかしいな？ このあいだ病院の子供が、耳聞こえない子はわかって言っただけ教えてくれたのに」「・・・」(怒)「と丸美が何か言ったのだが、ライ子は訳すかわりに「・・・っ！！ ブッチョこっちきて！！」と言って、奥の部屋へブッチョを引っ張っていく。カツ子と丸美には「二人はここで待ってて！！」と言い残していく。

ライ子はブッチョを寝室まで連れていき、バタン！とドアを閉める。あの一件以来寝室はきれいにしているらしい。

訳がわからないブッチョは「おい！ いきなりなんだってんだよ！」と言うと。

「ダメ！！ 絶対ダメなのブッチョ！！ それだけはやめて！！ お願い！！」とすごい剣幕で止められる。

「は？ どういうことだよ！ 説明しろ！」

「ダメなの！ なにも聞かずにやめて！」と食い下がる。

ブッチョはしばらく震えるライ子を見てから口を開く。

「あのなあ、お前が何で丸美の通訳のまねごとなんかやってるかは知らねえけどよ」

ライ子はうつむいて動かない。

「俺はお前らと出会ってからの半年とちよつと、丸美の通訳じゃないお前とほとんど喋ってねえ！」

「これ”はお前と会話するための足がかりなんだよ。ちゃんと”

お前の声”を聞かせてくれよ！」とライ子の肩をつかんで言う。

「…………」ライ子はブッチョを見つめる。

しばらくの沈黙の後ライ子は口を開く。

「…………わかった…………でも、”これ”は私が教える」

と言ったライ子は、寝室のドアを開けて出ていき、ブッチョもそれに続く。
リビングに戻ったライ子とブッチョを、丸美とカツ子は心配そうに迎える。

「あははは、ごめん、なんでもない。ちょっと休憩したら、さつきブッチョがやったのの説明するね」とライ子は手を顔の前でパタパタさせながら、冷蔵庫に飲み物を探しに行く。

03

全員が飲み物を手にし、テレビから流れる女の子向けアニメが終了したところで、ライ子が説明しだす。

「えー、さつきブッチョがやった変な行動は、別に気が狂った訳ではなく」と言ったところで「気が狂った言っな！」というブッチョのヤジが入る。

「ぐおっ！」ライ子はブッチョに蹴りを入れながら「気が狂った人はほっといて。あれは”手話”といって、耳の聞こえない人の為の会話手段です」と言っ。

「あつ、テレビでもやってる人見ますね」「某国营放送でしか見たことはないが。

ライ子はどうやら手話のある程度勉強していたらしく、基本だけはマスターしているようだ。

ライ子の説明では、手話には、大きく分けて片手だけで表現する平仮名、数字、アルファベットと、両手や体の部分を使い単語を表現する二つの表現方法があるとのこと。

とりあえず、50音さえ覚えればなんとかなるだろうということ、それを覚える事になった。

着ぐるみの手袋で手話なんかできるのか？と思っていると、ライ子は着ぐるみ用の大きな手袋から普通の手袋にはめ替えていた。用意周到である。

こうして手話のレッスンが開始される。

「あ、い、う、え、お」と言いながらライ子と同じように手指の形を変える一同。着ぐるみの先生に教わっている様は一種異様な光景である。

通常の50音以外の濁音などは、その文字の形のまま横に動かすなどして表すらしい。

「ぶ、っ、ち、よ、は、あ、ほ、だ」しばらくして応用編に入ったらしく、一同声を出しながらライ子に続く。

「ぶ、っ、ち、よ、は、す、け、べ」と一同は真剣に続けている。

後日なぜか一同は”ぶつちよ”という指文字だけは、すんなり出せるようになっていたという。

そんな具合に、カツ子の腹の虫が鳴り始める頃には、全員がなんとなく50音分をできるようになったのであった。

「（おなかがすきましたねえ、なにたべましょうか？）」「とカツ子が手を動かすと。

「（つくるのめんどくせえから、まぐどでいいんじゃない？）」「とブツチヨが答える。

「（ん？ わたしはなんでもいいよ）」とライ子が言う。

「（じゃあきょうは、まぐどでたべよっか）」と丸美が締める。

そんな一同を眺め、ブツチヨは宣言する。

「（ふっふっふっ、これでわれわれはさいごのつつしんしゅだんをてにいれた！ これをたたかいにりようするのだ！）」分かりづらいことこのうえない。

首をかしげる一同だが、とりあえず腹が減ったので、ブツチヨをスルーしてマグドへ向かうのだった。

マグドで昼食をすませた一行は、ブッチョの提案で近所の公園にやってきました。

「(わーい！ 滑り台で遊ぶ!)」と言って丸美がかけていく。

「(わたしも遊ぶ!)」とライ子も後を追う。

「(あんまはしゃいでケガするなよ)」と走っていく二人に向かって、ブッチョは手話で言うが、もちろん二人は気づかない。

「(いやいや、声を出しながら手話をすればいいんじゃないですか?)」と言うカツ子も声を出さない。

「(それもそうだな、じゃあカツ子しゃべりながら手話をしてくれ。)」という。

「(え? いや、先にブッチョさんがやってくださいよ)」と、なぜか躊躇する。

「(は? なに言ってたんだ? 別に声出したって問題ないだろ?)」
と言いながらブッチョは声を出さない。

「(む、なんかヤです。ブッチョさんが声を出すまで私声出しません)」となにやら意味の無い勝負が始まりそうである。

そんな不毛な勝負が始まるうとしていたその時。

「おいブッチョくん、こんなところで用事ってなんだい?」とテンホー氏がやってくる。

「む、ゲームのメールで我が輩を呼び出したのは貴様等か!」とレイさんもやってくる。

「(あれ? テンホーさん、レイさん、なんでこんな所にいるんですか?)」

「(俺が呼び出した。これから)ぼこぺん」大会を開催します!」

「(お? ブッチョくんさっそく手話覚えたのか。てか)ぼこぺん

” なつかしいな) ” とテンホー氏も手話を使えるようだ。

「貴様等は先ほどから何をやっているのだ！」一人だけ手話ができないらしい。

「えっ、みんな”ぼこぺん”やるの？ わたしもやる！」とライ子
がやってくる。

「(わたしもー)」と言いながら丸美も合流する。

「」で、”ぼこぺん”ってなんですか？」

「我が輩も知らないぞ」

「俺も知らなかったけど、病院の子供に教えてもらった」とブツチヨ、カツ子、レイさんは子供の頃”ぼこぺん”で遊ばなかったようだ。

”ぼこぺん”の遊び方を聞いてみると。

1、まず、じゃんけんで鬼を決める。

2、鬼が木や壁などの特定の場所で、みんなに背をむけて目を隠し、みんなで「ぼーこぺん、ぼーこぺん、だーれがつっーいた、ぼこぺん」と歌いながら鬼の背中をつつく。

3、鬼は最後につついた人を予想して、予想が当たればその人が鬼になり、また2から始める。予想が外れた場合は、また鬼はみんなに背をむけて目を隠し、100を数える。その間にみんなは逃げて隠れる。

4、100数え終えた鬼は、今いた木や壁を拠点にしてみんなを探し出す。見つけた場合は、拠点に戻り「(名前)、ぼこぺん！」と宣言すると捕まえることができる。捕まった人は、拠点から順に手を繋いで捕らえられる。で、全員を捕まえれば鬼の勝ちである。

5、捕まっていない人が、鬼に「ぼこぺん」される前に拠点に着いて「ぼこぺん」と言うと、捕まっている人が解放され、鬼が100数えるところからやり直しになる。

地域によって違うようだが、だいたいこんな感じである。

「ああ、缶けりに似たような遊びですね」「缶けりをしたことがないので知らないが。ちなみにブッチョは缶けりすらもやった記憶がない。」

というわけで”ぽこぺん”の幕が上がったのである。

05

まず、じゃんけんで負けたのはブッチョである。

「よっしゃ、こいや！」と公園のどんぐりの木に向かい、目を隠す。そしてその他全員で「ぽこぺん、ぽこぺん、だーれがつつーいた、ぽこぺん」と歌いながら、ブッチョの背中をつつきまくる。

「いてえ！ レイさん、てめえだろうがあ！」とブッチョが予想すると、みんなが「正解、次レイさんが鬼」と言い、レイさんが鬼になる。

今度はレイさんが目を隠し、みんなで「ぽこぺん……」と歌いながらつつく。最後の一突きはカンチョーであった。

レイさんは「ぬぐあつ！ ブッチョ貴様かあ?!」と予想すると「ブツブー、私でしたー！ 逃げろー！」とライ子が叫び逃げ出す。100を数えたレイさんが目を開けると、視界には誰もいなかった。

「ぬ、我が輩をおいていなくなるとは、けしからん！」やはりルールを覚えるのは苦手なようだ。

とりあえずみんなを探し出すため、レイさんは拠点となるどんぐりの木を離れる。

ルールとして、隠れる範囲はこの公園内と決めてある。この公園は200メートル四方のそれほど大きくない公園だが、身を隠すのにちょうど良い遊具と木や植え込みが配置されている。

レイさんが探し始めてから一分「テンホー氏発見！」という声が聞こえる。

「しまった！」と叫びながら植え込みから飛び出すテンホー氏、さすがに大人の体では見つかりやすいようだ。

テンホー氏の全力疾走むなく、「ぼこぺえん！」というレイさんの声が、どんぐりの木を中心に公園に響き渡る。

がつくりと肩を落として捕まっているテンホー氏を背に気を良くしたレイさんは、意気揚々と次のターゲットを探し始めた直後。

「ぼこぺーん！」という声が公園の奥から聞こえたが、どんぐりの木の方を振り返ると、そこには木に手をつけている丸美が立っていた。どうやら声の出せない丸美の代わりに、他の場所にいるライ子が叫んだようだ。

「むう！ なんとること、無念！」と100を数えに戻るレイさん。

「（すまない、丸美ちゃん）」とお礼を言うテンホー氏だが、テンホー氏も丸美の接近に気がつかなくなっかたらしい。

「（あはは、どんどん助けちゃうからね！）」とスキップしながら隠れにいく。

レイさんは100を数え終わり、再び搜索を始める。

まさかあんなおっさんに最初から捕まるとは思わなかったテンホー氏は、公園の一番奥の安全な場所で傍観を決め込む。

すると、前方の遊具の影でなにやら忙しく動くブッチョを見つけ

る。しばらく見ていると、ブッチョは手話をしているらしく、「（丸美今だ、右前の木に移動）」、「（ライ子、滑り台の後ろへ隠れる）」などと言っている。なるほど、手話なら声を出さずに的確な指示が出せるが、ズルである。

そんな調子で二回ほどレイさんに鬼をやらせた後。ブッチョ、ライ子、丸美の三人はズルしても楽しくないことに気づき、手話での指示は無くなったのである。

それを見ていたテンホー氏は「さすがブッチョくん、頭の構造が小学生と同レベルだ」と感心しているのかバカにしているのか判別できない独り言をもらすのであった。

ズルの無くなったゲームはやはり緊迫した展開になり、いつのまにかカツ子以外全員が捕まってしまった。

「はははは！ あと一人だぞ、観念して出てきたまえ！」と言いなからレイさんはカツ子を探しに行く。

「カツ子姉ちゃんがんばって！」（カツ子姉ちゃん逃げて！）「やら最初は興奮していたライ丸姉妹だったが、10分たっても20分たってもカツ子は見つからない。

探していたレイさんも「ぬう、カツ子氏はどこにもいないでござる」と探し疲れたのか語尾がおかしなことになっている。

すると、ピリリリリ！ ブイイイイン！ とブツチヨの携帯電話の着信音とバイブレーターの音が公園に鳴り響く。

ブツチヨは液晶画面を確認することなく電話を取ると。

『『うええええん、ブツチヨさんどこですか？ たすけてくださあい！』』というカツ子の情けない叫び声が携帯電話から漏れ出す。

電話を頼りに全員でカツ子を探しにいくと、公園から歩いて5分も離れた民家の庭で身を隠すカツ子を発見する。

どうやら公園の端の方で一人で隠れていたら、通行人に見られたらしくパニックになり、気がついたら知らない家の庭にいたのと。よくもまあ簡単にパニックになれるものである。

その後公園に戻った一行は、一人ずつ順番に鬼になり”ぽこぺん”遊びは幕を閉じたのであった。

別れ際ブツチヨはレイさんと携帯番号の交換をし、一緒に遊んでくれたテンホー氏とレイさんにみんなで礼を言って解散したのだ。

気がつくと、空はすでに夕焼け色に染まっていた。

夕飯を再びマグドで済ました後、カツ子をマンションまで送って行き、現在ライ丸姉妹を自宅まで送っているところである。

ライ丸姉妹の家が見えたところで「ありがとブッチョ、もうここでいいや」とライ子が言う。

「（ブッチョ、また”ぼこぺん”やるーね）」と丸美が手話で話す。「ブッチョ、今日はありがと。そして……ごめん」とライ子。朝のやりとりを気にしていたようである。

「ん、これでよかったのかな？」とブッチョが言うと、ライ子は「うん」とうなずき「じゃーね！」と二人で手を振りながら家に向かって歩いていく。

ライ丸姉妹が家に入るのを見届けてから、ブッチョは帰路につく。その道すがら、最近の自分の身の回りの変化を、思い起こしていた。

今日のようにみんなで公園で楽しく遊ぶなんてことは、ブッチョの記憶の中には無かったことである。

ましてや手話を覚えたり、少し前まで赤の他人だったテンホー氏やレイさんまでも一緒になって、友達を搜索するなど。

もしかしてこれが”普通の人”の普通な人間関係なのかな？と。そんなことを呆けながら思っている。

ブワアアアアアアアン！ というクラクションの轟音と共に黒いワンボックスカーが、すごい勢いでブッチョの目の前の交差点を曲がってきて、ブッチョに接触する寸前で急ブレーキをかけ止まる。「てめえ！ 人を殺す気か？ っつてんだらうが？ っつてんだらうが？ っつてんだらうが？」

とブッチョが叫ぼうとする前に、運転席のウィンドウが開き。

「てめえ！ ひき殺されてえのか！ 道なんか歩いてんじゃねえよ！」と金髪にピアスのインチキホスト風の男が、すごい剣幕でまくし立てる。ホストはほとんどインチキ野郎だらうが。

年のころはブッチョと同じ位であろうか、さらに「冴えねえ面してんじゃねえよボケが！ 消えろ！」と吐いて、その黒いフィルムが貼られたガラス越しにテレビ画面がいくつも見える黒いワンボックスは、マフラーから壊れたような轟音を轟かせながら、猛スピードで去っていった。

あまりの傍若無人ぶりに啞然のブッチョであったが、あれもあれで自分よりは”普通の人”なのかも。とも思うのであった。

余談ではあるが、次の日、あっさりと手話を忘れたブッチョはライ子の逆鱗に触れ、スパルタ指導で手話を体で覚えさせられたのだ。

第三話了

040506で了(後書き)

参考文献

『すぐに使える手話辞典6000』米内山明宏 監修 緒方英秋

著 ナツメ社

第四話「ゆく年くる年」 01と02

第四話「ゆく年くる年」

01

年の瀬も押し迫った大晦日での一幕。

さすがに病院での活動も、年末は病院側に受け入れる余裕はないらしく、ブッチョはコンビニバイトに勤しんでいた。

ホスピタルクラウンは非営利団体なので、ブッチョの収入はバイトの給料のみである。

最近ではブッチョのジャグリングの腕も、ほどほどに上がっているようで、テンホー氏とのコンビ芸なども練習しているようだ。

カツ子とライ丸姉妹には、ホスピタルクラウンの活動をしている事は言っているが、ストリートパフォーマンスすらも見せた事は一度も無い。ブッチョは、未熟な芸を見せるのが恥ずかしいのだそうだ。

ところで、なぜクリスマス話題を通り越して、大晦日の話なのかというところ。

クリスマスにケーキを自作したのだが、作業を分担したおかげで、カツ子の作った見た目完璧の変な味にするパンケーキと、ライ丸姉妹セレクトの珍しいフルーツ、そして味は良いが見た目最悪の創作生クリーム&盛りつけによって、カオスマスケーキになってしまった記憶は、四人から抹消されてしまったのだ。

で、現在カツ子邸では、年を越す準備をしているのであつる。

予定としては、またライ丸姉妹の両親は仕事でいないので、今日はカツ子のマンションに泊まるついでに、カウントダウン&初詣を済ませようということらしい。

「もーいーくつ寝ーるーとーおーしょーおーがーつー」とライ子は、なんとも間延びしたフレーズを無限リピートしながら、重箱におせち料理を詰めている。

丸美は横の着ぐるみのリズムに合わせているように、踊りながらカツ子の料理の手伝いをしている。

どうやら自分で作れそうなおせちのメニューは、自分で作るとういうことらしく、三日前から四人で悪戦苦闘している様子である。

時折ライ丸姉妹が味見しては、ブッチョを呼んで調味料だけ入れさせるという二度手間の連携プレイで、なんとか切り抜けているようだ。

先ほど味見をした丸美が、苦虫を噛みつぶした様な顔をした後ブッチョを呼んで、その後ブッチョの味付けでオーケーサインを出していたのだが、苦虫レベルをオーケーまで持っていくブッチョの味付け技術はミラクルである。

「あとちよつとなので、ちよつと休憩しません?」と提案する。

「うんそうだね、ちよつと歌い疲れちゃった」とライ子は見当違いの疲れ方を見せる。

「(丸美も休憩しようぜ)」ブッチョが手話で声をかける。

「(うん、なんだかノド乾いちやった)」と丸美。

「ジュースならいっぱい買ってありますよ。あつたかいお茶や紅茶がいいならインスタントがあるので、お湯沸かしますけど?」

と、カツ子は正月外に出なくてもいいように、必要な物をいろいろそろえているのであった。さすが現役ヒッキーである。

丸美が紅茶がいいと言ったので、ついでという理由で全員紅茶ということになった。カツ子はさらについてということ、全員分のティーバッグを鍋で煮詰めるという横着ぶりを見せ、それを飲んだ丸美の「(苦い)」という一言で紅茶ネタは幕を閉じたのだった。

なんだかんだで、おせち料理を完成させ、みんなでのんびりとテレビを鑑賞しているところである。

カツ子の家にコタツが無いのは残念であるが、エアコンと床暖房が完備されているので、冬だとは思えないほどの暖かさである。

「で、大晦日の特番は何を観ましようか？」

現在午後6時なのだが、たいがいどのテレビ局も大晦日の特別番組を放映するのである。

「（”ノラえもん”がいい！）」と丸美が言う。

”ノラえもん”とは、遙か過去から生きている野良猫の妖怪がある家に住みつき、その家の出来の悪い少年の悩みを妖術で解決するという国民的アニメである。

「私は”ガキの集い”のスペシャルがいい！」とライ子。

”ガキの集い”とは、大御所のお笑い芸人コンビが司会の番組で、ここ数年大晦日にスペシャル番組を放映している。内容はというと、番組メンバーが日常生活の中で、スタッフの仕掛ける罠にはまりながら指令をこなしていくという抱腹絶倒の番組である。

「私は”紅白歌マゲドン”がいいです」

”紅白歌マゲドン”とは、某国営放送の誇る大晦日の歌番組の集大成で、女性歌手だけの紅組と男性歌手だけの白組に分かれ、今年の最終対決を行うという歌番組である。

「ん？ 俺か？ 別に何でもいいぞ。みんなで話し合ってくれ」とブッチョは丸投げを決め込む。

「ん、じゃ私は”ノラえもん”でいいや」

「（ううん、”ガキの集い”でいいよ）」

譲り合いとは美しい姉妹愛である。

「どつちでもいいなら”歌マゲドン”にしましょう？」「ぶち壊しである。

結局見たいところでチャンネルを替える、という中途半端な話で

まとまったようだ。

そんな感じでした。たりくだらなかつたりする番組を、見所でチャンネルを替えつつ見ていると。

「おなかすいたなー」とライ子が訴える。時計を見ると午後10時30分である。

「「そうですねえ、先に年越しソバを食べましょうか」」

「（やった！ 食べる食べる！）」と丸美は楽しみにしていたようだ。

「おう、冷凍ソバだろ？ 俺が作るうか？」とブッチョが言う。

「ダメだよ！ ブッチョはインスタントでも何か余分に調味料入れるもん！」

「（こないだなんか、うどんにあんこと牛乳を入れるんだもん！もう異次元スイーツだったよ。おいしかったけど）」チャレンジャーである。

「ああ、あれは隠し味にバターを入れたからな」

というわけでカツ子がソバを茹でたのだが、心なしか変な味がしたことについては触れないことにしたようだ。

今年が終わるまで、あと1時間。

今年はブッチョにとって、ありすぎると言う位いろいろな事があった。

この目の前にいる奇妙な三人と巡り会ったのを筆頭に、ホスピタルクラウンの活動を知ったり、バイトは変わってしまったが今までで一番長く続いている。

ブッチョの今までの人生の中で、これほど他人に関わり、変化にとんだ年は無かったであろう。

それもこの三人に出会えたからこそである。

願わくばこの関係が来年以降も続くことを望むのであった。

などとセンチメンタルなことを考えている横で、ライ丸姉妹は揃

っつらっつらっつらとしている。

「あれれ？ 二人とも寝ちゃいそうですねえ。初詣は明日にしましようか」「

「はっ！ いやいや、なに言ってるのカツ子姉ちゃん！ 眠くはないよ！」とライ子はあせって主張する。

「ん？ だいじよすそ、けれくなんかつきよ」「丸美は眠気で、手が思うように動かないようだ。

はたしてライ丸姉妹は初詣に行くことができるのであろうか。

ゴオオーン……。

除夜の鐘が鳴り響く夜道を、四人は寒さに耐えながら神社に向かうまばらな人影と一緒に歩いていった。

どうにか睡魔に打ち勝ったライ丸姉妹は、”紅白歌マゲドン”が終わり”ゆく年くる年”の放映が始まると、眠気を覚ますように「初詣行こう！」と言い出したので、少々早いが出発する事になった。向かっている神社は、出店の出るような大きな神社ではなく、地域の住民のみが行くような神社である。

カツ子のマンションから歩くこと10分ほどで神社に到着すると、年が明けてないにも関わらずある程度の人が集まっていた。

広場の中心では焚き火がたかれており、10人ほどの人々が焚き火の周りを囲み暖をとっていて、一行もそれに参加する。

「あつたかーい」とライ子は焚き火に向かって手をかざす。

「（顔があつつい）」と丸美は焚き火に背を向けながら暖をとる。

「あつ、あそこでお汁粉頂けるみたいですよ？」

カツ子の言う方を見ると、大釜で暖められたお汁粉が、無料で振る舞われているようだ。

「お参り終わったら食べて帰るか」と言う。

「はっ！ ブツチョ、年が明けるまであと何秒?!」とライ子が焦って聞いてくる。

「おいおい、お前あと何秒って、そんなにギリギリじゃねえだろ」と言いながら携帯電話の時計を見ると。

「ぎゃあ！ やべえ！ あと10秒だ！」ギリギリだったようだ。

「（8、7、6）」と急いで指折り数え出す。

「5、4、3」と周りの子供たちの声も聞こえ出す。

「2、1」と声は大きくなり。

「あけましておめでとつ」とあちらこちらで聞こえる。

「（あけましておめでとー）」「あけおめー」「明けましておめでとつございます」「ん、明けましておめでと」「それぞれがそれぞれに新年の挨拶をする。

「それじゃお参りしに行くか」とライ丸姉妹にお賽銭用のお金の5円玉を一個ずつ渡す。「わ、ブッチョけちくさい」との声に耳をかさずにカツ子を見ると、なにやらモジモジしている。

「えつと、ブッチョさんすいません、私お金持ってないです」「と金持ちらしからぬ申告である。

「わかつてるよ、お前が現金持つてるの見たことないしな」と言いながら5円玉を渡す。ブッチョはあらかじめ全員分の5円玉を用意していたようだ。

「すいません、後で何かでお返しします」「

「いやいや、5円でお返して、いいよそんなもん」

「あつ！　そうですね、ブッチョさんこついうお金のやりとり嫌いでしたね」「

「ぶつ！　5円でそんなこと言うとマジでケチに思われるからやめてえ！」　実際マジでケチである。

04

その後無事にお参りを済ませ、待望のお汁粉タイムである。何を願ってお参りしたか、などというどっかの安い恋愛ドラマのようなやりとりもなく、参拝前から一行の意識はお汁粉に向いていた。

大量の湯気の沸き立つ大釜からあつあつのお汁粉が、あらかじめ白玉の入った使い捨てのお椀にそそがれる。

一行はそれぞれお汁粉の入ったお椀と割り箸を受け取り、息を吹

きかけふうふう言いながら食べ始める。

「ああ、体があつたまるー」とライ子は身震いしながらすすっている。

「……………(笑)」

「うーん、あまくておいしい。……と言ってる」と丸美の両手が塞がっているので、ライ子がかわりに言っただけ。

「ああっ！ メガネが曇って何も見えません！」「カツ子の眼鏡は湯気で真っ白になっている。

そんな一同の横を通り過ぎたカップルが「あれ？ こっちは甘酒じゃなくてお汁粉食べさせてくれるんだ」と言ったのをカツ子は聞き逃さなかった。

「「そういえばこの神社から少し行った所に、もう一つ神社があるんですよねえ。そこは甘酒ですかあ」「と行きたそうである。

「甘酒かあ、飲んだ事ないな。お前等行くか？」とブッチョ。

「甘酒ってなに？ 私たちでも飲めるお酒なの？」とライ子は言う。丸美も首をかしげている所を見ると、二人とも甘酒を飲んだ事は無いようだ。

「「ライ丸ちゃん達も飲めますよ。甘酒っていうのは、お酒を造った後に出る酒粕を煮て砂糖で甘くしたおいしい飲み物です。どうします？」「と言いながら、足はずでに次の神社に向かっている。

で、現在一行の手には、甘酒の入った紙コップが握られている。

「あっ、甘くておいしい！」

「（このつぶつぶがおいしいね）」と初めて飲む子供にも概ね好評のようだ。

「ん、少しお酒の香りがするけど、いけるな」とブッチョも気に入った様子。

「って、カツ子はどこ行った？」

気がつくとき、カツ子がいなかった。またいつものマンネリ迷子ネタか？ という不安が頭をよぎった時「あっ、カツ子姉ちゃん！」とラ

イ子が、近くのテントにいるカッ子を見つける。

「おい、お前勝手に行くともた迷子になるぞ」とブッチョが忠告すると。

「ふあい？ ブッチョはん、なんれすか？」「と、ろれつがまわっていない様子。

「は？ まさかお前、いくらボケキャラでも甘酒で酔っぱらうなんて古典的にもほどがあるぞ」

と言いながらよく見るとこのテントでは、おじさんが一升瓶片手に日本酒を振る舞っていた。

「よう姉ちゃん、なかなかの飲みっぷりだね。もう一杯行つとくか？」とおっさんが一升瓶を差し出す。

「ふあい、ありがほーごらいまふ」「と言いながらコップを差し出す。

「ぶつ！ お前やめとけつて！ そんなに飲んだら帰れなくなつちまふそ……はへ？ はんかるれふが……」とブッチョはお酒を飲んでないのにふらふらします。

「ぶ……ブッチョまさか」

「（甘酒で酔っぱらったんかーい！）」「とまさかの古典ギャグである。

その後、ブッチョとカッ子の酔っぱらいの保護者は、ライ丸姉妹の介添えでなんとかマンションに戻る事ができた。

リビングまで来ると、ブッチョとカッ子は倒れて動かなくなってしまう。

「（もう！ こんな所で寝たら風邪ひくよ！）」「と怒ったところで起きそうにもない。

「まったく、しょうがないなあ」と言いながら、ライ子は部屋の隅に置いてある大きな袋から布団を取り出す。

どうやら今夜泊まるライ丸姉妹の為に、カツ子が買っておいた布団のようだ。

ライ子はリビングの床に寝ている二人の間に、敷き布団を敷く。

「ちよっと手伝って」と丸美を呼び「せーの！」と二人でブツチョを転がして布団に乗せる。

「もういっちょ、せーの！」と反対にいるカツ子も、転がして布団に乗せる。

「よっしゃ、いっちょあがり！」と言いながら掛け布団をかぶせてやる。

「じゃ、私たちはカツ子姉ちゃんのベッドで寝よっか」

「(やった！ ふかふかのベッドだ！)」

と、こうしてライ丸姉妹は、カツ子のベッドに二人で寝ることにしたようだ。

リビングに一つ敷かれた布団に眠る酔っぱらい達を残して。

翌朝、がっつりとブツチョの腕の中で目を覚ましたカツ子の「ぎゃあ！」という悲鳴が目覚ましとなって、新年の朝がスタートするのであった。

第4話了

第2おまけ話「表現の自由」01から03です(前書き)

前回のおまけ話と同様に、挿絵が挿入されています。

前回の告知どおり、キャラクタービジュアルの固定化は本望ではありません。

素人の描いた絵に嫌悪感を抱かない方はどうぞ。

この話は本編と続いています。シナリオ上重要な情報は書かれていません。

どうぞ飛ばしてください。

でもがんばって描きました。見る人はどうぞお楽しみください。

第2おまけ話「表現の自由」 01から03です

第2おまけ話「表現の自由」

01

01 二人が対峙してから三日、勝敗はつかずにいた。

惑星シュトウルーゼングノーシス第三惑星皇子シャルルグスブンゼン⇨ドラゴニズフス⇨ブラトリアヌス？世と惑星モルデスラハギンコルストール第六惑星のコルスリンシャロウ⇨ヒュルツドシュレツト⇨ヴァンダルセン第三皇子との一騎打ちである。

> i33313 — 3933 <

しかし二人のソウルドルトリメイションは尽きかけようとしていた。たぶん次のマルテリクスシュトラウムでノルデイルコントレクトがきまるであろう。

先に仕掛けたのはシャルルグスブンゼン⇨ドラゴニズフス⇨ズラトリアヌス？世であった。

彼の聖剣ヒュレディレイドシュテルンデルグにはファイアリングエレメンタルがエンチャントされているので、コシュタリウスが可能なのだ。

一方コルスリンシャロウ⇨ヒュルツドシュレット⇨ヴァンダルセン第三皇子の聖槍ノーザンファシユリティーフュノプリウスは賢者ノルセリウス⇨ゴロフサコニフ⇨モリモンサレイスによって一つの聖槍ココリジューヒルシュトラウゼンとモスリタウルス融合されているのだ。

そしてシャルルグスブンゼン⇨ドラゴニ……

「って寿限無か！ 名前が長すぎるわ！ 辞書か？ これは変な長い名前辞典か？！」とブツチョは原稿用紙を机に叩きつけながら叫

ぶ。

「カツ子姉ちゃん、挿し絵ももうなんだかてんやわんやでカオスだよ！」とライ子が言う。

「（カツ子姉ちゃん怖い）」と丸美は震え出す。

「なに言ってるんですか！ これは愛と友情の物語ですよ？ 戦いの果てに二人は結ばれるんです」「」

「さらにオチはホモネタかい！」

「失礼な！ ボーイズラブと言ってください！」と拗ねる。カツ子の意外な嗜好が明らかになる。

「なんか効果音おかしいし、ところどころに浮いてる丸いのなに？」

「あれはマスコットキャラのニッチくんです。ニッチくんを食べるとパワーアップできるんです」「」

「（怖い）」

「おーけー、これはノーカンで次いこう」

「ひどい！ 一生懸命書いたのに！」

いきなりのカオスだが、一同はなにをやっているかという。

今では正月三が日でも営業している店も多く、家から一步も出ないということはなくなったのだが、おせち料理を作った手前全部食べてしまわなければならぬ為、外出を避けているのである。

現在1月2日、おせち料理は本日中に無くなりそうだが、暇を持って余した一同は書き初めを始めたのである。

書き初めの歴史的な意味は知らないが「別に習字じゃなくても、なんか書きゃあ何でも良くね？」というブツチョの適当発言で、なんでもいいから何かを書くという”なんでも書き初め”をすることになった。

で、カツ子の”なんでも書き初め”作品は今のカオスホモ小説だったのである。

「じゃあ次は私たちの番だね！」とライ子は元気よく言う。

「（二人の共同作品です！）」と丸美も元気良く言う。

「やっぱお前らは習字か？ 小説は書けないだろ？」

「ペン習字つてのもありますよ？」

「ふっふっふっ、そんなレベルの低いものじゃないよ！ さあ丸美、

二人に見せておやり！」

「（さあ！ ブッチョにカツ子姉ちゃん！ 見ておしまいなされ！）」

と変なノリでコピー用紙を手渡される。

ブッチョとカツ子が、そのコピー用紙を見ると。

> i333314 — 39333 <

「わあっ！ あぶねえ、このサイトから閉め出されるところだった。つてマンガかよ！」

「「わあ！ びっくりしましたあ！ 運営から苦情がきますよ？」

「わっはっはっはっ！ どうだ！ 小説とマンガのコラボレーションだ！

いや、これは超融合と言っても過言ではない！」

「（そう、これはどちらも現実なのだ！）」と、なにやら哲学的な台詞を吐く小学生である。

「「いや、でも、マンガなら他のサイト行けって言われますよ？」

「そっだ！ 怒られたら責任取れんのか！」

「……」「ライ子は黙ってしまっ。」

しばらくの沈黙の後ライ子はあきらめたように口を開く。

> i333315 — 39333 <

> i333316 — 39333 <

「……」「……」「絶句のブッチョとカツ子。

「わはははは！ くるしゅうない！ くるしゅうない！」反省の色ゼロである。

「（わっしょい！ わっしょい！）」「こちらもおなじく。

この二人のフィーバーぶりが、この後しばらく続いた。

それをブッチョとカツ子はぼんやりと眺めながら「怒られなきやいいな」と思うのであった。

03

「それじゃあ次はブッチョの番だね」とライ子が仕切る。

「(さあ、ブッチョの作品を見せておくれ)」

「ブッチョさんは何書いたんですか?」

「いや、俺の作品はこれから書くんだ」

「は? まだ書いてなかったのかよ!」

「(今までなにやってたの!)」

との怒りもごもつともである。

「話を最後まで聞けって」と言っつて、ブッチョは大きな画用紙を取り出す。

「今からみんなで、一つのお題で絵を描くんだ」

「あつ、それ面白そうですね。なに描きます?」とカツ子は乗り気だ。

「なんかだまされてるような気がするんだけど。いや、何描くの?」とライ子。

「(ペカチュウがいい!)」と丸美が言う。

「ペカチュウ」とは、テレビゲームからアニメ化された”パケットモンスター”という大人気アニメのマスコットキャラ的な、電撃を発する怪物である。

「いいよそれで、じゃあ他の人を見ないように仕切り板作るね」とライ子は、そこらの物を使って仕切り板を作る。

子供二人はもちろん知っているだろうが、ブッチョやカツ子も見たことはあるのだが、描くとなると話は別である。

四人それぞれが画用紙の角に陣取り、筆記用具を構える。

「じゃあ制限時間は5分、よいい、スタート!」とブッチョが合図をおくると、四人は一斉に描きはじめる。

「ペカチユウ”って電気の怪物で、チュウって言うくらいだから虫だよな」とブツチヨは見当違いの独り言をつぶやく。

「んー、どんなでしたっけ？ 電気出して、目がクリクリしてましたよね？」とこっちはいい感じのようだ。

ライ子はすでに描き終えている。

丸美は楽しそうに体でリズムを取りながら描いている。

そして制限時間になり、見せ合うことになった。

「それじゃ、せーの！」と自分の描いた”ペカチユウ”を披露する。

「げっ！ ライ子、これはまずい！」とブツチヨはライ子の描いた

”ペカチユウ”の目を黒く塗りつぶす。どうやら正解だったらしい。

> i333317—3933<

「(うわ、ブツチヨのやつ目が三つもあって怖いし似てない)」と

丸美の突っ込みが入る。

「ぶっ、カツ子のそれ、体が人間じゃねえか」とブツチヨ。お前に言われたかない。

「あつ、丸美ちゃんのかわいい。お花が咲いて太陽さんまで描いてあります」「と目を細める。

ライ子の描いた”ペカチユウ”は、完璧すぎて突っ込みどころが無く、誰も触れないでいる。

「……あれ？ なんかちゃんと描いたのに何この敗北感」とライ子がつぶやく。

と、そんなライ子に気づき「え？ いや、お姉ちゃん上手！」

「おお、さすがライ子」「うわあ！ 上手ですなあ！」と取り

繕うコメントも、上手以外出てこないというボキャブラリーの低さ。

「もういいよ！ おせち料理やけ食いしてやるう！」とライ子は拗

ねて、おせち料理をがつつきだす。

その後、おせち料理の大食い大会になり、昼過ぎには食料がそこを尽き、新年2日目の晩にしてマグドへ直行する一同であった。

第2 おまけ話了

第五話「メモリーセンチメートル」 01から02

第五話「メモリーセンチメートル」

01

今日はブッチョにとって、新年最初のホスピタルクラウンとしての活動である。

「ねえねえピエロさん、私にもお犬さん作って」と、手から点滴の管が伸び、胸元から巻かれた包帯がのぞいている女の子が言う。

「おう！ ちよちよいと作っちゃうぞ」とブッチョはポケットから風船とポンプを取り出す。

病院での活動では神経を使わなければいけないことが沢山あり、やはりバイキンを子供達に近づけないようにしないといけない。なので、風船を膨らますのも口ではなくポンプの方が望ましいのである。

「ほらできた。おブードルさんのできあがり！」とブッチョはできあがった風船を女の子に渡すと。

「なんかあつちのピエロさんの作ったヤツのが上手」とダメだしされる。

「ぶっ！ いやいや俺のはここんとところにオリジナリティーを出してんだよ」と左右で長さの違うパーツを指さす。

「あははは、これは絶対しっぱいしたとこでしょう？ やり直し！」となかなかきびしいようだ。

「ぎゃふん！ 君は師匠より厳しいな」と作り直すブッチョを、女の子は先生になった気になって楽しそうに指示を出している。

ここでの活動も、ブッチョは一部の子供達から顔なじみになりつつあった。しかしここは病院なので、本当は顔なじみになどならな

い方が良いのだ。

ブッチョがこの病院に来てからの短い間にも、回復して元気になって退院した子もいれば、治療の甲斐なく亡くなってしまった子供もいた。

人の”死”というものに直面したことのないブッチョは、はげしく戸惑い、悩みもした。

クラウンテンホーはそんなブッチョに「俺たちの役目は、子供達の笑顔を引き出し、闘病の精神的負担を少しでも軽減させる手助けをすることなんだ。俺たちは、子供達や病院の先生とか看護師のように、病氣と闘っている”主役”じゃない。わき役はわき役らしく、何も気にせず自分の役をこなしゃいいんだよ」

「ピエロはピエロらしく、悲しみは内に秘めとくもんだ。そのため涙のメイクだろ？」

とクラウンテンホーは言うが、ブッチョとしてはこの涙のメイクは、父親に捨てられたことによる精神的な病により、感情の高ぶりによってでは涙を流したことがないので、自分の人間的な部分を表す思いで書いているのだ。

そしてクラウンテンホーは「悲しみを全部内に秘めるなんて、簡単な事じゃないけどな」と、一瞬悲しげな表情を見せる。

テンホー氏にどんな過去があったのであろうか。

などということを考えていると。

「ブッチョくん、たまには一杯つきあわない？」とのお誘いをテンホー氏から受ける。

が、ブッチョの頭に初詣の記憶がよみがえる。

「すみません、どうも俺お酒飲めないみたいです」と一連の騒動を話す。

「ぶはははは！ いや、いや、ほんとブッチョくん面白すぎるよ！」と大爆笑のテンホー氏。

「じゃあさ、カツ子ちゃんとライ丸ちゃんたちも呼んで、飯食いにいこうよ」とテンホー氏は提案する。

「スカイラグリーンへようこそー！」ウエイトレスのお姉さんの元気な声が店内に響きわたる。

ブッチョ、カツ子、ライ丸姉妹にテンホー氏を加えた一行は、フアミリーレストラン”スカイラグリーン”に到着した。

「なんか、ようこそなんて言われると気持ち悪いな」

「そうだね、そこまで素敵なところじゃないしね」

「（ぼつたくられそう）」

「「わあ、みんなそんな悪口ばつかり言っちゃだめですよ」」

という四人と、苦笑いのウエイトレスのお姉さんを見たテンホー氏は「あはははは！ さすが四人集まると最強だな君たちは」と大爆笑。

ウエイトレスのお姉さんに案内され、席につく一行。

その後注文をするのだが、その様子を見ていたテンホー氏は「君たちはいつもそんなに注文するのか？」と、注文した品数のあまりの多さに驚愕する。さらにその後、その注文した大量の食料のほとんどを、ライ丸姉妹が平らげるのを見て絶句するのである。

しばらくすると、次々に食料が運ばれてくる。

ライ丸姉妹は、待ちきれないとばかりにがつつき出す。

他の三人も空腹感から解放されるために、とりあえず無言で食べ始める。

「テンホーさんは、なんでほんな名前にひたの？」と、しばらくしてある程度食べて空腹が落ち着いたのか、ライ子は食べ物をおぼりながらテンホー氏にたずねる。

「おい、口に物入れながらしゃべるな！」とブッチョは叱ってみせると「ふあい」と答える。

「なんか子供にテンホー」さん”なんて言われると調子狂うな」と言う。

「（ん、ブッチョがいつもそう呼んでるからね）」と丸美が言う。「ま、しかたないか。で、名前の由来ね、君たちは麻雀は知ってるかな？」

四人とも麻雀はやったことはないが、四角いブロックを使った絵合わせゲームという認識で一致した。

「それで充分、麻雀であがるには決められた特定の絵柄を揃えたりしてできる役満っていうのがあるんだけど、その中に”天和”^{てんぽう}っていう役満があるんだ」

「図柄の書いてあるブロックは”牌”^{はい}”って名前で、基本最初にもらえる13個の牌の絵柄にもう一つ牌を引いて、14個で完成する”和了役”^{あがりやく}”っていうのを早く揃えた人が勝ちだけど、一番最初に始める”親””って人だけ最初にもらえる牌が14個なんだ。その親が最初に牌をもらった時すでに和了役ができてるのを”天和””って言うんだ」

「確率としては、親を33万回やって1回ぐらいの割合らしく”天の神様から授かった和了””って意味で”天和”と呼ばれてる。すごいだろ？ほんとに運のみの奇跡の名前で、天”大空、和”加算、あの広大な空にプラスできるって意味にもなるから”テンホー””って付けたんだ！”やはりテンホー氏はアホで厨二であった。

「え？日本語でオツケーですけど？」とライ子は理解できなかったらしい。

「（カツ子姉ちゃん、その肉取って）」と丸美は食べるのに必死だ。

「はいはい、あんまり急いで食べると喉につつかえますよ？」「と聞いちゃいない。

「ぎゃふん！聞いちゃいねえ！あ、確かにこのメンバーと絡むと”ぎゃふん！””って言っちゃうな」とテンホー氏はなにやら納得している。

テンホー氏と話すと、毎回説明っぽくなるのは俺たちが無知だからなのか？とブツチヨは思っていた。

テンホー氏のビールが三杯目に到達し、ライ丸姉妹が追加注文した大量のデザートが、テーブルを埋め尽くす頃。ブツチヨはテンホー氏に、クラウンになったきっかけを聞いてみる。

「んあ？ 人に聞く前に自分のから先に言えやあ！」とテンホー氏は完全に酔っている。

「いやいや、俺はテンホーさんに誘われたからですよ」と言つと。

「いや、そういうんじゃないでな。ん？ まあいいか、まだ君も明確にはわかんないだろうからにや？」テンホー氏もあまりアルコールに強い方ではないようだ。

そしてテンホー氏は少し考えた後、話始めたのである。あまりにも悲しい過去を。

「んー、ありやあ中学3年の時だにや、ふたつ下の妹が死んじゃつてさあ」と酔っぱらって明るい感じで。ブツチヨは聞くタイミングを間違つたようだ。

「いやー、ふたつしか違わなかつたけどかわいい妹でねえ、今で言うと”妹萌え”ってやつ？妹は元々病弱だったんだけど、あるときコロツと逝つちやいやがって」

「……」とブツチヨが言葉を失っていると「あー、もう昔の事だから気にするな。いやー、でも当時は荒れたねー、あたり構わずケンカしまくつたよ。これでも運動神経いい方だからケンカ強かつたんだぜ？でもあるとき高校生に袋叩きにあつて入院さ、内蔵破裂だつて、マンガでしか聞いたことないだろ？」と事も無げに言う。この時点ですでにブツチヨとは全く違う世界の間人である。

「そんなだから親ともうまくいってなくて、入院中たまに世話し

に来てくれても俺は目を合わせもしなかったよ。で、入院生活も一ヶ月を過ぎた頃、死んじまった妹によく似た女の子となかよくなつてねえ、妹と同じ俺のふたつ下で”サッチ”って言うあだ名で呼ばれててかわいかったにゃあ”テンホー氏は体をくねらす。

ここでテンホー氏は残りのビールを飲み干し、新たにビールを注文する。ライ丸姉妹はデザートに夢中で、カツ子は食べ過ぎで放心状態である。

新しいビールが到着すると、テンホー氏は再度話を続ける。

やはりサッチも入院患者で、心臓が弱いらしく、入院は数年にも及んでいたようである。その間に何度も危険な状態になったことも聞かされた。

「俺はこのとき気づいたんだ、妹が死んで以来何にイライラしてケンカばかりしていたのか、俺が無視するような態度をとっても何で親はなにも言わなかったのか」

「気づいてたんだよ、妹が苦しんでるのに何もできない自分の無力さに、祈ることしかできなかった自分のふがいなさに」

だから両親も、テンホー氏の気持ち痛いほどよく分かっていたので、好きなようにやらせていたのだろう。

しかし気づいたところで、テンホー氏が目の前の少女にしてやれる事はないのである。

サッチは退屈な入院生活が長く続いたせい、表情の変化の乏しい少女で、テンホー氏と談笑していてもどこか陰りのある笑顔しか見せなかったという。

この子の笑顔はこういうものだ。と疑問を持たなくなった頃、そいつは現れたのだ。

「いや、びびったさ、まさか病院の中にピエロがいるなんて、冷静に考えてみる、病院にピエロがラッパ吹きながら歩いてきたらどう

する？」

と言われブツチヨは想像する。病院の暗いリノリウムの廊下を、ラッパを吹き踊りながら靴をキュッキュと鳴らして近づいてくる白塗りのピエロ。

「ぎゃあ！ 完全ホラー！」とブツチヨは叫ぶ。

「いやまさにホラーだろ？ でも退屈で変化の乏しい入院生活が日常になっている子達にとってそれは、入院生活には無い非日常の出来事だったんだ」

「それを見ていたサッチの表情はこれでもかというぐらいワクワクしてた」

「で俺は思ったね、できんじゃん、病気を治す事はできなくても、このくそつままない入院生活を楽しくさせる事ぐらいはできんじゃん！ って」

その後サッチよりも先に退院したテンホー氏は「まずはサッチの為に修行して、退屈な入院生活を毎日楽しくさせてやるぜ！」とそのクラウンに弟子入りしたとのこと。

その後海外にまでクラウンとしての修行に行き、ホスピタルクラウンとしての知識を身につけサッチに会いにいったのだという。

しかしテンホー氏が病院に行くとサッチはもういなかったのである。

「そこでまた思い知らされたよ、言っただろ？俺たちは主役じゃないって、何の力もないただのわき役だって……」

「……」とブツチヨは言葉が出ない。結局は笑いの力で一時気を紛らわせたとしても、人の命など救えないということなのだろうか。

カツ子やライ丸姉妹も今の話を聞いていたのだろうか、食べる手を休めつつむいている。

そんな一同の沈黙を破るように、テンホー氏の携帯電話の着信音が鳴り響く。

「お？ はいなはいな」と言いながら電話を取る。

「ん？ あ、着いた？ 中にいるから入ってきて」としゃべっている。

「誰か来るんですか？」とブツチヨは、電話の終わったテンホー氏にたずねる。

「ああ、俺こんど結婚するんだ、それで奥さんになる人をブツチヨくんを紹介しようと思ってね」とテンホー氏。

「なに？ リア充の自慢話？」とライ子は再びデザートを食べ始めながら言う。

「（今から来るの？ じゃあもつと食べ物注文しなきゃ）」と丸美はまだ食べる気らしい。

「えっ？ テンホーさんの彼女さんが来るんですか？」とカツ子は身だしなみを整えようとするが、ぼさぼさヘアにジャージでは整える場所など無い。

「スカイラグーンへようこそー」という声が入り口の方で聞こえたかと思うと、テンホー氏はそちらの方へ手を振る。

やってきたのは、すらりとしたきれいな女性だった。

「はじめまして、みなさんの話はいつもテンホーの方から聞いてます。この人アホでしょう？」と女性はテンホー氏を指さして言う。

「アホとは失礼な！ 紹介します、これが俺の婚約者の”サッチ”です」とテンホー氏。

「は？」

と意味が分からない一同。

「サッチ死んだんじゃないかよ！」とライ子が言う。

「え？ なに？ なんて私死んだ事になってんの？」と戸惑うサッチ。

「えつと、だってさつき病院で思い知らされたって……」

「え？ だから、”わき役”の俺が修行に行つてて何も力になれなかった5年の間に、”主役”のサッチやお医者さんが病気を克服してしまつたから、”主役”の人たちはすごいなあつて思い知らされましたとさ！」とテンホー氏。

「5年も修行してたんかい！ どんだけ入院させとくつもりだよ！ とブツチョ。

「言い方がまぎらわしいんだよ！」（さつきの沈黙を返せ！）」とライ丸姉妹は怒り心頭である。

「いやー、その後サッチと連絡が取れてさー、会つてみたら超いい女になつててー、いやー、5年の月日つてのはすごいねつて思い知らされましたよ」とさんざんノロケまくっているテンホー氏をスルーし、サッチだけにお祝いを言う一同であつた。

05

その後食事の精算を済ます際、テンホー氏が「今日は無理言つて集まつてもらつたから俺が払うよ」と言つたのだが、あまりの金額に所持金が足りず、結局カツ子がお祝いということで支払う事になる。

別れ際テンホー氏はブツチョに、半年後にある結婚式に招待するという約束をして、テンホー氏とサッチのお祝い食事は、お開きとなつたのである。

帰りの道すがら、ブツチョはカツ子とライ丸姉妹に一つ提案をする。

「お前らどこか泊まりがけで出かけれる日がないか？」

「私はいつでも大丈夫ですよ？」と聞くまでもないヤツが言う。

「ん？ 私たちも土日ならいつでもいいよ」とライ子も即答である。
「いやいや、親の了承ぐらい取ってこいよ」まあそこらへんはカツ子がうまくやるだろうが。

「（なにかするの？）」

「ああ、少し前から考えてたんだけど、みんなで”ネズミーランド”に行かないか？」とブツチヨが言う。

「えっ？」と驚きの表情をしたであろう着ぐるみが言う。

「（行く！ 行ってみたい！ 行ってしまおるに……！）」丸美は興奮しすぎて手話などしている場合ではない様子。

「「お金とかは大丈夫なんですか？ なんなら私が出しますけど……」

」とブツチヨがお金のやりとりが嫌いなのを知りつつ申し出してみる。

「いや、昔から少しずつ貯めてきた貯金があるから、贅沢しなきゃ大丈夫なぐらいはあるんだ」と、実はまめに貯金していたという意外な一面を見せる。

「じゃあ次の土日に行こう！ 善は急げだよ！」「（なんなら明日からでもいい！ 学校なんか休んじゃえ！）」などと勝手な事を言っている。

結局、ライ丸姉妹の両親の了承と、ホテルの予約、夜行バスの予約などの結果、再来週の土日に”ネズミーランド”へ出かける事になったのである。

第五話了

第六話「東京ネズミールランド」 010203

第六話「東京ネズミールランド」

01

陽気な音楽と共にネズミやアヒルの着ぐるみに身を包んだ人が激しく踊っている。

ここは“東京ネズミールランド”日本のテーマパークの頂点に君臨する夢のワンダーランドである。

「マッキー！ レオナルドー！」とライ子は嬉々としてキャラクターの名前を叫んでいる。

ネズミールランドのメインキャラクター“マッキー”ストライクフイールド”はネズミの空軍パイロットで、プロペラ機を操り敵機を撃墜するエースパイロットなのだ。

日本のアニメ映画”紅蓮の豚”というゼロ戦特攻部隊の話は、マッキーがモチーフになっているのは有名な話である。

ちなみに”レオナルド”ダックシュタイナー”はアヒルの高射砲の砲手だ。

しかしこのネズミールランドは、そんな血なまぐさい設定とは無縁の実に楽しい夢の楽園の雰囲気醸し出しているのである。

一行は前日の金曜日の晩に、ネズミールランド直行チケット付夜行バスなる格安バスで、一晩かけてはるばる愛知県から、この千葉までやってきたのだ。

バスから降りた一行の第一声は「腰がいたい」「首が曲がらん」「（おなかすいた）」「まだねむたいです」と、他の乗客のテンションの高さとは対照的に、ネズミールランドを目の前に文句のオンパレードであった。

しかし入場口で出迎えてくれたキャラクターの着ぐるみ達を見ると、前述の文句など消し飛んでしまったのである。

着ぐるみに抱きつく着ぐるみ、というシュールな画をテーマパーク側がよく容認したなと思っていたのだが、実はカツ子がこのテーマパークの株主で、事前に根回ししていたのを知ったのはずっと後の話。

さすがに週末のテーマパークは、気分が悪くなるほどの人の群で埋め尽くされている。

なので人気のアトラクションは、すでに二時間以上の待ちになっている。

「（ふう、入り口にあんなトラップが仕掛けてあるなんて）」と行列の最高尾に並びながら丸美が言う。

事前調査で、人気のアトラクションは開場と共にダッシュで並ぶというのが鉄則とのことだった。のだが、あの入り口の着ぐるみの出迎えは初心者には見過ごせないイベントなのである。

今並んでいるのは”ブーさんのハニーハント”というアトラクションで、プレイボーイの豚のブーさんが女を引っかけるというアニメを再現した人気アトラクションである。

「こんなの面白いのか？」とブッチョが言う。

「なに言ってるの！ ハニーハントはジェットコースターに乗りながら立体映像で飛んでくる女の人を、光線銃で撃って捕獲するっていうすごいアトラクションなんだから！」なんだか世も末である。

「（たくさん捕まえるとブーさんバッチがもらえるんだよ！）」豚のバッチがほしいのだろうか。

「バッチももらえるといいですねえ」とカツ子は行列の先の方を見ながら言う。

それから順番がまわってくるまでの一時間半、しりとりしたり、じゃんけんしたりして時間をつぶす。

他の子供を見ると、大半の子供は携帯ゲーム機で遊びながら時間

をつぶしているのだが、中にはブッチョ達一行のように両親と子供で遊んでいる家族もある。

ようやく順番がまわってきて、建物の中のジェットコースターに乗り込み3Dメガネをかける。

所用時間は約5分。あつ、という間に終わってしまった。

しかし「あーおもしろかった!」「まさか最後にあの女の人が裏切るなんて!」「バッチ取れてよかったですね!」

と、5分とは思えない内容であったのだ。わずか5分の為に一時間半並ぶ価値のあるものであった。

ちなみに四人とも見事バッチを獲得し、さつそく四人そろって服にそのバッチを取り付ける。

なにやらおなじ物を付けると、妙な連帯感が生まれたような気になったのはブッチョだけではないようである。

02

「(おなかすいた)」と丸美が訴える。

一つアトラクションを乗り終えたばかりなのだが、時間はもう昼時である。

ここでの昼食は、レストランで食べるか、パーク各地に点在している屋台を食べ歩くかの二者択一なのだが、ライ丸姉妹とカッ子は事前に、どこの屋台で何が食べられるのかを調べてきていたようだ。こここの屋台は、すべて違う食べ物が発売されていて、そのすべてがキャラクターの名前がついていたり、キャラクターの装飾がほどこされている。

一行は食事しながら屋台をまわり、次の屋台までの道すがらにあるそんなに並ばなくてもよいアトラクションで遊んでいく。

実に効率の良い遊び方であるが、ブッチョはまさかすべての屋台

を制覇するとは思ってもしなかったのである。

で、最後の屋台での食事を終えた時にはすでに夜を迎えていた。

「あと一時間でパレードが始まりますよ」とカツ子がポップコーンを片手に言う。

「じゃあ調べておいた場所へ行こう！」とライ子はホットドッグを片手に言う。

「………（笑）」

「パレード超楽しみ！……とってる」と丸美は右手にポテト、左手にチュロスを持っているので、ライ子が通訳する。

ブッチョはホットドッグの最後の一口を口の中に放り込みながら、そんな具合に目的地に向かって歩く三人の後ろをついていく。

目的地に到着すると、なるほど事前に調べていただけあって、前列の方ではないものの、子供の身長でも充分にパレードを見ることが出来る場所である。

しばらくすると、場内のスピーカーから音楽が流れ出し、きらびやかな電装の施されたさまざまな山車の上では、陽気な音楽と共にネズミやアヒルの着ぐるみに身を包んだ人が激しく踊っている。

カツ子やライ子は、嬉々としてキャラクターの名前を叫びながらリズムをとっている。

丸美は音楽は聞こえないのだろうが、山車の上で踊る着ぐるみと同じように楽しそうに踊っている。

そんな光景が、山車の電装に照らされて、ブッチョにはこの空間が夢なのか現実なのか判別がつかないような錯覚におちいる。

いままでブッチョが夢で何度も見てきたこの空間は本当に夢なのかもしれない。

ブッチョの横ではしゃいでいる三人は、出会いこそ奇妙だったものの、ブッチョが今まで現実と思っていた最低な場所から救い出してくれた恩人のように思う。

だからブッチョは感謝の意味も込めて、この夢のような場所に三人を連れてきたかったのである。

03

パレードも終わり、そろそろホテルに向かわなくてはいけない時間になっていた。

ちょうどライ子は遊び疲れたのか、先ほどから欠伸を連発させている。

「大丈夫か？ 寝たら担いでいってやるぞ」とブッチョが言う。「ん？ 大丈夫」とライ子は頭をふらふらさせながら答える。

丸美はすでにブッチョの腕の中で寝息をたてている。

ホテルは、電車ですぐの海浜幕張駅周辺で予約してあるので、ライ子を担いでいってもたいしたことはない。

結局電車に乗る頃にはライ子も力尽きたので、丸美をカッ子に預け、ブッチョが背負って行くことになる。

しかしなぜかホテルのロビーに到着すると二人とも目を覚ますのであった。

で、チェックインを済ます時にブッチョが気づく。

「すまんカッ子、部屋を一つしか予約しなかった」と言う。

ライ丸姉妹がいるとはいえ、さすがにつきあってもいない若い独身男女が一つの部屋で泊まるのはマズいと思ったのであろう。

するとカッ子も「ええっ？ うーん」と躊躇している。

それを見てライ丸姉妹は「は？ 何言ってるの？ 二人で一つの布団で寝てたくせに」「（ブッチョの腕枕で寝てたのに？）」「と犯人の二人が言う。

「ぶっ！ なにを言ってるんだね君たちは！」

「あわわわ、な、なにもやましいことはしてませんよ？」

と慌てふためく二人。

よくよく考えてみると、別に一つのベッドで寝るわけではないので、そのままチェックインすることになった。

部屋に入り一息ついた後、一行は風呂に入りに行くことにした。このホテルのは大浴場があり、のんびりと風呂を楽しむのである。

ふとブッチョは、ライ子はその着ぐるみそのまま風呂に入ってるのか？という疑問が頭をよぎる。後で聞いてみようと考えながら、風呂の中でまどろんでいくのであった。

少々長湯をしてしまったブッチョが部屋に戻ると、すでにライ丸姉妹はそろって寝息をたてていた。

「うおっ！ もう寝たんかい！」と驚くと。

「二人とも今日は最後まではしゃぎまりましたからねえ」「とカツ子は、風呂上がりで肌を上気させたまま言う。

そんな普段ではあまり見慣れないカツ子の雰囲気、ドキリとしたかどうかはブッチョの無表情ではうかがい知れない。

「俺たちも疲れたな、明日もあるし早く寝るか」

「「そうですねえ、私もちよつとはしゃぎすぎました」「」

こんな感じでネズミーランド初日の夜は更けていくのであった。

窓の外には街の街灯の灯りがまばらにかがやいていた。

ブツチヨは風呂の後すぐに床についたのだが、なぜか寝付けず窓際の椅子に腰掛け外を眺めていた。

「眠れないんですか？」とカツ子がベッドの中から声をかける。

「ん？ ああ、なんか寝付けなくてな。起こしちまったか？」とブツチヨは外を見たまま答える。

「いえ、私も寝付けなくて」とカツ子は上半身を起こし、ライ丸姉妹が剥いだ布団を掛けなおしてやる。

「なにか飲みますか？」

「ああ、もらおうかな、アルコール以外で」

「あはは、お酒はもうこりこりです」と言いながら、備え付けの冷蔵庫から買っておいた飲み物を取り出し、もう一つの椅子に座りながらブツチヨに渡す。

「サンキュー、今日は疲れたろ」

「ええ、でもあそこまで楽しい所とは思いませんでした、私ネズミーランド初めてなんで」

「ああ、俺も初めてだし、ライ丸姉妹も初めてみたいだな」と言いながら受け取ったペットボトルのお茶に口をつける。

「いつもライ丸たちの両親に連絡してもらって悪いな」

「え？ 別にたいしたことじゃないですよ？」

「いや、俺はこんだから人に誤解される事が多くてさ」

「そんなことないですよ？ ほら、テンホーさんとかすぐに仲良くなつたじゃないですか」

「あはは、あの人は特別だ、レイさんもな」

「……………」

夜中ということもあるが、カツ子と二人きりで話すことなどないので自然と沈黙が訪れる。その沈黙を破ったのはブッチョの言葉だった。

「ありがとな」

「「え？ 突然何ですか？」」いきなりの感謝の言葉に動揺する。「いや、お前があのととき友達になってくれて言ってくれたから、今こんなに楽しく過ごしていられるなって思ってる」

「「えへへ、私も楽しいです」」

「俺は子供の頃親に捨てられて、それ以来表情が変わらなくなったんだ」

「「……」」ブッチョの突然の告白に言葉をなくす。

「知つての通り、俺は何をやってもダメだし、人との接し方なんて何一つ分かつちゃいない」

「でも、お前やライ丸たちと出会ってから、なにか他人との関わり方が分かつてきたような気がするんだ」

カツ子は何も言わずブッチョの話を聞いている。

「ライ丸たちにも感謝してる、あいつらがいなかったらホスピタルクラウンに興味なんか持ってたと思う」

まだクラウンの姿はカツ子やライ丸姉妹には見せたことはないのだが。

「お前たちのおかげで俺に夢ができたんだ、ほんとありがとう」

「「いや、別になににもしてませんし、ブッチョさんにもお世話になってますし、でも、夢ってなんですか？」」

「それは俺の力でお前たちを幸せにさせてやるって夢だ」

「「えっ？ それって……」」と思わずカツ子はブッチョの目を見る。

「……え？ あれ？　なんか俺言うことまちがった？」とそんなカッ子に戸惑う。

「えっと、だから、俺がもつとクラウンとしての腕を上げて、今日のようなお前たちの笑顔を俺の力で引き出してやるって……あれ？　カッ子寝るの？」

カッ子はふてくされたように何も言わずにベッドに入り込む。

「え、えっと、じゃ、俺も寝るかな？」とブツチョもすごすごとベッドに入ろうとする。

「あ、そういえばライ子って風呂入るときも着ぐるみ着てるのか？」

「そんなわけないじゃないですか、なにおかしなこと言ってるんですか？　もう寝ますよ！」となにやら怒っていらっしやるようだ。

「じゃあライ子の顔知らないの俺だけ？　ずるい！」と空気の読めない発言をすると。

「ライ丸ちゃんたちが起きるからあんまり騒がないでください」と怒られる。

「……ごめんなさい、もう寝ます」と訳も分からず敗北したようだ。その後ブツチョは、今までに見たことのないカッ子のマジギレにビクビクして、なかなか寝付けなかったという。

「おつ、きつ、ろー」と叫びながらベッドの反動を利用してジャンプした後、空中で大の字のように両手両足を広げるライ子。

「うぎゃあ！」とブツチョの悲鳴がホテルの部屋に響く。どうやらライ子は無事ブツチョにフライングボディーアタックを決める事ができたようだ。めでたしめでたし。

「って、めでたしじゃねえ！　って、ぐええっ！」とブツチョの上に覆い被さっているライ子の上に、丸美のボディーアタックが追加される。

そんな感じに二日目の朝は爽やかに始まったのである。

「って、まだ6時半じゃねえか！ もうちょい寝させて！」と言いながらブッチョは再度寝ようと試みるのだが、ライ丸姉妹がおなじ部屋ではしゃいでいて寝れるはずもなくそのまま起きることになる。

「あれ？ カツ子は？」とブッチョは一人足りない事に気づく。

「（カツ子姉ちゃんトイレだよ）」とのこと。

「でもちよつと長いね、おっきい方かな？」とライ子が言っている。

ガチャツ！ と部屋の扉が開いて、「ちよつとライ子ちゃんそういうこと言わないの！」とあわててカツ子が入ってくる。部屋の外まで聞こえていたようだ。

「ん、おはようカツ子」とブッチョが言う。

「おはようございますブッチョさん」と普通に返してくる。

昨晚の一件があつたので、ブッチョは内心ビクビクしていたのだが、少し安心する。

その後一同はホテルの朝食を済ませ、身仕度を整えながら、テレビから流れる見たことのない番組やCMに興味をそそられるのであつた。

外に出ると、今日も昨日に続いて快晴である。

ブッチョは旅行などの行事に出かけた事などないので、自分が晴れ男なのか雨男なのかなどという話題とは無縁なのだが、そんなことはどうでも良いと言う程の快晴である。

「ねつずみっしーい、ねつずみっしーい」とライ子はアホのように同じ言葉を連呼して歩いている。

丸美はそのアホと手を繋ぎ、一人で楽しそうにスキップしている。よく転ばないものである。

「ネズミーシーも楽しみですねえ、知ってました？ ネズミーランドではお酒売ってないですけど、ネズミーシーでは売ってるんですよ？」「と出さなくてもいいお酒の話題を出す。

「カツ子姉ちゃん、もうお酒飲んじゃダメだよ！連れて帰るの大変だったんだから！」とライ子。

「（布団に入れるのも大変だったんだから！）」と丸美も追い打ちをかける。

「「あわわわ、別にお酒飲みたい訳じゃないですっ」「と慌てるカツ子。」

そんないつもと変わらぬ一行はネズミーシーに入場したのである。

ネズミーシーは海をテーマにしたテーマパークで、と、どこかで聞いたような物をテーマにしている。

テーマパークを海岸沿いに作る場合が多いので、海はテーマにしやすいのだろう。

とはいえ、やはり経営母体の規模が違うせいか、アトラクションをはじめ隅々までのクオリティが高いのである。

ライ丸姉妹曰く、これはこれ、あれはあれでどちらが良いとは言いがたいようである。

こちらのテーマパークは、メインキャラこそネズミーランドと同様”マッキー”ストライクフィールド”であるが、他は海にちなんだキャラクターが多いのだ。

そこで異彩を放つのが、この海のテーマパークにあつて砂漠の物語の主人公“アレジン”この往年の名機のような名前のキャラクターは、魔法の絨毯と魔法のランプという靈感商法のアイテムのような物を売っている青年である。

実はこのアイテムは本当に魔法のアイテムで、それを大量に販売して世界を混沌に陥れる、という物語の主人公なのだ。

「また憂鬱な設定のキャラクターがいたもんだな」とブツチョが漏らす。

「魔法のランプを擦ると、中から青色の怪物がわいてくるんだよ」とライ子が余分な説明を付け加える。

「（私アレジン嫌い）」と全否定の丸美。

「ヒロインが一番のくせ者でしたからねえ」と、どう聞いても良いところが聞こえてこない。

そんな”アレジン”のアトラクションは、魔法の絨毯に乗って、光線銃でランプの怪物を倒すというものだった。なにか向こうにも同じようなアトラクションがあった気がするが、攻撃性の強いアトラクションの多いテーマパークである。

「アレジンの最期はスツキリしたね！」とアトラクションから出てきたライ子は上機嫌だ。

「（ランプの怪物多すぎ）」と丸美は疲れ気味。

「「やっぱりヒロインがラスボスでしたねえ」」とカツ子。

「なんか人間不信になりそうなストーリーだったな」とブッチョは精神的に疲れたようだ。

その後、なにやらカラフルな俗に言うコーヒーカップに乗ったり、きらびやかな回転木馬に乗ったりとどこにでもありそうな乗り物に乗っていく。

そうしてパーク内を歩いていてブッチョは気づく。

「なんかネズミーランドに比べて人が少なくないか？ 並ぶのが楽でいいけど」

「うん、こっちは出てくるキャラクターが微妙だからね、ちょっと大人向けかな？」と周りを見ながらライ子は言う。

確かにこちらのパークは、ネズミーランドよりも地味な落ち着いた色合いの建物が多いようだ。

「「それには激しい乗り物は少ないですよ」」

ストーリーは激しいけどな。とブッチョは心の中でつぶやく。

「（あつ！ 次はあの船に乗りたい！）」と丸美は、前に見える川を進む遊覧船だか海賊船だか判別に苦しむような船を指さす。

その船は“パイレーツオブカナディアン”という映画をモチーフにした海賊船を模した遊覧船で、なんともゆったりした乗り物である。

「ああ、なんか落ち着くなこれ」とブッチョは快適な船旅に満足気

だ。

「「そうですねえ、ちょっと寒いですけど気持ちいいです」「
と大人ふたりでまどろんでいる横で。」

「わあ、人が縛られてぶらさがってるよ!」

「(いま大砲が飛んでつたよ!)」
と子供にはいい刺激の演出もあるようだ。

07

昨日の疲れが残る一行にとってネズミーシーのゆったり具合はち
ようど良いようで、ライ丸姉妹もぐずることなく順調にアトラクシ
ョンを満喫していく。

食事も今日は昼も夜もレストランで済ます。

「ああ、もう外は真っ暗だな」とレストランから出たブッチョが空
を見上げながら言う。

「これから中央の池で水上ショーが始まるよ!」とライ子はわくわ
くしながら言う。

「(噴水とかすごいんだよ!)」と丸美。

「このショーは場所を取らなくても見られるんでゆっくり行きま
しょう」「

と事前に調べてきた三人は、この旅行の最後とも言えるイベント
に心躍らせているようだ。

中央の大きな池に到着すると、すでに人だかりができていた。し
かしどこからでも見られるように工夫がされており、難なく位置を
確保する。

しばらくすると照明が暗くなり、音楽が流れ出す。

それと同時にカツ子、ライ丸姉妹を含む観客から「わーっ!」と
いう歓声がわき起こる。

ドーン!という爆発と共にステージにマッキーが現れると、さら

に大きな歓声上がる。

ノリの良い音楽に乗せて様々なキャラクターの着ぐるみが登場し、めまぐるしく電装の色彩が変化していく。

一曲目が終わり、会場が一瞬静寂に包まれたと思つた瞬間、バーン！という二曲目の始まりと同時にライトアップされた大きな水柱が上がる。

「わあっ！」とライ子はびっくりして後ろにのけぞり、バランスを崩した所をブツチョが背中をささえてやる。ライ子は「ありがとうブツチョ」と言つたのだが、ブツチョには音楽で聞こえなかつたようだ。

丸美はというと、音は聞こえないものの爆発などの振動は伝わらしく、そのたびにビクン！と体を震わせ驚いている。

カツ子はそんな丸美が迷子にならないように、肩をしっかりと掴んでいて、丸美もそんなカツ子の手を掴んでいる。

周りの家族連れを見てみても、みな同様に子供を見守りながら楽しんでるようである。

08

水上ショーも終わり、それぞれに他のアトラクションに向かって行く人々。ブツチョ達一行もその流れに沿って池を後にする。

「さあ、あと少しだけど、まだなにか見るか？」とブツチョが言う。

「「そうですねえ、そろそろお土産買いに行きましょつか？」「と提案するカツ子。

「えっと、私たちもいいのかな？」と珍しく控えめな事を言うライ子。

「ある程度ならいいぞ、お土産買うのも遊びの内だろ？」

「（ほんと？ やったあ！ おみやげだあ！）」と丸美はライ子の手をとりピョンピョン跳ね出す。ライ子もうれしそうである。

数軒まわったが、売っているのはお菓子ばかりでガツカリしている。
と。

「あつ！ あそこ！ あれもお土産さんみたい！」

とライ子が見つけたのは、大きな鯨が口を開けているようなオブジェなのだが、どうやら口の中が店舗になっているようである。

「（いろんなものが売ってるよ！）」

この店はグッズ関係が売っているようである。

カツ子と丸美はなにやら魚のキャラクターを物色しているようである。ライ子は一人で海賊グッズのコーナーを見ているので、ブッチョはライ子のそばで見ている。

ライ子はしばらく物色した後「ブッチョ、これどうかな？」と、なにやらジャラジャラと装飾品のぶら下がったバンダナを取り出す。どうやら”パイレーツオブカナディアン”の主人公の装飾品らしい。「いいんじゃないか？ お前がほしいヤツを買えばいいよ」とブッチョが言う。

「あつ、“海賊チャック”スワロー”のバンダナですね、格好良いですよねえ」とカツ子が後押しする。

「（みんなで買って、着けて帰る？）」と丸美が提案する。

「は？ そんな恥ずかしいまねできるか！」

「ブッチョ、ノリ悪い」（それ以上恥ずかしいことなんかあるのか？）「きつと似合いますよ」「
といつものように騒いでいると。

「あれ？ お前“久未弥”じゃね？」

と一行の後ろから声が聞こえる。

なにやらこちらの方に向けて声が聞こえたので、カツ子とライ子は振り返る。

そこには、二十歳前後程のチャラチャラした男がこちらを向いて

立っていた。

「……秀夫さん」

と発したのはブッチョであった。

「やっぱ久未弥じゃねえか、お前みたいな奴がなんでこんな所にいんだ？」と秀夫と呼ばれた男は、高圧的な態度で話す。

「ヒデ、だれこの人、ともだち？」と秀夫の後ろから派手な女が現れる。

「バーカ、こんなのと友達な訳ねえだろ、こいつ親に捨てられたから、俺の親父が面倒見てやってたんだよ」と説明する。

「こいつ昔から何もできねえし、顔があのまま変わんねえんだぜ、超ウケるべ？」と秀夫が言うと「まじで超うける」と二人で笑い出す。

そんな異常に丸美も気づき、ブッチョの後ろに隠れる。

「あ？ お前の子供？ お前結婚したんか？」と、そんな丸美を見ながら秀夫は言う。

「着ぐるみ着てる子がいる、ジャージのお姉さんもおなかまく超うける」と派手な女はアホの子のように喋る。

「いえ、こいつらは友達です」とブッチョは敬語で話す。

「まあどうでもいいけどよ、お前が帰ってくると邪魔だからよ、帰ってくるなんて言いだすなよ」

「そんなこと言いません、約束ですから」とブッチョが言ったところで。

「ねえブッチョ、この人感じ悪い、お土産いらないからここ出よ？」とライ子は、ブッチョの服を引っ張りながら小声で話しかける。

三人に押されるように店を出るブッチョの背後から「お友達になぐさめてもらえよ」と声が聞こえる。

結局嫌な気分になった一行は、ブッチョには何も話しかけられず、どうでもいいお土産を適当に買い帰路につくのであった。

帰りのバスの中、久未弥と呼ばれた男は、どこからともなく聞こえてくる声を聞いていた。

「お前みたいな奴に夢を見る権利なんかないんだよ」と。

第三章了

悪夢である。

久未弥は油断していたのだ、カツ子とライ丸姉妹と出会ってからの日々が、あまりにも自分が求めていたものに近すぎていたことにそれが現実ではないと知りながら。

みんなそれぞれ何かを隠し、それを詮索せずに表面だけで成り立つ関係。そこを逃げ場に行っているのだ。

「俺はっ……やっとなあそこから逃げ出したのに……あの頃に戻るのは嫌だ！ それとも逃げることはできないのか？……でも、あと少しだけ夢を見させてくれ」

そうやってまた久未弥は虚構の中に身を委ねていくのであった。

01

「気持ち悪い……」

女はカーテンを開け、朝の光を浴びながらつぶやく。

この、数少ない友人から”カツ子”と呼ばれている女は、朝起きる度に胃の中身をあげている。

しかしこれでも良くなった方である、その友人達と出会う前に比べれば……。

「早く来ないかな、みんな」

ライ丸姉妹が来るまで、あと9時間。

ブッチョが来るまで、あと10時間。

女は今までどんな目にあおうとも、そんな事を思った事は無いのだが、最近毎朝口に出す台詞がある。それをまた今日も繰り返すのである。

「さみしいよお、助けてよお、みんなあ」

02

カツ子の日常は起きる時間こそ一般人と同じだが、日中は時間だけが無意味に過ぎていく。

今の友人達と出会う前は、昼夜逆転どころではなく、時間という概念が無いに等しい生活を送っていた。

カーテンを閉め切った部屋で、24時間パソコンのオンラインRPG”ドラゴンスクリーム”をプレイし続け、時間を知るのはもう一台のパソコンに表示されている株の取引の開始と終了の時刻だけであった。

現在も株の取引とドラゴンスクリームは続けている。
株は生活費の為。

ドラゴンスクリームは、こちらの疑似世界にも共に冒険した”仲間”がいる為だ。

現実ではない世界の、現実と虚像の境界が曖昧な”仲間”。その中には現実としてちよっかいを出してくる者もいるのだが。

カツ子はそんな偽物の”仲間”でも捨てきれずにいた。

もともとカツ子は、ドラゴンスクリームで廃人になってしまったのではなく、廃人になるためにドラゴンスクリームを始めたのだ。

なので止めるのに未練は無いのだが、止めてもやることのないのも事実である。

そして今日も無意味な冒険に出かけて行くのであった。

そして夕方。

「はあい、いらっしやいライ丸ちゃん達」

と待ちわびた客を迎えるカツ子。

その友人はライオンの着ぐるみを着た子と耳の聞こえない子供の姉妹である。

「おはよーカツ子姉ちゃん！」とライ子と呼ばれている着ぐるみに身を包んだ少女は、元気よくマンションの中に入ってくる。

「（お姉ちゃん、もう4時なんだから”こんにちわ”でしょ）」とライ子の妹の丸美が手話で喋りながら続いて入ってくる。

「二人とも宿題は終わりました？」

「ううん、帰ってからすぐ来たからまだ」

「（私はお姉ちゃんが帰って来る前にやっちゃった）」

「ブッチョが来る前にやっちゃうね」

とライ子は着ぐるみの中から宿題と筆記用具を取り出す。いったい着ぐるみの中はどうなっているのだろう。

ライ子が宿題をやっている間、丸美はテレビを見て、カツ子は夕食の準備に取りかかる。

とはいえカツ子は昼過ぎから夕食を作り始めており、後は盛りつけるだけなのだ。

ライ子の宿題も終わり、夕食の準備も整ったところで。

ピンポン！

とカツ子のもう一人の待ち人の登場である。

「「はあい、ブッチョさんお仕事お疲れさまです」」

とカツ子はいつものように友人を迎える。

「ああ、これ買ってきたんだけど、飯食ったらみんなで食おうぜ」

とブッチョというあだ名で呼ばれた久未弥は、コンビニの袋を持ち上げて言う。

「なになに？ なに買ってきたの？」

と言いながら袋を覗くライ丸姉妹。

「（わあ、ケーキだ！ やったー！）」

と丸美はピョンピョン跳ねながら喜びだす。

「む、それって私の料理の口直しってことですか？」

「ぶっ！ アホか、違っつて！ただの気まぐれで買って来たんだって！」

「「あつ、アホって言ったあ！ アホって言った人がアホなんです
う！」」

「ブッチョもカツ子姉ちゃんもケンカはダメだよ！」

「（痴話喧嘩は犬も食わないって言うよ！）」

「間違ってるし！ 痴話喧嘩じゃねえし！」

などと、いつものように騒がしい日常。

一日数時間だけの心の拠り所。

カツ子は最近、自分が我儘になってきたのを実感している。

こんな事を思うのだ。

「みんな一緒にここに住めばいいのに」

第1話了

第2話「ドラゴンスクリーム」01と02

第二話「ドラゴンスクリーム」

01

ここはライオネル山脈の中腹にある広場である。

この山脈は、中型のワイバーンの巣が数多くあることで有名な場所なのだ。

「それじゃ私とモゲタさんが落とすんで、リーチさんはワイバーンの胸にある赤いところを攻撃してトドメをさしてください」と頭の上に”99”という数字と”ブロッサム”という文字の書かれた、鎧を身につけた体格の良い女性が言う。

「俺は出番なし？ 素材でも掘つところかな？」とこちらも”99”と”ロースト”と書かれた白いローブを身にまとった男性が言う。「いやいや、ローストさんはリーチさんの回復役でしょ」と、これも”99”と”モゲタ”と書かれた大きな銃を持った男が言う。

「攻撃つて、呪文の方がいいのかな？」とこの黒いローブをまとっている男性には、”リーチ”という文字の前の数字が”05”と書かれている。

そう、これは”ドラゴンスクリーム”というMMORPGと呼ばれるオンラインゲームの中の話である。

それぞれの頭の上の文字はレベルと名前で、このゲームのキャラクターレベルは99でカンストなので、今回はレベル05のリーチ氏のレベル上げが目的なのだ。

実を言うと、今回の冒険はブロッサムにとってあまり乗り気ではなかった。

このリーチという初心者は、初心者特有のマナー知らずとは別に、

どうも女性にちょっかいを出すのが目的の気があるらしい。

しかも金を持っていそうな女性に寄っていく傾向があるらしく、他の女性プレイヤーの紹介で知り合ったのだが、ブロッサムに会って以来しつこく冒険に誘い続けてくるのである。

というのも、紹介した女性プレイヤーも結構な金額をこのゲームのキャラクターにつき込んでいるのだが、ブロッサムが身に着けている装備や所持品は、最低でも150万円は掛けないと手に入らない物なのである。

実際ブロッサムに紹介した後音沙汰無し、という話はすでに聞き及んでいた。

ブロッサムもネット社会の初心者ではないので、こんなわかりやすい人間に引っかかる事はないのだが。

などと思い返しているうちに、上空にはワイバーン2体が飛び回っていた。

「ブロッサム、右のヤツから行くよ？ カウントダウン！」とモゲタは銃を構えながら言う。

「オーケー、3・2・1・ゼロ！」

というブロッサムの掛け声と同時にモゲタの銃が火を噴く。それと同時にブロッサムは剣を抜きながら、ターゲットのワイバーンに向かってジャンプする。

ドン！ という音と共にモゲタの攻撃が当たったワイバーンは落下し始める。しかし落下途中で体制を立て直し、ブロッサムのジャンプは今一歩届かない。

しかしブロッサムは空中でモーションを取ったと思った次の瞬間もう一度飛び上がり、ワイバーンに対して連撃を繰り返し地面に叩きつける。

「リーチさん、今！」

というモゲタの声にリーチのキャラクターが呪文を放つ。

「えい！」

リーチのキャラクターから出た火の球が4発ワイバーンの胸の赤い部分にヒットすると、断末魔と共にワイバーンは消滅する。

「あと1体、続けていきます」というブロッサムさんの掛け声と共に同じ事を繰り返し、もう一体のワイバーンも難なく倒す。

「あれ？ 誰か体力減った人いる？」と戦闘が終わったのを確認したローストがとりあえず声を掛ける。

「いや、僕もダメージ受けてないよ。それよりもブロッサムちゃんに心を癒して欲しいな」とリーチが軽口をたたく。事あるごとにこの男はこのような台詞を吐くのである。

「……」無視するブロッサム。

「……この後どうします？ 俺はもうそろそろ落ちなきゃならないんで町に戻りますけど」と微妙な空気を察したローストが言う。

「俺も落ちようかな？ じゃ戻りますか」とモゲタも賛同する。

「そっか、じゃあね、僕はブロッサムちゃんと、もう少しここにいろよ」とリーチが言う。

「初心者と二人じゃ無理、戻りましょう」とブロッサムはそっけない態度で帰路に着く。

帰りの道中はリーチが空気の読めない発言を繰り返し、嫌な感じでパーティーを解散して今日の冒険を終えたのである。

02

その後町で今日の冒険の記録をセーブし、ブロッサムさんがログアウトしようとする、メッセージが送られてくる。

送信者名を見るとリーチと書かれている。

ブロッサムはうんざり気味にため息をつきながらメッセージを確認する。

【今日はありがとう、今度ブロッサムちゃんの顔が見たいな。携帯のアドレスと僕の写真送っとくから返信してね】

というメッセージと添付ファイルが添えてあった。

「じい……」

とつぶやきながらとりあえず添付ファイルを開くと、ブロッサムと同年代らしい男性がポーズをとって写っている写真が表示され、その写真にメールアドレスが書かれていた。

「……馬鹿じゃないの？」

と吐き出すと。

「いやーないわー、確かにイケメンだけどやめといた方がいいよ、カツ子姉ちゃん」と後ろから声が聞こえる。

「ぎゃあ！ らららライ子ちゃん、なななななで居るの？」「と派手に驚くカツ子。

「（こんなナルシストのクズやめて、ブッチョで我慢するときなよ）」

「ままま丸美ちゃん！ なななななでここでブッチョさんが出てくるんですかあ！」「慌てすぎである。

「私たち今日学校半日だったから、早く来たら入れてくれたじゃん」
昼過ぎに来たライ丸姉妹が昼寝を始めてしまったので、カツ子はドラゴンスクリームをやりだしたのだ。

「そそそそういえばそうでしたね」「と素を見られたカツ子は動揺しっぱなしである。

「それにしてもあからさまだねえ、このリーチって人」

「（歪んだネット社会の申し子って感じだね）」

とライ丸姉妹のような子供から見ても怪しい事この上ないようである。

「……いいいい今は見なかったことにして！」「と懇願するカツ子。

「今のはって、リーチの事？」「（それとも黒いカツ子姉ちゃんの事？）」「

「ぎゃふん！ 今日の夕飯好きなもの頼んでいいから、ブッチョさんにはいわないでえ！」「

「やったー！」「（わかったー！）」

と、カッ子の買収工作はとりあえず成功したようである。

い声が聞こえる。先ほどライ丸姉妹の口封じのリクエストで注文しておいたのだ。

「なっ!」

「ぶはははは、ブッチョがこんな時間に来るわけないじゃん!」「(カツ子姉ちゃんあわてすぎ!)」と大爆笑のライ丸姉妹。

「うっうっ……」「撃沈である。」

で、テーブルには大きなピザが鎮座し、その周りにはドリンク、サラダ、フライドポテトなどが設置されており、さらにそれをライ丸姉妹とカツ子が囲んでいる。

「で、ブッチョにはいつ告白するの?」

「ぎゃあ! また振り出しですか?」

「(女子会といえば恋バナでしょ?)」「ターゲットはカツ子一人ではあるが。」

「いつから女子会に? って、女子会初めてですっ」「」

「女子会たのしいよあ?で、どうなの?」

「(てかカツ子姉ちゃんブッチョの事好きなんでしょ?)」

「うっうっ……はい……好きです」「屈したようである。」

それを聞いたライ丸姉妹はワーキヤー言いながらはしゃいでいる。カツ子は相手が子供とはいえ、このような恋愛の話で友人とはしやぎあつた事がないので、なにやら今の自分が自分でないような浮遊感を感じる。

これまで世の中を斜シヤに見てきたカツ子にとって、この手の恋愛話は侮蔑ぶくつの対象であつた。しかしその対象になってみると、なんてことはない楽しいのである。

「よし、カツ子姉ちゃん、ブッチョに告白しよう!」

「無理です!」即答である。

「(えー、なんで?)」と不満を述べると。

「もし告白してダメだったら、もうここには来てもらえなくなっちゃいますよ?」とへタレ発言をすると。

「え? ブツチヨが断るわけないじゃん!」と断言する。

「え? え? なんで? ほんと?」とライ子の自信たっぷり
の発言に期待してしまっカッ子。

「(ブツチヨごときがカッ子姉ちゃんを振るなんて、何様って感じ
でしょ?)」

「えー? そうですかねえ? うーん」
と考え込むカッ子。その
実、頭の中は混沌として考えなどまとまるはずもないのだが。

「でも可能性は低いけど、最近ブツチヨも人間関係広がってきてる
から、他の女に取られちゃうって事もあるかもよ?」
とライ子は不安を煽る。

「(そうそう、病院でシングルマザーとかに泣きつかれたらブツチ
ヨ断れなさそう)」
と丸美が追い打ちを掛ける。

「うっ、丸美ちゃん、リアルな想像やめてください」
カッ子は冷や汗が出る。

「でもブツチヨに他の彼女ができて、ここには来なくなるよね?」

「(そうだったらヤダなー、カッ子姉ちゃん絶対ブツチヨをものに
してね?)」

「うっ、なんだか変なプレッシャーをかけられてますねえ」
と言ったところで。

ピンポン! と再びインターホンが鳴る。

「ブツチヨだ!」
とライ子が叫ぶと。

「そう何度も騙されません、今度はお寿司屋さんですよ」
カッ子は夕飯を作る気力が無くなったので、寿司も注文していたのであ
る。

「はい、どちらさまでですか?」
とインターホンを取ると。

『おう俺だ、カッ子開けてくれ』
とインターホンに出たのはブツチヨであった。

「ええええええつ！ ぶつぶつぶブツチヨさん、ななななな
なんで、こここここんな時間にいいっ?????」 完全パニッ
クである。

『ああ、今日は交代のバイトが早く来たからな。って、なんかヤな
予感がするな、なにか企んでるのか?』と珍しくブツチヨは警戒す
る。まあカツ子の様子を見れば無理はないのだが。

「えええつと、なんでもないですよ?どとどとどぞ」「なんでも
ない人間の話し方ではない。

『……まあいいか、じゃ上がっていくぞ』

04

「なんだ? なんかのパーティーか?」

リビングに入り最初に目に入ったテーブルの食料を見てブツチヨ
が疑問を呈す。

「(カツ子姉ちゃんと女子会ごっこやってたの)」と丸美が言うと。

「ごっこ? あれはごっこのレベルじゃなかったですよ?」「
とカツ子は泣きながら言う。

「ん? なんかあったのか?」

「ああ、カツ子姉ちゃんがねえ、ブツチぶぐつ……むぐぐぐ……」

となにか言おうとするライ子の口を、カツ子は着ぐるみの首の隙
間に手を突っ込んでふさぐ。

「やだなあライ子ちゃん、女子会の内容はトッピークレット
ですよ?」「となんだか鬼気迫る勢いである。

しばらくすると寿司も到着し、テーブルの上はさらにパーティー
の様相を呈しているのであった。

「それじゃあ、かんぱーい!」というライ子のかげ声と共に、それ
ぞれお茶の入ったグラスを掲げる。

「え？ マジでなんの乾杯なの？」

というブッチョの疑問をよそに、丸美がブッチョに質問する。

「（ブッチョって誰か好きな人っているの？）」

「「ぶーっ！」「とお茶を吹き出すカツ子。」

「わっ、吹き出すなよお前、って、好きな人か？」

「たとえばカツ子姉ちゃんとかー」とライ子が誘導すると。

「ん？ 本人の前で言うのもなんだが、好きだぞ」などという。

「「えっ？」とカツ子の顔が明るくなる。

「ライ子も丸美も好きだぞ。って何言わすんだよ」と照れているようにブッチョが言う。その横でがっかりするカツ子。

「いや、そういうのじゃなくて……まあいいや、じゃあ好きな女のタイプは？」と質問を変えるライ子。

「（お金持ちの人の方がいいよね？）」

「んー？ いや、俺の稼ぎが少ないから、金持ちだと気がひけるな」

「ブッチョってあんま化粧とか濃くない人が好みじゃない？」

「でも必要最低限の化粧はマナーだろ？」

「（ブッチョ料理できるから、料理下手な人でもいいよね？）」

「仕事から帰ってきて、おいしい料理で出迎えてくれるっていいよな」

「ブッチョはファッションとかこだわらないでしょ？」

「自分はいいいけど、彼女はお洒落でいてほしいだろ？」

「（ブッチョ面倒見いいから、迷子になっちゃうような子供っぽい人いいんじゃない？）」

「ないない、迷子ってガチで子供じゃねえか」

「ブッチョって……えっと……あと何かあったっけ？」

とライ子が言ったところで。

「「わーっ！ 悪かったですね！ どうせ私は化粧つ気なくて、いつもジャージばっか着て、料理下手で、すぐ迷子になる引きこもりの暗い女ですよ！ ブッチョさんのバカあつっつ！」「とつとつ

キレたようである。

「ってなんで俺が怒られなきゃいけないんだよっ!」

「ブツチヨさんだって、いつも同じような格好ばっかして、料理だって見た目最低だし、すぐに怒るじゃないですか!」

「あ? 誰もお前の事なんて言ってるねえだろ! なにイライラしてんだよっ!」

「私だって……私にだってデートに誘ってくれる人ぐらいいるんですよっ!」

「は? だから何の話だっただよ! デート? 引きこもりのくせにそりやお盛んなことぞ!」

「きいいいいいいっ! よーくわかりました! よーくわかりましたよっ!」

と言いながらカツ子はパソコンの部屋へ駆け出す。ライ丸姉妹は、二人のガチ喧嘩にビクビクしている。

しばらくすると、カシャッ! と奥の部屋から音が聞こえてくる。「!!!」一瞬で状況を把握するライ子。

「わーっ! ちょっとまった! カツ子姉ちゃん早まっちゃダメっ!」とライ子はカツ子の元へ駆け出す。

「(ちよっと、それはまずいっ!)」と丸美も続く。何事か、とブツチヨもとりあえず後に続く。

パソコンの部屋の奥には、スマートフォンを手にしたカツ子が肩を怒らせ立っている。

カツ子は部屋の入り口に集まった三人に向かってこう告げる。

「わたしは、あさって男の人とデートしてきます!」

第2話了

第3話「チエイサー×チエイサー」01と02

第三話「チエイサー×チエイサー」

01

ドンドンドンドンドンドンドン！

朝早くからドアを叩く音が鳴り響いている。

「なんだあ？ 借金取りなんか来るいわれはねえぞ？」

と、睡眠を邪魔された久未^{くみ}弥は面倒くさそうに布団から出る。

実はこのものぐさそうな男は、借金はおるか家賃の滞納すらも無いという金に関してはキツチリとした性格の持ち主である。

ドンドンドンドンドンドンドン！

「朝っぱらからやかましい！ 誰じゃこらあ！」とドアを勢いよく開けると。

「ブツチョなにのんきに寝てんだよ！ 早く起きてー！」

「（バカブツチョ！ 早くいくよ！）」

とライ丸姉妹が突入してくる。

「うおっ！ なんなんだよお前ら朝っぱらから」

と言いながらブツチョは異変に気づく。

「あ？ ライ子、お前なんか感じ変わった？」

そう言われたライ子の着ぐるみは、いつもの茶色ではなく白と灰色の迷彩模様になっていた。

「そんなことどうだっていいから、早く支度してよ！」

「（10分以内に支度を済ませること！ 以上！）」

この調子では逃げられそうもないブツチョは、渋々着替えを始めるのであった。

支度を終えた一行はマグドへ直行し「今日は動くから、腹八分目

にしといて」とのライ子の指示で、朝食は朝のセットを一人につき3セットに抑える。

朝食を済ませた三人は、行き先も告げずに歩くライ子について進んでいく。

「おい、とりあえず何しようとしてるか教える」とブッチョは、薄々気づいていながら質問する。

「なにつて、カツ子姉ちゃんのデートを尾行するの!」「(そして邪魔するの!)」

やっぱりか、とブッチョは一昨日の出来事を思い出す。

あのカツ子とのケンカの後、ブッチョはカツ子のマンションへは行っていない。どうやらライ丸姉妹は行っていたようだが、ブッチョとしてはあのケンカの原因が分からなかったため、釈然とせず和解する気になれなかったのである。

「はあ、お前らなあ、こんな事して何になるんだよ。カツ子にとつてその男とうまくいくのが幸せなら邪魔なんかしてやるな」

「却下!ブッチョは甘い!カツ子姉ちゃんの柔肌が他の男の手に落ちてもいいの?」

「(カツ子姉ちゃんああみえておっぱいおつきかったよ)」

「ぶっ!お、お前らなに言っただ!」

「ブッチョ、よく聞いて?これはカツ子姉ちゃんのためなの。そう、これはすでに……」

「カツ子姉ちゃんのおっぱいと、私たちの将来のおっぱいのための聖戦なのだ!」と手近にあった台の上で叫ぶ灰色迷彩の着ぐるみ。

「つて、そんなこと大声で叫ぶな!俺がおかしいと思われるだろ!」

「(そーれ、おっぱいおっぱいおっぱい!」「おっぱいおっぱいおっぱい!」とライ丸姉妹は絶好調である。

午前10時 豊多市駅前

駅に隣接するデパート前の広場。

今日は土曜日ということもあって行きかう人の流れも少々多いようだ。

広場の端のベンチに人の目を避けるように、一人の白いワンピースの女がうつむきながら座っている。

女の名前は”みながわ皆川 さくら桜”。これから人生初のデートに挑もうとする女である。

この女には本名以外に2つの名前がある。

一つは、女戦士”プロツサム”

一つは、ヒッキーセレブ”カツ子”である。

今日はプロツサムでもカツ子でもなく、皆川 桜としてそこに座っていた。

しばらくすると、携帯電話が着信したらしくスマートフォンを耳にあてがう桜。

そのままベンチから立ち上がり辺りをキョロキョロと見回し、待ち人がやってきたらしく電話を切る。

桜に近づいてきたのは、長身のチャラチャラしたイケメン風の男であった。

「桜ちゃん、今日は来てくれてありがとう。僕うれしいよイケメン」「と言いながら近づいてくる男。

「あら、利りいち一さん、私もうれしいですわセレブ」「と桜は返す。「って、アテレコかよ！ 語尾がなんかおかしいし！」

と叫んだブツチョーら一行は、双眼鏡片手に建物の影からカツ子を監視中である。

こんな町中でこの変な一行は目立ちすぎて尾行には適さないと思うのだが、このライ丸の灰色の迷彩は都市型迷彩といって市街地では目立たないらしく、人の目につきにくいようである。

「で、あいつ利一っていいのか？」とブツチョーが聞くと。

「ん？ 違つよ、あんな奴の名前知らないし、興味ないから適当につけたの」

「（あいつがゲームの中で使ってる名前だよな）」
どうやら相手の男は、カツ子がやっているネットゲームの知り合いのようだ。

カツ子の本名については、マンションに散乱する通信販売の箱に明記されているので、すでに三人には周知されている。

「それにしても、中高生じゃないんだからいい大人が朝早くからデートするか？ 普通夜じゃねえの？」とブツチョが言う。

「は？ ブツチョ夜のデートしたことあんの？」とライ子が冷たく言う。

「ごめんなさい、ないです」と速攻謝罪する。

まず桜と利一の二人は電車に乗り込み二駅さきの駅で降りる。どうやら向かっている先は映画館のようだ。

その道すがらを監視しているブツチョが、今更ながらに気づくのだが。

「カツ子のやつジャージ以外の服持ってたのか？」とカツ子が身に着けている白いワンピースを見ながらブツチョがつぶやく。

「（なに言ってるの！ 昨日ジヨスコと一緒に買いに行かされたんだから！）」

「そうだよ！ なんか一人でブツブツ言って怒りながら服選んでるんだもん、超怖かったよ！」

どうもカツ子は、いったん火が付くとなかなか鎮まらない性格だったようだ。今現在ブツチョ達がいなくてもパニックを起こさないのは、その怒りによるものだけである。

「それにしてもなんで電車で移動なんだよ、普通の奴は車持ってるだろ？」とブツチョがそんな疑問を述べると。

「電車で移動するって言うからこうやってデートさせてやってるんじゃない！ 車だったらデート自体を阻止するよ！」などと言い出す。

どうやら遊び半分のようである。

カツ子と利一の二人が、今まさに映画館に入ろうという時、二人を監視する不審者一行に何者かが近寄ってくる。

「貴様等は何を不審な事をやっておるのだ？」と近寄ってきた警察官が言う。

「なんだレイさんか、邪魔、あっち行って」とライ子は冷たくあしらう。

「ぬう、あんまりな言い草であるな。ところでカツ子殿がおらぬよ。うだがどうされた」

「（カツ子姉ちゃん知らない人についていつちゃったんだよ）」と丸美が言うが。

「む？ すまぬ、我輩はジエスチャー遊びは苦手である」と、前に手話だと説明したのだが理解できないようである。

まあ、今の説明では誤解を生じる可能性があるので良しとする。

「あーっもお！ レイさんのせいで、カツ子姉ちゃん達どの映画見に行ったか分かんなくなっちゃったじゃんか！」とライ子は激怒した。

さんざんライ子に罵声を浴びせられたレイさんは「なにかあったら連絡をよこしたまえ」と言い残し、すぐごと退散するのであった。

「で、どうするんだ？ 映画終わるまで待ってるのか？」と映画館の前でブッチョが聞くと。

「（あつ、ペカチユウだ！）」と丸美は映画のポスターを指差す。

「今回のパケモンは立体映像らしいよ、どうする？ ブッチョ」と丸美が意見を求めてくる。

「は？ どうするってなにが？」と話の流れが分からないブッチョ。

「家族チケットってのがあったって」「（わっ、安ーい！こんな値段で3人映画見れちゃうみたいだよ！）」

「……………」

ヨ
カッ子のいない時のライ丸姉妹は手が付けられん、と思っブツチ
であつた。

「あーっ、おもしろかった！」

「（まさかペカチユウの最期があんな立体で表現されるなんて）」

「なんかあの立体メガネ掛けてると疲れるな」

と、それぞれ感想を述べながら映画館を出る一行。

「よし、じゃあ飯食って帰るか！」とブッチョが言うと。

「こらっ！ 本来の目的を忘れるな！」とライ子のお叱りを受ける。

「ちっ、忘れてなかったか、残念。でも、もう本気でどこにいるか
分かんないだろ？」と言うと。

「（えっと、次は近くの喫茶店で休憩だっつて）」と丸美は紙を見な
がら言う。

「は？ なんだそれ？」

とブッチョが覗くと、紙にはカツ子のデートのスケジュールが書
いてあった。

「ぶっ！ なんでデートのスケジュールなんかがあるんだよ！」

「え？ 知らないの？ カツ子姉ちゃん、なんでもスケジュール作
って行動してるんだよ？」

「（ネズミーランドの時も全部カツ子姉ちゃんのスケジュール通り
に見ていったんだよ？）」

どつりで無駄なく遊んでくれたわけだ。とブッチョは少し感心す
るのであった。

「あ？ じゃあ今のポケモンの映画は余分だったんじゃないか！」

「ばれたか！」（気づくのが遅いわ！）」

カツ子達のいる喫茶店は映画館からすぐの場所だったので、すぐ
に発見することができた。

その様子を監視していると、カツ子は相変わらず視線は合わせていないものの、いい感じで談笑しているようにも見える。

「むう、なんかいい感じにおしゃべりしてるんだけど」とライ子は不満をもらす。

「（このままではヤバいかもしんないよ、ブッチョこのままでいいのっ?）」と丸美が振ってくる。

「ん? いい感じ? んー、別にいいんじゃないの?」と興味なさげに言う。

その後もカツ子と利一の二人は、バッテリーセンターやらゲームセンターなど、中学生レベルのデートコースを巡っていったのである。

スケジュールを確認すると、最後はファミリーレストランで夕食をとるらしい。

「って初デートの夕食がファミレスかよ!このスケジュールはカツ子が考えたのか?」

「ほとんどあの男が考えたらしいよ。でもファミレスはないよね」

「（なんか大人の人にしては安上がりなデートだね）」

などと言いながらブッチョ達一行はファミレスに入り、二人を監視できる位置に陣取る。

さすがにライ子は目立つので長いすに寝そべり身を隠し、どこから取り出したのか潜望鏡で監視する。

それを見て丸美も寝そべり、潜望鏡を取り出す。目立つことこの上ない。

そんなライ丸姉妹をよそに、ブッチョはぼんやりとカツ子を眺めているのだが、なぜかライ丸姉妹の言うような危機感というものが感じられなかった。

別にカツ子に興味が無いというわけではなく、ブッチョとしてもカツ子が本当に他の男と一緒にになり、ブッチョの元を離れていくということになれば、それはそれでもすごく嫌なことである。

しかしカツ子の様子からなのかこれまでの流れなのか分からないが、カツ子がああ男とは一緒にならないという確信めいたものがあった。

などと考えていると、目の前のテーブルには大量の食料が並んでいた。

「ぶっ！ ちょっと待てお前ら、俺そんなに金持ってきてねえぞ！」とブッチョが財布の中身を確認しながら言つと。

「え？ いいじゃん、カツ子姉ちゃんあそこにいるし」と本末転倒である。

「（店を出る前にカツ子姉ちゃん確保すればいいよ）」と暢気なものである。

そんなやりとりをしながらカツ子を見てみると、二人はまだ談笑しているようであった。

そんな二人の状況に変化が現れたのが、ファミレスに入ってから一時間ほどした辺りである。

なにやら男の方が真剣な話をして、それをカツ子が黙って聞いているようである。

「（実は俺の妹、昔から病気でずっと入院しているんだイケメーン）」

「（それは大変ですねえセレーブ）」

「（それでその病気を治す為のドナーが見つかったんだけど、お金を払わないとそのドナーは次に待ってる人の所に行っちゃうんだイケメーン）」

「（そうなんですかセレーブ）」

「（で、どうしてもあと50万円が工面できないんだ。初対面でこんな事言うのは非常識だと思うけど、なりふり構ってはいられないんだ。少しでもいいからお金を借してくれないか？イケメーン）」

と二人の会話を丸美がアテレコしだす。

「おいおい、そんなあからさますぎるアテレコはやめてやれよ。語

尾がまだおかしいし」

とブッチョは言うが、ライ丸姉妹の真剣な雰囲気気づく。

「え？ 今のマジなの？」

「うん、語尾はともかく二人の会話は本当だよ」

「（とうとう本性を現しやがった）」

「で、カツ子はなんだって？」

「（いいですよって即答だった……）」

「……」しばらく絶句の三人。カツ子は思った以上にアホだったようである。

金の受け渡しの約束をして安心したのか、男はまた談笑を始める。そんな二人の状況に再び変化が訪れる。

お金のやりとりから30分ほど経過した頃、店内に一人の男性客が入店する。

その男性客は、案内のため近寄ってきたウェイトレスのお姉さんを手で制し、一直線にカツ子達の座っているテーブルに向かっていく。

そのままその男性は利一の横に座ってしまい、利一の肩に腕をまわして肩を掴む。

利一の仲間か？と思いきや、その利一は青ざめた顔でうつむいている。

「おい、カツ子のヤツやべえぞ」

というブッチョの言葉でカツ子の方を見ると、新たな男性の登場でパニックになったらしく、カツ子は激しく体を揺らしている。「……っ!!」瞬間ブッチョは息をのみ駆け出していた。

しかし9年よりも前には、ほぼ毎日のように訪れていた世界。それより9年間この世界を見る事は皆無であった。それも最近訪れる機会がたまにあるのである。実は桜はこの純白の世界が嫌いではない。まわりの風景が見えるのだが白だけという曖昧な世界。現実にながら夢の中にいるようなやさしい世界。桜はこの白い世界が何なのか知っている。

それは現実から逃避するために桜が作り出した世界。

そこは誰も侵入することのできない桜だけの秘密の世界。のはずなのだが、なぜだろう、誰かの声がきこえる。聞き覚えのあるその声。

なぜか安心する。

その声は、なぜか桜ではない名前を呼んでいる。

声の主は、桜だけに進入が許されているはずのこの世界を上から覗いている。

嫌ではない、桜は待っていたのだ。

この世界から救ってくれる勇者を。

その勇者に向かって桜はぼんやりと口を開く。

「あれえ？なんでブッチョさんがこんなところにいるんですかあ？」

言うと同時に白い世界は曖昧に消えていく。

「大丈夫かカツ子、腕思いつきり引つ張っちまって、痛くないか？」
どうやら飛び出した自分をブッチョが捕まえたらしい。

床に横になっっている自分の上半身を、しゃがんだブッチョが腕で抱いてくれているようである。

顔が近いが、意外と冷静な自分に驚く。

目でもつむつてやるうかと思案していると。

「カツ子姉ちゃん大丈夫？　びっくりしたよ、すごい勢いで走り出すんだもん」といつもとは違う色彩の着ぐるみが心配そうに話す。

「（ブツチヨもすごい勢いでカツ子姉ちゃん捕まえたよ！）」とその妹も心配してくれる。

「うん、ありがとう、大丈夫です」と言いながらカツ子はブツチヨの手を借りて立ち上がる。

店内は騒然としていたが、一行が席に戻ると、またもとの喧騒を取り戻す。

05

で、横一列に並んで座った四人の前のテーブルを挟んだ対面には、なぜか利一と謎の男が座っている。

「お嬢ちゃん大丈夫かい？」と謎の男の第一声である。

「あつ、大丈夫です。それよりどちらさまでですか？」

「ああ、俺はこいつの借金を回収しに来ただけの借金取りです」と利一を指差しながら、目を笑わせずにこやかに答える借金取りの男性。

「皆川さんはこいつの彼女って聞いたけど？」と男性がカツ子に尋ねると。

「あ？　なに言ってるんだこいつ」とブツチヨが横から口をはさむ。

「ん？　お前どこかで会ったことなかったか？」と男性はブツチヨに問いかける。

「知るか、てめえみたいな知り合いはいねえよ、頭だけじゃなく目も悪いのか？」

とブツチヨは言うが、実は男性は以前サドルの一件でブツチヨと鬼ごっこをした鬼の中の一人なのである。もちろんブツチヨがそんなことを覚えているはずもないのだが。

「まあそれはいい。で、返済期限は今日までだが、てめえこないだ

今日までに全額用意するって言ってたよな」と借金取りの男性は利一に言う。

「ぎ、銀行からおろすの忘れてて、す、すぐおろしてきますからここで待っててください！」などと利一は不良債務者お決まりのステレオタイプな事を言い出す。

「よし、30分待つてやる、すぐにおろして来い」と男性が利一に言った後にブツチョを見て。

「おいお前、こいつについていって逃げないように監視してる」と言う。

「は？なんで俺がそんなことしなきゃなんねえんだよ！自分で行けよ！」とブツチョが不満を述べると。

「俺はこのお嬢ちゃん達と楽しくお話してるからよ」とどつやら三人は人質にとられたようである。

第三話了

第4話「ぺい・まねー・ばらーど」01と02

第四話「ぺい・まねー・ばらーど」

01

冬の凍てついた空は、すでに澄み切った漆黒の闇に支配されていた。

久未弥は肌を突き刺す冷氣から逃れるようにジャケットに身をすぼめる。

ふと久未弥は自分の横と一緒に歩く男に声を掛ける。

「お前どんだけ借金してんだ？」

どういいうわけか久未弥は、この利一と呼ばれていた不良債務者の監視役をまかされていた。

「なんでそんな事あんに言わなきゃなんねえんだよ」と利一がぶつきらぼうに言う。

「あ？ 俺の友達から金を騙し取ろうとしたくせに、えらそうな口をたたくんじゃねえよ」と久未弥も負けてはいない。

「……お前あの女の男か？」との利一の問いに。

「そんなんじゃねえけど、あそこにいた三人は俺の一番大切な人間だ」と答える。

「……300万」

「は？」

「だから俺の借金は300万だって言ってるだろっが！」

「ふーん、闇金で借りたのか？」

「年利率18%も利息をとるんだぜあいつら！」と憤慨する利一。

「ん？ 18%？ って闇金じゃねえじゃねえか！ なんでそんなに借金したんだ！」

「うるせえ！パチンコだよ！」どうやら利一は根っからの駄目人間

のようである。

300万というと大金ではあるが、ちゃんと仕事をして毎月返済していれば決して返せない金額ではない。

しかし、利一のような社会に適應できない人間にとって、それは容易なことではない。

それは久未弥も同じことで、少しでも借り入れをしようものなら利一と同じ道を歩んでいた事だろう。

だとしても利一のように人を騙して金を得ようとする行為は許されるものではないのである。

などと考えながら歩いていると、どうやら目的のATMに到着したもようである。

「金をおろすからちよつとここで待っていてくれ」と言って利一はATMの設置されている小屋へと入っていく。

一度に300万を引き出す事はできないので、5分ほどはかかるであろうか。

その間久未弥は道行く人々を見て思う。

人とは本当に様々なのだ。

健康な人、病んでいる人、病気を治す人、それを助ける人。

犯罪を犯す人、そして人の命を奪ってしまう人も。

その様々な人が集まって、この人間社会という世界を形作っているのである。

自分、カツ子やライ丸姉妹、テンホー氏にサッチ、レイさんも。

未然に防げたとはいえ、詐欺をはたらこうとした利一すらもその世界の一部なのである。

しかし、その利一の姿が見えないようである。

「あれ？ あいつ、いつのまにかいなくなってるう！」どうやら逃げられたらしい。

久未弥が辺りを見回すと、はるか先で逃走している利一を発見す

る。

「てめえええっ！ 逃げんじゃねええっ！」

との久未弥の叫び声を号砲に、久々の鬼ごっこが開始されたのである。

02

一方こちらファミリーレストランでの一幕。

借金の取立て屋に、人質として捕らえられているカツ子とライ丸姉妹。

「カツ子姉ちゃん、そのポテト取って」と迷彩ライ子が言う。

「……（食）」

「おっさん、そのお肉こっちによこして……と言ってる」と手話を知らない借金取りの男性に、いつものネタで話しかけるライ丸姉妹。

「ほら、二人ともそんなに急いで食べると喉につつかえますよ？」

「と二人を気遣うカツ子。

「……」テーブルに広がる食料の量と、それを消化していく子供二人を見て絶句する借金取り。

「あんたら、いつもこんなに食べるのか？……じゃなくて、状況を理解してるか？」

「なに言ってるの！ 腹が減っては戦はできないんだよ！」

「（そろそろデザート頼んでいい？）」

「はいはい、えっと、借金取りさんもデザート食べますか？」

「いや、俺はコーヒーだけでいい……じゃなくてだな……まあいいか」

「おっさんは利一と知り合いなの？」とライ子が聞くと。

「利一？ ああ、あいつそんな風に呼ばれてんのか。別にあいつとは仕事上の知り合いっただけだよ」

と言いながらコーヒーをすすする借金取りの男。

「とりあえずお嬢ちゃん、利一のヤツはやめときな。あいつはろくなヤツじゃない」とカツ子に忠告する借金取り。

「そうだよ、カツ子姉ちゃん利一にお金を50万円も騙し取られるところだったんだよ」

「（あんな嘘を簡単に信じちゃ駄目だよ！）」

「え？ あれ嘘だったんですか？ 妹さんが無事なら良かったです」

「あいつに妹はいねえよ、簡単に人を信じるのは感心しねえな。あと、あの無表情のヤツもやめた方がいい、ヤクザに喧嘩売るなんて”普通”じゃねえよ」と、この男はブツチョコの事を思い出したようである。

「……”普通”ってなんですか？ あなたや利一さんのように、お金に振り回されている人達の事を”普通”っていうんですか？」
とカツ子は変な絡み方をする。

「あ？ 世の中金だろ？ あんただって金は必要じゃねえのか？」

「ええ、そりゃあ生きていくためにはお金が必要ですけど、そんなにお金って大切なものですか？」

「は？ 金さえあればなんだってできるし、なんだって手に入れることができる。それを欲しがるのが”普通”だろ？」

「そうですね、確にお金があれば何でも手に入りました。食べるものも着るものも、家も電化製品も、遊び道具だって何でも買えました」

「でも……本当に手に入れたいものは、どこにも売ってませんでしたよ？」

「あんだ……そうか、いや、悪かった、そうだな、金の価値観の話は平行線で終わりそうだ。で、そのブツチョコくんはお嬢ちゃんの欲しいものを持つてるのか？」

「え？ うーん、たぶん半分くらいは持つてるかもしれませんが」

「わははははっ！ 半分も持っていれば上出来だな、俺もあやかりたいもんだ！」と愉快そうに笑う借金取り。

「「そうですね、私たちにとってブッチョさんは、お金よりは頼りになりますよ？」」

「と言ってるうちにブッチョくん帰ってきたようだな」

と、ブッチョが店の中に入ってきたようだ。

「あれ？ ブッチョ、利一は？」とライ子は、一人で来たブッチョにたずねる。

「ごめんなさい、逃げられました」速攻謝罪のブッチョ。

やはりお金の方が頼りになるかもしれない、と思う一同であった。

「で、このこと帰ってきたと」

「はい、すみません」

現在、利一を逃がしてしまったブッチョは、借金取りの説教を受けていた。

「あんたなあ、すみませんで済んだら警察なんていらねえだろ！こんな簡単な使いもできねえのかよ！」と凄じ剣幕でまくしたてる。

「いや、でもあいつすげえ足速くて、ほんと一瞬の出来事だったんだって」とブッチョはジエスチャー交じりで説明する。

「お前はガキか？ 言い訳なんてしてんじゃねえ！ 役にたたねえクズ野郎が！」借金取りは追求の手を緩めない。

「あ？ なんであんたにそこまで言われなきゃならねえんだ？ そもそも俺が監視役なんてやらされる理由がわかんねえよ！」とブッチョの主張ももつともである。

「そうだよ！ おっさん！ ブッチョをそんなに責めるな！」とライ子はブッチョを擁護する。

「……………(怒)」

「悪いのは利一でしょ？ なんでブッチョが怒られてるのが分かるんないよ！……………と云ってる」と丸美も訴える。

「お嬢ちゃん達、ちよつと黙ってな。ブッチョって言ったか、あんたにとってこのお嬢ちゃんは大切な人じゃねえのか？」と、借金取りはカツ子を指してたずねる。

「……………大切な友達です」

「そうだろ？ あんたはその大切な友達を、未然に防げたとはいえ詐欺の被害者にするところだったんだぞ！」

「ちよつと待つてよ！ ブッチョは利一があんな人だって知らなか

「つたんだよ?」と、ライ子は責められるブッチョを見かねて言う。

「……………(汗)」

「そうだよ、今日は私たちが無理やり連れ出したんだから!・・・
と言ってる」と丸美も続く。

「それでもだ。あんた解かってんだろ?そんなことじゃ大切なもの
なんて何も守る事なんてできないって」

「……………」ブッチョは言い返す言葉が無い。

その通りである、実際カツ子がデートに行くと言った時、ライ
丸姉妹の様子を見ればただ事ではないと容易に想像がついたであ
らう。

ケンカをしたしなにかかわらず、ブッチョはライ丸姉妹に事情
を聞き、止めるべきだったのである。

「だから利一の監視は、あんたにやった最後のチャンスだったんだ。
それなのにまんまと逃げられやがって」

何のチャンスかは知らないが、ブッチョは反論できない。

「まあいいや、それはあんたが勝手に責任を感じていればいいだけ
だからな。でも、あんたのせいで俺の仕事がパーになっちまった。

この落とし前として、お嬢ちゃんが騙される予定だった50万円分
の利一の借金をあんたに払ってもらおう」などと横暴な事を言う。

「……………そんな大金持ってません」とブッチョが言う。

「その50万円、私が払います。元は私が騙されそうになったの
が悪かつたんですから」などとカツ子が言い出す。

「お嬢ちゃん……………まあいいか、俺は少しでも集金できれば問題ない
からな」と借金取りはふんぞり返り、冷たくなったコーヒを口に
する。

「ブッチョさん、お金は私が払いますが、カードを渡すので下ろ
してきてもらってもいいですか?」と言いながらブッチョにキヤ
ッシュカードを渡し、暗証番号を告げる。

「いいのか? そんな大金」

「ええ、ほんとに気にしないでください。私の責任ですから」

と言って送り出す。

こうしてブツチョコは、再びATMまで行く事になったのである。

04

「くそっ！」と、久未弥が叫ぶのは、ファミリーレストランを後にしてからすでに5回目になる。

その叫びは借金取りの理不尽な要求に向けてではなく、自分の考えの甘さに対する後悔の念へである。

こここのところ、自分の夢が見つかった、などと浮かれていたせいだ。

どの口が笑顔で幸せにしたいなどと言ったのであろうか。

結局は自分の甘さのせいで、カツ子やライ丸姉妹に嫌な思いをさせてしまっている。ましてや、50万円という大金まで払わせてしまっ。

「俺は馬鹿だ！」

と、後悔しきれぬうちにATMに到着する。

カードを機械にすべり込ませ、液晶画面に映った数字を教えるもらった通りの暗証番号の順に触っていく。

次に液晶は金額の入力画面に移り変わり、久未弥は5と0と万の部分を押す、次に円と書かれた部分を押す。

液晶画面には金額の確認画面が映し出されていて、今入力した500000円の表示の上に現在の残高が映っている。

久未弥は、見ては失礼と思いつつ確認してしまっ。

「800万か、さすがに持つてるなあいつ……あれ？」

と言いつつ、いち、じゅう、ひゃく……と残高を数えていくと。

「は、はっせんまんえん!? 8000万円て、国家予算ですか?」
どこの小国なのだろうか、久未弥は錯乱しているようである。

とりあえず50万円を備え付けの紙袋に入れ、落とさないようにしっかり持ち、ATM小屋から出て行く。

なぜか久未弥は少々震えているのだが、どうやら口座の中の金額を見て、カード自体が8000万円の価値があるように錯覚しているようだ。暗証番号を知らなければただのカードなのだが。

「ちよつ、早く戻んなきゃ」と、冬の夜道を小走りで行く不審者。

「おい貴様、なにを急いでおる！」と不審者を見かけて声を掛ける警察官。

「ぎゃああ！ れれれレイさん！ なななんでもないツス！ さらばツス！」と久未弥は完全にパニックに陥り、ダッシュで逃げる。「おい、ブッチョ貴様！なぜ逃げる！」と追いかけだす。

鬼ごっこ第二部は熾烈を極め、現在久未弥は身を隠すためにまんが喫茶に入ったところである。

「はあ、はあ、俺は何で逃げてるんだ？ それにしてもレイさんしつこい！ 10分位ここで時間つぶすか」

久未弥は走り疲れて喉が渴いたので、ドリンクバーへ飲み物を取りに行く。

たまには炭酸でも飲むか、とグラスを手に取り機械にセットしようとする、他の客とかちあってしまう。

「あつ、すみません。お先にどうぞ」と相手に勧める久未弥。

「そうか？ じゃ、お先に」と先にグラスをセットする利一。

「あつ！」と二人同時に発する。

「やべえ、逃げる！」と言って走り出す利一。

「てめえ！ 逃げんな！」と久未弥もそれに続く。

鬼ごっこ第三部のスタートである。

たぶんこれが、最後のチャンスというやつであろうことは久未弥も分かっている。

のだが、なかなか久未弥と利一の距離の差は縮まらない。それどころか目で見るとかぎりりでも、その差が開いているのは一目瞭然である。

それもそのはず、基本的な体力の違いはあるにせよ、かたや50万円、かたや300万円の走りである。

しかも、たぶん利一は返すだけの金など口座にさえ無いのである。まさに命がけなのだ。

「はあ、はあ、くそっ！ パチンコ、ばっか、やってる、奴のくせして、なんで、あんなに、速えんだよ！」誰が聞いているわけでもないのに無理してしゃべらなくても良いのだが、息も絶え絶え愚痴をこぼす。

「くそっ！ このままじゃ、あいつらの命が……」

ファミリーストランを出てからどれだけ経過したであろうか、そろそろカツ子とライ丸姉妹の命が危ないのではないか。などと思いの分らないストーリーができあがってしまうほど久未弥の体力は限界まで迫っていた。

たぶん利一が次の角を曲がってしまったら、久未弥は利一を見失ってしまうだろう。

そう思いながら追いかけていたのだが、利一はあっさりと先の角を左に曲がってしまった。

……のだが、なぜかすぐに引き返してきて、反対の方向へ走りなおして行く。

疑問に思いながら今のタイムロスで差が縮まり、息を吹き返した

久未弥は、左の角から走って出てくる二人組を目にする。

「ブツチョー！ 助けにきたよー！」（利一絶対捕まえようね！）
「とライ丸姉妹が合流する。」

「お、お前ら、なんで？」

「ブツチョーぜんぜん帰ってこないから心配したら、カツ子姉ちゃん
の携帯電話に、レイさんからブツチョーの様子が変だったって電話
があって、ブツチョー探したら利一が走ってきてびっくりしちゃっ
た！」とライ子が説明してくれる。

そのまま三人で追跡すると、利一はまた曲がった先を引き返して
きた。

「あーっ！ 待てーっ！ 逃がしませんよー！」とカツ子が登
場する。

「お前まで来たのか？」とブツチョーが聞くと。

「心配してみんなでブツチョーさん探してたんですけど、利一さんを
追いかけてたんですね？」と言う。

「よく借金取りのおっさん行かせてくれたな」

「ええ、ちゃんと戻って言ったら信じていただけましたよ」「
などとやりとりしながら追っていると、前を走る利一のさらに向
こうから。

「おい！ 貴様！ なぜ逃亡するか！」とのレイさんの怒鳴り声が
聞こえてくる。

レイさんの声はブツチョーに向けられたものだったのだが、さすが
の利一も警察官の登場で観念したのか立ち止まってしまった。

こうして冬季鬼ごっこ大会は、鬼の敗北で幕を閉じたのだった。

06

ファミリーレストランに戻った一行は、借金取りに利一を引き渡
す。

「……で、なんでこんな事になってんだ？」

と借金取りの男は、利一と警察官を引き連れて戻ってきた一行を見てそうもらす。

「いや、なりゆきです。気にしないでください」とブツチヨは説明する。

そんなブツチヨと一同を眺め、借金取りは「ははははっ！」と突然笑い出す。

「お嬢ちゃんの言うとおり、あんたなら本当に手に入れたいものつてヤツを持つてるのかもな！ だろ？ お嬢ちゃん」

と借金取りが言うと、訳のわからないブツチヨをよそに「はい」と言つてカツ子は一緒に笑い出す。

場違い感まる出しのレイさんには早々に退場してもらい、一同も借金取りに別れを告げる。

「ほんとにいろいろすみませんでした、おかげで目が覚めました。最後に名前を覚えてもらつてもいいですか？」と借金取りの男にブツチヨがたずねると。

「やめときなブツチヨ、あんたは俺のような奴にやつかいになんかなつちやあダメだ」と言う。

借金取りの男は加えて「あのお嬢ちゃんは“金の正当な価値”つてのが解つてる、せいぜい良い働きをしてやるんだな」などという言葉を後に一同と別れる。

「すまん、俺のせいでバタバタしまつて」

とブツチヨは帰りの道すがら、カツ子とライ丸姉妹に謝罪する。

「いえ、私こそ変な意地張つたばかりにみんなに迷惑かけてしまつて」とカツ子も謝る。

「私達もごめん、おもしろがらずにもつと早くに止めとけばよかつたよ」やはり遊び半分だつたらしい。

「(ごめんなさい)」と丸美も謝る。

一通り謝つた一同は、しばらく無言で歩いていただけだ。

「あつ！ おつきい滑り台がある！」「(遊んできていい?)」

と、ライ丸姉妹は、目の前に現れた公園に向かって走り出す。

「おい、夜中だからあんまり騒ぐなよ！」と言って見送る。

この公園は斜面を削って作っており、斜面側には公園が一望できるデッキが設けられている。

楽しそうに遊び始めたライ丸姉妹を眺めながら、ブッチョとカッ子はデッキの手すりに身を預ける。

「なんか疲れたな」とブッチョは公園をぼんやりと見ながら言う。

「そうですねえ、私も着なれない服着て疲れました」「と白いワンピースをつまみながらカッ子はつぶやく。

「いや、なかなか似合ってると思うぞ」と言う。

「ふふふ、お世辞言っても何も出ないですよ？」「とカッ子は楽しそうに返す。

「あつ、そういえばこれをまだ返してなかった」と言いながら、懐から銀行の封筒を取り出す。

「ああそうでしたね、忘れてました」と言って、ブッチョから封筒を受け取る。

「……一応お金は下ろしてきたんですね」「

と、カッ子は封筒の中身を見ながら、独り言のように言う。

今日の出来事を思い出すように黙る二人。

二人の間にはライ丸姉妹の楽しそうな声が流れていく。

しばらく無言で封筒の中を覗いていたカッ子は、意を決したように口を開く。

「ブッチョさん、聞いてもらいたい事があるんです」

と、いつもと雰囲気の違いにブッチョは思わずカッ子を見ると、カッ子の視線はまっすぐにブッチョの方を向いていた。

今朝、桜は、デートの結果がどうであれ、ブッチョに告白しようと心に決めていた。

告白してしまえば、もう今までのような関係ではいられない事は自分でも解っている。

しかしいつまでも、このままではいられないのも事実である。だが、もうすでに賽は投げられた。

桜は言う。

「ブッチョさん……」

もう戻れないと知りながら。

「私は……」

私は人殺しの子なんです。

第四話了

第5話「告白の行方」01と02

第5話「告白の行方」

01

すべてはあの日から始まった。

四年生になって3ヶ月程経った梅雨時の土曜日の午後、ふくたけ福武 さくら桜
はうらめしそうに窓にうちつける雨を眺めていた。

「雨は嫌い、だってお外で遊べないんだもん」

と桜は一人で愚痴をはいている。

都営住宅の三階に住む福武家は、父と母、そして桜の三人家族で、
父は2年前に脱サラして宅配業、母はパートと、決して裕福とはい
いがたい家庭である。

しかしそれでも桜は幸せな生活を送っていた。

「いつまでも愚痴愚痴言つてないの！ しょうがないじゃない、雨
なんだから」

との母の言葉にも、桜は納得いかないようだ。

というのも、桜は先日のテストで100点を取り、そのご褒美と
してお母さんと遊園地に行く約束をしていたのである。

父はいつも朝早くから晩遅くまで仕事をし、最近起きている父の
顔を見ていないのが桜の気がかりである。

そんな桜をあざ笑うかのように、さらにいつそう雨足が強まり、
勢いを増した雨音が不安を煽る。

ざあざあざあ……。

ぱちぱちぱち……。

騒音のように鳴り続ける雨音から避けるように桜は窓から離れる
と、つけたままだったテレビがなにやら騒々しい。

「あーやだ、ビルの爆破事件？ 最近は物騒になったわねえ」
テレビ画面には、黒々とした黒煙を吐く雑居ビルが写し出され、
テレビレポーターの興奮した声と、いくつもの消防車や救急車のサイレンの音が異常事態を告げている。

画面に表示されている場所が、桜の家から電車で40分程と比較的近いことも、興味を惹かれる要因である。

しかし、テレビというフィルターを通して見る現実はどこか他人事めいていて、遠い世界の話のようにも見える。

このような大きな事件は、暇な休日のお茶の間には格好のエンターテイメントであり、桜と母もお茶菓子を目の前にテレビに釘付けになっている。

結局この時点で判明したことは、死者3名、病院に搬送された負傷者6名。

不確定情報ではあるが、犯人は死亡しており、死者数に含まれているとのことである。

02

辺りも暗くなった頃、台所では母親が夕飯の揚げ物のおいしそうなかおりを垂れ流しており、桜はリビングで空腹感を感じながらテレビから流れる事件の続報を眺めていた。

事後処理があらかた済んだ現場の前で、レインコートをまとったレポーターがメモを片手に報告した内容はこうだ。

現時点で判明した事はと前置きをした上で、犯人は雑居ビルの事務所にガソリンのような液体を撒き事務所を爆破、それによって事務所の中にいた事務員2人が死亡。ビルの前を歩いていた通行人も巻き込まれ、1人重体、5人が重軽傷。

犯人は爆発に巻き込まれるも生存していたが、駆けつけた警察官に向け、所持していた拳銃を発砲したため射殺されたとのことだっ

た。

怖い、と桜がもらしていると、突然電話が鳴り出す。

心臓が飛び出そうなほどびっくりしていると、お母さんが電話に出る。

「はい、福武です。はい、そうですが、ええ……」

と、徐々に声が緊張を帯びていく母を、いつの間にか桜は見つめていた。

「はい……えっ?……そんな!」

と言いながら目玉が飛びださんほどの勢いで目を見開き、テレビ画面を見る母。桜もそれにつられてテレビを見る。

「はい……わかりました」

というお母さんの声を背中で聞いた後、
ボタン!

と何かが倒れたような音がして、桜が後ろを振り返ると、お母さんが床に倒れ込んでいた。

「お母さん!」

と駆け寄る桜。

すぐに救急車を呼び、病院に搬送される母。

病院の先生の話では、急激なストレスにより意識を失ったのとのことだった。

お母さんはそのまま入院することになり、桜はそれに付き添い病院で夜を明かすのだが、自分だけでは何もできないと知りながら、なぜか父には連絡をしなかった。

桜が病院で何もしていない間にも、かの事件は進展、解明されてゆく。

夜の内に重体だった一人が病院で死亡し、結果、被害者は死者3人、重軽傷者5人、そして犯人死亡ということでこの事件の被害状況が明らかになったのである。

そして、朝には犯人の身元が公開される。

病院のテレビから聞こえるニュースキャスターの声が伝えた犯人の名は。

福武 ふくたけ 敏夫 としお（33）。桜の父親である。

テレビ画面に映る顔写真も、まぎれもなく父と同じ顔である。

桜は薄々感じていた。

それもそのはず、夜の内に何度も警察官が母の元に訪れていたのだ。

感じていたとはいえ、明確に確証を突きつけられるとショックを隠しきれない。

テレビが桜に伝えた事件のあらましはこうだ。

宅配便の配送の仕事をしていた犯人は、会社の当初の話通りに支払われない賃金に腹を立て、事務所に入り、業務を行っていた担当者を射殺。その後ガソリンの様なものを撒き引火、事務所奥にいた従業員が焼死、ビルの前を歩いていた通行人にも被害が出る。その後駆けつけた警察官が火傷を負いながらも生存する犯人を見するも、拳銃を発砲してきたためやむなく射殺したとのことである。

小学校4年生の桜には、ニュースキャスターが話す言葉は難しすぎて、あまり理解できなかった。

しかし桜にもこれだけはわかった。

お父さんは、

お金のために人を殺して、

警察官に殺された。

ここから桜の世界が一変する。

事件も一週間も過ぎると、住宅の周りに押し寄せていたテレビ局もいなくなり、元の静けさを取り戻したように思えた。

実際精神的に参っていた桜も今日から学校へ行くことになり、不安ながらも少し日常が戻ってきたような気がしていた。

父の事に関しては、死んだ事よりも事件によって被った精神的被害のほうが大きく、悲しんでいる暇もなかったのである。

桜が登校してみると、クラスメイトは声には出さないものの全員が事件の事を知っているらしく、最初はぎこちないながらも給食の時間の頃には、事件前と変わらぬように接してくれたので、桜は心の底からの安堵感を感じ得るのであった。

しかし、それも一日一日と日を追うごとにクラスメイトとの距離感が開いていくのを感じていく。

申し訳なさそうに距離を置いていくクラスメイト達だったが、どうやらイジメというわけではないようだった。

桜が登校再開してから4日目、クラスメイト達の反応の理由が明らかになる。

その日の晩、桜の自宅に担任の先生と教頭先生が緊張の面持ちでやってきた。

桜は自分の部屋で待っているように言われたが、なにぶん狭い住宅なので、話し声は聞こえてしまう。

ありきたりの挨拶を並べる先生達。

その声色は暗さを帯びており、桜の不安を煽る。

「福武さん、まことに申し上げにくいのですが……」

と言いよんだ担任の先生に代わり、教頭先生が話し始める。

「実は、父兄の方々から、自分の子供を人殺しの子と一緒に勉強させたくない、という意見が寄せられておりまして」

”人殺しの子”？ そうか、私は人殺しの子なんだ。と桜はおなかの辺りが締め付けられた気がした。

「そんな！ それじゃあの子はどうすればいいんですか？！」

「これは提案ですが、他の学校に転校するという手もございます」などと言う。

結局、桜は転校することになってしまった。

桜は同級生のイジメではなく、その親達から迫害されたのだ。

桜は同じ市内の学校に転校するが、一ヶ月もしないうちに”人殺しの子”だということがバレて、転校を余儀なくされる。

二回目の転校も失敗に終わり、苗字を母方の姓に戻し県外に転校する頃には、借金はかなりの額まで膨れ上がっていた。

桜は中学を卒業するまでに6度転校を繰り返し、転校するたびに”人殺しの子”とバレないように人目を避けて生活してきた。

そして中学校を卒業して母から告げられたのは、800万円にも及ぶ借金の額であった。

当時のサラ金での年利が28%程であったため、単純計算で月に19万円以上返済しないと元金が減っていかないのである。

仕方なく働くこととする桜。

しかし今まで人目を避けて生きてきたので、母親や学校などの守りを望めない社会で生きていく事は桜にとって難題すぎた。

桜に街行く人々の視線が語りかけてくる。

人殺しの子だ。

3人も殺した殺人犯の子だ。

人殺しの子と同じ空気を吸いたくない。

殺人犯の子。

人殺し。

白い世界。

気がつくといつも知らない路地裏にいた。

パニック障害である。

いつも路地裏で呼吸困難のうちに目が覚める。

そしていつも路地裏で、ヒザを抱えながら思うのだ。

私の居場所はどこにも無い、と。

04

それでも借金を返すために働かなくてはいけない。

なるべく人目につきにくい仕事を選んで、いくつも掛け持つて働いていく。

その頃には母親は、身も心も疲れ果てていて、仕事もままならない状態であった。

桜は働く。

働いて、食べて、寝て、働いて、食べて、寝て……。

桜は減る事のない借金の、毎月の返済のためだけに生きていた。

金、

金、

金、

金、

金さえあれば、好きなものが買えるのに。

金さえあれば、この苦行から開放されるのに。

金さえあつたならば、こんな事にはならなかったのに。

昔見たドラマの悪役が「世の中は金がすべてだ」と言っていたのを思い出す。その通りだと思った。

あるときテレビの中に映る、いかにも調子に乗っていきそうな主婦が、したり顔でインタビューを受けていた話の内容に興味をしめす。どうやらテレビ画面の女は、株で1年間に1200万円を儲けたと自慢しているようだった。

桜はすぐさま株の本を買い勉強を始める。

もともと人と関わることをせず、暇で勉強ばかりしていたので、この手のものを理解するのにそれほど時間はかからなかった。

後で思うと自分でもおそろしい事をしたと思うが、株式投資をするのにあたって、仕事をすべて辞め、必要経費をすべて闇金から調達したのである。

この時点で借金は1000万円以上に達していた。

しかし、どうも桜には株の才能があつたらしく、半年後には借金を全て完済してしまう。なぜか闇金から借りた金は倍になっていたのだが、それも些末な問題であつた。

あれだけ母親と自分を苦勞させた金。

父親に殺人まで犯させた金。

桜は、それをいとも簡単に手に入れる術を見つけてしまった。

桜は思う、

なんてふざけた世界だ、
と。

そのころ母親の体はすでに限界に達していて、入退院を繰り返すようになっていた。

その母は、桜のおかげとはいえひと段落ついたので、悪いと思

ながらも生まれ育った東京都に戻りたいなどと言い出す。

桜はそんな忌まわしい土地に戻りたいなど気が知れない、と思うのだが、母の意志を汲んで故郷の周辺にアパートを借り、そこに一人で住まわす事にする。

自分は、東京にも現在ののアパートにも居りたくないのです、考えた結果。

住んだ事が無く、母の住む東京からそれほど離れておらず、都会でも田舎でもない愛知県の豊多市に住む事にする。

外出しなくても生活ができるようになった桜は、ほとんど外に出ることはなくなった。

食事も贅沢を言わなければ、通信販売の食料で事足りてしまう。桜はゴミ出しと通販商品の受け取り以外ドアを開ける事はなかった。

しかしその間にも、株で儲けた金は桜の口座に入金されていく。株で儲けて、食べて、寝て、株で儲けて、食べて、寝て……。以前と変わらず、金を稼ぐだけの生活に飽きた頃には、貯蓄はすでに数億円を越えていたのである。

こんな事をしていても、ちっとも幸せじゃない。

そう思った桜は、有り余る金を使い、幸せになろうとする。欲しいものは何でも金で手に入れた。

マンション、テレビ、パソコン、ゲーム機、携帯電話、ベッド、マッサージチェア……必要なものから流行のものまで、目につくものを次から次へと購入していく。

だが、いくら欲しいものを買っても、いくらおいしいものを食べても、いくら意味の分からない高級ブランド品を買ったところで、なにも満たされはしない。

大金は手にしたが、大量の現金を直に持った事がないのに気づき、意を決して銀行から下ろしてくる。

いつか見た雑誌の中の広告で、現金の敷き詰められた風呂に浸かり、満面の笑みを浮かべる男性の写真。さぞかし楽しいものだろうと思いつながら、桜は1000万円を自宅に持ち帰る。

そしてそれを部屋にばらまき、その光景を見た桜は、

……吐いた。

こんな紙切れのせいで、父は人を殺し、母は病床に伏せ、自分の幸せを奪ったのだ。

桜は狂ったように、自分の吐しゃ物と一緒に現金をゴミ袋に押し込み捨てにいく。

それ以来現金を手にする事はなくなった。

結局金の力では、

過去を消すことはできなかつたのである。

以前にも増して、桜は家に籠もる。

テレビで見た”廃人”と呼ばれる人を見て、それをまねてネットゲームに手を出す。

これが意外におもしろいのだ。

そこにいる人々は、完全にゲームの世界で生活しており、それぞれ現実とは違う人生を生きているのである。

桜はこの世界では”女戦士ブロッサム”であり”人殺しの子”ではない。

そうして桜は、傷つき飛べない鳥が身を守るように、自ら用意したカゴの中で生きていくのであった。

06

「……」

桜がそこまで話終えるまで、ブッチョは無言で聞いていた。

寒空の下、少々長めの告白にもかかわらず、寒さは感じなかった。

多分この人も、あの姉妹も、私が”人殺しの子”と知れば私の元を離れていくだろう。

あのネットゲームとは違う”非現実”とも”現実”とも知れないような日々を与えてくれた三人、ブッチョさん、ライ子ちゃん、丸美ちゃん。

そんな三人に、これ以上私の正体を隠し、騙し続けるなんて事はできなかった。

この一年にも満たない、桜にとって最も楽しくて、うれしくて、怖くて、悲しくて、怒れて、おいしくて、おもしろくて、そして、幸せだった日々を自ら手放すのは惜しい。

告白したのを後悔していない、と言えば嘘になる。

このまま隠し通しておきたかったのが本音である。

言ってしまったことによって、私の中には、後悔の念に満たされていくのが分かる。

それでも、伝えなければならぬ。

感謝と、別れの言葉を。

「ブッチョさん、今まで騙してすみませんでした。

私のわがままに付き合っていただいて、ほんとにありがとうございました。

私もう行きます、ライ丸ちゃん達の顔を見ると辛くなっちゃおうから……」

と言いながら桜はブッチョに背を向ける。

桜は気づく。

別れがこんなに辛いとは思わなかった。

後ろ髪引かれるのが分かる。

胸が張り裂けそうになるとはこの事か。

しかし、不思議と涙は出なかった。

そして桜の背後から、ブッチョの別れの言葉が告げられる。

「は？ 何一人で帰ろうとしてんだよ」

「え？」

と思わず振り向いて聞き返してしまう。

「いや、俺バカだから、お前が大変な人生を送ってきたのは分かっただけどよ、さんざん俺たちを振り回しておいて先に帰るなんて許されんだろ！」

などと言う。

「いや、だから私は”人殺しの子”ですよ？」と言うと。

「だから、父親が人殺しだからって、お前は俺たちを殺すのか？」と言う。

「いいえ、そんなことは絶対にしません！」と言うと。

「じゃ、いいじゃねえか、アホかお前？」なんて事を言う。

「……」 啞然とする桜。

「は……ははは……あはははは」

そうだ、思い出した、この人はバカだった。

思えばかつて、インチキ臭いと分かっていたながら、冗談で受けた詐欺紛いの占い。

暇つぶしに、誰も来ないと分かっていたながら行った住宅街。

そこにやってきた、表情の変わらない、ヤクザに追われていたこの人。

はじめからそうだった。

友達になつてくれと言ったときも。

デパートで何度も迷子になったときも。

思い返せば数え切れないが、

このバカな人は何も疑問に思わず受け入れてくれる。

着ぐるみを着た少女でも、

耳の聞こえない少女でも、

そして”人殺しの子”でさえも。

この人はほんとにバカで、

どうしようもないバカで、
なんともならないバカで、
バカ過ぎて、信じられないほど………やさしい。

だから、わたしは、この人を好きになつたんだ。

そう気づいた桜は、自分の目から熱いものが流れていくのを感じる。

なんでだろう、うれしくて笑いたいのになんて私は泣いてるの
だろう。

もしかしてこれは、うれし泣きなのだろうか。

あの中学校の頃、黒板に”皆川 桜は人殺し”と書かれて流した
涙や、

あの知らない路地裏で、呼吸もままならないまま流した涙とも違
う。

こんなあたたかい涙が、私の中にもあつたんだ。

こんな宝物のような涙を、外に出してはならぬと、桜は上を向く
が、流れは止まない。

ならばと両の手のひらで塞いでみるが、とめどなくあふれてきて
しまう。

ずっと、ずっと、外に出る事を待ち望んでいたように、ぼろぼろ
とあふれ落ちる涙。

とつとつ桜は声を上げて泣き出す。

今までの悲しみを吐き出すように、

今までの悔しさを洗い流すように……。

「あーっ！ ブッチョのくせにカツ子姉ちゃん泣かしてるっ！」「
(信じられない！ ブッチョ何様のつもり！)」「

と、その光景を発見し、激怒しながら走り寄ってくるライ丸姉妹。「ちよっ、俺は何にもしてないって!」とブツチョが弁明するが。「じゃあなんでカツ子姉ちゃん泣いてんだよっ!」とライ子は、パンチやキックを繰り返しながら問い詰める。

「(ブツチョ、カツ子姉ちゃんに告白されたんだろ?)」と丸美も迫ってくる。

「え? ああ、告白はされたけども、俺は悪くないだろ?」と言うと。

「は? はあ? ブツチョのくせにカツ子姉ちゃん振るなんて……」とライ子が言ったところで、カツ子が止めに入る。

「うう……ライ子ちゃん、ちがうのお……ぐすっ……」

と、ぐしゅぐしゅと泣きながら、説明しようかどうか言いよんでいるとブツチョが。

「心配すんなって、こいつらなんか俺よりバカだからさ」

などと言ったブツチョに、なにおー! と殴りかかっているライ丸姉妹に説明すると。

「ん? カツ子姉ちゃんが私たち殺すわけじゃないんでしょ? じゃ問題なし!」「(問題なし!)」

との返答に、二人を抱きしめて、桜はまたしばらく泣きじゃくるのであった。

桜が泣き止んだ頃にはすでに深夜である。

完全に冷え切った体を温めるために、あたたかい缶ジュースを手を持つ四人。

「すみませんねえ、こんなに遅くなっちゃって」と、ホットレモネードをすすりながら桜が言う。

「エ? アナタダレデスカ?」とブツチョはココアをすすりながら、なぜか片言で話す。

「え? 誰って、何言ってるんですか?」と聞くと。

「(括弧が普通になってるんですけど)」とお汁粉を飲む丸美が指

摘すると。

「ああ、もう自分を偽らなくても良くなったんで、普通になりました」

と桜が言うとライ子が。

「ただでさえブツチヨと私の言う事が分かり辛くなってるのに、カツ姉ちゃんまで普通の括弧になったらパニックでしょ？」などとコーンポタージュの缶の中をのぞき込みながら、身もフタもない事を言い出す。

「そうだな、ちょっと今後の対応に支障をきたすな」とブツチヨも言う。

「（ここまでできて普通になるのはKYでしょ？）」と丸美まで言う。

「えええええーっ!?!」

どうやら普通のカツ子に戻ったようである。

08

そんなこんなで、やっとライ丸姉妹の家の周辺までやってきた一同である。

「ブツチヨ、カツ姉ちゃん、ありがと、ここでいいや」とライ子は言うが、家まではまだ距離がある。

「いや、こんなに遅くなっちゃったから、家の人に謝っとかないと」
とブツチヨが言う。

「（多分もう寝てるからいいよ）」と丸美が言う。

「「そうですねえ、挨拶はまた後日にしましょうか」「」
となぜかカツ子が容認する。

「ん？ そうか？ じゃあ明日にするか……」

とブツチヨが言った時、後方からものすごいエンジン音を轟かせながら、ワンボックスカーが猛スピードで走行してくる。

ブツチヨは、そのワンボックスカーに見覚えがあった。

あれはあのいつぞやの横暴なインチキホストの所有する車だ。

ブッチョが三人を道の際に避けさせていると、なんとそのワンボックスは一行の前に停車したのである。

降ろされたウィンドウから顔を出したのは、やはりあの時の金髪ピアスの男であった。

ブッチョは、また無茶苦茶な事を言うであろう男に対し、すぐに言い返せるよう身構えていると、インチキホスト風の男が口を開く。
「冬子とつこ！ 杏奈あんな！ てめえら何こんな時間までほっつき歩いてやがるんだ！ 早く帰りやがれ！」

と怒鳴った先をブッチョが見ると、そこには、身を固まらせるライ子と、その後ろに隠れる丸美の姿があった。

怒鳴り終えた男の車は、そのまま嵐のように走り去ってしまった。
「……」またしても唾然としてしまう。

「お前ら、あいつの知り合いか？」と、かろうじてブッチョがたずねると。

少し躊躇した着ぐるみから声が漏れだす。

「あの人、私たちの……お父さん」

第四章了

第1話「授業参観」 00・01・02・03

第5章「百獣の王」

第1話「授業参観」

00

陽気な音楽と共にネズミやアヒルの着ぐるみに身を包んだ人が激しく踊っている……などという光景が嘘のように、暗く沈んだ闇が支配する空間になっている。

ここはネズミランドというテーマパークなのだろうが、開園中の華やかさは微塵もない。

須藤 久未弥は、この閉園後のテーマパークに一人佇んでいた。

「ねえ、誰かいないの？僕もう帰りたいよ」

と言うと、目の前のステージに、一本のスポットライトが照らされ、その先には土下座をしている父親が照らし出される。

父は言う。

「久未弥、お前に帰る場所なんてあるのかい？」

「……っ！ お父さんが僕の帰る場所を作ってくれなかったんじゃないか」

「なにを言ってるんだ、カツ子くんのお父さんなんて、帰る場所を壊してしまっただじゃあないか」

「他の人は関係ないよ！」

「そんな事はない、お前と父さんは親子ではあるが、言ってしまえば他人なのだよ、俺はお前ではないし、お前は俺ではない、お前は帰る場所というものを作れるのか？」

「……わかんないよ」

「そうだろ？ 俺もわからないまま生きてきて、結果、帰る場所と

「いつものをお前に作ってやれなかった」

「詭弁だよ」

「そうかもな、だが、父さんもお前と同じ一人の人間なのだと
ことを忘れるな」

「……………」

「……………」

「……………」

覚醒。

最悪の目覚めである。

「もっともらしいことを言いやがって」

先日のカツ子の告白のせいか、夢の中のふざけた父親まで説教じ
みた事を言い出す始末である。

「……………帰る場所、か」

01

「……………」

「どうか、これはさすがにバレるよね？」

「ん？ そうかな？」

「うん、だよな」

「ブッチョバカだから大丈夫だよな？」

「超バカだからね」

「うん、ほんと、バカみたいに、私たちのこと信じてくれるから」

「……………」

02

「は？ 授業参観？」

とライ丸姉妹が突きつけたプリントを前に、ブッチョはすっとな

きょうな声をあげる。

「（え？ ブツチヨ授業参観知らないの？）」と丸美が言う。

「ぶっ、それぐらい知ってるわ！ そうじゃなくて、何で俺にプリント渡すんだよ」

「ブツチヨだけじゃないよ、カツ子姉ちゃんにも渡したもん」とライ子が言う。

「ええ、いただきました。ブツチヨさんは行かないんですか？」「とカツ子は行く気のようにだ。

「カツ子が行くならいいじゃねえか。なんでお前から自分の親……」
と言いかけたところで、ブツチヨは先日の出来事を思い出す。

今まで思っていたイメージとは違うライ丸姉妹の父親。

この姉妹にも何か思うところがあるのだろうか。

「ったく、しょうがねえな、行ってやるよ」

とブツチヨが折れると。

「ほんと？ やったー！」「（二人とも絶対だよ！）」

と二人でうれしそうにピョンピョンと飛び跳ねる。

「でも、ちゃんとした服とか持ってねえぞ？」とブツチヨが言うと。

「あつ、ちゃんと用意してありますよ」「とカツ子は奥の部屋からスーツを持ってくる。

「予定済みかよ！ なんかはめられた気がするんだが」と言うと。

「あんま気にするとハゲるよ？」「（血尿出すの？）」「
と言いたい放題だ。

こうして一同は、小学校に登校する事になった次第である。

03

授業参観日当日。

ライ丸姉妹からは、10時30分までに来ればいいから、と言われている。

しかし9時30分をまわった現在、久未弥ははまだコンビニでバイト中である。

「くっそ、あいつ、いつもは遅刻なんてしねえのに、なんで今日にかぎってなんだよ」

どうやら交代のバイトがまだ到着していないようである。

10時までには行ける、と電話がかかってきてはいるのだが気をもんでしまう。

こんなこともあるのかと、久未弥はバイトのロッカーにスーツを用意しており、愛車のフェラーリ（自転車）もすぐに出られるように暖気運転させている。

とりあえずカツ子には悪いが、先に行っていてもらおうよう電話してある。ライ丸達もカツ子の顔を見ればひとまず安心するだろう。

レジに立ちながら久未弥は、自分の小学生の頃を思い出していた。父親に捨てられた久未弥にとって授業参観とは、幸せな家族を見せ付けられるイベントのように思えてならなかった。

自分を引き取ってくれた叔父さん夫婦などは、一度も見に来てくれた事がない。

しかし、親が自分達の教室に現れてうれしそうに手を振る子や、まだかまだかと親を待ちわびている子、などの気持ちも分からないではない。

実際久未弥も、自分を捨てた父親がもしかしたらこの日ばかりは自分を見に来るかもしれない、という期待を毎回抱いているのだが、結局のところ一度も現れた試しはないのだが。

だがやはり子供にとって、親が自分のために教室まで来てくれる、というのはうれしいものである。

なので、ただ行くだけでライ丸姉妹を喜ばす事ができるこのイベントにはぜひ行きたいのだが、それがままならない。

などと考えていると、ようやく交代のバイトが出勤してきたようである。

手早くスーツに着替えた久未弥は愛車にまたがり、ライ丸姉妹がかよう小学校へと向かっていく。

この時間なら、なんとか間に合うだろう。と思っていると、前方でおばあさんが大きな荷物を抱えて辺りを見回している。

あ、もしかしてこれって、ドラマとかでよく見る授業参観に間に合わないって流れ？と思ったので、見てみないふりを決め込む事にする。

そしておばあさんの横を通り過ぎようとしたその時、久未弥の腕をおばあさんが掴み、久未弥の自転車は転倒してしまう。

「ぎゃあ！ ばあさん殺す気か？ あんた暗殺者か」とあまりの出来事に動揺している。

「年寄りが困っておるのに、無視して通り過ぎようとするとはなにごとか」などとおばあさんは言い出す。

「しょうがねえな、で、どうしたってんだ？」

「道に迷ってしまってねえ、ここへ連れて行っておくれ」と言いながら、地図の書いてある紙を取り出す。

その地図を見ると、目的の場所は隣町である。

「無理、遠すぎんだろ」と言う。

「貴様、声を掛けたなら、責任をもって連れていけよ」とばあさんは言うが、久未弥は声など掛けてはいない。

はたして久未弥は授業参観に間に合うのであろうか。

授業開始まで後1分。

ライ子は自分の席に座り、そわそわしながらブツチヨの到着を待っていた。

すでに教室の後方では、さまざまな年齢や、さまざまな顔、さまざまな格好の父兄の方々が並んでいる。

しかしライ子の待ち人の姿は、その中には見受けられない。

先ほどから間違い探しの最後の一つを見つけようとするように、何度も、何度も、繰り返し後ろを振り向き見直しているのだが。

ふとライ子の頭に、いつか見たドラマの内容がよぎる。主人公が子供の授業参観に行こうとするのだが、トラブルに巻き込まれて間に合わない、という内容だった。

そのドラマのオチは子供が主人公を許す、というものだったが、もし自分がそのドラマの子供だとしても、主人公を許してやる自信がない。

などと考えていると、教室の後ろの扉が開き、人が入ってくる。時間的に最後であろうその人は、太ったおばさんだった。

その太ったおばさんに、少々照れ笑いしながら手を振るクラスメイトの女の子がライ子の視界に入る。

ライ子の目には、そのクラスメイトがあざ笑っているように見えた。

そして、授業開始を告げるように教室の前方の扉が開き、教室内の全員が先生が入ってくるであろう扉に注目する。

ライ子は、タイムアップを宣告した先生を教室に入れないように、呪いの目つきで開いた扉を睨んでいると。

「おっ、こっち逆かい。って、お前学校でも着ぐるみ着てんのか」

とライ子に向かつて言いながら入ってきたのは、スーツ姿のブツ
チヨであった。

「ちよっ、恥ずかしいから早く後ろ行ってよ」とライ子が言う
と、「わかってるよ、そう急かすなって」と言いながらブツチヨは、
ライ子の横を通り過ぎながら教室の後方へと移動する。

そんな二人のやりとりには、教室中からクスクスと笑い声が漏れて
いて、ライ子は恥ずかしがりながらも内心うれいのであった。

そんなこんなで授業が始まる。この時間は算数の授業のようだ。

「じゃあ、この問題分かる人」と先生が黒板に問題を書いて言う
と、教室中のほぼ全員が、はい！という元気な声と共に、天井に届
けとばかりに手を挙げだす。ライ子も他のクラスメイトに負けじと
手を挙げている。

先生は、どの子にしようかと考えながら見回し。

「んー、じゃあ吉田 冬子さん」

と先生が言う。

「はい！」

と元気よく返事しながらライ子が立ち上がり、教室の前まで進み、
黒板に問題の答えを書く。

「はい、よくできました。拍手」

という先生の言葉で、教室の中は拍手で包まれる。

ライ子は拍手するブツチヨをチラリと見ると、照れながら自分の
席に戻っていく。

05

そんな調子で授業は進み、これといって何事もなく授業終了のチ
ヤムが鳴る。

授業が終わると、それぞれに自分の親の元へ寄っていく子供たち。
ライ子もブツチヨの元にやってくる。

「ブツチヨ、来てくれてありがと。でも、何かトラブルに巻き込まれて来られなくなるような心配がしたんだけど、大丈夫だった？」などと来るなり超能力者じみた事を言い出す。

「ああ、来る途中変なばあさんにかまされたけど、レイさんに電話で頼んで置いてきた。俺がどっかのドラマの主人公だったら間に合わなかったかもな。」

それよりカツ子は来てないのか？

「え？ううん、だいぶ早く来てくれたんだけど、ここに来るまでが限界だったみたい」

カツ子もあの告白以降目を見て話すようになるなど、だいぶ情緒も安定してきてはいるが、さすがにまだ他人の視線にさらされるとパニックに陥るらしい。

「そうか、学校なら隠れる所も沢山あるだろ」

「うん、もう丸美の授業始まつちゃうし、探してる暇無いから行こっか」

と、二人ともひどい事を言いながら丸美の教室に向かう。

ブツチヨが教室の扉を開くと丸美は目の前にいたが、丸美は気づく様子がない。

「ブツチヨそっちは前だって、もう、絶対わざとだろそれ」とライ子もブツチヨの後に続いて教室の前方から入っていく。

そんな二人を教室中の子供や父兄が注目すると、ずっと後ろを向いていた丸美もそれに気づき、満面の笑みになる。

「おう、丸美。授業がんばれよ」と言いながら教室の後方に移動するブツチヨ。

「（あれ？カツ子姉ちゃんは？だいぶ前に一回見たけど）」

「（ああ、あいつは今頃かくれんぼしてる最中だ）」

「（いつものように凄いダッシュだったよ）」

などと手話で話していると先生が入ってくる。授業の始まりのようだ。

「おい、お前は自分の教室に戻んなくていいのかよ」とブッチョが隣のライ子に言う。

「うん、私はいいの。それよりもちゃんと丸美を見てよ」

丸美の授業は国語で、どうやら音読をさせるようである。

「じゃあここを読んでくれる人」

と先生が言うと、先ほど見た授業のように子供たちは元気よく手を挙げる。

丸美も元気よく手を挙げているのを確認すると。

「はい！・・・と言ってる」

と突然ライ子が声を上げる。

「え？あー、そ、それじゃあ吉田よした 杏奈さん？」と、先生も戸惑い気味に丸美を指名する。

それを聞いて丸美は立ち上がり、教科書を持ってまっすぐ伸ばした腕を目の高さまで持ち上げると。

「・・・(笑)」

「おじいさんは、やまへしばかりに、おばあさんは、かわへせんたくにいきました。・・・と言ってる」

と、いつものネタをやりだす。それはただライ子が読んでいるだけじゃないのか？というツッコミを入れる暇も無く、ライ子はそのまま丸美が音読する部分を読みきってしまった。

「えー、あー、はい、よく読めました、じゃあ拍手」

教室は戸惑いの拍手が起こるが、ブッチョとライ子は全開で拍手する。

そんなブッチョとライ子に丸美は、満面の笑みで親指を立てて答える。

それ以降、見せ場の終わった丸美は、足をブラブラさせたりリズムを取ったりと、常にリラックス状態で授業を受ける。それを見てブッチョは、こいつはライ子より大物だろうと思うのであった。

「ばいばーい」

下校時間になると、ライ子も丸美もそれぞれ友達に挨拶を交わしながら帰っていく。

この学校は、いつもは集団下校なのだが、今日に限っては親と一緒に帰るらしい。

満足気なライ丸姉妹をよそに何か忘れていているような気がしたブツチヨは、校門辺りで考えていると。

「おお、あんた、さっきはすまんかったなあ」と声を掛けながら、あの迷子のばあさんが歩いてくる。

「あれ？ ばあさん目的の場所には行けたのか？」と聞くと。

「目的が向こうからやってきてくれたから大丈夫じゃ」

などと言われ、こいつポケてんのか？ と思っっていると。

「母上、そんなに急いで歩くから迷子になるでござる」

とレイさんが、ばあさんの荷物を持って現れる。

どうやらこのばあさんはレイさんの母親で、レイさんに会いに行く途中だったようだ。

ばあさんは周りを見てから、ライ丸姉妹に向かって。

「お嬢ちゃん達すまんかったなあ、授業参観に行く途中にお父さんひき止めちまって。」

今日はお母さんは来てないのかい？」と言われ。

「あー」

とようやく忘れていた事に三人が気づくと。

「ブツチヨさああん、ライ丸ちゃんたちい、先に帰ろうとするなんてヒドイですよ」「」

との声に三人が振り向くと、そこには全身白い粉まみれのカツ子

が泣いて立っていた。

「わあ、カツ子姉ちゃんどうしたのそれ」

「気がついたら運動場の横の倉庫にいてえ、白い粉がいつぱいでしたあ」「」

どうやら体育倉庫の中に逃げ込んだ時に、ライン引き用の消石灰をぶちまけたようである。

「（カツ子姉ちゃん、その粉が目に入るとあぶないよ）」

「ええっ、でも目をつむったままじゃ帰れないよう」「とあたふたしている。

「ほら、ちよつとしゃがみなつせ」

ばあさんはカツ子をしゃがませ、取り出したハンカチで顔の粉を払ってやる。

「え？ あ、ありがとうございます。って誰ですか？」「」

「レイさんのお母さんだ。ここに来る前にちよつと知り合ってたな」

ばあさんは丁寧に、ハンカチを水筒の水で濡らしてカツ子の顔をふいてやる。

「よし、こんなもんでいいでしょ。あんたも母親なら、もっとしっかりせんといかんよ」

「え？ えつと、そうですね、面目ないです」「」

ばあさんの勘違いを、そのままカツ子が受け入れると。

「なんと、そなたらは家族であったのか？」などとレイさんお得意の空気読めない発言をする。

「またお前は何も考えんと喋りおつて。」

ほいじゃあ後は家族で仲良く帰りなつせ」とばあさんはレイさんを引っ張り去っていく。どうやら母親は空気が読めるようである。

久未弥はそんなレイさん親子を見送りながら、そんな二人の出す”親子”らしい雰囲気をなんだか羨ましい、と感じる。

自分を捨てた父親の記憶も曖昧なのだが、母親に関しては自分を産んですぐ他界してしまったようなので、思い出もないのである。

それにもかかわらず、羨ましいと思わせる親子の関係というのは良いなと思う久未弥であった。

07

帰りの道すがら、カツ子がコンビニに寄りたいたいと言い出したので、コンビニに入る事にするのだが、よく粉まみれの格好で店に入れるものである。

そんな事を思いながら、ブッチョがコンビニの入り口にさしかかると、背後から軽くスーツの裾を引っ張られる。

ブッチョが振り向くと、そこには背中に隠れるようにブッチョを見つめるライ丸姉妹がいた。

「どうした、中に入らないのか？」

ライ丸姉妹がブッチョから視線をはずして見た先を見ると、そこにはコンビニ袋を下げた金髪にピアスをしてスウェット姿の男が店から出てきていた。

コンビニの前で立ち止まる一団に、自分の娘達がいることに気づいた金髪の男は。

「あ？ あんたら何者だ？」と自分の娘達と同行する大人の男女に、訝しげな視線を向け、腕を組みながら尋ねる。

「ん？ えっと、いつも娘さん達を連れまわしちゃってすみませんね。奥さんは今日も仕事ですか？」とブッチョが逆に質問する。

「は？ なに言ってるんだあんた、分かってんだろ、あんなヤツもういねえよ」と男は完全に警戒しながら話す。

「あれ？ そうですか、でもすみませんね、いつもお世話になって」

と、なぜか二人の話はかみ合わない。

「お、お父さん、なんでもないよ、すぐ帰るから先に帰ってて」とライ子が二人の会話に割り込んでくる。

「（ブッチョもいいから早く買い物済ませよう）」と丸美は戸惑う

ブツチヨに入店を促す。

そんな光景を見て男は、組んだ腕を解き、片手をスウェットのポケットに入れる。

「あー……、そうですね、あなた達が、いつもウチの娘達がお世話になって、ありがとうございます」と男は思い出したように態度を一変させる。

「ああ、いいえ、こちらは一緒に遊んでるだけですから」とブツチヨが返す。

「いえ、こちらもいつも助かってます」

ようやく話がかみ合いだし、今までと違いちゃんとした受け答えをするライ丸姉妹の父親を見てブツチヨは、普通に話せばまともな人なのかな、と思っている。

「冬子、杏奈、今日はもう帰ってきな」と父親はライ丸姉妹に向かって言う。

「えっ？でも……うん、わかった。ごめんねブツチヨ、カツ子姉ちゃん」とライ子は名残惜しそうにブツチヨとカツ子を見ながら、父親の元へ離れていく。

「（ブツチヨ、カツ子姉ちゃん、今日はありがとうね）」と言いなから丸美もライ子に続いていく。

「ああ、じゃあまたな」

「またね、二人とも」

と言いながらブツチヨとカツ子は、帰っていく家族三人を見送るのであった。

ブツチヨから見たライ丸姉妹の家族の姿は、先ほどのレイさん親子とは違い、なぜか”親子”という雰囲気を感じられなかった。

久未弥は今気がつくべきだったのだ、なぜ目の前で去っていく家族が”親子”らしく感じなかったのか。

またしても”最後のチャンス”を逃した久未弥に、前回のような幸運は訪れないのである。

第1話了

第2話「誕生日」 010203

第2話「誕生日」

01

「はあ……」

冬子はカレンダーを眺めながら溜息を漏らす。

今日は2月6日、冬子の誕生日である。

冬子の家では、誕生日を祝うという習慣はないのだが、前に一度クラスメイトの誕生日会というものに呼ばれて行ったことがあり、そこではただその日に生まれたというだけで主役のように祝福されるクラスメイトがいた。

この世に生を受けた事に対し、親が子供のために豪華な料理をこしらえたり、ケーキを食べながら祝うその光景を見て冬子は、この子はよほど”良い子”で、親に叱られたりもしないからここまで祝福されるのだろう、と思ったものだった。

同時に、自分もこの子のように、この世に生まれた事を祝福されたらどんなに素敵な事だろうとも想像していたのである。

あの授業参観の日から三日、冬子と杏奈はあの日から父親にブッチョ達に会うことを禁止されていた。

なぜか、という疑問はあったのだが、冬子たち子供にとって親に逆らうという考えは毛頭ないのである。

しかし、このままここにいるより、ブッチョに自分は今日が誕生日だと打ち明ければ、もしかしたら祝福してくれるかもしれない。そう思い、意を決して父親の目を盗み、とはいえ、父親は出掛けしていないのだが、カツ子のマンションへやってきたのである。

そんな冬子にブッチョが放った言葉は。

「ちよつと丸美借りて出掛けてくるから、カツ子とライ子は待つてくれ」との事だった。

期待はしていなかったとはいえ冬子は、誕生日の話をきりだす前にくじかれた事で、何もする気がおこらなくなってしまう、ブッチヨと丸美が帰ってくるまでふて寝することになってしまう。

「まあしょうがないか、私はお父さんとの約束も守れない”悪い子”だから」

と、あきらめのまま冬子の誕生日は過ぎていくのであった。

02

一方ブッチヨと丸美の二人は、病院にやってきていた。

「(ブッチヨ、私どこも悪くないよ?)」と丸美が不安そうに手話でたずねると、

「(ちよつとお前に会ってもらいたい子がいるんだ)」とブッチヨも手話で答える。

ブッチヨは丸美の手を引いて小児科病棟までやってくると、目の前に行く看護師をつかまえて、

「ブッチヨですけど、今からいいですかね」とたずねると、その看護師はナースセンターの奥に誰かを呼びにいつてしまった。

そんな様子を不安そうに見つめる杏奈あんなは、この病院の小児病棟に来るのは今回が初めてではない。

病院にかかる事が皆無なこの健康優良少女は、一度だけこの病棟に入院したことがある。

もちろん良い記憶などではない。しかし、その事によって得られたモノもあつたので良しとするところが大物たるゆえんなのかもしれない。

しばらくすると、先ほどの看護師はドクターらしい若い男性を引き連れて戻ってきた。

「（やあ、君が杏奈ちゃんか、初めまして、僕は倉持くらもちと言います）」と倉持と名乗った男性は、丸美に丁寧ていねいに手話で挨拶する。

この若い医師は最近この病院に入ってきたらしく、丸美とは面識が無いらしい。

初対面の大人に、いきなりあだ名ではない本当の名前を呼ばれ戸惑う丸美をよそに、倉持医師とブッチョは丸美を連れて歩き出す。

いよいよ人体実験をされるのかも、と丸美が恐怖に震えていると、連れてこられたのは、自分の姉と同じくらいの年齢であろうかという少女の病室であった。

三人が病室に入ると、その少女は倉持医師とブッチョの二人と短い会話を交わした後、丸美の方を向いて、

「（初めまして、私は鈴木すずき 栞しおといいます）」と手話で挨拶をする。

「（は、初めまして、よ、吉田 杏奈といいます）」と丸美も丁寧ていねいに、緊張してどもった感じで手話で自己紹介する。

「（ふふふ、杏奈ちゃんて面白い子ね。耳が聞こえない者どうし仲良くしましょ）」と栞と名乗った少女が言い出す。

「（え？ でも栞姉ちゃん、今しゃべってなかった？）」

丸美はどういう事か分からず、首をかしげながらブッチョを見る。

「（そう、今日お前に知ってもらいたかったのは、この事なんだ）」

03

話は二日前にさかのぼる。

ブッチョはいつものように、この病院でテンホー氏とホスピタルクラウンの活動をしていた。

順番に子供を訪問していき、次のベッドは、母親と一緒にいる少

女だった。

「こんにちは、僕はクラウンブッチョ、なにして遊ぼっか」とブッチョが近づいていく。

すると少女は、

「こんにちはピエロさん、私は鈴木 栞といいます」

と、なにやら喉の病気なのだろうか、栞ちゃんは低い声で、声を絞り出すように話す。

「じゃあ栞ちゃん風船で動物作ろうか、何か作って欲しい動物はあるかな？何でも作っちゃうよ」とブッチョが言うと、栞ちゃんはしばらくブッチョの口元を見ながら考えた挙げ句、

「ごめんなさい、もう一度言ってください」などと言い出す。

滑舌が悪かったのかな、とブッチョが言い直そうとすると、栞ちゃんの母親が、

「すみません、この子耳が聞こえないんで、短い言葉しか読みとれないんです」と言う。

「え？でも、今しゃべってましたよね、っていうか、聞こえないのにしゃべってる事わかるってエスパーか？」

とブッチョが素のリアクションをとってしまうと、後ろからテンホー氏におもちゃのハンマーで叩かれてしまう。

「こらこらブッチョ君、ミーティングで話を聞いてなかったのか？」

「いや、聞いてましたけど……」

確かにブッチョはミーティングで、今日は耳の聞こえない子がいることは聞いていたのだが、てっきり手話で話すとばかり思っていたので、いきなりしゃべられて訳がわからなくなったようだ。

とりあえずブッチョは気を取り直し、クラウンとして子供達と遊んでいく。

そして一通り終わった後、ブッチョとテンホー氏は小児科の倉持医師に、今回の栞ちゃんの話を書く事にする。

「それは“口話法”^{くわわほう}”といって、耳に障害のある人が、人の話す事を

理解し、そして自らも声を発して会話する能力を身につける事をいうんだ。

人の話を理解するのは、例えば“読唇術”^{どくしんじゆつ}、人が話す口の動きなどで言葉を読み取る方法がある。

次に声を出す方だけど、これは喉の振動と口の形、舌の使い方です。

そのどちらにも健常者の協力と、たいへんな努力が必要となってくるんだ」

ブッチョは、読唇術というのは昔見た映画に出てきて聞いた事があつたが、忍者やスパイなどの常人離れたキャラクターが使っていたので、相当な修行を積まないと使えないものだと思っていた。実際修得するにはたいへんなのだろう。

うちの丸美はエスパー（？）なので、話している事を理解する事は問題ない。しかし声を出す事はたいへんな努力を要することだろう。

さらに倉持医師は、

「口話法を身につけるなら、子供の頃から訓練した方が身に付きやすい。どちらにしても協力者は必要だけどね」と付け加える。

それを聞いてブッチョは、

「先生、栞ちゃんに会わせたい子がいるんですが……」

で、現在に至るわけである。

非常に興味を示した丸美は、すでに倉持医師と鈴木母子から発声方を教わっている。

丸美は自分の出した音が“声”として認識されるのがよほど嬉しいらしく、教えてもらったことを何度も反復していく。

どうも一文字づつ練習するよりも、単語で覚える方が効果が実感できて楽しいらしい。

こういった練習法からも、つらい事を楽しみながら乗り越えていくと努力していたであろう、栞ちゃんの家族の人柄が見えるよう

である。

そして、聞き取りづらいなながらも、小一時間で三つほどの単語を発声できるようになったのには、倉持医師や鈴木母も目を丸くしていた。

その後、とりあえずブツチヨが必要と思える単語と、丸美セレクションの単語を教わる頃には、丸美の集中力に鬼気迫るものを感じていた。

「ん……」

冬子が目を覚ますと、部屋の中はすでに真っ暗だった。

どれほど眠ってしまったのであろうか、いつのまにか掛けられていた毛布をはぎながら上半身を起こす。

目元が濡れたような感触がある。どんな夢を見ていたのか覚えていないが、自分は泣いていたようだ。

口元も濡れているが、よだれも垂らしていたようである。

暗い部屋の中には、ぼんやりとした月明かりと、電化製品の待機中を告げるランプだけが部屋を照らしている。

静かな部屋に聞こえる空調の音を聞いて、ようやく自分はカツ子のマンションで寝てしまった事に気づく。

「……カツ子姉ちゃん？」

どうも人の気配がしないので、名前を呼んでみるが返事がない。

「桜姉ちゃん？」

不安になり本名を呼んでみたりするが、やはり返事がない。

目を覚まして誰もいないというのは、こうまで寂しいものなのだろうか。

なにやら食べ物のおいがするのだが、テーブルに食べ物はあるではない。

もしかしたら自分が寝ている間に食事を済ませ、みんなどこかへ行ってしまったのだろうか。

そう思った時、冬子は重大な事を思い出し、同時に胸が締め付けられたように痛くなる。

誕生日。

どうしてこんな事になってしまったんだろう。

期待はしていなかった。

とは言わないが、

ただ誕生日を祝ってもらいたくて、お父さんの言いつけを破ってまでやってきたカツ子のマンション。

なのに、ただ誕生日だと伝えることすらもままならない。

そればかりか、みんなは自分を差し置いて食事を済ませ出掛けてしまった。

なんで私は生まれた事を祝ってもらえないんだろう。

私が悪い子だから？

私がうるさい子だから？

私が邪魔な子だから？

私は最低な子だから。

でも、それでも言うってほしい。

ケーキも、プレゼントも、豪華な食事もいらさない。

いつか聞いた、クラスメイトが言われていた言葉。

この世に自分が生を受けたというだけ、ただそれだけのためだけにある記念日。

その日だけ、自分にだけに向けられる言葉。

祝福の言葉。

ただ一言。

お誕生日おめでとう。

そう願った冬子は、自分でも気づかないうちに嗚咽を漏らしていた。

「うっ……うっ……誰かあ、誰かいないのぉ？ 桜姉ちゃん、

杏奈あ、ブツチヨお」

冬子が、助けを求めるように三人の名前を呼ぶと、

「お……でえ……ちゃん……」

という曇った様な声が後ろから聞こえる。

「えっ?」

冬子が声のした方へ振り向くと、部屋の明かりがともしり。

「お誕生日おめでとう!」

と、先ほど冬子が助けを求めて呼んだ三人がクラッカーを手に持ち立っていた。

「お……でえ……ちゃん……（お誕生日おめでとう）」という丸美の声を合図に、三人はクラッカーを鳴らす。

「え? え? みんな何で? じゃなくて、あれ? 杏奈、声?」

あまりの出来事に状況が理解できない冬子に三人が説明する。

「悪かったなライ子、さつき丸美に誕生日って聞いたからさ。てか、なんで俺だけ本名じゃねえんだよ」

「（お姉ちゃんびっくりした? 今日はブツチヨと声を出す練習してきたんだよ。上手に言えたかな?）」

「「ごめんねライ子ちゃん、急だったんでケーキとフライドチキンしか用意できなかったの」」

よく見ると台所には、ケーキの箱とフライドチキンの箱が置いてある。

カッ子とブツチヨが、テーブルの上にケーキとフライドチキンを並べ、グラスにジュースを注いで行く。

丸美がケーキの上にロウソクを刺していき、ブツチヨがそれに火を灯す。

そして丸美が部屋の照明を消すと、ケーキの上で灯っている火が、暗くなった部屋をやわらかく照らしていく。

「（それじゃ、あらためて。せーの）」

「ハッピーバースディトゥーユー、ハッピーバースディトゥーユー

……」

冬子の目の前では、ロウソクの明かりに照らされた三人が冬子のために、誕生日の祝福の歌をうたっている。

その光景は幻想的で、あたたかい気分らせてくれる。

あのいつかのクラスメイトも同じような気持ちだったのだろうか。こんなにあたたかくて、

こんなにうれしくて、

こんなにしあわせな気分を味わっていたのだろうか。

それを今、自分が受けているのである。

夢にまでみた祝福を。

「……ハッピーバースデーディア、冬子ー、ハッピーバースディトゥーユーー」

歌が終わり、拍手の中、みんなの視線が冬子に集まる。ここで主役がロウソクの火を吹き消すのだ。

だが冬子はなかなか火を消そうとしない。

「（お姉ちゃん、早くしないとロウソク溶けちゃうよ）」
と催促すると、

「うっ……うっうっ……」と、着ぐるみの中から聞こえてくる。

「お前泣いてんのか？ 早くしないと、せつかくのケーキがロウソクまみれで食べなくなるぞ」とブツチョヨが言う。

「ぶあかあっ、泣いてっ……なんかつ……ないわあっ」

と言うと、冬子は走ってカツ子の寝室に入り、ドアを勢いよく閉める。

その寝室の方から、「わーわーっ！」という叫び声が聞こえたかと思うと、すぐに戻ってきて、

「みんなっ、ありがとうっ」

と言いながら、勢いよくひと吹きでロウソクの火を吹き消す。

それからみんなで楽しくケーキやフライドチキンを食べ、冬子の生まれて初めての誕生日は、幸せな気分のまま過ぎていくのであった。

しかしこの幸せな日を境に、ライ丸姉妹はブッチョとカッ子の前に姿を現さなくなる……あの雨の降りしきる夜の日まで。

第2話了

第3話「声よとどけ」01とか02

第3話「声よとどけ」

01

ざああああああつ。

三月も半ばに差し掛かろうという時期に、季節はずれの大雨である。

昨夜から降り出した雨は、丸一日たった現在に至っても雨足の弱まる気配がない。

久未弥は暇をもてあましていた。

バイトが休みなのはいいとしても、カツ子は東京の母親の容態が芳しくないとのこと、昨日から一人で東京に行っている。

さらに、あのライ子の誕生日以降、ライ丸姉妹はカツ子のマンションに来なくなってしまった。

体調でも悪くなったのかと心配になり、家まで行こうと思ったのだが、カツ子には連絡がいつているらしく、大丈夫、との事だったのでそれを信じて待つことにする。

なので、カツ子が大量に買い込んだ四人分の食料を二人で消化しているうちに、カツ子は最近目に見えて太っていき、それを指摘した久未弥はダイエットにつきあわされる事になる。

そんなやりとりも、ライ丸姉妹がいないと味気ないと感じる二人であった。

ざああああああつ……

ととつとととつと……

雨音と、トタン屋根から流れ落ちる雨水の音が、静かな部屋にリズムを刻むように流れ込んでくる。

ざああああああつ……

とととととととととと……

どん、どん、

ざあああああああつ……

とととととととととと……

どん、どん、

「あ？」

久未弥は雨音の中に、ドアを叩く音が混じっている事に気づく。

「なんだ？こんな時間に、宅配便か？」

時計を見ると、午後10時をまわったところである。

「はい、なんですか」と言いながらドアを開けると、そこには、びしょ濡れで立っているライ丸姉妹の姿があった。

「おい、お前らどうしたんだよ」

とブツチヨがたずねると、

「ブツチヨ、お願い、なにも聞かずに私たちを泊めて？」などと言
い出す。

もう三月の中旬とはいえまだ気温は低く、夜中にびしょ濡れでは
風邪をひいてしまう。

「とりあえず入れ、今風呂沸かしてやるから」と言って、真夜中の
訪問者を招き入れる。

部屋が濡れちやうから、と風呂が沸くまで玄関先で待とうとする
姉妹を久未弥は強引にあがらせる。

「そんな事にすんな、今タオル持ってきてやるからストーブにあ
たつてちよつと待ってる」

久未弥は家中のタオルを引っ張りだし、姉妹に渡してやる。

よく見ると、丸美の唇は紫色になっていた。

「ほら、濡れた服脱げ、すぐ洗濯してやるから」

そう言われ、がくがくと震えながら脱ぎ出す丸美をよそに、ライ
子は震えながらも着ぐるみを脱ごうとはしない。

「お前そのままだと風邪ひくぞ」と言つと、

「やだ」などと言つ。

かたくななまでに着ぐるみの中身を見せたがらないライ子に久未弥が折れる。

「わかったよ、せめて風呂から出たら、タオルなんかで身を隠してくれ」

と言いながら風呂の湯加減を確かめに行く。

もういいぞ、と言ってライ丸姉妹を風呂に送り出し、入ったのを確認すると、脱ぎ捨てられた服を洗濯機にかけてやる。

そこで久未弥は思い至る、

「あ、やべえ、あいつらの着るものが何もねえ」

こんな時間に開いている店など限られている。

子供用の衣類などを販売している店舗など、この時間帯に開店しているところは無いだらう。

今洗濯している服が乾くまで待たせる事などできる訳がない。

「しょうがない、せめて下着だけでも買ってきてやるか」

久未弥はバイト先のコンビニで、子供用の下着を販売しているのを思い出す。

「おい、ちょっとコンビニ行ってくるから」と言い残し、コンビニに向かう。

02

さすがにバイト先のコンビニで子供用の下着を買うのはためらわれ、他のコンビニに向かう。

そこにも上下の下着が置いてあり、それを手に取り思う。

こんな時間に傘も差さずに訪問してきたライ丸姉妹。

ひと月以上ぶりに姿を見たと思ったら、この異常事態である。

タイミング悪くカツ子は東京に出掛けていて、あの様子だとライ丸姉妹は先にカツ子を頼って行ったのだらう。

などと思っていると、子供用の下着を握りしめながら呆けている無表情の男に店員も不審がりだったので、商品を精算しようとする

が、ライ丸姉妹の様子だと腹も空かしているかもと食料も一緒に購入する。

帰りの道すがら、コンビニの袋をぶらさげながら、まさか自分が子供用の下着を購入するとは夢にも思っていなかった久未弥は、少し妙な気分になる。

子供用の下着は、バイト中ごくまれに売れていく商品で、親らしき客が購入していくのが普通である。

先ほどのコンビニの店員の目にも、自分は人の親のように見えたのであるうか。

そもそも、将来自分は人の親というものになれるのだろうか。いつか夢で問われた“帰る場所”。

それが住む家などという無機物ではない事はわかっている。

家族のために働いて生活費を稼ぎ、病気にかかれば心配して、楽しいときには一緒に笑い、悲しい時には一緒に泣く。

そんな事の積み重ねが、子供にとっての“帰る場所”になっていくのかもしれない。

母親は亡くなり、父親に捨てられ、家族のぬくもりを知らない久未弥にとって難しい命題ではあるが、この一年たらずの間に起こった出来事を思い返すとそんな気がするのであった。

アパートに戻ると、ライ丸姉妹はまだ風呂に入っており、脱衣所に新品の下着を置いて「ここに下着置いとくからな」と言うと、ガチャ、と浴室の扉が開こうとするが、

「わあ、杏奈、開けちゃダメだよ」という声と共に扉が閉め戻される。どうやら久未弥に気づかず丸美が出ようとしたらしい。

そんなこんなで二人が風呂から出てくるまで、こたつの上に食料を並べて待っていると、

「あやっただあ（食べ物だ）」と言いながら、下着姿の丸美が飛び出してくる。

「（おつ、だいぶ発音が上手くなった、ちゃんと練習してるようだ
な、えらいぞ）」と言った後に、

「とりあえず食べる前にこれ着とけ」と言って服を渡す。

丸美がそれに袖を通すと、その服は久未弥のスウェットらしく、
腕まくりしてしまえばちょうどワンピースのような格好になる。

着終わると、丸美はすぐさまこたつに入り食事に手をつける。

すると、脱衣所からもう一人ライ子が出てくるのだが、その格好
を見て久未弥は驚愕する。

頭はタオルでぐるぐる巻きにされていて、体はバスタオルで首か
ら隠し、腕や足などにもタオルが巻き付けられ、露出がゼロに押さ
えられている。たぶんこの子は肌が空気に触れると、灰になって消
えてしまうのだろう。

「……このさいまあいいや、お前も食え」

という久未弥の言葉を合図に、二人は飛びつくように食料をむさ
ぼり食っていく。

大量の食料が消費されていく様を眺めていると、会っていなかっ
たひと月という時間の長さを感じてしまう。

食事が終わると、落ち着いたのか丸美はそのまま寝てしまう。

すでに時間は11時30分をまわっており、食べてからすぐに寝
るな、とも言えず、することもないので残った二人も寝る事にする
のであった。

照明の消された部屋には、未だ止む気配のない雨の音と街灯の明かりが流れ込んでくる。

「眠れないのか？」

部屋の中に久未弥の声が響く。

「うん」

全身をタオルで包んだ少女は、そう答えながら上半身を起し、横で寝ている妹が剥いだ掛け布団を掛けなおしてやる。

「ブッチョも眠れないの？」

「……ああ」

いくら久未弥でも、なじみの姉妹のただ事ではない様子を目の当たりにして寝ていられるほど楽家ではない。

しばらくの沈黙の後、少女はためらいがちに口を開く。

「私ね、ブッチョに謝らなくちゃいけない事があるの」

「なんだよ、あらたまって」

と言いながら久未弥は、この姉妹が隠していた事実に対する告白をするであろうと思い、少女と同じように身を起こす。

聞いていた両親の想像とは違う父親の姿。それどころか、母親はいないなどという始末。

それについての告白と謝罪であろうと身構えていると。

「ブッチョの自転車のサドルに穴開けたの私なの」

と、衝撃発言。

「いつの話だよ！ てか、あれやったのお前だったのか！」

「うん、ごめん。最初のは振り回してた傘が偶然あたって穴が開い

ちゃって、どうしようって思ってたらブッチョが出てきて、思わず隠れてたら、ブッチョいきなりヤクザに喧嘩売りに行っちゃうんだもんビックリしちゃった。

でも、その後の二つの穴はわざとなの。

だってブッチョ、無表情のくせにいちいちリアクションが面白かったんだもん。ほんとごめんね」

などと言う。

「マジかあ、あの穴のせいで、雨降りの後に乗ると尻が濡れるんだよ」と、久未弥は少女の告白に対して愚痴を漏らす。

「うん……ほんと、ごめん……」

と少女が再度謝罪の言葉を言うと、二人の会話が途切れ、静寂が訪れる。

ざあああああああ……

こころなしか二人の間を流れる雨音が強くなった気がする。

久未弥が時計を見ると、時間は午前2時をまわろうとしていた。ぼんやりと時計を眺めていると、少女の方からなにやらごそごそと聞こえてきたので、久未弥が視線を戻すと、そこには頭部のタオルを取り去った少女の顔があった。

「おっなんか初めまして、って感じだな」

と、いきなりの事で戸惑う久未弥が初めて見る少女の顔は、ショートカットの髪の毛と強気そうな目が特徴の凛々しい女の子であった。

さらに鼻先に貼られた絆創膏が、やんちゃそうなイメージにぴったりで似合っていた。

「想像通り元気よさそうな顔してるなお前。

でもお前ら姉妹で全然感じが違うんだな」

と久未弥が言うと。

「うん、だって私たちほんとの姉妹じゃないもん」

「えっ？」

このいつも一緒の仲の良い姉妹に、血がつながっていないとの事

実に久未弥は戸惑う。

再び訪れる静寂。

しばらくの沈黙の後に、ライオンの皮を脱ぎ捨てた、冬子という名前のただの少女は言う。

「ブツチョ、はなし聞いてもらっていい？」

「私、最低な子なの」

04

「私のうちね、杏奈が来るまで、お父さんと私二人だけだったの。

お母さんは最初からいなくて、顔も分かんない」

冬子はどこを見るでもなく、とつとつと語り始める。

「私は悪い子で、毎日お父さんにうるさい、邪魔だ、って怒られて叩かれて、でもなにが悪くて怒られてるのかわからなくて、それが痛くていやだった、悲しかった。

でも一番悲しかったのは、大好きなお父さんが笑ってくれない事。

お父さんに喜んでもらいたくて、掃除をしたり、

お父さんにおいしいって言うてもらいたくて、ご飯を作ったり、

お父さんに褒められたくて、勉強もがんばったの、

でも、笑ってくれなかった。

大好きなお父さんだけど、夜中に酔っぱらって帰って来た時のお父さんは嫌い。

いつもより大きな声で怒って、いつもよりいっぱい叩かれる。

でもね、ある時お父さんが新しいお母さんを連れてきたの、今日からこの人がお前のお母さんだよって。

そのお母さんはかわいい女の子を連れていて、この人たちが今日

からあなたのお父さんとお姉ちゃんよ、ってお母さんに言われると、「杏奈です」ってかわいい声で言ったの。

それからは夢のようだった。

やさしいお母さんと妹と一緒にできて、お父さんも笑うようになっ
てくれた。

杏奈も、お姉ちゃんお姉ちゃんって、いつつもついてきて一緒に遊んだの。

毎日みんな一緒にご飯を食べて、

毎日みんな一緒にお風呂に入って、

毎日みんな一緒に並んで寝たの。

ほんとに楽しくて、うれしくて、しあわせだった……お母さんがいなくなっちゃうまでは。

ある日、突然お母さんはいなくなっちゃったの、杏奈を残して。

お父さんは、あの女、男と出て行きやがった、って言うてすごく怒ってた。

その時から、お父さんはまた笑わなくなって、前にも増して怒るようになつたの。

すごく怖かった、酔っぱらってなくてもすごく怒って、すごく叩くようになった。

でも、怒られて叩かれたのは私じゃなくて、杏奈だったの。

すごく怖かったけど、私はぜんぜん叩かれなくなった。

私ね、お父さんに怒られて、叩かれる杏奈を見て、こう思ったの。

よかった……って。

怖くて痛いことをされるのが、私じゃなくなってよかったと思っ
たの。

いつも痛くて悲しい思いをしなくて済むって思った。

叩かれる杏奈を、いつもそう思いながら見てた。

叩かれて泣きながら寄ってくる杏奈を、私の身代わりに怒られてくれた杏奈を、私はいつも慰めて抱きしめてやったの。

かわいそうになって。

最低でしょ？

そうやって私は、いやな事を全部杏奈に押し付けたの」

と、冬子は自嘲気味に話す。

「……」言葉に詰まる久未弥。

この子が抱えてきた自責の念の重さを考えれば、お前は最低な子なんかじゃない、などと軽々しく言えはしない。

そんな久未弥をよそに、冬子は続ける。

「でも、ある時、それじゃ済まない事が起きたの。

杏奈が、お父さんが暴れて倒した棚の下敷きになって病院に運ばれた。

頭部骨折だつて、そのせいで杏奈は耳が聞こえなくなった。

その時病院の先生に原因を聞かれたお父さんは、杏奈が棚に登ろうとして倒れたつて言ったの」

「……っ、お前それつて、違つつて言わなかったのかよ」と思わず久未弥が言つと。

「私だつて違つつて思ったけど、お父さん怖かったし、私の勘違いかもつて」などと言つ。

「そんなバカな、いくら父親だからつて、間違つた事を言つてたら、違つつて言わないと」

「わかんないよ、お父さんが間違つた事を言つたの？ なにが正しくて、なにが間違つてるの？ わかんないよ」

「……っ」

そうなのだ、何も知らない子供にとって、親というのはこの世の中の道しるべなのだ。

親は正しい、間違つた事など言うはずがない。

そうやって疑う余地などないのである。親も自分と同じ人間だと

。好しんちしんちしんちしんち

でも、そんな事はどうでもいいの、と言いながら続ける。

「シヨックだった。耳が聞こえない世界って想像できる？」

おしゃべりもできない、テレビの音も聞こえない、音楽だって聞こえないの。

想像した、想像すればするほど恐ろしかった。

この音、この会話、この曲、もし聞こえなかったとしたら、なんて不便でつまらなくて、そして寂しい世界だろうって。

私が杏奈の世界から音を奪ってしまった。

わかっている、実際ケガをさせたのはお父さんだけど、私が怒られていればこんな事にはならなかった。

杏奈は絶対私を恨んでるだろうと思った。

私の身代わりになったせいで、耳が聞こえなくなっただから。

でも、あの子ね、そんな事になってもね、お姉ちゃんお姉ちゃん、って笑って寄ってくるの。

声は聞こえなくてもわかる、あの子はこんな私に、大好きって言うてくれたの。

そんな杏奈に最初は戸惑ったけど、そんな妹を見て私は決めたの。

これからは、私が杏奈を守る、って。

耳が聞こえなくて不自由なら私がかわりに聞いてやり、言葉が話せなくて不便なら私がかわりに言うてやる。

私はいらなからって、杏奈にだけはかわいい服を買ってもらった。

そして、

これからお父さんが杏奈を叩こうとしたら、私が全部叩かれてやる、杏奈には指一本触れさせないって……」

そこまで聞かされて、久未弥は気づく。

「お前、それってまさか……」

と言いながら、冬子に巻き付けられたタオルを取り除いていく。

タオルの中から出てきたのは、無数のアザのある少女の体だった。

「最初はね、叩かれると痛くて我慢できなくて、私が泣いてるうちに杏奈も叩かれちゃった。

私がんばったよ、泣かないように、痛くても我慢するように、私は強くなるんだ、もっと強くなるって。

あの学校の図書館で読んだ図鑑に載っていた、百獣の王ライオンのように強くなるんだって。

だから私はライオンとして生きることにしたの。自分で着ぐるみを作ってたね。

便利なんだよ着ぐるみは、服で悩む事もないし、ケガや傷も隠せるし、それに、泣いてもわかんないし」

この少女は、あの着ぐるみの中にどれほどの悲しみを詰め込んでいたのだろうか、身勝手な大人のせいで翻弄される無垢な少女。

久未弥はなぜもっと早くに気づいてやれなかったのだろうかと思う、いや、気づこうと思えばできたはずなのだ、

なぜこの姉妹は、毎日自分たちの元へやってくるのか、なぜこの姉妹は、あれほど腹を空かしているのか。

少女たちの助けを求めるサインに、気づく事ができなかった自分を悔やむ。

この少女を救ってやらなければ、

この少女を楽にしてやらねば、

そう思った久未弥は、無意識に冬子を抱きしめていた。

「ブッチョ？」

「もう大丈夫だ、がんばったな冬子、もう充分だよ。

悪いのは全部大人なんだ、お前は全然悪くない。

もう安心しろ、

お前は最低な子なんかじゃない」

と久未弥が冬子に言う。と。

「うっ……うっ……」

と久未弥の腕の中の少女から嗚咽が漏れだしたかと思うと、大粒の涙を流し、大きな声で泣き始める。

「うわああああああああああああ……」

今までこの小さな少女の中にため込まれ、少女を壊してしまう程まで膨れ上がった悲しみを吐き出すように、

虚勢を張り続け、傷つき疲れはてたライオンが、悲しみの雄叫びをあげるように、冬子は泣いた。

「ブッチョおっ……助けて……助けてよお……もう私じゃどうしようもできないのっ……今日っ、お父さんがっ……」

子供の写真は高く売れるからっ、お前ら裸になれって言われてっ……杏奈と逃げてきたのっ……」

「……っ！」

どこの世界の親なのであろうか、子供を売ろうとするなどとは常軌を逸している。

「もう……私には無理なお……お父さんの事も……杏奈の事も……」

すでに限界だったのだろう、冬子は助けを求め続ける。

「ああ、後はもう大人の問題なんだ。まかせておけ」

「でもっ……私は杏奈にっ……ひどい事をしたのっ……」

大人の理不尽な暴力は、それから逃げた子供の心にまで傷を負わせてしまっていた。

「大丈夫だ、お前はがんばったんだ、あいつも恨んでなんかいない」

「そんな事ないっ……私はっ、杏奈に最低な事をしたのっ……」

冬子がそんな悲痛な叫びをあげると。

「おねえちゃん」

と、くぐもりながらもよく通る声が、すべての音をかき消すように部屋に響く。

二人が声のした方を見ると、冬子の妹の杏奈が笑顔でこちらを向いていた。

「おねえちゃん……（お姉ちゃんは、最低なんかじゃないよ）」

杏奈は発声と手話を交えながらそう告げる。

「嘘！ そんなことないっ、私はあんたを見殺しにしたのっ！ 恨んでるに決まってる！」

「（私は恨んでなんかいないよ？ お姉ちゃん、大好きだよ）」

と言いながら、杏奈は冬子に寄っていく。

「嘘、嘘、嘘、そんなわけない！ 音も声も奪われて、恨まないわけじゃないじゃん！」

そう言いながら、冬子は寄ってくる杏奈を突き飛ばす。

「おねえちゃん……だいき……」

それでも杏奈は、そう言いながら冬子に寄っていく。

「いやっ！ 来ないでっ、もうイヤなのっ、限界なのっ！ あんたのかわりに叩かれるのも、あんたの事で苦しむのも！」

冬子は腕を振り回し、杏奈を追い払おうとする。

しかし杏奈は、冬子が振り回した腕に打ちつけられながらも、寄って行こうとする。

「おねえちゃん……」

何度打ちつけられ、はじき飛ばされても、杏奈は冬子に寄っていく。

すでに杏奈の額からは血が滲んでいる。

「おい、冬子やめろっ」

久未弥が冬子を止めようとするが、興奮しているらしく、すごい力で振り払われてしまう。

「嫌、嫌、嫌、もう全部嫌なのっ、もう私を苦しませないでよおっ！」

「おねえちゃん……」

杏奈の顔や体はすでに傷だらけであった。

なにがこの小さな少女にそこまでさせるのか、杏奈はあきらめずに自分の姉にたどり着こうとする。

「あんたなんか……あんたなんか来なければよかったのに！」

そう冬子が叫んだ時、傷だらけの杏奈の体は姉の胸に到達し、二人は倒れ込む。

そこで杏奈が叫んだ言葉で、二人はすべてを理解する。

杏奈は叫ぶ、

心の底から絞り出すように、

声よとどけと、

「おねえちゃん……まで……わたしを……すてないで……」

お姉ちゃん“まで”私を捨てないで。確かに杏奈はそう言った。

「う、うわああああっ……杏奈あっ……そんな……私はっ……」

そうなのだ、このいつも笑顔の少女は冬子とは違い、すでに両親から見放されていたのだ。

杏奈はいつも笑顔の裏に、いつまた捨てられるかも知れぬ恐怖に怯えながら過ごしていたのだ。

母に捨てられた後杏奈は耳が聞こえなくなったが、その事による絶望よりも、耳が聞こえなくなった事により冬子が自分を見てくれるようになった安心感の方が勝っていたのである。

だがその姉からすらも捨てられるとなれば、その時こそ杏奈の世界は閉ざされてしまう。

「そんなっ……私は、そんなつもりじゃ……ごめん、ごめんね杏奈……杏奈！ 杏奈！ うわああああああっ」

冬子は杏奈をもう離さないと言わんばかりに抱きしめながら、声

を上げて泣きじゃくる。

杏奈は冬子から離されてなるものかとしがみつきながら、声を上げて泣いている。

神様はこの姉妹に、どれほどのつらい思いをさせるのであろうか。いや、つらい思いをさせているのは神様ではなく、人間の大人達なのだ。

久未弥は思う、この子供達に悲しい思いを背負わせた、身勝手な親も罪なら、それに気がついてやれなかった自分も罪だ。

どうしたらその罪はつぐなえるのだろうか、自分に罪をつぐなう事ができるのだろうか。

泣き続ける姉妹を呆然と眺めながら考えていると、玄関の扉を叩く音がする。

「須藤さん、いるんでしょ？ 開けてください」

そう扉の外から声が聞こえる。

時間も時間なら、状況も状況なので、久未弥は訳がわからず玄関の扉を開けると。

「須藤 久未弥さんだね。警察の者だけど、ちょっと中を見せてもらっていいかな」

と言いながら、三人の警察官が部屋に上がろうとする。

久未弥はその中に知り合いがいるのに気づき。

「レイさん、ちょうどよかった、あいつら父親から……」

と久未弥が言おうとしたところで、先に入っていった警察官の方から、

「被害者の少女二人を発見」という声が聞こえる。

「は？なに言っただよ、お前ら」と久未弥が言うと、レイさんが、「ブッチョ貴様、見損なつたぞ。須藤 久未弥、未成年者略取の現行犯で逮捕する」などと言い出す。

「おいおい、なんで俺が逮捕されるんだよ」

「貴様、この状況で言い訳が通用すると思っているのか」

確かに部屋の中から子供の泣き声が響き、中に入れば下着姿の痣

だらけの少女と、血を流した傷だらけの少女が抱き合っているこの状況は、言い訳の余地など無い。

「待ってよおまわりさん、ブッチョは何も悪いことなんかしてないよ」

と、冬子が奥の部屋から久未弥を擁護している。

「ブッチョは悪くないの、私たちをおと……」と言ったところで言葉がなくなってしまった。

久未弥が冬子と杏奈を見ると、二人とも抱き合ったまま驚愕の表情で固まっている。

その姉妹の視線の先をたどって振り返ると、そこには姉妹の父親が立っていた。

いよいよ子供達が自分を訴えようとするだろうと思い、先手を打ってきたのである。

「冬子、杏奈、無事だったか」と叫びながら駆け寄り、二人を抱きしめる。

「ひっ……」冬子は驚きのあまり言葉が出ない。

「須藤 久未弥、3時14分、未成年者略取の現行犯で逮捕」と言っ
つて久未弥の手首に手錠がはめられる。

「ちよつと待って、あいつらを父親に渡しちや駄目だ」

という久未弥の訴えも警察官の耳には届かない。

「話は署で聞く、早く歩け」

久未弥は引きずられるようにパトカーに乗せられ、警察署まで連行されていく。

止む気配をみせない雨の中を、守るべき姉妹を父親に人質にとられたまま。

どれほどの時間が経ったのであろうか、取り調べ室の窓から覗く景色は、あれだけ降っていた雨は止み、空は白んでいる。

「だから、何度言ったら分かるんだよ、あいつらは父親に虐待されてるんだって」

久未弥は最初から同じ訴えを繰り返している。

「虐待してたのはお前の方だろ、調べはついてるんだ」

警察官の方はこの一点張りである。

「バカな、俺がなんであいつらを虐待なんかしなきゃいけないんだよ！

俺は捕まってもいいから、あいつらを保護してくれよ、そうだ、あいつらの爺さんか婆さんに連絡してくれ、一緒に住んでるはずだから」

と久未弥が言うと、

「何を言ってるんだ、分かってるんだろ。あの姉妹の家は三人暮らしで、他には誰もいない」と返答が帰ってくる。

「は？　じゃあ近くに住んでるだろ」

「お前は何も知らないのか、吉田家の実家は福岡県にあるんだぞ、そんな所に連絡して意味があるのか」

すんなり被害者の個人情報を入力する警察官も訳がわからないが、その内容も久未弥には意味がわからない。

いつも姉妹を送り届けていた一戸建ての家、そこにいたやさしそうな老夫婦すらも、姉妹の嘘が作り上げた幻なのだろうか。

なぜあの姉妹が、自分にそこまですべてを隠し続けていたのかが理解できない。

そのせいで打つ手のない自分がもどかしい久未弥であった。

「それじゃ誰か様子を見てきてくれよ、頼む」

「安心しろ、もうすでに署員が向かっている」

そんな事を言われて、簡単に安心できるならば苦労はしない。

相手は自分の身が危うくなると、警察を利用し他人をおとしめるような人間なのだ。

そう思うと、警察に頼ったそのすぐ後に、二人に危害を加えるなどという馬鹿げた事はしないかもしれない。

しかし、そんなありもしない希望をもったところで、なんの役にもたたないのである。

それからしばらく警察官の質問と久未弥の否定との堂々巡りが繰り広げられ、取調べと姉妹への心配により、久未弥の精神的疲労はピークに達していた。

取調べに関しては、テレビドラマのような激しいものではないが、警察官の少々高圧的な物言いが精神力を削いでいく。

眠さを感じないのだが、体中の感覚がぼんやりとされていて気持ちが悪いく。

久未弥が、なにか今起こっている事のすべてが現実ではないような錯覚に陥った頃、取調室の扉がノックされる。

はい、と久未弥の前に座っている警察官が返事をする、扉が開き婦人警官が顔を出し、入り口付近で待機しているレイさんに耳打ちする。

するとレイさんは驚愕の表情をした後、久未弥を一瞥し、座っている警察官に耳打ちする。

しかし声のでかいレイさんの耳打ちは、久未弥に漏れる。

「……二人、病院に搬送されたそうです……」

久未弥は確かに聞こえた、二人病院に搬送された？ どこかで若者が喧嘩でもしたのだろうか、なぜそれをこの取調べ室に報告しに来るのだろうか。

そんな事を思っていると、目の前の警察官は久未弥に告げる。

「須藤さん、あんたの言うとおりだった、引き止めて悪かった」

「は？ なに言ってたんだあんた」

久未弥は何の事かわからない。

そんな久未弥に警察官は説明する。

「二人が病院に搬送されたらしい」

「……っ！」

血の気が引いた。

久未弥は倒れそうになりながら立ち上がり、取調室を出ようとする時、

「すまんブッチョ殿、トヨダ記念病院でござる」とレイさんに告げられる。

そう言われ部屋を出る直前、久未弥は前だけを見つめ、

「お前ら……あの二人にもしもの事があったら……ただじゃ済まねえからな」

と言い放ち、久未弥は駆け出して行った。

その光景を眺めながらレイさんが言う。

「ブッチョ殿……」

「そんなに怖い顔をして言わなくてもいいではないか……」

07

警察署を飛び出した久未弥は、財布も携帯電話も持っていないことに気づく。

「トヨダ記念病院か、走って行った方が早い」

トヨダ記念病院は、いつも久未弥がホスピタルクラウンとして通っている病院ではなく、豊多市にあるもうひとつの大きな病院である。

この警察署から走って40分ほどであろうか、一度家に戻るよりはそのまま向かった方が早いのである。

走り始めた久未弥だが、気ばかりあせり、なかなか進んだ気がしない。

さらに雨上がりの水溜りの多い道も邪魔な事この上ない。しかし久未弥は走る。

二人が病院に運ばれた。この事実が久未弥に重くのしかかる。おそらく父親に暴力を振るわれての事だろう。

なぜ自分はそうなる前に駆けつけてやる事ができないのだろうか。どこかのドラマや漫画の中の主人公ならば、大切な仲間のピンチに颯爽と駆けつけるのであろう。

“人はみんな、自分が主人公の物語の中で生きている”

あの中学生の頃、教師がぬかした言葉が思い浮かぶ。

反吐が出る。なにが自分が主人公の物語だ、こんな出来の悪い物語など願ひ下げだ。

それとも自分の物語は、どう転んでもこのような最悪の結末にしかならないのであろうか。

それを運命と呼ぶのなら、久未弥は自分の運命を恨む。

そんな事を鬱々と考えながらも久未弥は走る。

そんな久未弥をあざ笑うかのように青々と晴れ渡る空の下を走っていく。

せめて、あの冬子と杏奈の姉妹の運命だけは、良い結末になるようにと願ひながら。

08

久未弥がまだ朝の勤務の始まっていない病院の、夜間外来の入り口の扉をくぐったのは7時40分頃であった。

朝とはいえ、まだ電気の灯っていない薄暗いロビーを走り抜けていく。

待合室まで到着すると、そこで待っていたのは、長椅子に心配そうに座るカツ子と、杏奈であった。

「ブツチヨ！」

そう叫んで、杏奈は久未弥に抱きついてくる。

「杏奈、よかった、無事だったのか、二人運ばれたって言われて、冬子は？」

と久未弥は杏奈を抱きしめながらカツ子に問いかける。

「冬子ちゃんはまだ治療中です。意識がないって先生が言っていました」

「……っ！ 杏奈、なにがあつたんだ」

と言いながら見た杏奈の首にも治療のあとがある。

「（ブツチヨ、お姉ちゃんが、お姉ちゃんが）」

杏奈は混乱しているらしく、泣きながら同じ手話を繰り返すだけで精一杯らしい。

久未弥は杏奈を抱きしめ、落ち着かせた後になにが起こったのかを聞く。

それは現在より2時間ほど遡った午前5時30分頃。

「てめえら、よくもやってくれたなあ、こんな事で俺から逃げられると思ってるのかあ！」

金髪ピアスの父親は、怯えて抱き合う娘二人に、手近に置いてあった本を投げつけながら怒鳴りつける。

警察での事情聴取を終え、自宅に帰ってきた直後から始まる父親からの恫喝。

久未弥のアパートよりも築年数が多いのではなかるうかというほどの、プレハブ平屋建てのアパートの一室である。

リビングにはゴミと酒瓶が散乱しており、投げる物には事欠かないようである。

「見る、てめえらのせいで携帯が壊れたじゃねえか！」

そう叫びながら、液晶画面に穴の開いたスマートフォンが冬子に投げつけられる。

裸の写真を撮ると言われながら向けられたスマートフォンを、冬

子が振り払った拍子に落として開いた穴である。

「冬子お、てめえ死んで詫びるや！」

と言いながら父親は冬子を蹴りつける。

「ごめんなさいお父さん、ごめんなさいお父さん」と蹴られ続け、泣きながら謝罪の言葉を繰り返す冬子。

「てめえのせいで携帯買い替えなきゃならねえじゃねえか、いくらすると思っただやがんだ！」

携帯電話ごときで、なおも続く暴力。

「てめえみたいな邪魔な奴は生まれてこなきゃよかったんだよ！」

父親からの辛らつな言葉に、冬子は気が遠くなる。

かつて、親しい他人のブッチョやカツ子、そして血は繋がってはいない妹の杏奈、その三人から受けた、生まれた事に対する祝福。

しかし、もつとも祝福してほしい人物から出た言葉は“生まれてこなきゃよかった”である。

その言葉を耳にしてから、不思議な事に冬子の体は痛みを感じなくなつた。

思えば、体に力が入らない。自分がぐったりしているのが分かる。そんな時、ふと、父親の暴力が止み、声が聞こえる。

「おいおい、警察にでも電話するつもりか？ 笑わせんな、杏奈てめえ自分がしゃべれない事ぐらいわかってんだろ」

どうやら杏奈は、姉の状態が危ういので、家の電話で助けを求めようとしているらしい。

静かになつた部屋に、電話の音が漏れ出す。

『はい警察ですが、どうなさいました？』

その声を聞いて、父親は、バカが、と小さく笑う。

『もしもし、大丈夫ですか？』

なにもしゃべらない相手に、電話口の声が問いかけると。

「たすけて…… たすけて……」

と杏奈は声を絞り出す。

「杏奈あ、てめえ、いつの間になしやべれるようになってんだあ！
どいつもこいつも人のこと馬鹿にしやがって！」

と言いながら父親は電話を切り、杏奈の首を掴み持ち上げる。

「てめえは絶対殺す！ 死ねえ！ ……がっ！」

と言ったかと思うと、杏奈の首を掴んでいた手は離され、杏奈は投げ出される。

「冬子お、てめえまだ生きてやがったんかあ！」

父親の視線の先には、酒瓶を握りしめた冬子が立っていた。

「杏奈に、杏奈に手を出すなあっ」

杏奈を助けようと、とっさに冬子は手近にあった酒瓶で思い切り父親の頭を殴ったのだが、ドラマの中のようにには割れないものだな、などのんきに思っている自分に驚く。

次の瞬間、父親の頭から流れる血にひるむ。

「てめえは死んでるやあ！」

と言いながら出された父親の蹴りは、冬子を隣の部屋まで飛ばしてしまう。

「杏奈、てめえも死んどけ！」

と言いながら杏奈ににじり寄ったところで、玄関の扉をノックする音が響く。

「警察だ！ 玄関を開ける！」

どうやら久未弥の訴えで向かっていた警察官が、中の騒ぎを聞きつけたらしい。

こうして、意識の無い冬子と、頭部から血を流している父親が病院に搬送された、とのことである。

「……………」

絶句する久未弥。

自分の娘を蹴り飛ばし、血は繋がっていないとはいえ、年端もいかない子供の首を絞めるなどとは狂気の沙汰である。

その話を聞いて、久未弥はもう一度杏奈を抱きしめる。

「ごめんなさいブッチョさん、私がもっと早くに言っておけばこんな事にはならなかったのに……………」

「カツ子…………お前、いつから知ってた」

「あの、初めてみんなでジヨスコに行った次の日、ライ丸ちゃんたちが来て、ご飯食べさせてもらってないって、着ぐるみも脱いで見せてくれて……………」

「なんでその時言わなかったんだ」

「だって、二人がブッチョさんには言わないでくれって」

なんなのだろう、久未弥はやはり姉妹が自分にだけ事実を隠してきた事が理解できない。

それをカツ子に問うても知り得ない事だろう。

当の杏奈は、安心したのか久未弥の腕の中で寝息をたてている。

「ごめんなさい、私はブッチョさんにいっぱい嘘をつきました」

そう、今思い返せばおかしい話である。

いくら夫婦で仕事をしていて、子供にかまってやれないといっても、顔も見たこともない他人に子供をまかせる事などないだろう。

こんなわかりやすい嘘さえ見抜けなかった自分を悔やむ。いや、見抜けなかったのではない、見抜こうとしなかったのだ。四人で過ごす楽しい日々を壊したくなくて、久未弥は現実に対する疑問に目を向ける事から逃げてきたのだ。

そんな自分の甘さを後悔する。

やはり現実から逃げる事は許されないのだと久未弥は痛感する。

「……………」
二人の会話は途切れ、病院の待合室には熱にうなされているのであろう子供の泣き声と、それを少しでも楽にしてやろうとあやす親の声が聞こえてくる。

その時、診察室から二人の警察官が現れ、それに連れられるように頭に包帯を巻いた冬子と杏奈の父親が現れる。

久未弥とカツ子は息を飲むが、父親は杏奈を抱く久未弥に無表情のまま一瞥をくれただけで、警察官に急かされて通り過ぎて行ってしまう。

それからしばらくして、診察室から一人の警察官と病院の先生らしき人が現れ、久未弥たちの方へ向かってくる。

そして警察官が久未弥に向かって、

「あなたが冬子さんのお父さん……………なわけはないですね、お話はあなたでいいのかな」とたずねる。

「はい、あの子はどんな状態ですか」

と久未弥が聞くと、白衣をまとった医師らしき男性が話す。

「そうですね、右腕とアバラの二カ所の骨折と、複数の打撲、後は複数の切り傷、重傷ですが命に別状はありません、今はショックで意識を失っているのです、後は目を覚ませば数日で退院できると思います」

との医師の報告に、最悪の事態を回避できた事で、とりあえず安堵する久未弥とカツ子。

確かにひどいケガだが、命さえあればケガなどは、時間で体が回復と治療をしてくれる。実に人間とはよくできている。

生きていれば、どんなにづらい状況でも笑える日がきつとくる。

いや、笑える日を作ってやる。そう久未弥は思い、冬子が生きていた事に感謝するのであった。

しかし、

五日が過ぎても、冬子は目覚めなかった。

10

「正直、原因がわかりません」

久未弥とカツ子、そして杏奈の前に座る医師はそう言い放つ。

「検査はすべてしましたが、先の治療した箇所以外、異常は見受けられません」

なかなか目覚めない冬子を心配し、カツ子が依頼した検査の結果がこれである。

「は？ 異常がないんだつたら、なんで起きないんだよ」いらだつ久未弥。

「「お金が必要なら、いくらでも出します」」

「（血が必要ならあげます）」
と、それぞれ見当違いながらも、自分のできそうな精一杯を申し出る。

「いえ、すでにできるかぎりの事はやりました」

などと医師は、実に不吉な言い回しをする。手のほどこしようがない、ということだろうか。医師は続ける。

「考えられるのは、冬子さんが自分で目覚めようとしていない、ということかもしれません」

「？」

医師の言った事が理解できない三人。

そんな三人を見て、医師は説明する。

「人間の脳には、生命を維持するために働く機能があるんですが、もしかしたら冬子さんの脳は、目覚めた時にかかるストレスに冬子さんが耐えられないと判断して、目覚めさせないようにしているのかもしれない。」

最悪の場合、一生目覚めないということも
そんな事になれば、生きているのかさえもわからなくなってしま
う。

「じゃあどうすれば……」

「できるかぎり話かけてあげてください。起きて大丈夫だよ、目
覚めると楽しい事があるよ、と」

駄々をこねて、部屋に閉じこもった子供の機嫌をとるようである。
本当にそんな事で冬子が目覚めるのだろうか。

しかし、それ以外に方法がないというならば、それにすぎるしか
ないのである。

そこで久未弥は口を開く。

「それなら先生、お願いがあるんですが……」

11

「ほんとすみません、一緒に手伝ってもらって」

と、久未弥はピエロの格好で言う。

「いやいや、ブッチョくんはまだまだ新人で一人でやらせる訳には
いかないよ。」

ブッチョくんをこの世界に誘ったのは俺だから、ブッチョくんの
ピンチには喜んで協力する。

それに、ほんとにピンチなのはライ子ちゃんだからね、友達のピ
ンチは俺のピンチだ」

と、クラウンテンホーは元気に言う。

久未弥が先生にお願いしたのは、この病院でのホスピタルクラウ
ンの活動を許可してもらったことであつた。

なにもできない久未弥が、唯一今の冬子にしてやれる事、それが
クラウンブッチョとして笑いを届ける事である。

この病院ではホスピタルクラウンを呼んだことはないが、その存

在を知っていた医師たちも興味を持ち、すぐに許可が下りたのだ。つまりらない日常にやってきた非日常に子供達からは笑顔があふれる。

それから毎日、久未弥はクラウンの格好で冬子を見舞に訪れる。病室一つ一つを回るような活動は、テンホー氏が来る事ができる週に一回だけだが、久未弥は毎日冬子に会うためにクラウンブツチョとなり、ピエロのメイクで面会にやってくる。

はじめは興味津々でブツチョについてまわっていた子供達も、それが毎日となると飽きが来るのか、次第にブツチョのまわりの子供は少なくなっていく。

それでもブツチョが元気よく挨拶すると、皆笑顔で挨拶してくれる。

ブツチョが話しかけると、楽しそうに話してくれる。

久未弥は思う。

それでいいのだ。

大きな楽しみ、それを与える事も大切だが、楽しさが大きければ大きいほど、それが去って行った後の寂しさも大きいのである。

ブツチョが冬子に伝えたい事は、楽しさは小さくとも互いに笑いあえる日常。

久未弥が冬子に伝えたい事は、楽しさは小さくとも安心して過ごせる日常。

それは冬子に限った事ではない、ここに入院している子供達、その家族にも通ずる願いなのだ。

久未弥は今日も冬子に伝える、

この世界はこんなにも楽しいのだと。

久未弥は明日も冬子に伝える、

この世界はこんなにもあたたかいのだと。

冬子が今まで負ってきた、あまりにも悲しい傷を、心をえぐるような思いを、その一つ一つを少しずつ癒すように。

久未弥は届ける、

笑い声を、

楽しそうな話し声を。

久未弥は願う、

声よとどけ と。

第三話了

第4話「ライオンハート」010203了

第4話「ライオンハート」

01

「あれ？ どこだろう、ここ」

冬子が目を覚ますと、そこはなにもない世界だった。

「なんだろう、ここはすごく居心地がいいな」

知らない場所だが、よく知っている場所。そんな気がした。

意識はあるが感覚がなにもない、そんな不思議な感覚を感じ、冬子は気づく。

「あつ、そつか、思い出した。私、もうすぐ死ぬんだ……」

冬子は、父親から受けたひどい仕打ちを思い出す。

「そつかあ、私死ぬんだ……。でも、ま、いつかあ、生きてても私にはちよつとしんどい世界だったからなあ」

そんな事を言いながら、これまでのつらい記憶を思う。

「じゃあ、ここはあれだね、三途の川つてやつだ、なにも見えないけど」

ほんとに真っ暗でなにも見えないが、なぜか冬子にはここが三途の川だということが判る。

「私はどつちかなあ、天国に行けるといいなあ。でも、やつは無理だよなあ、いっぱい嘘ついたし、ひどいことも言ったからなあ」

それを思い出したただけで胸が締め付けられ、次々と顔が浮かんでくる。

「カツ子姉ちゃん……桜姉ちゃんには悪いことしたな、私たちと一緒にになってブツチヨに嘘をついてくれちゃって、後でブツチヨに怒られなきゃいいけど。」

桜姉ちゃんにはほんと感謝してるんだ。いつも給食しか食べてな

かった私たちに、おなかいっぱい食べさせてくれた。きつと食費がすごかっただろうな。

あと、一緒にゲームしたり、みんなでアニメ観たり、それからラグーナスにも連れて行ってくれた。

ほんと、お母さん、って言うにはちょっと頼りなかったけど、そう思えるくらい大好きだったよ。

桜姉ちゃんも、たいへんな思いして生きてきたみたいだけど、ブツチヨと幸せになれるといいな」

そう言って冬子は、幸せを願いながらカツ子に別れを告げる。

「嘘つていえば、家の大家さん。ブツチヨは私たちのお爺ちゃんとお婆ちゃんだと勘違いしてたみたいだけど、大家さんにも口裏合わせてもらおうように頼んじやったからね。ほんといい人達だったな」
久未弥が警察に頼んでもわからないはずである。

「あと……杏奈にはほんとひどいことしたな。

まさかあんな事思ってたとはね、私、自分の事ばっか考えてて恥ずかしいよ。

私、杏奈に“来なければよかったのに”なんて言っちゃったけど、初めて杏奈が来たとき、私、妹ができてほんとうれしかったんだ。

私のせいで杏奈の耳が聞こえなくなっただけから、私は自分を捨てて杏奈の不自由な部分のかわりになるって決めたんだ……最初はね。

でも、耳が聞こえなくてもいつも楽しそうな杏奈と、一緒に笑ったり、遊んだり、バカなことやったりしてるとちに、自分を捨てるなんて事忘れちゃったんだよね。

杏奈のかわりにしゃべることも、杏奈だけに新しい服を買ってもらうのも、そういうの全部含めて私の、私たち姉妹の自分ってやつなのかなって。

でも、ほんとごめんね、杏奈、一生私が守るって決めただけど、どうもできそうにないや。

こんな出来の悪いお姉ちゃんをゆるしてね、杏奈、好きだよ」
そう言っただけでたった一人の妹に別れを告げる。

「それと……お父さん……」。

「ごめんね、私、最期まで、お父さんにとっての良い子にはなれなかったね。」

「ほんと一生懸命がんばったんだけどなあ、全然うまくいかなかったよ。」

「うん……そうだよ、ほんと私、お父さんが言うように生まれてこなきゃよかったのね。どうしてだろうね、なんでお父さんの所に生まれてきちゃったんだろう。ほんとごめんなさい。」

それでも、私は、お父さんの事大好きだったよ。

でもね、いくらお父さんでもね、杏奈を、私の妹を傷つけるのだけは許せなかった。

私はどうなってもよかったの。

でも、杏奈はダメ、杏奈は私の妹で、私は杏奈のお姉ちゃんだから、お姉ちゃんが妹を守るのは当然でしょ？

だからごめんね、お父さんの頭、ビンで叩いちゃった。

お父さんが嫌いだからじゃないよ、好きだけど、杏奈を助けるためだったから……」。

でも、なんかこれじゃ、お父さん悪者みたいだね。

そんなことないよ、

お父さん、

大好きなお父さん、

私はお父さんの所に生まれてきて良かったと思ってるよ。

じゃあね、お父さん」

そう言っただけで、大好きだった父親にも別れを告げる。

しばらくの沈黙。

冬子は、結局最後まで父親の愛情を受けられなかった事を残念に

思う。

死ぬことを受け入れたとはいえ、こうして順に別れを告げていく度、自分の中身がなくなっていくような気がする。

そして、たぶん、自分の中に残る最後の一滴を絞り出すように、別れの言葉を紡ぐ。

「そして、ブッチョ……」。

みんなにアホみたいなあだ名つけやがって、なにが“カツ子”だ、なにが“ライ子”だ、なにが“丸美”だよ、安直すぎるっての。

あの変なあだ名のせいで、四人でいる時自分じゃないような気になって、嫌なこと全部忘れちゃってたじゃんか。

あのみんなで初めてジヨスコに行った時、無茶苦茶だったけど、私、なにも考えないではしゃいだの初めてだった。ジューズ吹き出したのも初めてだったけどね。

だから、そんなふうに毎日過ごせたらいいなって、そんな楽しい日々が続いたらいいなって、カツ子姉ちゃんに頼んでブッチョに嘘ついてもらったの。

いや、ブッチョほんとにバカだったからねえ。

初めて絡んだ時だって、いくらおなかすいたって言われたって、知らない子供にハンバーガー買ってやるか？

それどころか、ブッチョも初めて行くカツ子姉ちゃんのマンションにまで連れていくし、ほんとブッチョは常識がなかったなあ。

そういえば私と杏奈が、カツ子姉ちゃんに行きたいってせがんだラグーナス、あの時、私ブッチョの事お父さんって呼んでみたいんだけど、私あの日ね、ほんとはお父さんと来たかったなって思ってたの……。

で、ブッチョにお父さんって呼んでたって聞かされた時ね、私、ブッチョがお父さんだったらしいなって思っちゃった。

あはは、どつちも無理な話なんだけどね。

ほんとみんなでいろんな事したな、ブッチョはネズミーランドにも連れてってくれた。

あそこは全部が夢の国だった。

アトラクションも、食べ物も、着ぐるみも。

そして、

四人で過ごしたあの時間全部が夢のようだった。

最後はちよっぴり残念な感じだったけどね。

そういえば、ブッチョはテンホーさんと同じようなことやってるみたいだったけど、ブッチョのクラウンのメイク一度も見たことなかったなあ。

でも前に教えてくれたな、ブッチョはピエロのメイクしてるって。ピエロの目の下に書いてある涙は、自分の悲しい事を隠しながら人を笑わせるんだって意味だよって言った。

あはは、今思うとなんだか私たち四人もピエロみたいだね。

悲しい事、つらいことを隠して、みんながみんなを笑わせて、その時だけでも嫌な事を忘れてる。

ほんと、みんな生きるのが不器用だったよね、現実から逃げればつかで……。

現実にも目を向けたとたんにこれだからなあ、もっと早くに言うべきだったかな。

まあしようがないよね、私の命はもともとここまでだったんだよ。うん、でも、ブッチョのピエロ姿が見れなかったのは残念かなあ。

ブッチョとも……これで……」

“さよならだね”その一言がためらわれる。

その言葉を口にしてしまうと自分はほんとうに終わってしまふ。

「あはは、なんだろうね、こうやって思い出してみると、楽しいこといっぱいあったなあ。」

確かにつらいこともいっぱいあったけど、ブッチョ達と出会ってから、楽しいこと、面白いこと、いっぱいあったよ。うっん、そればっかじゃない、みんなは私の誕生日を祝ってくれた。

私が生まれたことを祝福してくれた……。

そうだよ私、このまま死んじゃダメじゃん。

今度は私がみんなの誕生日祝ってあげないと。

そうだよ、このまま死ねない。

このまま死ねないよ。

ねえ、私やっぱり死にたくない……死にたくないよ。

やっぱり死ぬのは嫌。

助けて、

誰か助けてよ、

ブッチョ……私、みんなと生きていたいよおっ！

そう冬子が叫んだ時、どこからか、かすかに声が聞こえた気がした。

「……う……と……こ……」

確かに聞こえる、しかも聞き覚えのある声だ。

声が聞こえたと同時に、冬子の目尻から水滴の流れる感覚を感じる。どうやら自分は泣いているようだ。

「ブッチョ、ブッチョなの？ 私はここだよ」

冬子は声のする方へ手を伸ばしているつもりなのだが、うまく手が動いていない。

「くっ……ブッチョ、ブッチョ、ブッチョおっ」

冬子は力の限り手を伸ばす、

ここから抜け出すために、

生きようとするために、

そして、

また、みんなで笑いあうために。

「う……うわあああああああつ！」

そう叫んだ瞬間、冬子の手は、誰かのあたたかい手に包まれる。その手から伝わるあたたかさが、からっぽになりかけた自分の中身に満たされていくのがわかる。

それと同時に、冬子の目に現実の世界がぼんやりと広がる。

その目に映る世界は、

楽しいこと、面白いことがいっぱい、

うれしいこと、しあわせなこともいっぱいある。

けれど、

悲しいこと、つらいこと、嫌なこともたくさんある。

でも冬子は望んだのだ。

それでも私はそんな不安定な世界で生きていたい、
大好きな人たちのいるこの世界で生きていたい、と。

「あれれ？ 杏奈がいるう、でもなんか人がいっぱいだよ」

そんな気の抜けた声を出した冬子の、ぼんやりとした視界に最初に入ったのは、笑顔の杏奈と、その後ろでこちらを覗いている子供達だ。

「あはは、桜姉ちゃんまでいるよお、どうしたのみんな」

と言う冬子の視線の先には、口に手をあて、うんうんとうなずいている桜の姿がある。

そして、

「いたたた、痛いよブツチョ、そんなに強く手をにぎったら。」

それに……

そんなに泣いたら、せつかくのピエロのメイクが台無しだよ？」

そこには、冬子の手を握り、顔をくしゃくしゃにして泣く、涙でメイクの半分が落ちたピエロがいた。

02

結局、一ヶ月も意識が戻らなかった冬子だが、検査の結果どこにも異常は見られず、目覚めて四日後に退院することとなる。

その決定を聞いた冬子の一言。

「げ、なんか春休み損した気分」

その発言にひとしきり笑いあう一同。

確かに、目が覚めたら春休みは終わっており、さらに進級も済ませていくという状況である。

退院前日。

この日はテンホー氏も来ての、ホスピタルクラウンの巡回日である。

冬子の意識が戻った事をテンホー氏も喜んでくれたのだが、ブッチョが毎日ピエロの格好で通っていたことにより子供達の反応が薄くなっていて、やりづらい、との言葉を賜った。

そして、次は冬子の病室である。

「はじめまして、ピエロのブッチョだよ」

と、元気よく入室してきたブッチョを見て、冬子は、うわぁ……、という顔をする。

「いやいや、お前、こっちは一生懸命やってんだから、イタいって顔すんなよ」

とブッチョが言つと、

「いや、マジでイタイから、って言うかそのテンションはないわぁ」などと冬子は笑いながら言う。

「（あはは、ブッチョ面白い格好してる）」

と、杏奈は毎日ブッチョのクラウン姿を見ていたはずなのに、そんな事を言う。

冬子が目覚めるまで、ブッチョの姿に笑う余裕がなかったのである。

「そうですねえ、私は似合ってると思いますよ」「

桜はこの場の楽しい雰囲気で充分なのか、笑顔で適当な返事をする。

「まあしょうがないか、お前は俺の事知ってるからな。どうせまた後で来るからもう行くぞ」

と言いながらブッチョが病室を出ようとする。

「……ちよつと待ってよ」と冬子が呼び止める。

「ん？ どうした？」

「せ、せつかく来たんだから、風船で何か作っていきなさいよ……」

と、照れながら言う冬子を見た一同は、ツンデレか！ と、心中で突っ込みをいれる。

しょうがねえな、と言いながらブッチョは、冬子のリクエストのライオンを作り手渡すと、

「ありがとブッチョ、大切にするね」

と言つて冬子は受け取るが、あくる日にはその風船を割ってしまい、しよっぱい顔を一同に披露する事になる。

それを見た杏奈の、形あるものはいつか壊れるんだよ、との説法に、さらにしよっぱい顔をする冬子であった。

そして、そんな楽しい雰囲気のまま、退院の時を迎える。

病室の前で、担当医師と看護師に見送られる冬子。
荷物を持つ久未弥と桜と杏奈とは別に、二人のスーツ姿の男女が
同行している。

この二人は、冬子と杏奈がこれから入る児童養護施設の職員であ
る。

冬子たちの父親は傷害容疑で逮捕され、実家の祖父母も二人の受
け入れを拒否したために、児童擁護施設に入る事になったのである。
施設の場所は、桜のマンションからそう遠くはないのだが、施設
の生活に慣れるまでしばらくは会えなくなってしまうだろう。

「そろそろ行きましようか、冬子ちゃん、杏奈ちゃん」

病院の出入り口まで来ると、擁護施設の女性職員は、男性職員の
まわしてきた車に乗るよう二人を促す。

「ブツチョ、桜姉ちゃん、また遊びに行くからね」

冬子は言う。

「おお、いつでも来いよ。カツ子のマンションで待ってるからよ」

「はい、ご飯いっぱい用意して待ってますよ」

久未弥と桜は答える。

「ブツチョ……、桜姉ちゃん……（すぐに会いに行くからね）」

また発声が上手くなっただろうか杏奈は手話も交えて言う。

「（おう、また一緒にどこか行こうな）」

「（また他のテーマパークに遊びに行きましようね）」

久未弥と桜は手話で答える。

一通り言葉を交わした後、車に乗り込む冬子と杏奈。

「じゃあまたねー」

「またねー……」

そういい残して去っていく車に向かって、見えなくなるまで手を
振り続ける久未弥と桜であった。

第1話「里帰り」 00と01と02

最終章「夢の終わり」

第1話「里帰り」

00

陽気な音楽と共にネズミやアヒルの着ぐるみに身を包んだ人が激しく踊っている……。

などという夢を、今まで幾度となく見てきた久未弥だが、いつからだろう、

気がつくと、久未弥はその夢を見なくなっていた。

あのネズミーランドも、なぜか土下座する父親も、そして、大切な友人さえも、久未弥の夢には現れない。

なぜなのかわからないが、久未弥は予感していた。

それは夢の終わりを告げる前兆なのだ。

01

「「なんだか寂しくなっちゃいましたね」」

二人分の緑茶の注がれた湯呑茶碗をテーブルに置きながら、桜はそうつぶやく。

「ああそうだな、あいつらいつも騒がしいからな」

湯呑茶碗を受け取りながら、久未弥もそんな事を言う。

冬子と杏奈が児童養護施設に送られてから一週間が経ち、二人きりの毎日はなんだか気が抜けたような感じである。

しかし、あの姉妹がいつ遊びに来てもいいように、毎日桜のマン

シヨンで二人を待っている。

「あの、ブッチョさん。ちょっとお願いがあるんですが」

と、桜は湯呑みを置いて久未弥に話しかける。

「なんだよカツ子、あらたまつて」

久未弥も湯飲みを置き、桜の話に耳を傾ける。

「今度の週末、私と一緒にお母さんが入院してる東京の病院へ行くつてもらえませんか？」などと言う。

「そんなにお母さんの具合悪いのかよ。てか、俺と一緒にじゃなくても、この間一人で行けたんじゃないかねえのか？」

と久未弥が言うと、

「えへへ、ちよつとタクシーで東京に着いたら、電車にチャレンジしてみたくなくて乗ってみたなら、知らない所にいますよ。」

そしたら時間がなくなつて、荷物を渡しただけで帰つてきちゃいました。東京つて都会すぎて、すぐに迷子になつちやいますねえ」

東京出身者とは思えない発言である。

「お前お母さんが入院してる病院までタクシーで行くんじゃなかったのかよ、それがなんで東京着いたら電車に乗るんだよ」

「いやあ、もしかしたら大丈夫かなあつて思いました」

「は？ なんでわざわざ東京でそんなことするんだよ。そんなこと豊多でいくらでもできんだろ、お前アホか」

「あつ、今アホつて言いました。アホつて言った人がアホなんですからねえ！」

「お前は小学生か！ だからお前は……」と言つたところで久未弥は言葉を止める。

仲裁役のいなくなった今では、ケンカをしだすと本気になつてしまつたろう。

それに、年中無休で休日の桜の時間がなくなつた理由を考えると、そう責められたものでもない。

「……あはは、面目ないです」

久未弥の思惑に気づき、桜も怒りをおさめる。

「「なので、2、3日時間をとってもらえないでしょうか」「
「しょうがねえな。でも、最近忙しいから今度の週末は無理かもし
れんぞ」

最近は気温も暖かくなり、週末も行楽日和が続き、コンビニも忙
しいのである。

「「ええ、別にいいです。でも、できることなら早く行ってあげた
いので」

やはり母親の事が心配なのであろう。

久未弥は、なるべく週末に休みがもらえるようにお願いしてみ
よ、と言って冷めた緑茶を飲み干す。

こうして二人の東京行きが決まったのである。

02

次の日、以外にもあっさりバイトの休みが取れ、バイト終わりに
桜にメールで報告しながら自宅に戻った久未弥の目に、ライオンの
着ぐるみが映る。

「ああ、結局渡せないまま行っちゃったな」

あの雨の日に冬子が脱いで以来、使われなくなった着ぐるみ。

たぶん冬子にはもう必要はないのであろう。

しかし久未弥は、この着ぐるみはあの姉妹の手元に置いておかね
ばならないような気がしていた。

確かに、悲しさと同らさの詰まっている着ぐるみではあるが、冬
子の杏奈に対する優しさの象徴でもある。

だが、おそらく冬子に着ぐるみを返すと、邪魔だからいらない、
などと言いつつではあるが。

とはいえ、この着ぐるみを見ると、一抹の寂しさを覚える。

などと、柄にもなくセンチメンタルになっているうちに、東京へ

行く日を迎える。

東京までの移動手段は、桜の希望で新幹線での旅となる。

新幹線など乗った事のない二人は、乗車券を購入するのに一時間を要し、さらに、お土産店を物色しているうちに乗り過ごし、もう一度乗車券を買いなおすという離れ技を披露する。

「はあ、なんだか行く前から疲れちゃいましたね」

やっとのことで乗る事のできた新幹線の席に座り、桜はこうつぶやく。

「てか、お母さんに会いに行くだけなのに、なんでそんなにお土産買う必要があるんだよ」

と言う久未弥の突き出した指の先には、大量のお土産が入った袋が置いてある。

「だって、あんなにいろんなお土産があつたら目移りしちゃうじゃないですかあ」

だからといって、手当たりしだい購入する事はないと思うのだが。そのせいで、新幹線を乗り過ごしたのだ。

「そうそう、お弁当も買ったので食べません？ おなかすいちゃいました」

と言いながら袋を取り出す。

「おお、そういえば腹減ったな。って、なんで六つも弁当買ってんだよ、東京までそんなに時間かかんねえよ」

確かに差し出された袋の中には、弁当が六個入っている。

「いやあ、みんなおいしそうだったんで買ったちゃいましたあ。それに、このあいだも結構時間かかりましたよ？」

新幹線がタクシー並みのスピードで走行したら乗客は暴動を起こすだろう。しかもこの女は、途中で電車に乗り換え、いつものパニックネタに時間を費やしている。

「ああ……もういいや、突っ込むだけ体力の無駄になりそうだ。それよりも、今回はスケジュール表は作ってないのかよ」

「え？　なんでブッチョさんそんな事知ってるんですか？」

久未弥が、姉妹と一緒に桜を尾行していた時の事を説明する。

「ああなるほど……私、昔からこんなだったんで、行く事のない旅行のスケジュールとかを考えるのが好きなんですよね。」

この時間に楽しく何をして、この時間においしく何を食べて、この時間にしあわせな気分で帰る、なんて、妄想しながらスケジュールを作るんです。

ネズミーランドなんて、10回位は行ってますよ。妄想の中ではですけど。」

どおりで無駄なく遊べた訳である。

「でも、実際行動してみると、まったくスケジュールどおりにいかないですよ。」

そういう理想と現実のズレみたいなのを確認できるところも、なんだか好きなんですよね。」

そのズレは、一般の人よりも大きいのであろう。

「でも今回はいいんです。ブッチョさんたちと行動していると、スケジュールなんて考えなくてもなんとかなりまし、楽しいですから。」

それは単に無計画なだけの気もするが。それに、今回はあの姉妹はいない。

そこまで話して、桜が久未弥の方を見ると、

「うん、ごちそうさん」と言って久未弥は空の弁当箱を置く。

「あれ？ 話聞いてました？ って、二つ目の弁当食べ始めてるし。」

そんな具合に、二人の旅は始まったのである。

久未弥は、新幹線の窓越しに流れる景色をぼんやりと眺めていた。その窓と久未弥の間には、幸せそうに寝ている桜のアホ面が覗かれる。

実のところ、久未弥は東京行きには乗り気ではなかった。

聞いていた桜の実家のある区は、久未弥が住んでいた地域に隣接していたのである。

父親に捨てられた久未弥は、父親の弟一家に引き取られ、高校を卒業するまで面倒を見てもらっていた。

父親の弟一家は、家主の幸太郎（しんたろう）を筆頭に、妻の八重子（やえこ）、そして息子の秀夫（ひでお）という三大家族で、その中で久未弥は生活をしていた。

しかし、そこでの待遇は決して良好とは言い難く、久未弥は家族から蔑（あは）まされて生きてきたのである。

食事は三人とは別の時間にとらされ、電気代がもつたいないと8時には部屋の電気を消される。

さらに毎日のように浴びせられる侮蔑の言葉。

「お前は表情がなくて気持ちが悪い」

「お前としゃべるとバカが感染する」

「お前はなににもできない能無しだ」

毎回ちがう侮辱の言葉に、よくもそれだけの言葉を思いつくものだ、と、久未弥はいつも思っていた。

思い返してみると、久未弥はその事で泣いていた記憶がある。いつの事だかわからないような昔の記憶だが、確かに引き取られた後に泣いていたのだ。

まあ、いつから泣けもしないほどの顔面麻痺になったのかなど、

思い出したところで何の足しにもならないのだが。
そういうわけで、そんな一家と鉢合わせする確率の高い場所へ行くのは、気が引けるのであった。

そんな事を思い返しているうちに、新幹線が一駅手前の品川駅に到着したので、よだれを垂れさせ始めた桜を起こす。

「じゅるっ……え？ もう東京ですかあ？」

「じゅるっって言うな！ もうすぐ着くから、降りる準備しておけ」
そう言っつて、桜の周辺に散乱する、食べ散らかしたお土産の残骸を一瞥する。

桜はそれらを乱雑に袋に詰め込み、よし、と一言で片付けたのを見て、久未弥は、はあ、とため息を漏らす。

程なくして新幹線は東京駅に到着し、二人は故郷の地に降り立ったのである。

04

桜の母親が入院している病院は、東京駅からさらに30分ほど電車で揺られた場所に建っていた。

その病院は、豊多市にあるような大規模な施設とは違い、どちらかといえば昭和の時代のマンションの風貌を呈していた。

外壁にはタイルが貼られ、窓には格子が取り付けてあり、建物全体が煤けているような印象を受ける。

「なんか歴史を感じさせる建物だな」

との久未弥のつぶやきをよそに、桜はいつもの事のようにスタスタと病院に入っつていき、そのまま脇目も降らずエレベータへと向かう。

桜はちょうど開いていた空のエレベータに乗り込み、久未弥が乗ったのを確認すると三階のボタンを押し、すぐさまエレベータの扉を閉じる。二人でいても、狭い空間に他人といるのは難しいのである。

ろっ。

エレベータが到着した先には、リノリウムの貼られた床と時代を感じさせる壁の特徴的な雰囲気、薄暗い廊下が現れた。

桜はその廊下を奥まで進むと、扉の開け放たれた病室の入り口の壁をノックする。

「お母さん、入るよ」

今までに聞いたことのないような低い声を発しながら病室に入る桜の後に久未弥は続く。

狭い病室は個室で、中にはベッドの上で上半身を起こしテレビを見ている白髪の女性がたたずんでいた。

「桜ちゃん、いつもありがとね。あら？ ええと、あなたがブッチヨさん？」

白髪の女性が久未弥に気づく。

「はい、はじめまして。須藤 久未弥と言います」

「はじめまして、桜の母親の皆川 みながわ 時枝 ときえ と言います。ふふっ、この子ったらいつもブッチヨさんとしか言わないから、てっきり太った方なのかと」

やはりこのあだ名は駄目なようだ。

「いつも桜がお世話になっております。最近この子はいつもあなた方の話ばかりするんですよ」と言うと。

「お母さん、余計な事は言わなくていいの。私飲み物買ってくるね」と言いながら桜は病室を出て行く。

その後久未弥は、桜の母親としばらく他愛もない話を続けるが、すぐに話題をなくしてしまい気まずい空気が流れる。

「桜ちゃん遅いわねえ」

気まずそうにしている久未弥に桜の母親は声を掛ける。確かに桜が病室を出て行ってから20分は経ったであろうか。

「ああそうですね、またパニックになってるんじゃないですかね。しばらくすれば戻ってきますよ」

と、母親の前でもあまりにもぞんざいな扱いである。

そんな久未弥に桜の母親は口を開く。

「ブッチヨさん……あの子から全部聞いたんですね」

桜の母親は窓に目をやりながら久未弥に話掛ける。

「はい、だいたい事は話してくれました……」桜の悲痛な叫びを思い出す。

「そうですね、それを知ってまであの子と一緒にいていただけの事に感謝します」

その言葉で、この親子がどれほど世間からつらい仕打ちを受けてきたかが窺える。

そして桜の母親は話を続ける。

「たぶんあの子は父親の事を憎んでいるのだと思います。あたりまえですよ、あの子には本当に辛い思いをさせてきてしまいました。それでもね、私はあの人……殺人を犯してしまつたあの人を、早まつた事をしたと責めたとしても、憎んだりはできないですよ」

意外な発言である。

「ふふつ、いえ、別に人を殺してしまつても愛している、なんて映画みたいな話じゃないんです。

そうですね、桜の父親が自営業に転職したのは聞きましたか？最初は小さな会社で営業をしていたのですが、元々不器用な人で成績が悪くて収入が少なく生活は苦しかったです。

ある日突然会社を辞めて自営業をするって言いだしたんです。あのなりに収入の良い仕事を探していたんでしょねえ。

で、案の定、不器用なあの人に自営業なんて勤まるわけがなくて、借金がかさむ一方でした。

自営業といつても、宅配の下請けの仕事だったんですけど、あの、自分の仕事のできないのを棚に上げて、その仕事を紹介した会社を怨み始めたんです。最初の話と違う、とか言いながら。

バカですよ、それであんな事件起こして。

でも、あの人があんなに悩んで転職までして収入を増やそうとしたのは、私たち家族のためだったんです。

あの人はいつも、桜に好きな物を買ってやれない、桜に好きな物を食べさせてやれないって悩んでました。本当にあの人は桜の幸せを願っていたんです。

でも最終的にあの人は、桜を一番不幸にする選択をしてしまったんですけどね」

不器用な人間が最終的にたどり着いた凶行。選択は間違っではないが、それは家族を思っただけの結末であった。

その話を聞いて、久未弥が言葉を失っていると、ちょうどそこに桜が戻ってくる。

「ごめんなさい、ちょっと遠くまで飲み物買いに行っていました」

と言う桜の服には汚れが付いていた。やはり、またどこかの路地裏にでも行っていたのであろう。

「二人で何の話をしてたんですか？」

と桜は久未弥にお茶のペットボトルを手渡しながら言う。

「ブッチョさんに、お父さんのお墓参りに行ってもらおうかな、って話してたのよ」

初耳である。

「……っ！」あからさまに絶句する桜。

どうやら数年前に桜にわがままを言って、墓を建ててもらったらしい。

「私はこんななんでお参りに行けなくてねえ。ブッチョさん行ってもらえますか？」などと桜の母親は言う。

久未弥は、うつむきながら硬直している桜を横目に見ながら、

「いいですよ。カツ子、後で場所を教えてくださいよ」と言う。

「はい……でも私は行きません」とキツパリ。まあしかたがないだろう。

それを聞いて桜の母親は。

「ふふっ、桜ちゃん“カツ子”って呼ばれているの？ ブッチョさんなぜかしら？」

「ぶっ、ブッチョさん言わなくてもいいですよ。お母さんも変なと

ここに食いつかないの」

その後、桜から父親の墓がある場所を教えてもらい、一人で墓参りすることになるのであった。

第1話了

第2話「墓参り」 01と02です

第2話「墓参り」

01

花の時期を終えた桜並木は、透き通るような若葉によって薄緑に染められていた。春の暖かな陽気も心地よく、心が洗われるようである。

しかし、久未弥の心は洗われるどころか、黒い霧で覆われているようだ。というのも、一人で墓参りに来たはずの久未弥の後ろには、怨めしそうな目で歩いている桜がいるからである。

「まったく、そんなに嫌ならついてくんなよ」と久未弥が言う。

「全然関係ないブツチョヨさんだけ行かせられるわけないじゃないですか。なんであんなお願い了承したんですか」と、憤慨やるかたない様子。

「別にいいじゃねえか墓参りぐらい。お前の気持ちもわかるから、一緒に来なくてもいいって言ってんだろうが」

その場のノリで了承したとはいえ、久未弥も内心失敗したと思っ
ていなかったわけでもなかった。

しかし父親の墓参りを断固拒否していた桜が、最終的に一緒に行く事になった時に、失敗は確実のものとなったのである。

それこそ全然関係のない自分一人なら、さつさと墓周りを掃除して、花と線香でも供えておしまいなのだが、一番面倒くさいのがついてきてしまった。

「あつ、その林みたいなお寺に見える屋根がお寺です」

と、唐突に桜が指差した先には、木々の中から覗く大きな瓦屋根が見える。何故お寺というのはアホみたいに屋根がでかいのだろう。二人がさらに近づいていくと、やはり屋根ばかりが目立つ古ぼけ

た本堂が現れる。どうやら墓地はこの本堂の裏手にあるようだ。

久未弥が墓地の方に向かって行くと、桜がない事に気づく。振り返ると、桜は寺の敷地の外で立ち止まっていた。

「おい、どうした、行かないのか？」

と、久未弥が言っていると、桜が、

「私はここで待っています」

などと言いながら、しゃがみ込んで携帯ゲームを取り出す。じゃあ最初から来なければいいのに。

02

久未弥は墓地の入り口に据えてある桶に水を汲み、その中に柄杓を突っ込んだ物をぶら下げて歩き出す。

桜の父親の墓は、墓地の隅にひっそりと建っていた。

周りの墓に比べて簡素なその墓石には“福武 敏夫之墓”と記されていた。

あのような事件を犯した敏夫氏は、福武家の墓には入れてもらえなかったのだ、この墓は個人の名義になっているのだろうか。

久未弥はそれを見て思う。

自分が死んだ後、家族と同じ墓に入る事に何の価値があるのかは分からないのだが、おそらくお参りに来ているのは桜の母親だけである。この墓は、そのうちに誰も来なくなり、そのまま放置されてしまふのだろう。そう思うと、家族の墓に入り、代々お参りしてもらった方が寂しくないような気がする。そう思うと、家族と同じ墓に入るという事にも価値があるのだろうか。

まあ、死んでしまえば関係のない事なのだが。

そんな事を考えながら、墓の周辺に生えた草をむしり、墓に水をかけ、道中のスーパで購入した花と線香を供える。

「よし、これでいいだろ」

と言いながら、ぱん、ぱん、と場違いな合掌をし、墓参りの終了とする。

その後、久未弥が桶と柄杓を返し、後かたづけをしていると、

「あれ？ 君は久未弥くんじゃないか」

と、知らないおっさんに声を掛けられる。

「えっと、どちらさまでしたっけ」

と、久未弥が尋ねると。

「ああ、覚えてないのも無理はないか。直接会ったのは、君のお父さんのお葬式以来だからね。」

私は君のお父さんの親戚の者だよ。

十数年経って、ようやく君もお父さんのお墓参りに来れるようになったか」などと言い出す。

「は？ 人違いじゃないか？ 親父は俺を捨てて行方不明なんだよ。それにあなた、子供の頃に会ったきりなのに俺の顔がわかるのかよ」

「何を言っているんだね。5年位前まで、みんなと写った写真を載せた年賀状を送ってきてくれていたじゃないか」

確かに、父親の弟一家は12月に入ると家族写真を撮っていた。

そこになぜか自分も一緒に写らされていたのだが、中学生の頃一度拒否した時、「これは毎年、親戚中にお前を生かしてやってるっていう証拠の写真なんだから、お前が入らなきゃ意味ねえんだよ」と、秀夫から言われた事があった。なるほど、ちゃんと役目は果たしていたということか。

「まさか久未弥君、君は、あの時の記憶がないのか」

と、親戚だと名乗るおっさんは、勝手にうるたえている。

「あの時にも俺は親父に捨てられて、そのクソ親父は行方不明だって、それだけの話だろ」

「君はお父さんの事をそんなふうに思っていたのか。ちょっと、こ

「うちへ来たまえ」

と言つて、自称親戚のおっさんは墓地の中へと入っていく。

久未弥がその後をついていくと、一つの立派な墓の前で立ち止まる。

そして、その墓石の裏には、数人の名前と没日が刻印されており、その中には、確かに自分の父親の名前が刻印されていた。

「えっと、なんだこれ。クソ親父は、俺を捨てた後にのたれ死んだつて事か？」

と、久未弥が混乱していると。

「そんな、お父さんが君を捨てるなんてありえない」

などと言い、そして、次に親戚のおっさんが口にした言葉に耳を疑う。

「だって久未弥君、君のお父さんは、

君をかばつて死んでしまったのだから」

は？　ますますもって訳がわからない。

自分を捨てたと思つていた父親が、実は自分の身代わりに死んでいた？

「いや、でも、親父は俺を捨てて出ていったはず……」

「君はお父さんが出て行ったのを覚えてるのかい？」

「……？」　確かに、父親が自分を捨てて出て行った事実はあるのだが、なぜそう認識していたのかは定かではない。

「……もしかして、幸太郎からそう聞かされていたのか？」

幸太郎、父親の弟である。そして、久未弥を高校卒業まで生かしておいてくれた人。

ああ、そうかもしれない。しかしそれを久未弥が思い出そうとすると、吐き気をもよおす。

あの家での出来事は、一秒たりとも思い出したくはないのである。「わからないか。幸太郎に直接聞いた方がよさそうだな。久未弥君、

ちよつとまっつてくれ」と言いながら、親戚のおっさんは携帯電話を取り出す。

「どうやら親戚のおっさんは、幸太郎氏に電話を掛けているようで、少々もめている様子である。」

「そんな様子を見て、長くなりそうだな、と思いながら辺りを見回していると、本堂の陰からこちらを覗き見る人影を発見する。言わずと知れた桜である。どうやら、あまりにも戻ってくるのが遅い久未弥を確認しにきたらしい。」

「すっかりその存在を忘れていた久未弥が、桜に近寄っていくと。」

「「ブツチョヨさん遅すぎますよう。私を置いて帰っちゃったかと思いましたよ。」と言う。」

「括弧が二重に戻っているのをみると、相当不安だったようだ。」

「「で、あの人ブツチョヨさんの知り合いなんですか?」」

「「ん? ああ、俺の親戚の人らしい。なぜか俺の親父の墓もここにあつたみたいでな」」

「「えつ、ブツチョヨさんのお父さん亡くなられてたんですか?」」

「「というか、ブツチョヨさんの家もこの近くなんですか?」」

「「いや、俺が住んでた家は少し離れているんだけど、なんでここに親父の墓があるのかは知らん」」

「これは後で親戚のおっさんに聞いたのだが、かつて父親の実家がこの付近にあり、久未弥もそこに住んでいたらしい。しかしそんな記憶は久未弥にはない。」

「「そうですか、私はてつきりブツチョヨさんのお父さん生きているとばかり思っていました」」

「俺もさつき初めて死んでたって知ったしな」

「「ええつ、それはシヨックじゃないですか」」

「ああ、その前に情報が錯乱して訳わかんないけどな」

「などと話していると、電話を終了した親戚のおっさんが近寄ってくる。」

「待たせたね久未弥君。おや? そちらのお嬢さんは久未弥君の彼

女かい？」

「はい」「違います」

「ぎゃふん。即答ですか」

「ぎゃふんじゃねえよ、そのテキストな受け答えやめろって。前にそれで警察ともめたじゃねえか」

そんな二人のやりとりに、親戚のおっさん苦笑い。

「いや、ごめん久未弥君。変な質問をしてしまった。

それより、明日少し時間を作ってくれないかな。幸太郎との話し合いに、久未弥くんも同席してもらいたいんだ」

という親戚のおっさんの申し出に久未弥は躊躇するが、あの家に戻りたくない気持ちより、父親に関しての事の真相を知りたい気持ちの方が勝る。

「はい、わかりました。俺、行きます」

こうして久未弥は、二度と戻らないと決めた家に、もう一度足を踏み入れる事になるのであった。

第2話了

第3話「知らない父親」 01と02

第3話「知らない父親」

01

久未弥の目の前には、見慣れた一軒家が建っていた。築年数は20年に迫ろうというその家のガレージには、10年は乗り続けている低クラスのベンツが停めてある。

久未弥の目に映るその光景のすべてから、忌まわしい記憶が呼び起こされる。

久未弥は5年ほど前、高校を卒業してすぐこの家から逃げ出し、二度と戻らないと誓った。

しかし何の因果か、今自分はその家の前に立っている。

胃が痛くなってきた。

冷や汗も出てきたかもしれない。

そんな久未弥の耳に、声が聞こえてくる。

「へえ、ここがブッチョヨさんが住んでた家ですかあ」「

とぼけたような桜の声である。

「つて、なんでお前まで来てるんだよ！」

「えっ？　だってブッチョヨさん、ホテルから声を掛けてるのに反応ないから、私ここまでついてきちゃったじゃないですか」「

確かに、泊まったホテルから出るとき、声を掛けられた気がするが、ぼんやりし過ぎていて記憶がない。

「お前帰れ」

これからの話は、他人に聞かせるものではない。

「私がこんなところから一人で帰れるわけないじゃないですかあ」

子供かお前は。

「つたく、しょうがねえな。たぶん気持ちのいい話じゃねえぞ」
「はい、いいですよ。私の気持ちのよくない話も聞いてもらいました」

「ああ、そうだったっけな」

「大丈夫ですよ、ブッチョさん。私が付いてます」

久未弥が頼りなく見えたのか、桜はそんな事を言う。すこし頼もしかった。

「ああ、ありがとな」

そう言いながら、久未弥はインターホンのボタンを押す。

クラウンとしてステージに立つ時に感じるものよりも強い緊張感を覚えながら。

そして扉が開かれる。

シヨ一の幕開けである。

02

「で？ なにが聞きたいんだ？」

いきなりの横柄な態度で、幸太郎が切り出す。

居間にはテーブルが置かれており、親戚のおっさんと久未弥と桜の三人が並ぶその対面には、幸太郎一家が顔をそろえている。

「幸太郎。お前はなんで父親が久未弥君を捨てて出ていったなんて嘘をついたんだ」

親戚のおっさんは苛立たしそうにテーブルを指でノックしながら問いつめる。

「いやいや待ってくれよ。俺は久未弥の事を思ってたんだ。

目の前で父親が死んで、そのショックでその時の記憶がない子供に、本当の事を言うのが正しいのか？

こいつは記憶どころか、最初は喋れもしなかったんだぞ」

「それにしてもだ、言うに事欠いて、父親が自分を捨てて出ていっ

たなどと、言っていることと悪いことがあるだろう。

それともなにか？ 久未弥君がお前の兄さんの息子だから、逆恨みでわざとそんな酷い嘘を教え込んだのか？」

「あ？ なんでここで兄貴の話が出てくるんだよ。

確かに兄貴からは、貧乏くじ引かされてばっかだったからな。死んでまで俺をはめたんだよ、兄貴は！」

その後しばらく久未弥の父親についての二人の言い争いが続く。

その二人の話をまとめると。

久未弥の父親と幸太郎の実家は中規模の会社を経営していたのだが、跡継ぎ問題の際、跡継ぎが兄になったと知った幸太郎は、家を出て、小さい会社を経営していた社長の娘の八重子と結婚する。幸太郎はよほど社長というものになりたかったらしい。

しかしそれでも幸太郎は後を継げはしなかった。そこで気がつけばよかつたのだが、社長になれなかつたのにも理由があり、幸太郎は残念な事に会社を任せられるほどの能力がなかつたのである。

だがその時、都合良く兄が死んだとの報告を受け、死んだ兄の息子の久未弥を引き取り育てる事を条件に社長の座に就くことに成功する。

しかし、幸太郎のその天性の商売の才能の無さで、数年で会社を倒産に追い込んでしまい、一族から白い目で見られるようになった。との事だった。

その時に幸太郎が久未弥に言った文句がこうだ。

「お前の父親は、倒産寸前の会社を俺に押しつけやがった」

そこからは久未弥も知っている。

それまでも悪かつた久未弥の待遇が、さらに悪化していったのだ。それまでも、食事は他の三人とは別の部屋でとらされ、ゴミだし掃除といった雑用を強要され、三人が外出の際には留守を任される。言われる言葉も、泣くな、わめくな、口答えするな。

と、その程度だったものが、

食事は一日一度残飯のようなものを与えられ、雑用の出来が悪いと竹刀で折檻されるようになり、あげくの果てには、怪我や病気の時に、なんの治療も受けさせないようになってしまった。

さらに、久未弥への暴言もエスカレートする。

お前は父親の血を継いでるからバカなんだ。

お前は父親と同じクズなんだから近寄るな。

お前はアホだから父親に捨てられたんだよ。

父親に捨てられた奴がこっち見るんじゃねえよ。

父親に捨てられた奴が泣くんじゃねえ。

父親に捨てられた奴が笑うんじゃねえ。

父親に捨てられた奴は、顔色一つ変える権利なんかないんだよ。

「はっ、あはははははははははは
思い出した。」

あまりに毎日言われ続けて忘れていたが、父親に捨てられたという記憶も、泣けないほどの顔面麻痺になった事も、すべては目の前に座っている一家によって作られたものだった。

久未弥はかつて自分が行った、意味のない努力を思い出す。

無表情のまま泣き、無表情のまま怒り、無表情のまま笑う。

最初は無理矢理作っていた無表情も、慣れてくれば自然にできるものだった。

使われなくなった表情筋は衰退していき、動かすことができなくなってしまう。それが長年続いた結果、久未弥の顔面は機能を失ってしまったのだ。

思い返すと、なんと無意味な努力を自分してきたのだらう。

わかっている。その当時の自分には、その選択肢しかなかった事を。なんの力もない自分を扶養する近しい大人を正しいと信じて疑

わないのが子供なのだ。

久未弥は知った。子供というのはそういうものだと。どんなに父親に理不尽でひどい仕打ちをされても、父親が正しく、自分が間違っていると疑わない少女とも出会った。

その少女に助けを求められた時、なんでこの少女はもっと早くに父親の間違いに気づかないのかと疑問に思った。

笑ってしまう。自分は今の今まで気が付かなかったのだ。

「あははははははははははは」

久未弥は笑う。声を出しひざを叩きながら体全体で笑う。無表情のまま。

桜を除くその場にいる全員は、何かに取り憑かれたように笑う久未弥に恐怖を感じる。

「ブツチョさん、大丈夫ですか？」
と、桜は悲しそうに笑う久未弥に手を差し伸べる。

「あははは、超うけるだろ？俺は命の恩人の父親を、ずっと恨んで生きてきたんだぜ？」

この顔面麻痺だって、ずっと父親に捨てられたショックでなっただと思っただら、俺の努力の結果だつてよ。

今の俺は全部この人たちに作られた嘘で出来上がってるんだよ」
そこまで言っで、久未弥は自分が悲しんでいる事に気づく。

本当におかしいのだ、滑稽すぎて笑いが止まらない。

このまま、狂ったように笑い続けたら、自分は名実共にピエロになれるんじゃないかと思う。

「ブツチョさんっ」「
そう言いながら手を強く握ってくる桜の聲に、久未弥は我に返る。

「あはは、もういいよ、わかった、帰ろうカツ子」
そう言っで久未弥が立ち上がると、親戚のおっさんも立ち上がり、

「それと幸太郎。久未弥君にお兄さんの遺産は渡したのかね」と言っで。

「あ？ そんなもん養育費として使っちゃったよ。充分だろ？ こ
こまで生かしてやったんだから」などと言う。

「幸太郎！ お前というやつは！」

と激怒する親戚のおっさんを久未弥が制止し、

「そうですね幸太郎おじさん。今までありがとうございました」と
言い残し家を出て行く。

久未弥は、もう二度と戻る事はないであろう家に振り返りもせず
進んでいく。

ようやく久未弥は、自分を繋ぎとめていた鎖を断ち切れた思いが
した。

これで自分は前に向かって進む事ができる。

しかしその前に、もう一つ聞いておかねばならない事がある。今、
久未弥は、それを聞くのにうってつけの場所に向かっているのだっ
た。

そして再び墓地である。

久未弥の父親が眠る墓の前には、先ほど須藤邸を後にした三人の姿があった。

「本当にすまなかつた久未弥君。もつと早くに気づいていれば、君につらい思いをさせずにすんだのに」

心底すまなそうに、親戚のおっさんは謝罪する。

「いえ、全然気にしてないですよ。済んだことですし」

と、久未弥は改めて父の墓に線香を手向ける。

それに続いて、親戚のおっさんも線香をあげ、桜もついでに線香をあげる。その際、なぜか桜はしきりに首を傾げていた。

「どうしたカツ子。さっきから首をかしげて」

「え？ えっと、なんでブッチョさんのお父さんのお墓なのに、

須藤って書いてないんですか？」

確かに一同の目の前の墓には“緒方家代々之墓”、と記されている。

「ああ、お嬢さんそれは、須藤家は幸太郎の奥さん方の姓だからですよ」

と、親戚のおっさんが説明するが、桜は、はあ、と気のない応答でなにやらスッキリしない様子。

そんな桜は放っておいて、久未弥は聞きたかった事を親戚のおっさんに尋ねる。

「で、俺の父親はどうやって死んでいったんですか」

そう、父親が自分をかばって死んでいったと聞かされた時から思い出そうとしているのだが、父親がどうやって死んでいったのか、さらに、父親がどんな人だったかさえ思い出せないでいた。

「そうか、久未弥君は本当に何も覚えてないんだね。無理もない、お父さんは君の目の前で死んだのだから。」

あの時、君とお父さんは二人で街に買い物に出掛けていて、ビルの爆発に巻き込まれたんだ。

そして、君のお父さんは咄嗟に、爆発から君を守るために覆いかぶさり、降ってきたビルの瓦礫にのまれて死んでしまった。

その後、到着したレスキュー隊に久未弥君は救助されたのだが、君は奇跡的に擦り傷一つ負ってなかったらしい。後の話で、無傷だったのは君のお父さんの守り方が良かったとのことだった」

久未弥は目を閉じながら、親戚のおっさんの口から語られるその話に耳を傾けていた。

これが自分の本当の父親の最期であつたらしい。

今まで信じ込んでいた父親とは違う知らない父親。

いや、久未弥は知っている。決して自分を捨てたりなどしない優しい父親を。

自分の子供を、自分の命を懸けてまで守る立派な父親を。

久未弥は覚えている。自分を産んですぐに亡くなった母の分まで、愛情を注ぎ込もうとしていた父の姿を。

そう、あの日も、仕事が忙しくなかなか遊んでくれない父さんが、無理矢理時間を作って自分を買った物に連れて行ってくれた。

あいにくの雨だったが、久未弥は楽しかった。

父さんと一緒に行くおもちゃ屋さんも、父さんと一緒に行く服屋さんも、

父さんと一緒に乗る電車も、父さんと一緒に傘を差し歩く雨の歩道も、

大好きなお父さんと一緒にいるだけでうれしかった。

昼食をとるため、どこで食べようかと雨が降りしきる歩道を歩きながら、父さんは約束してくれた。

こんどの休みは、一緒にネズミランドへ行こう。

うれしかった。一度も行った事の無いテーマパーク。いつかテレビで見たそこは、まるで違う世界のようだった。

この大好きなお父さんは、自分の夢をかなえてくれる。もう、うれしくて、うれしくて、しあわせだった。

バン！

突然だった。

突然の大きな音と同時に父さんが覆いかぶさってきた。

暗転。

次に気づいた時、目の中に飛び込んできたのは、降りしきる雨で濡れた一面に反射する赤色回転灯の赤と、自分を引きずり出そうとする数人の消防士。

そして、今、自分が引きずり出された場所には、瓦礫の中、土下座をするような格好のまま動かない、血まみれの父さんがいた。

ゆつくりと久未弥は目を開ける。

思い出した。長い間記憶の奥に封印されていたため、ぼんやりとではあるが、久未弥は思い出した。

思い出してしまえばどうということはない、久未弥は初めから本物の父親を知っていたのだ。

本当の父さんを知る久未弥が夢の中で訴えていた、お前の父さんはネズミランドに連れて行ってくれる優しい父さんだぞ、お前の父さんはこうやってお前を守りながら死んでいったのだぞ、と。

少々大きな雑音が混じってはいたが。

「おじさん、ありがとうございました」

本当の父親への黙祷を終え、親戚のおっさんに礼を言う久未弥。しかしその気持ちは晴れ晴れとしたものではなかった。それは、命の恩人であり、自分を愛してくれていた父親を恨んでいた事。そして、本当の父親を思い出すまでに長い時間が空いてしまい、思い出したそれが、どこか他人事めいていたように感じているためである。

どこかのテレビドラマのように、思い出した瞬間に涙の一つでも流そうものなら格好もつくのであるうが、そういう感情も一切ないま、現実はそのまんま。と、思いながら後片付けを済ます。

「ちよつと桶と柄杓を返してくるんで先に行つててください」
そう言つて久未弥は墓地の入り口で二人と別れ、寺の備品を返しに行く。

桶と柄杓を所定の位置に戻し、一呼吸入れて墓地を見渡す。

最初は簡単に桜の父親の墓参りを済ますだけの予定が、なかなかおおごとになったものだと振り返る。

須藤家を出てから、今まで逃げ続けてきた状況は、解決してしまえばあつけない幕切れであった。

実は父親は自分を捨てた訳ではなく、自分のために命を捨てていた事。そして顔面麻痺になった本当の原因。そのどれもが、久未弥の保護者一家による迫害の末に作り上げられていた。

身勝手な大人の、どうでもいい欲望とプライドによって起こされた悲劇。

「……………うおつ。悲劇とか自分で思つちまったよ。まあ過ぎた事を愚痴つてもしょうがねえ。そろそろ行くか」

そう、久未弥にとってここからがスタートラインなのだ。

今までの遅れを取り戻すため、後ろを振り返っている時間はない。久未弥は進む。

枷の外れた足で一歩づつ確実に。

心なしか桜達が待っている寺の入り口までの景色は、来るときに

見ていた雰囲気とは違い、久未弥を祝福しているかのように見えるのであった。

第三話了

最終話「夢の続き」01と02

最終話「夢の続き」

01

「あれ？ おじさん、カツ子は？」

寺の入り口まで戻ってきた久未弥を待っていたのは、親戚のおじさんただ一人であった。

「あつ、まさかあいつまたパニックか。おじさん、カツ子の奴ダツシユしていきませんでした？」

いきなり面識の薄い人と二人きりにさせられ、おそらく話し掛けられたりでもしてパニックに陥ったのだろう。面倒くさい奴である。「いや、飲み物を買いにいって来ると言って歩いて行つたよ。顔色が悪かつたから、どこか調子が悪いんじゃないのかね？」

嫌な話が続いたので腹でも痛くなつたのだろうか。

しばらくすれば戻ってくるだろうということで、二人は待つ事にする。

「ところで久未弥君。幸太郎の家を出てからの生活はどうだったのかね？」

「どつって言われても、何も変わらなかつたですよ。仕事をやってもうまくいかなかつたし、この顔面麻痺と性格のせいで他人ともうまくいかなかつたですしね」

人間関係がうまくいかず、仕事も短期間で変わるような社会不適合者であった。

「そうか、君には苦勞をさせてしまったな。でも、今でもそれは変わらないのかね？ 今の久未弥君を見ると、そんな感じとは思えないのだが」

と、親戚のおっさんはそんな事を言う。

そう、久未弥は変わった。ちょうど一年ほど前、一人の女に“友達になつてください”と声を掛けられたのを境に、久未弥の目に映る世界は徐々にその色と形を変えていった。

久未弥は気づかされた、この世界にはいろんな形があつたのだということを。

久未弥は気づかされてしまったのだ、この世界は良くも悪くもこんなにいろんな色で染めあげられていたのだと。

そして、人の弱さ、人の強さ、人の中にある様々なものに触れる機会ができた。

過去の悲しみから再生し、人に笑顔を届ける事を生き甲斐にする人にも出会った。

人を守る仕事に就きながら、人の命を奪った事のある人もいた。借金を重ね、まともに仕事のできない人も、その借金を取り立てる人もいた。

そして、父親の理不尽な暴力に、心も体も疲弊しながらも必死に寄り添いながら生きる姉妹にも出会った。

久未弥の世界を変えてくれた女もまた、つらい過去を背負いながら必死に生きていたのだ。

人を幸せにするのも人で、人を不幸にするのも人であつた。確かにこの世は辛い事が多すぎる。しかしどれだけ辛いことも、

助け合える人が一人でもいれば幸せになることだつてできるのだ。

文字も語っている。辛い“辛”に、一人の“一”を加えただけで“幸”になつてしまう。一人加わるだけで幸せになつてしまうのなら、二人も三人も助け合える人が加われば、どれだけの幸せを作ることができるのだろうか。

本来人は、この世に生を受けた時すでに、二人分の“一”を授かっている。父親と母親からである。

本当ならば人は、その二人の有り余る愛情によつて幸せになるべく生まれてくるのだ。

しかし、久未弥を含む四人の仲間達は、“一”が足りないどころ

か“辛”ばかりが増えていき、一人二人では事足りない。

久未弥は思い知らされた。自分一人の力では、一人として幸せにはできない事を。

久未弥は思う。ならば、四人が四人ともが助けあえば、いつかみんなが幸せになれるのではないか。

もしかしたら、この世界の人ひとりひとりが助け合えば、すべての人が幸せになれるのかもしれない。

いつか自分をホスピタルクラウンの世界に誘った人が言っていた。“アダムス医師の望んだ世界”を久未弥自身が望んでいるという言葉。今ならその意味がわかるような気がする。

久未弥は思う。

そんな風に、まずは自分の大切な人から幸せにしたい。

大切な人。

いつも笑顔を絶やさない、お洒落な娘。丸美。

妹想いの着ぐるみ少女。ライ子。

引きこもりセレブの迷子キャラ。カツ子。

そして、その中には久未弥自身も入らなくてはならない。

自己犠牲からなる幸せというものは、与えられた者にとって幸せであるとは限らない。

自己犠牲から破綻してしまった冬子。

自己犠牲の末に、間違った選択をしてしまった桜の父親。

自己犠牲の末に命を落としてしまった久未弥の父。

そのどれもが、想いが相手に伝わらないまま、幸せにはなっていないのであった。

だから、この四人の“仲間”全員が幸せにならなくてはいけないのだ。

それは簡単な事ではない。そう思っても、想いが伝わるとは限らない。対立する事もあるだろう。それはしかたのない事なのだ。だって、この世界には、一つとして同じ色や形はないのだから。

しかし、この四人ならできそうな気がする。いつか誰かが漏らしていた“四人集まると最強だな”、と。
そう、四人ならできるはずだ。一人一人は著しく社会には適合していなくても、四人で一人前なら良いではないか。
誰かの足りない部分を、他の誰かが補っていく。そうやって作っていくのだ、毎日こつこつと、いつか夢の中で問われたモノを。
そう、

“帰る場所”というやつを。

02

などということを久未弥が考えていると。

「久未弥君、大丈夫かね。ぼーっとして」という親戚のおっさんの声で我に返る。どうやら長い時間呆けていたようだ。

「大丈夫です。てか、どんだけ時間経ちました？」

久未弥が携帯電話を取り出し時間を確認すると、桜を待ち始めてから40分も経過していた。

「なかなかあのお嬢さんは帰ってこないね」

「あいつ、多分迷子になってるんだと思います。知らない土地で道がわからないなら、電話かけてくりゃいいのに」

と言いながら、久未弥は携帯電話の液晶画面に桜の電話番号を呼び出し、通話ボタンを押す。

『お掛けの電話番号は、現在使われておりません。もう一度電話番号をお確かめの上お掛け直してください』

「あれ？俺電話番号入れ間違えた？」

そんな事はないのだが、もう一度掛けなおす。

『お掛けの電話番号は、現在使われておりません。もう……』

「ん？まあいいや、メールにするか」

そう言って、今どこだ？ と、携帯電話に登録されている桜のアドレスにメールを送る。

しばらくすると、久未弥の携帯電話がメールの着信を告げる。久未弥がそのメールを確認すると。

「あ？ なんじゃこりゃ」

液晶画面には、現在このメールアドレスは使用されておりませんと、表示されている。

その後、どれだけ桜の携帯電話に送信しても、通話もメールも受け付けられる事はなかった。

そして、そのまま桜は、久未弥の前に現れなかったのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3451w/>

くらんくらうん

2012年1月11日06時57分発行